

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— VIII —

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— VIII —

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告—Ⅷ— 正誤表

頁	行	誤	正
2	20	4.800 m^2	4,800 m^2
"	"	3.000 m^2	3,000 m^2
"	"	41.500 m^2	41,500 m^2
3	1	5.000 m^2	5,000 m^2
4	5	技術主者	技術主査
20	3	とうり	とおり
28	19	柔わらかく	柔らかく
"	23	でし	ていし
29	22	出土した。	出土した。
30	8	P3がある炉	P3がある。炉
34	14	対抗	対称
34	21	貼付凸帯	貼付け凸帯
42	11・20	重複	重複
45	4	いずれ浅	いずれも浅
48	4	短軸	長軸
"	20	外は内外にわたってナデヘラ削りがみられ、	トル
"	21・24	外は	他は
"	25	施こす	施す
50	27	N32°W	N32°E
53	4	N56°E	N56°W
55	29	蔵骨器内の内より、	蔵骨器内より刀子が出土した。
55	31	穂	鋒
56	5	屈局	屈曲
"	7	施こされ	施され
"	8	優ぐれた	勝れた
57	26	後半	前半
76	10・17	施こす	施す
78	7	須恵器杯大は	須恵器杯の大きさは
FL. 4	(1)・(2)	影	景
PL. 38	(2)	第2号	第5号
PL. 39	(1)	第3・4号	第2・3号
"	(2)	第5号	第4号
PL. 53	(1)	墓抔	墓塚
PL. 55	(1)	"	"
Tab. 2	39	箱式棺	箱式石棺

序

九州縦貫自動車道建設にともなう埋蔵文化財の発掘調査は、昭和44年度に始まり本年度9月をもって、県南部大牟田市から鞍手郡鞍手町の間、159個所の調査を終了いたしました。現在はその膨大な資料を公開すべく整理作業を実施しております。

本報告書は、昭和49年度から50年度にかけて調査を実施した鞍手郡若宮町所在の柳ヶ谷遺跡・都地原遺跡、宮田町所在の平原遺跡の記録であります。

若宮・宮田町は、近年九州縦貫自動車道・山陽新幹線・工業団地の建設、また、それに伴う諸開発の波がおしよせ静かな農林業の地は変貌し数多くの文化財を結果的に失うことになりました。十分な報告ではありませんが、本書を通して埋蔵文化財に対するなお一層のご理解ご協力をいただければ幸いです。

また、発掘作業と、その後の整理作業に際して寄せられた関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

昭和51年11月1日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行った事前調査のうち、昭和49年度から昭和50年度にかけて発掘した福岡県鞍手郡若宮町所在の柳ヶ谷遺跡・都地原遺跡、宮田町所在の平原遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆はつぎのとおりである。

I	酒井仁夫
II	池辺元明
III	酒井仁夫
IV—1・2	酒井仁夫
IV—3	池辺元明
IV—4	上野精志・池辺元明
IV—5	池辺元明
V—1	池辺元明
V—2	上野精志・松村一良
V—3・4	上野精志
V—5	上野精志・松村一良
4. 分布図作成にあたっては、小方良臣・浜田信也・児玉真一各氏の協力を得た。
5. 昭和49年度及び昭和50年度に行なった九州縦貫道関係の調査は、主として山本文和主事と、栗原和彦・石山勲・酒井仁夫・副島邦弘・川述昭人・上野精志・児玉真一・中間研志・池辺元明各技師が担当した。
6. 本書の編集は、池辺が担当した。

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅷ—
福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群の調査

目 次

	頁
I はしがき	1
II 鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群	7
III 平原遺跡の調査	17
1. 調査の経過	17
2. 調査の内容	18
3. 小結	20
IV 柳ヶ谷遺跡の調査	21
1. 東区の調査経過	21
2. 東区の調査内容	22
3. 西区の調査経過	25
4. 西区の調査内容	26
5. 小結	57
V 都地原遺跡の調査	59
1. 東区の調査経過	59
2. 東区の調査内容	60
3. 西区の調査経過	73
4. 西区の調査内容	74
5. 小結	79

目 次

本文対照頁

PL.	1	(1) 若宮町宮永採集小型仿製鏡（酒井撮影）……………	7
		(2) 若宮町山口鶴ヶ谷採集石器（酒井撮影）……………	7
PL.	2	若宮町小金原採集石器（上野撮影）……………	7
PL.	3	宮田町芹田採集石戈（池辺撮影）……………	7
PL.	4	(1) 剣塚古墳近影 東から（池辺撮影）……………	11
		(2) 高野古墳群遠影（池辺撮影）……………	11
PL.	5	(1) 剣塚古墳航空写真 北から（酒井撮影）……………	11
		(2) 剣塚古墳出土円筒埴輪片（上野撮影）……………	11
PL.	6	(1) 高野古墳群航空写真 南から（上野撮影）……………	11
		(2) 竹原古墳航空写真 南西から（酒井撮影）……………	11
PL.	7	(1) 山口神社出土縄代双鳥文鏡（酒井撮影）……………	12
		(2) 山口神社出土経筒（酒井撮影）……………	12
PL.	8	(1) 山口神社出土経筒（酒井撮影）……………	12
		(2) 山口神社出土経筒（酒井撮影）……………	12
PL.	9	(1) 山口神社出土菊花双鳥文鏡（酒井撮影）……………	12
		(2) 山口神社出土湖州鏡（酒井撮影）……………	12

平 原 遺 跡

PL.	10	平原遺跡航空写真（公団提供）……………	17
PL.	11	平原遺跡航空写真 南から（酒井撮影）……………	18
PL.	12	平原遺跡全景 東から（酒井撮影）……………	18
PL.	13	(1) 第1・2号掘立柱建物 南から（酒井撮影）……………	19
		(2) 第1・2号掘立柱建物 東から（酒井撮影）……………	19
PL.	14	(1) 小屋跡 東から（酒井撮影）……………	19
		(2) 小屋跡 南から（酒井撮影）……………	19

柳 ヶ 谷 遺 跡

PL.	15	都地原・柳ヶ谷遺跡航空写真（公団提供）……………	22
------------	----	--------------------------	----

PL.	16	都地原・柳ヶ谷遺跡航空写真 南西から（池辺撮影）	22
PL.	17	(1) 柳ヶ谷遺跡航空写真 1 東南から（酒井撮影）	22
		(2) 柳ヶ谷遺跡航空写真 2 南から（酒井撮影）	22
PL.	18	東区全景 西から（酒井撮影）	22
PL.	19	(1) 第1・2号住居跡 北から（酒井撮影）	23
		(2) 第3号住居跡 南から（酒井撮影）	24
PL.	20	(1) 第1・2・3号貯蔵穴 西から（酒井撮影）	22
		(2) 第1号貯蔵穴 西から（酒井撮影）	22
PL.	21	東区出土土器（池辺撮影）	23
PL.	22	西区全景 北東から（上野撮影）	25
PL.	23	西区全景 南西から（上野撮影）	25
PL.	24	西区東半遺構の状況 北から（池辺撮影）	25
PL.	25	(1) 第1号住居跡 1 北から（池辺撮影）	27
		(2) 第1号住居跡 2 北から（池辺撮影）	27
PL.	26	(1) 第2号住居跡 北から（池辺撮影）	27
		(2) 第3・5・14号住居跡 北から（池辺撮影）	28
PL.	27	(1) 第3号住居跡 北から（池辺撮影）	28
		(2) 第4号住居跡 北から（池辺撮影）	29
PL.	28	(1) 第5号住居跡 北から（池辺撮影）	30
		(2) 住居跡群 北西から（池辺撮影）	27
PL.	29	(1) 第6号住居跡 1 北東から（上野撮影）	30
		(2) 第6号住居跡 2 北東から（上野撮影）	30
PL.	30	(1) 第7・8・16号住居跡 南から（上野撮影）	31
		(2) 第7・16号住居跡 東から（上野撮影）	31
PL.	31	(1) 第7・8・16号住居跡 南から（上野撮影）	31
		(2) 第9号住居跡 南から（池辺撮影）	32
PL.	32	(1) 第10号住居跡 北から（上野撮影）	33
		(2) 第11号住居跡 南から（上野撮影）	34
PL.	33	(1) 第12号住居跡 東から（池辺撮影）	38
		(2) 第12号住居跡カマド 東から（池辺撮影）	38
PL.	34	(1) 第13号住居跡 西から（池辺撮影）	38
		(2) 第13号住居跡カマド 西から（池辺撮影）	38
PL.	35	(1) 第14号住居跡 東南から（池辺撮影）	40
		(2) 第14号住居跡カマド 東南から（池辺撮影）	40
PL.	36	(1) 第15号住居跡 南から（上野撮影）	42

	(2) 第15号住居跡カマド 南から (上野撮影)	42
PL.	37 (1) 第17号住居跡 北西から (上野撮影)	45
	(2) 第18号住居跡 南から (上野撮影)	48
PL.	38 (1) 第1号掘立柱建物 北から (池辺撮影)	50
	(2) 第2号掘立柱建物 北から (上野撮影)	50
PL.	39 (1) 第3・4号掘立柱建物 南から (上野撮影)	50・52
	(2) 第5号掘立柱建物 東から (上野撮影)	53
PL.	40 (1) 柳ヶ谷墳墓 北から (上野撮影)	55
	(2) 柳ヶ谷墳墓出土蔵骨器 (上野撮影)	55
PL.	41 西区出土土器 (池辺撮影)	27~48
PL.	42 西区出土土器 (池辺撮影)	27~48
PL.	43 柳ヶ谷遺跡出土石器・青銅器 (池辺撮影)	50

都 地 原 遺 跡

PL.	44 (1) 都地原遺跡近景 東から (池辺撮影)	60
	(2) 東区全景 東から (池辺撮影)	60
PL.	45 (1) 第1号住居跡 南から (池辺撮影)	60
	(2) 第3号住居跡 東から (上野撮影)	64
PL.	46 (1) 第2号住居跡 南から (池辺撮影)	64
	(2) 第2号住居跡内貯蔵穴 南から (池辺撮影)	64
PL.	47 (1) 第1号掘立柱建物 東から (酒井撮影)	68
	(2) 第1号掘立柱建物柱穴内土層断面 東から (酒井撮影)	68
PL.	48 東区出土土器 (池辺撮影)	64~73
PL.	49 東区出土土器 (池辺撮影)	64~73
PL.	50 東区出土土器 (池辺撮影)	64~73
PL.	51 (1) 第4号住居跡 東から (上野撮影)	74
	(2) 西区墳墓群全景 南西から (上野撮影)	75
PL.	52 (1) 都地原第2号墳墓 西から (上野撮影)	75
	(2) 都地原第2号墳墓 (復元状態) 西から (上野撮影)	75
PL.	53 (1) 都地原第2号墳墓の墓抔 西から (上野撮影)	75
	(2) 都地原第2号墳墓出土蔵骨器 (上野撮影)	76
PL.	54 (1) 都地原第3号墳墓 北西から (上野撮影)	76
	(2) 都地原第3号墳墓 北西から (上野撮影)	76
PL.	55 (1) 都地原第3号墳墓の墓抔 北西から (上野撮影)	76

	(2) 都地原第3号墳墓出土蔵骨器 (上野撮影)	76
PL. 56	(1) 都地原第4号墳墓 南東から (上野撮影)	77
	(2) 都地原第4号墳墓出土蔵骨器 (上野撮影)	77
	(3) 都地原第5号墳墓 (上野撮影)	78

挿 図 目 次

Fig. 1	鞍手地区調査遺跡分布図 (縮尺1/708,000) (池辺作成)	5
Fig. 2	上大隈遺跡出土土器 (北九州古文化図鑑 第1輯 第15図4より転載)	8
Fig. 3	剣塚古墳墳丘実測図 (縮尺1/400) (直轄文化財を守る会・福岡県教育委員会実測, 上野製図)	9
Fig. 4	高野古墳群第1・2号墳丘実測図 (直轄文化財を守る会実測, 製図)	10
Fig. 5	若宮・宮田地区遺跡分布図 (縮尺1/25,000) (池辺作成)	16—17

平 原 遺 跡

Fig. 6	平原遺跡地形図 (縮尺 1/1,000) (酒井製図)	16—17
Fig. 7	遺構配置図 (縮尺 1/200) (酒井・高田一弘実測, 酒井製図)	16—17
Fig. 8	平原遺跡第2トレンチ発掘状況 (酒井撮影)	17
Fig. 9	第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (酒井・高田実測, 池辺製図)	18—19
Fig. 10	第2号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (酒井・高田実測, 池辺製図)	18—19
Fig. 11	小屋跡実測図 (縮尺1/40) (酒井・高田実測, 池辺製図)	18
Fig. 12	平原遺跡出土須恵器実測図 (縮尺 1/3) (酒井実測, 製図)	19

柳 ケ 谷 遺 跡

Fig. 13	柳ヶ谷遺跡東区地形図 (縮尺 1/200) (池辺作成)	22
Fig. 14	柳ヶ谷遺跡東区遺構配置図 (縮尺1/200) (酒井・池辺・内田始実測, 池辺製図)	22—23
Fig. 15	第1・2・3号貯蔵穴実測図 (縮尺1/40) (酒井・内田実測, 池辺製図)	22—23
Fig. 16	住居跡・貯蔵穴出土土器実測図 (縮尺 1/4) (酒井実測, 製図)	24
Fig. 17	柳ヶ谷遺跡発掘状況 (池辺撮影)	25
Fig. 18	柳ヶ谷遺跡発掘状況 (池辺撮影)	26
Fig. 19	第4号住居跡実測図 (縮尺1/40) (池辺・高田実測, 池辺製図)	28—29
Fig. 20	第5号住居跡実測図 (縮尺1/40) (池辺・小味山ゆり実測, 池辺製図)	30—31
Fig. 21	第6号住居跡実測図 (縮尺1/40) (酒井・上野実測, 池辺製図)	30—31

Fig. 22	第8号住居跡実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 池辺製図)	32
Fig. 23	第9号住居跡実測図 (縮尺1/40) (池辺実測, 製図)	33
Fig. 24	第10号住居跡実測図 (縮尺1/40) (上野・清水範行実測, 池辺製図)	34—35
Fig. 25	第11号住居跡実測図 (縮尺1/40) (清水実測, 二神和子製図)	35
Fig. 26	住居跡出土土器実測図 (縮尺1/40) (酒井実測, 製図)	36
Fig. 27	第12号住居跡実測図 (縮尺1/40) (池辺実測, 製図)	37
Fig. 28	第13号住居跡実測図 (縮尺1/40) (高田・内田実測, 池辺製図)	39
Fig. 29	第14号住居跡実測図 (縮尺1/40) (池辺・小味山実測, 池辺製図)	41
Fig. 30	第15号住居跡実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 池辺製図)	43
Fig. 31	住居跡出土須恵器実測図 (縮尺 1/3) (酒井実測, 製図)	44
Fig. 32	住居跡出土土師器実測図 (縮尺 1/4) (酒井実測, 製図)	45
Fig. 33	第17号住居跡実測図 (縮尺1/40) (池辺・清水実測, 池辺製図)	46
Fig. 34	第18号住居跡実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 池辺製図)	47
Fig. 35	出土土器実測図 (縮尺 1/4) (酒井実測, 製図)	48
Fig. 36	柳ヶ谷遺跡出土石器・青銅器実測図 (縮尺 1/2) (酒井・松村実測, 酒井製図)	49
Fig. 37	柳ヶ谷遺跡出土石鏃実測図 (縮尺 1/1) (松村実測, 製図)	50
Fig. 38	第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (池辺・高田実測, 池辺製図)	50—51
Fig. 39	第2号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 橋本啓子製図)	51
Fig. 40	第3号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 橋本製図)	52
Fig. 41	第4号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 池辺製図)	53
Fig. 42	第5号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図)	54
Fig. 43	柳ヶ谷墳墓実測図 (縮尺1/10) (上野実測, 製図)	55
Fig. 44	柳ヶ谷墳墓出土葦骨器実測図 (縮尺 1/3) (上野実測, 製図)	55
Fig. 45	柳ヶ谷墳墓葦骨器内出土鉄器 (縮尺 1/2) (上野実測, 製図)	56

都 地 原 遺 跡

Fig. 46	都地原遺跡発掘状況 (酒井撮影)	59
Fig. 47	都地原遺跡地形図 (縮尺 1/1,000) (上野作成)	61
Fig. 48	第1号住居跡実測図 (縮尺1/40) (松村・伊東登美子実測, 松村製図)	62
Fig. 49	第2号住居跡実測図 (縮尺1/40) (松村実測, 製図)	63
Fig. 50	第2号住居跡内貯蔵穴出土土器実測図 (縮尺 1/4) (中牟田賢治実測, 製図)	64
Fig. 51	第3号住居跡実測図 (縮尺1/40) (高田・伊東実測, 松村製図)	64—65
Fig. 52	第3号住居跡出土土器実測図① (縮尺 1/3) (中牟田実測, 製図)	65
Fig. 53	第3号住居跡出土土器実測図② (縮尺 1/4) (中牟田実測, 製図)	66

Fig. 54	第1号掘立柱建物実測図（縮尺1/40）（酒井・高田・伊東実測，松村製図）	67
Fig. 55	都地原第1号墳墓実測図（縮尺1/10）（上野実測，製図）	68
Fig. 56	都地原第1号墳墓出土蔵骨器実測図（縮尺 1/3）（上野実測，製図）	69
Fig. 57	表土層下出土石器実測図（縮尺 1/2）（松村実測，製図）	69
Fig. 58	表土層下出土土器実測図（縮尺 1/3）（中牟田実測，製図）	70
Fig. 59	表土層下出土土器実測図（縮尺 1/3）（中牟田実測，製図）	71
Fig. 60	表土層下出土土器実測図（縮尺 1/4）（中牟田実測，製図）	72
Fig. 61	第4号住居跡実測図（縮尺1/40）（上野・関実測，二神製図）	74—75
Fig. 62	都地原第2号墳墓実測図（縮尺1/10）（上野実測，製図）	75
Fig. 63	都地原第2号墳墓出土蔵骨器実測図（縮尺 1/3）（上野実測，製図）	75
Fig. 64	都地原第3号墳墓実測図（縮尺1/10）（上野実測，製図）	76
Fig. 65	都地原第3号墳墓出土蔵骨器実測図（縮尺 1/3）（上野実測，製図）	77
Fig. 66	都地原第4号墳墓実測図（縮尺1/10）（上野実測，製図）	77
Fig. 67	都地原第4号墳墓出土蔵骨器実測図（縮尺 1/3）（上野実測，製図）	78
Fig. 68	都地原第5号墳墓実測図（縮尺1/10）（上野実測，製図）	78

表 目 次

Tab. 1	九州縦貫自動車道古賀～直方間関係遺跡一覧表（池辺作成）	4—5
Tab. 2	若宮・宮田町内遺跡地名表（池辺作成）	13～15

付 図 目 次

Fig. ①	柳ヶ谷・都地原遺跡周辺地形図（縮尺 1/5,000）（伊東作成）
Fig. ②	柳ヶ谷遺跡地形図（縮尺 1/1,000）（酒井作成）
Fig. ③	柳ヶ谷遺跡東区第1・2号住居跡実測図（縮尺1/40） （酒井・池辺・内田実測，池辺製図）
Fig. ④	柳ヶ谷遺跡東区第3号住居跡実測図（縮尺1/40）（酒井・池辺・内田実測，池辺製図）
Fig. ⑤	柳ヶ谷遺跡西区地形図（縮尺 1/200）（池辺作成）
Fig. ⑥	柳ヶ谷遺跡西区遺構配置図（縮尺 1/200） （酒井・上野・池辺・高田・内田・小味山・清水実測，池辺製図）
Fig. ⑦	柳ヶ谷遺跡西区第1号住居跡実測図（縮尺1/40）（池辺・内田実測，池辺製図）
Fig. ⑧	柳ヶ谷遺跡西区第2号住居跡実測図（縮尺1/40）（池辺・高田実測，池辺製図）
Fig. ⑨	柳ヶ谷遺跡西区第3号住居跡実測図（縮尺1/40） （池辺・清水・小味山実測，池辺製図）

Fig. ⑩ 柳ヶ谷遺跡西区第7・15・16号住居跡実測図（縮尺1/40）

（酒井・上野実測，池辺製図）

Fig. ⑪ 都地原遺跡東区地形図（縮尺 1/200）（池辺作成）

Fig. ⑫ 都地原遺跡東区遺構配置図（縮尺 1/200）

（上野・池辺・高田・松村・伊東実測，池辺製図）

Fig. ⑬ 都地原遺跡西区地形図（縮尺 1/200）（二神作成）

I は し が き

I は し が き

1. 調査に至るまでの経過

日本道路公団直方工事々務所管内路線内の遺跡分布調査は、昭和43年に初めて公団側より依頼された。それに対し宮田町大字上有木字高平所在の古墳(宝暦年間・神谷武蔵墓)、及び鞍手町大字中山所在剣城附属館跡が調査予定地として回答された。当時は路線の中心杭も打たれていなかったため、より綿密な分布調査が路線決定後に必要となり、昭和45年春に実施した。その結果、福間町所在本木遺跡、若宮町所在遠園遺跡・小原遺跡・柳ヶ谷遺跡、宮田町所在筒井田遺跡・平原遺跡、鞍手町所在高木古墳群が加わった。

昭和49年春よりの発掘調査を控えて、1月22日から23日にかけて、再度の分布調査を、公団直方工事々務所担当者と共に実施した。この時点では、最終的な遺跡地点及び各々の路線内面積を確定する必要があったため、調査は綿密を極め、若宮インター内で円墳2基・遺物散布地3地点、宮田町大字室木所在遺物散布地を、さらに高木古墳群内で円墳4基、及び鞍手町大字新北所在遺物散布地を追加した。

2月19日、工事々務所より、各遺跡地図及び調査完了希望日一覧表が送付された。各地点工事担当業者の工程に従って希望された理想的調査日程であった。2月26日、公団側建設局総務課職員及び直方工事々務所職員と文化課職員の総勢15名によって、路線内遺跡の再確認を行なった。その際、文化課側より調査日程表を示し、公団側からは各遺跡の調査優先順位を聴問した。

最優先的に調査を希望された遠園遺跡については、本格的調査に先立って遺跡内容を明確にする必要があり、3月4日、大成建設の重機を利用して、トレンチを計八本設けて、表土を剥いだ。その結果、各トレンチより中世遺物の出土が相継ぎ、遺構もほぼ全てのトレンチで確認された。4月当初より、早急な調査が必要となった。

3月27日、公団側と調査開始前の最終的打合わせを行った。文化課側からは、若宮町・宮田町所在遺跡(遠園遺跡から平原遺跡に至る各遺跡、但し北田遺跡を除く)のみ調査を実施する旨を主張した。つまり、福間町・鞍手町内所在各遺跡の調査は昭和50年度以降に実施したいという希望である。公団側には、工事工程と睨み合わせて再度の調整を願った。

3月29日、調査実施に当たっての具体的打合わせを工事担当業者と行ない、4月1日より、いよいよ調査を開始した。遠園遺跡と小原遺跡の発掘開始であり、49年度の直方管内発掘調査開始の鐘声を告げたのである。

2. 調査日程の調整と修正

3月27日に協議した文化課提案の調査日程に対し、公団直方工事々務所側からは、各業者の意見を基に、4月25日対案が出された。それは、工事各工程の進行状況に応じて、各地点とも細かく区分決定されたものであった。工事用道路分の調査を全て優先させ、その他残土処理場・構造物設置地・試験盛土地等の調査完了を早期に予定された。

これに対し、調査方法としては、遺構範囲を早急に把握するため、ブルドーザー等の重機によって表土を剥いだ。特に遠園遺跡の調査に当っては、ユンボの爪に鉄板を組み合わせて、キャタピラーの跡を削りながら遺構の検出を計った。遺物包含層については、適宜に設けたトレンチによる調査を実施した。本木遺跡は、当初調査を予定していなかったが、工事用道路を敷きたいとの事で、5月8日、その分のみ重機で表土を剥いだ。その結果、谷に盛られた積土中に若干遺物は含まれてはいるものの、遺構はなかった。次いで5月27日には全面的に表土を剥いだが、川砂の再堆積層が厚く谷を埋めていることが判明し、調査を中止した。筒井田遺跡は条里遺構があるかと予想されていた。重機によって長さ100mにわたってトレンチを掘り、その土層の観察を行なったが、それらしいものは全く検出されず、調査を実施しなかった。

ともかく、不満足な内容ではあったが、咲花・北田・都地原・平原・柳ヶ谷各遺跡の調査を進行させていった由であるが、5月14日、若宮町大字山口に円墳6基が路線内に発見された。さらにこれらの古墳の乗る丘陵上には空濠が繞っており、大友家戦史にいう茶臼山城と想定された。6月に入って柳ヶ谷遺跡の調査が進行するに従って、東側丘陵にもさらに集落跡が広がると考えられ、インター全面にわたる調査が必要となった。各地点の路線内面積は、茶臼山城4,800㎡・小原古墳群3,000㎡・インター分41,500㎡であり、時まさに至れりの感であった。

6月25日、公団担当者、業者と共に、継続中の調査の終了見通し、及び追加分遺跡調査所要日数等について説明し、また建設側の意見を聴いたが、追加遺跡地があまりにも広大であると共に、用地問題・立木処理問題が複雑に絡んでいるため、その場では結論が出せなかった。6月26日、文化課内でこの事について協議すると共に、6月28日、追加遺跡について、工事々務所職員と文化課々長以下の職員が立ち合い、さらに7月1日には、公団建設局総務課職員と文化課職員とが立ち合った。その結果、茶臼山城については早急に測量会社に地形実測を委託する事、インター分については遺構の残存範囲を把握するため重機を導入して、全面表土を剥ぐことが決められた。調査担当者については、福岡工事区のうち筑紫野市分遺跡調査終了に伴って、若宮町内調査に加わる事となった。

7月3日よりインター附近の表土を剥いだ、その結果、柳ヶ谷遺跡に近い丘陵では若干の住居跡が検出されたが、西側の、よりインターに近い丘陵では遺構が全く検出されなかった。凡

そ5,000㎡の路線内面積が、調査予定地から除かれた。しかし、7月28日より始めたインター内の調査では、立木伐採によって円墳が10基以上発見され、用地未解決分を加えれば20基近くなることが判明した。ともかく、工事の進行上、東側より土取り作業と相並んで調査を実施していった。

一方茶臼山城及び小原古墳群については、8月5日より伐採作業に入り、9月1日より東洋航空事業K.K.の手によって地形測量を開始した。空濠及び土塁、周辺円墳群については、等高線間隔0.5mの平板測量を行ない、他地形は航空写真を利用して地形を復元した。そのようにして9月末にはその成果が出たが、その作業も発掘作業共々、土取り作業の進行と平行したのである。

9月14日、公団建設局総務課・直方工事々務所・文化課の各職員が会し、今後の調査日程及び鞍手町分遺跡の状況について談合した。つまり、小原古墳群・茶臼山城跡については10月末日までに調査を完了すること、汐井掛古墳群については同日に完了する地点で調査を中止する事とした。鞍手町分遺跡については、文化課側より遺跡分布範囲図面を提出した。公団側からは工事用道路分の調査を先行してもらいたい旨要望があり、そのための立会いを9月20日前後にしたいとの事であった。

9月29日、直方市及び鞍手郡内各町教育委員会と共催で、若宮町内遺跡の見学会及び中央公民館での発掘状況説明会を催した。天候に恵まれた事もあって、小学生から老人まで100人前後の人々が弁当持参で集まり、盛会であった。

以上のような状況で、11月15日全ての作業を終了し、来年度の調査に備えたのであった。

遺跡の調査関係者はつぎのとおりである。

昭和49年度

総括	福岡県教育委員会	教育長	森田 實	管理部長	西村 太郎
		文化課長	藤井 功	文化課課長補佐	平井 元治
		文化課々長 参事補佐	川崎 隆夫	調査係長	松岡 史
庶務会計		文化課庶務係長	前田 栄一	文化課庶務主査	師岡 満
		文化課庶務主事	山本 文和	嘱託	因 将太
発掘調査員		文化課技師	栗原 和彦		酒井 仁夫
		同	上野 精志	同	池辺 元明
発掘調査補助員		高田 一弘	中牟田賢治	伊東登美子	内田 始
		松村 一良	田平 徳栄	関 晴彦	清水 範行
		小味山ゆり			

昭和50年度

総括	福岡県教育委員会	教育長	森田 實	管理部長	西村 太郎
		文化課長	藤井 功	文化課々長補佐	野上 保
		文化課々長補佐	川崎 隆夫	調査係長	松岡 史
		技術主査	栗原 和彦	技術主査	宮小路賀宏
庶務会計		文化課庶務係長	前田 栄一	文化課庶務主査	師岡 満
		文化課庶務主事	山本 文和	嘱託	因 将太
発掘調査員		筑波大学教授	増田 精一	筑波大学助教授	加藤 晋平
		文化課技術主査	栗原 和彦	文化課技師	石山 勲
		同	酒井 仁夫	同	副島 邦弘
		同	児玉 真一	同	上野 精志
		同	池辺 元明	同	中間 研志
発掘調査補助員		高田 一 弘	中牟田賢治	伊東登美子	川述 公紀
		佐土原逸男	舟山 良一	平ノ内幸治	宇野 慎敏
		日高 正幸	清水 範行	田平 徳栄	小味山ゆり
		東京教育大学学生	東邦女子大学学生	別府大学学生	
		九州大学学生			

地元協力者 (昭和49~50年度)

石川 次三	本田 顕市	中島 利夫	北崎 守勝	有吉 良助	草野 千禄
塩川 義幸	塩川 貞夫	本田辰次郎	塩川 常雄	原田 則一	荒牧 重喜
花田 繁美	松尾 牧夫	安永 金作	塩川 豊	大久保亥之吉	塩川 善喜
吉田ハギエ	本田 初子	丸山チトセ	塩川 昭代	中島 弘子	有吉 弘江
神谷ミツル	荒牧 春子	塩見モモエ	中島トシエ	安武 浪子	安河内和子
塩川 正枝	本田 ヒデ	塩川 絹子	塩川ツキノ	河村マサノ	塩川 初江
北崎千恵子	井田千鶴子	上野 房江	奥村 松子	豊福 文江	藤島 峯子
安永八千子	仲光 民子	井内フジノ	荒牧シゲル	久門 恵子	入江マツノ
春日 貞子	中島カナエ	小方さつか	中村 玉子	荒牧 松子	花田 はな
松尾 キミ	中村フジキ	塩川 エン	真鍋 文子	伊藤 シゲ	大峰 愛子
神谷トシ子	吉田美智子	吉田 秀子	波止美登里	石川イチコ	毛利ツキノ
太田ウメノ					

なお、日本道路公団の調査関係者名は、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書一VI一参照。

Tab.1 九州縦貫自動車道古賀～直方間関係遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	内容	調査面積 (m ²)			備考
				49年度	50年度	51年度	
直 1	本木遺跡	宗像郡福間町大字本木	散布地	1,331			遺構なし
直 2	遠園遺跡	鞍手郡若宮町大字山口	中世屋敷跡	6,909			
直 3	小原遺跡	"	弥生～古墳時代住居跡	615	5,228		
直 4	汐井掛1号墳	若宮町大字沼口	円墳, 近世墓地			150	
直 5	汐井掛2号墳	"	円墳	314			
直 6	汐井掛3号墳	"	円墳	480			
直 7	咲花遺跡	"	奈良時代住居跡	5,325	301		
直 8	都地原第1地点	"	掘立柱建物	4,107			
直 9	北田遺跡	"	散布地	436			
直 10	柳ヶ谷遺跡	若宮町大字水原	弥生～古墳時代住居跡	6,038			
直 11	筒井田遺跡	宮田町大字下有木	条里	185			遺構・遺物なし
直 12	平原遺跡	宮田町大字芹田	掘立柱建物	1,776			
直 13	段ノ上遺跡	鞍手町大字室木	散布地		950	1,731	遺構なし
直 14			円墳				消滅
直 15	高木A-1号墳	鞍手町大字新北	円墳		150		
直 16	高木A-2号墳	"	円墳		150		
直 17	高木遺跡	"	須恵器・土師器・散布地		500		遺構なし
直 18	高木遺跡	"	弥生時代土拵墓・木棺墓・石棺墓 甕棺墓・弥生時代住居跡		600	132	
直 19	高木B-1号墳	"	円墳		150		
直 20	高木B-2号墳	"	円墳		150		
直 21	向山遺跡	"	弥生時代袋状竪穴・土拵墓・弥生～古 墳時代住居跡, 円墳		1,982	4,676	
直 22	中屋敷遺跡	鞍手町大字中山	弥生時代住居跡・袋状竪穴, 中世土拵墓・柱穴		4,174	3,659	
直追1	都地原第3地点	若宮町大字水原	弥生～古墳時代住居跡	1,470			
直追2	都地原第2地点	若宮町大字沼口	散布地	4,939			遺構なし
直追3	汐井掛遺跡	"	弥生～古墳時代木棺墓・石棺墓 土拵墓・石蓋土拵墓・円墳	17,577	19,000		50年度は1部筑波大学に調査委嘱
直追4	小原古墳群	若宮町大字山口	円墳		735		
直追5	茶臼山城跡	"	弥生時代・住居跡・石棺墓・木棺墓 石蓋土拵墓・空濠・土埜	4,251	40		
直追6	末森遺跡	鞍手町大字八尋	土師器・青磁・散布地		280		遺構なし
直追7	音丸遺跡	鞍手町大字新北	山城		500	2,000	9,000m ² を測量
直追8	力石遺跡	"	土師器・散布地		600		遺構なし
直追9	後牟田遺跡	鞍手町大字中山	青磁・散布地		32	475	遺構なし
合 計				48,753	35,522	12,823	

註 1. 追……………追加地点の意

2. 直……………直方地区の意

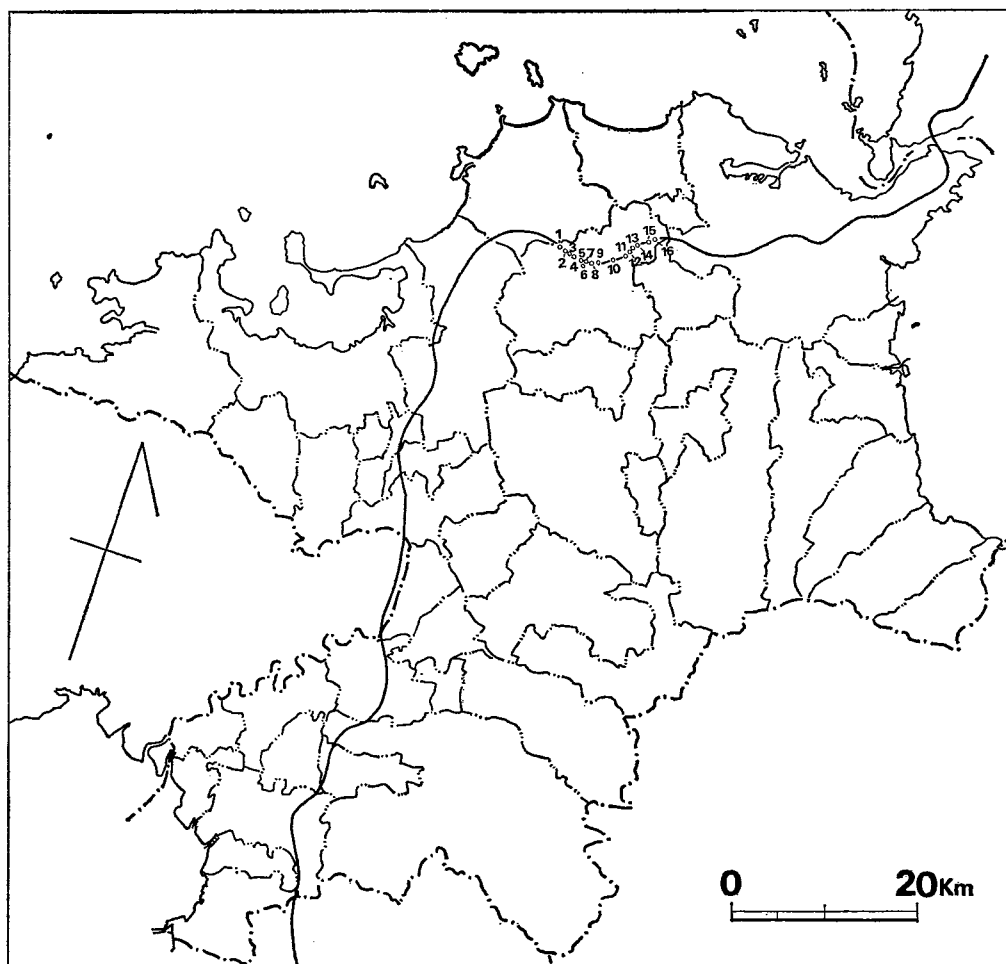


Fig. 1 鞍手地区調査遺跡分布図 (縮尺1/708,000)

- | | | | |
|-----------|----------|------------|------------|
| 1. 遠園遺跡 | 2. 茶臼山城跡 | 3. 小原古墳群 | 4. 小原遺跡 |
| 5. 咲花遺跡 | 6. 汐井掛遺跡 | 7. 都地原第2地点 | 8. 都地原第3地点 |
| 9. 柳ヶ谷遺跡 | 10. 平原遺跡 | 11. 段ノ上遺跡 | 12. 高木古墳群 |
| 13. 高木遺跡 | 14. 向山遺跡 | 15. 音丸城跡 | 16. 中屋敷遺跡 |
| 17. 後牟田遺跡 | | | |

Ⅱ 鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群

Ⅱ 鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群

若宮・宮田平野は遠賀川の形成する筑豊平野の北西部に位置し、犬鳴山（584 m）に源を発する犬鳴川流域にある。

若宮町は、鉾立山（663m）、犬鳴山を西南に、西方には西山（645m）と、西と南を山地に限られ、北も麿山（293m）などの丘陵性の山々に限られているうえ、低平な丘陵部が広く分布しているために、平野部は狭小なものとなり盆地をなしている。その中を、黒丸・山口川の小流を合して東流する犬鳴川はこの平野部の生命線をなす。

宮田町は、六ヶ岳（339m）連山を東北に、南に笠置山（425m）と、それに連なる大之浦丘陵等の丘陵部に包まれ、犬鳴川とそれに合する八木山川の流域にやはり盆地状の狭長な平野部を形成している。

このように、平野部が比較的狭少な地域であるため、開発の波に洗われることもなく、諸々の遺跡も破壊されず地下に眠っていた。

しかし、昭和47年から山陽新幹線の建設、昭和49年度からは九州縦貫自動車道の建設が始まり、さらに昭和50年度には、産炭地振興にかかる工業団地の造成が開始され、これに伴う諸開発事業が急速に増えてきた。これらの開発行為によって発見された遺跡地も少なくない。

遺跡地は、これらの低丘陵・台地・河岸段丘面に集中し、弥生時代から歴史時代にわたっている。ここでは若宮町・宮田町に限り、周辺の遺跡群を最近行なわれた調査をもとに簡単に紹介してみる。

犬鳴川流域では縄文時代の遺跡は発見されていないが、散布地として山口川上流の鶴ヶ谷周辺が知られる。荒牧正義氏採集の石器は、縄文～弥生時代のもので石鏃・石匙等がある。（PL.1-2）、また、若宮町竹原の山口川氾濫原で、流木にまじって後期の土器片が発見されている。

弥生時代の遺跡としては、犬鳴川流域で宮田町上大隈の弥生時代後期を中心とする土器群、同磯光の石斧・石庖丁・石鏃、若宮町金丸の銅戈・銅剣、同小金丸の石庖丁・石斧、同宮永の小型仿製鏡などが知られる。また、山口川流域では、九州縦貫自動車道の発掘調査で発見された、汐井掛遺跡の墓地群、柳ヶ谷・都地原・小原の住居跡群はこの時期の重要な遺跡になった。

3. 小原遺跡 山口川の西南岸の丘陵斜面に立地する。九州縦貫自動車道建設に伴う福岡県教育委員会の発掘調査（1974年4月～5月）では、住居跡21軒・貯蔵穴2・掘立柱建物等が検出されている。住居跡は、弥生時代後期および古墳時代後期のものである。貯蔵穴は弥生時代中期、掘立柱建物は歴史時代のものである。（註1・2）詳細については報告書に譲る。

5. 汐井掛遺跡 山口川の北岸、東西にのびる丘陵上に立地する墓地群である。九州縦貫自動車道建設に伴う福岡県教育委員会の発掘調査（1974年7月～1976年4月）では、丘陵の尾根

にそって弥生時代から古墳時代にかけての土壙墓（木棺墓）157・箱式石棺墓18・石蓋土壙墓12・甕棺墓1が検出された。またこれらの墳墓には墓標的存在と考えられる配石・置石が認められる。出土遺物は、長宜子孫内行花文鏡片・飛禽鏡片・方格規矩鏡1・装身具（ガラス製小玉多数・ガラス製勾玉2・硬玉製勾玉2・碧玉製管玉10・水晶玉10）鉄器類武器（鉄鏃4・剣2・刀3）工具（鉄斧3・刀子1）農具（鎌1・鍬先1）がある。さらに古墳28基・蔵骨器などが検出されている。（註2）詳細は正式報告の予定である。

6. 小金原遺跡 (PL. 2) 若宮町大字高野字小金原に所在し、犬鳴川の作る段丘上に位置する。石松清氏によって石廂丁・石斧・石剣・弥生式土器が採集されている。（註3）小金原の他に湯原・辻の下・宮永八反田からも弥生式土器・石器が採集されているが採集地点が明らかでないため分布図・地名表からははずした。

8. 金丸遺跡 浦原古墳群の所在する丘陵の一部に位置するものと推定できるが確かではない。森本六爾『日本考古学研究』に「鞍手郡若宮村大字金丸出土のクリス形銅剣1」の記述がある。遺物の所在は不明である。（註3・4・8）

10. 上大隈遺跡 (Fig. 2) 犬鳴川の河岸段丘上にあり、古くから弥生式土器の散布地として知られている。Fig.2の土器はその代表的なもので、『北九州古文化図鑑』には、「上大隈の竪穴よりの発見品、簡単乍ら原始的な描線画がある。即ち山形文と鳥形のもので表面は元来丹塗がしてあった痕がある。」とある。この土器は鞍手高校に保管してあったが火災の際に消滅している。（註3・6・7）



Fig. 2 上大隈遺跡出土土器

古墳時代の遺跡としては、若宮平野を三分し中央部まで延びる竹原丘陵や小金原丘陵の先端部に剣塚前方後円墳・帆立貝式前方後円墳の高野1号墳・八幡塚古墳・史跡竹原古墳が立地し、10数ヶ所の古墳群が平野をとり囲むように分布している。集落遺跡は、近年まで発見がなかったが、九州縦貫道関係の小原・柳ヶ谷・都地原遺跡、新幹線関係で田尻遺跡等が発見された。

12. 小原古墳群・里古墳 若宮町字山口字小原にあり、約80基の円墳が観察できる。九州縦貫自動車道建設に伴う福岡県教育委員会の発掘調査（1974年8月～11月）で8基の調査が実施されている。いずれも墳頂部に陥没が認められ、盗掘を受けており、なかに石材を全く残さな

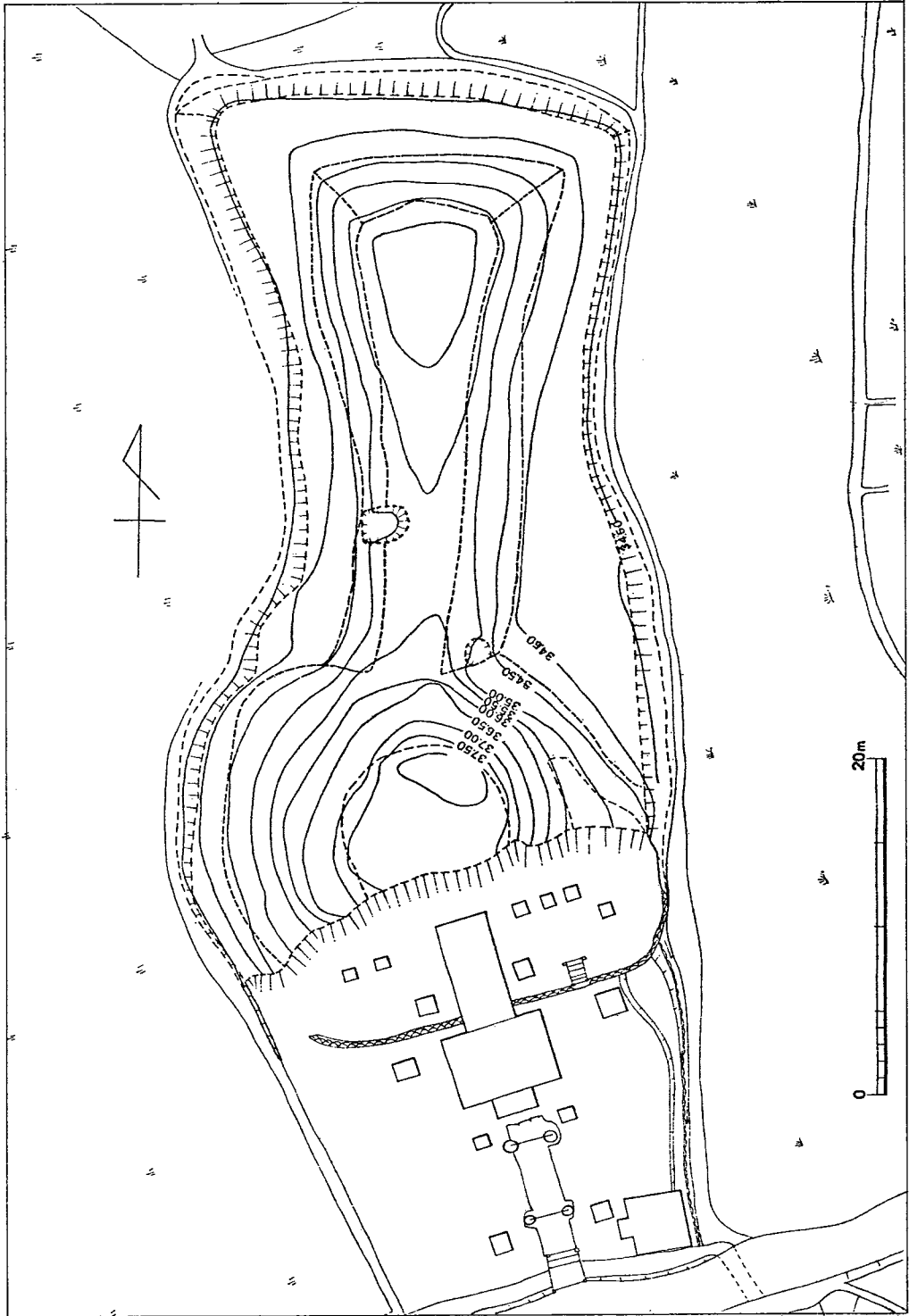


Fig. 3 劔塚古墳墳丘夷突測図 (縮尺1/400)

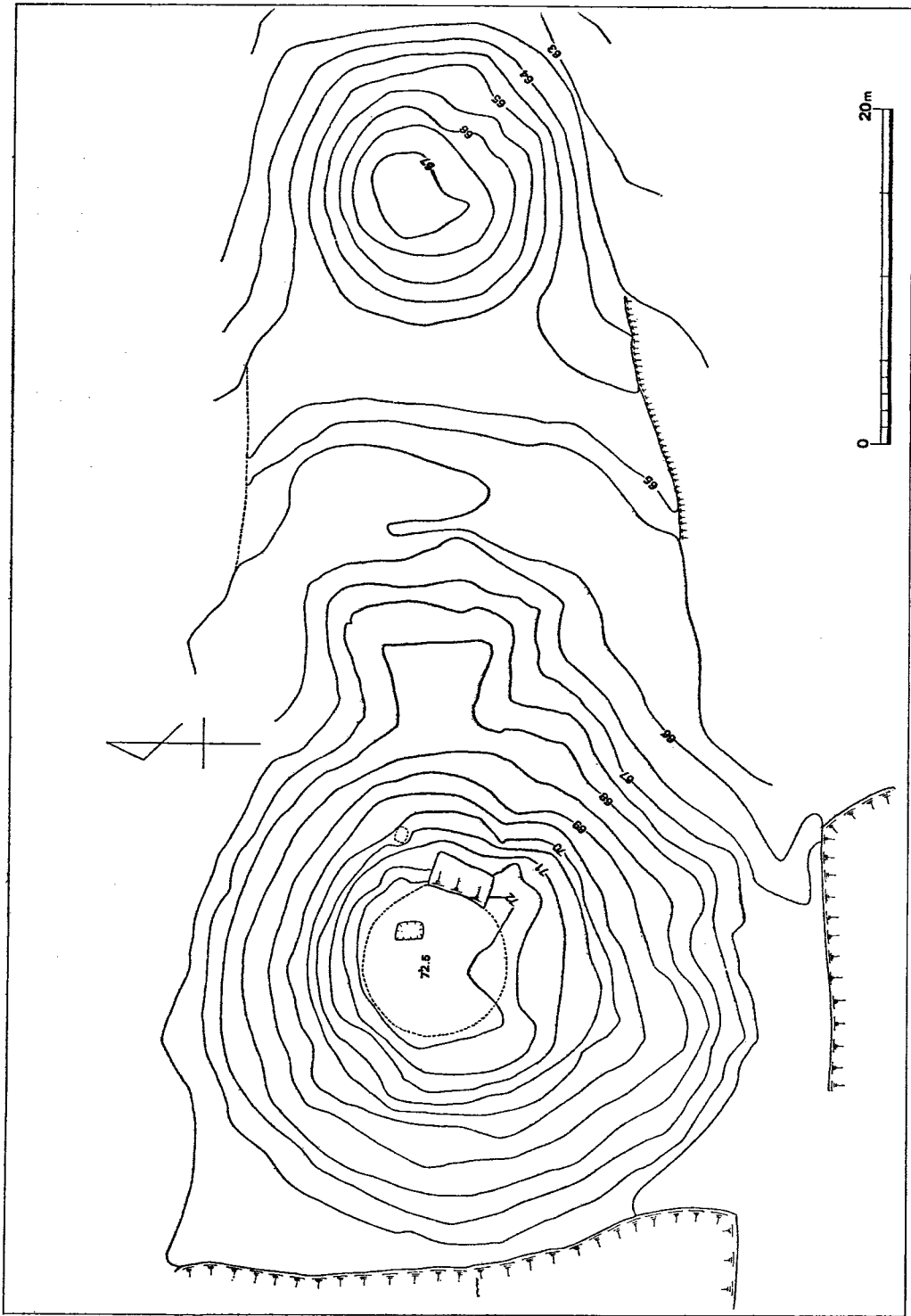


Fig. 4 高野古墳群第1・2号墳墳丘実測図

いものもあった。出土遺物から6世紀末から7世紀にかけての古墳と推定できる。(註2) 詳細は正式報告の予定である。

小原古墳群と同丘陵に存在する前方後円墳を確認した。里古墳と呼ぶ。この古墳はすでに盗掘を受け開口している。長さ約7mの複室の横穴式石室で玄室奥壁部に石棚がある。石室及び石棚の構築は竹原古墳と類似しており、ひとまわり大きい。ほぼ同時期に比定できる。主軸はほぼ東西を示し、墳丘南側は畑地のため削平されているが、北側は括れ部を明確に残している。後円部径は約14mである。近いうちに測量を実施したい。(註5)

13. 剣塚古墳 (Fig. 3, PL. 4-1・5) 若宮町高野に所在し、犬鳴川・黒丸川・山口川の合流点の西側小金原丘陵の先端部の低位置に立地する。二段築成の前方後円墳である。全長約50m・後円部径23m・前方部幅約15mを測る。鞍手郡内では最大のものである。後円部の南側の大半が興玉神社の建築の際に削取られているが、そのほかはよく留めている。昭和37年に後円部上に半円状に15個の円筒埴輪の配列が確認されている。(註3)

14. 高野古墳群 (Fig. 4, PL. 4-2) 若宮町大字高野に所在し、竹原古墳の所在する丘陵とは黒丸川をはさむ向い側の丘陵上に立地する。帆立貝式前方後円墳1基・円墳3基が観察できる。前方後円墳は全長約38m・後円部径約29m・前方部幅約10mを測りほぼ原形をよく留めている。以前は円墳も9基を数えたが、造成のため破壊された。この丘陵は若宮町内でも多くの古墳が分布し、遺物が散布しているが、戦後の開拓による削平のため多くの埋蔵文化財が崩壊している。

18. 史跡竹原古墳 (PL. 6-2) 若宮町大字竹原にあり、装飾古墳としてあまりにも有名である。昭和32年に国指定史跡となっている。竹原古墳は発見されて以来、その華麗な装飾壁画はあまねく人に知られ、現在も鮮明な図柄を見せる。古墳の詳細については、森貞次郎氏によって紹介されている。昭和50年度文化財保存事業として、竹原古墳の保存工事が行なわれ、ガラスによる密封がなされた。出土遺物は、若宮町中央公民館に展示されている。(註3・12~18)。

20. 上金生古墳群 若宮町金生(かのう)に所在する。白山神社裏の丘陵一帯に32基の中小円墳が散在する。この一帯は『和名抄』に鞍手の六郷として「金生郷」の地名があり、白山の地名由来からも古代の鉄生産地として考えられている。また北側の水田では条里制の存在が推定できる。

25. 八幡塚古墳 若宮町大字竹原にあり、竹原古墳・剣塚古墳と並び若宮町の代表的な古墳である。山陽新幹線の側道が墳丘裾部にかかるため、1972年に裾部の調査、1975年に内部主体の確認調査が福岡県教育委員会により実施された。墳丘は二段築成の円墳で径約35mを測り、葺石が施され、周濠をもつ横穴式石室であることが確認された。残念なことに石室は盗掘を受けており、遺物は、須恵器片と円筒埴輪片が出土したにすぎない。詳細は本報告に譲る。

35. 田尻遺跡 若宮町大字金丸・水原にある。山陽新幹線に伴う、福岡県教育委員会の発掘

調査（1973年1月～3月・1974年4月～6月）では、古墳時代後期の竪穴住居跡と掘立柱建物群が発見されている。（註19・21）

38. 下有木古墳群 宮田町大字下有木に所在し、熊野神社の北東側の丘陵に位置する。この古墳群は宅地造成のため数基が破壊されている。このうち1基が1970年3月の土取りの際発見され福岡県教育委員会が調査を実施している。現在5基確認できるが、そのほとんどが盗掘のため半壊の状態にある。

40. 百塚古墳群 宮田町大字上有木に所在する。この古墳群は以前100余基の群集墳であったという土地の古老の話であるが、農道や畑拡張の際に破壊され現在は50基しか確認できない。しかし半数以上は盗掘のために半壊されている。（註28）

48. 倉山古墳（谷頭古墳） 宮田町大字上大隈の丘陵上に立地する前方後円墳である。全長約22m・後円部径約15m・高さ約3m・前方部幅約10m・高さ約1mを測る。前方部は一部畑によって削平された可能性がある。内部主体は横穴式石室である。前方部から円筒埴輪・石室からは鉄鏃・管玉が出土したといわれるが所在は不明である。（註23）

奈良時代の遺跡は発見されていなかったが、九州縦貫道関係の調査で、若宮町沼口の咲花遺跡、宮田町芹田の平原遺跡で掘立柱建物が確認された。また水原丘陵を中心に15ヶ所で蔵骨器が出土している。このほか歴史時代の遺跡では山城跡がある。犬鳴山の熊ヶ城跡、春山の宮永城跡、笠置山の笠木城跡などが著名である。またこれに関する出城・砦も多い。九州縦貫道関係でも茶臼山城・遠園遺跡が調査された。昭和32年に県の考古資料に指定され、沼口の法蓮寺に保管されている山口神社出土銅製経筒の写真撮影を行なった。（PL.7・8・9）

52. 遠園遺跡 若宮町大字山口にあり、山口川の右岸、丘陵平坦部に位置する。九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査（1974年4月～5月）で、掘立柱建物6・土壇7・土墳墓1が発見されている。出土遺物は、青磁・白磁・土師器・瓦器・合子・鉄器等があり、鎌倉時代から室町時代にかけてのものである。「大友家戦史」に遠園城とみえ、茶臼山城との関係も考えられる。詳細は本報告に譲る。（註1・2）

53. 茶臼山城跡 若宮町大字山口にあり、九州縦貫自動車道建設に伴い福岡県教育委員会の発掘調査（1974年10月～11月）が実施された。「大友家戦史」にみられる茶臼山城跡で、天文11年（1542年）に大友家の将、戸次鑑連の手によって落城されている。遺構は空濠・土塁が残っており、城の南及び東側を取り囲んでいる。なお築城以前の遺構として、石棺墓2・石蓋土壇墓2・木棺墓1・土壇墓2・弥生時代後期住居跡1・蔵骨器1が検出された。（註1・2）詳細は本報告に譲る。

65. 若宮条里 条里遺構関係の発掘調査は、1974年に縦貫道関係の調査で宮田町下有木筒井田遺跡、新幹線関係の調査で若宮町金丸の2ヶ所で実施されたが条里遺構・関連遺物は確認さ

れていない。しかしながら道路・水路・水田の畦畔・小字界からみて、条里制の行なわれたことは明らかである。(註26)

79. 笠置山城跡(笠木城) 嘉穂郡と鞍手郡の郡境、標高425mの笠置山全山を山城として築かれ、城跡は山頂から一面に、本丸・二の丸・三の丸を残している。なおこの山はいたるところでアズキ色の輝緑凝灰岩が産出されることでよく知られる。(池辺元明)

Tab. 2 若宮・宮田町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	時期	遺構	出土遺物	
縄文時代							
1	鶴ヶ谷	若宮町小原字鶴ヶ谷	丘陵先端	縄文	散布地	石鏃・後期土器片	
弥生時代							
2	柳ヶ谷	若宮町水原字柳ヶ谷	丘陵	弥生～奈良	住居跡・貯蔵穴、 掘立柱建物	弥生式土器、須恵器・土師器 石器	1・2
3	小原	" 山口字小原	"	弥生～古墳	住居跡・貯蔵穴	弥生式土器、須恵器・土師器 鉄製品・石器	2
4	都地原	" 沼口字都地原	丘陵平坦地	"	住居跡	弥生式土器、須恵器・土師器	1
5	汐井掛	" 沼口字汐井掛	"	弥生～歴史	土拵墓・木棺墓 石蓋土拵墓 箱式石棺墓・円墳 蔵骨器	弥生式土器・土師器・須恵器 後漢鏡・玉類・鉄製品	2
6	小金原	" 高野字小金原	段丘上	弥生	散布地	石斧・石庖丁	3
7	東禪寺	" 脇田字湯原	"	"	"	"	3
8	金丸	" 金丸	丘陵	"	"	銅戈・銅劍	3・4・8
9	先尾高	" 高野字先尾高	"	"	住居跡	弥生式土器	5
10	上大隈	宮田町上大隈	河岸段丘	"	弥生式土器散布地	弥生式土器	3・6・7
11	薬師丸	" 磯光字薬師丸	"	"	"	石庖丁・鏃・石斧	8
古墳時代							
12	小原古墳群 里古墳	若宮町山口字小原・里	丘陵	古墳	円墳80基(内8基調査) 前方後円墳1基	須恵器・土師器・馬具・玉類 鉄製品	1・2・5
13	剣塚古墳	" 高野字剣塚	丘陵先端	"	前方後円墳	円筒埴輪	3
14	高野古墳群	" 高野	丘陵	"	前方後円墳1基 円墳9基		
15	浦原古墳群	" 金丸字浦原	"	"	円墳16基		

16	天神山古墳群 金丸古墳 西の浦古墳	若宮町金丸字天神山	丘陵	古墳	円墳4基	鉄剣・鉄斧・鎌・刀子・人骨	10・11
17	沼口・萩野古墳群	沼口	"	"	円墳		
18	竹原古墳	竹原字諏訪神社	丘陵先端	"	装飾古墳	馬具・玉類・鏡片・鉄鍬	3・12~18
19	稲光古墳群	稲光字沖	丘陵	"	円墳3基		
20	上金生古墳群 白山神社裏古墳	金丸字上金生	"	"	円墳32+ α 基		
21	庄屋村東古墳群	下字庄屋村	"	"	円墳11基		
22	庄屋村西古墳群	"	"	"	円墳(5基残存1部開口)		
23	大浦東古墳群	原田字大浦	"	"	円墳2基		
24	大浦西古墳群	"	"	"	円墳15基(現存12基)		
25	八幡塚古墳	平字竹原	丘陵先端	"	円墳	円筒埴輪片・須恵器片	19
26	越後古墳	金丸字越後	"	"	"	須恵器	
27	向田古墳	原田字向田	丘陵	"	"		
28	損ヶ熊古墳群	原田字損ヶ熊	"	"	円墳5基		
29	宮永古墳群	宮永	"	"	円墳20基		
30	東禅寺古墳群	庄屋村	"	"	円墳10基		
31	平古墳	平	"	"	円墳		
32	伊野古墳	平字竹原	"	"	円墳		
33	竹原	"	"	"	箱式石棺	鉄器	3
34	古賀の原	銚字古賀の原	段丘	"	散布地	須恵器・鏡片・玉類・人骨 金銀環	3
35	田尻	金丸水原	"	古墳~歴史	住居跡	須恵器・土師器	19・21
36	浦宮古墳群	宮田町本庄字浦宮	丘陵	古墳	円墳2基 前方後円墳1基		
37	上屋敷横穴群	上大隈字上屋敷	"	"	横穴3基		
38	下有木古墳群	下有木	"	"	円墳9基(現存5基)		
39	下有木北古墳群	"	"	"	円墳・箱式棺	人骨・鉄刀・鉄鍬・須恵器	
40	百塚古墳群	上有木字向の畑	"	"	円墳(現存50基)		28
41	井掘古墳	上有木字井掘	"	"	円墳		
42	四ッ塚古墳群	上有木字向の畑	"	"	円墳6基(現存5基)		
43	生見古墳群	宮田字生見	"	"	円墳2基		
44	本白古墳 上大隈古墳	本城字本白	"	"	円墳2基	鉄器・玉類	
45	亀石古墳群	本城字亀石	"	"	円墳2基		
46	谷古墳群	龍徳字谷	"	"	円墳3基(現存1基)		
47	龍徳古墳群	龍徳	"	"	円墳5基		

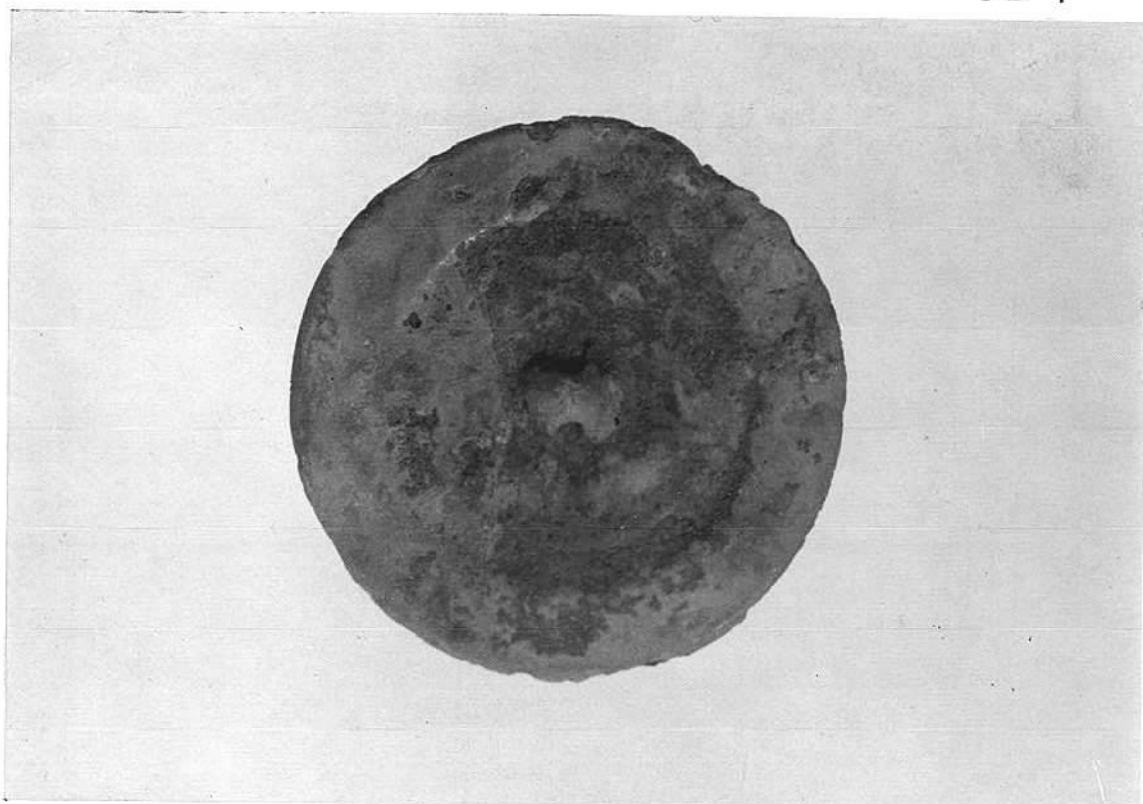
48	倉山古墳 谷頭古墳	宮田町上大隈字谷山頭	段丘	古墳	前方後円墳	円筒埴輪・管玉・鉄鍬	23
49	向の畑	" 下有木字向の畑	丘陵	"	箱式石棺	鉄剣	
50	神田	" 上有木字坂元	"	"	"		
歴 史 時 代							
51	咲花	若宮町沼口字咲花	丘陵平坦地	奈良	集落・住居跡	須恵器・土師器	1
52	遠園	" 山口字里	"	中世	掘立柱建物・土拡 土拡墓	青磁・白磁・土師器・瓦器 合子・鉄器	1・2
53	茶白山城跡	" 山口字里小原	丘陵	"	山城跡・空濠・土塁	土師器・須恵器・青磁	1・2
54	宮永城跡	" 宮永	山頂	"	"		
55	明専寺城跡	" 野中	丘陵	"	"		
56	天の坊城跡	" 天の坊	山頂	"	"		
57	清水城跡	" 清水	"	"	"		
58	熊ヶ城跡	" 犬鳴	"	"	"		
59	草場城跡	" 乙野字草場	"	"	"		3
60	友池城跡	" 原田字友池	丘陵	"	"		
61	鬘鏡山城跡	" 金生字鬘鏡山	山頂	"	"		
62	山口神社経塚	" 沼口		"	経塚	経筒・銅鏡	3
63	清泉寺跡	" 金丸字岩崎	段丘	"	寺跡	土師器片	
64	金丸墓地	" 金丸	"	江戸	近世墓		25
65	若宮条里	" 若宮平野	"	奈良			26
66	稲光城跡	" 稲光	山頂	中世	山城跡		
67	下村城跡	" 下字乙藤	丘陵	"	"		
68	金丸城跡	" 金丸	丘陵上	"	"		
69	杉園遺跡	" 稲光字杉園	段丘		土師器散布地	土師器片	27
70	平原	宮田町芹田字平原	丘陵平坦地	奈良	掘立柱建物	土師器・須恵器	
71	城崎砦跡	" 阪元字城崎	丘陵上	中世	砦跡・木戸跡		
72	上有木城跡	" 上有木字井掘	"	"	山城跡		
73	山崎城跡	" 山崎	山地	"	"		
74	山内城	" 山内	"	"	"		
75	白山城跡	" 白山	山頂	"	"		
76	祇園山城跡	" 竜徳字城山	"	"	"		
77	竜ヶ岳城跡	" 竜徳字竜ヶ岳	"	"	"		
78	稲筑城跡	" 竜徳字門の内	"	"	"		
79	笠置山城跡	" 宮田字笠置山	"	"	"	刀・剣	3・26
80	本城山城跡	" 竜徳字城山	"	"	土塁		
81	真光寺跡	" 上大隈字寺の下		"			

- 註1 福岡県教育委員会「鞍手のむかし」若宮町所在遺跡の調査報告会資料 1974. 9
- 2 福岡県教育委員会「鞍手のむかしその3」若宮町所在遺跡の調査報告会資料 1976. 3
- 3 鞍手教育研究所「鞍手郡郷土史」 1965. 6
- 4 森本六爾「日本考古学研究」 1943. 1
- 5 小方良臣氏教示
- 6 九州考古学会「北九州古文化図鑑」 第1輯 1950. 2
- 7 「日本考古学講座 4 弥生時代」1955. 4
- 8 高橋健自「銅鉾銅剣の研究」1923
- 9 直鞍文化財を守る会の実測による。
- 10 佐野一・亀井明德「福岡県鞍手郡若宮町西の浦古墳調査概報」『九州考古学』36・37 1969
- 11 浜田信也「金丸古墳」若宮町教育委員会 1975. 3
- 12 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」美術研究194 1957
- 13 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」『九州考古学』1 1957
- 14 小林行雄編「装飾古墳」平凡社 1964
- 15 斉藤忠編「古墳壁画」日本原始美術5 1965
- 16 森貞次郎「竹原古墳」中央公論美術出版 1968. 3
- 17 酒井仁夫『金丸古墳』付、「竹原古墳出土遺物」若宮町教育委員会 1975. 3
- 18 森貞次郎「北部九州の古代文化」明文社 1976. 5
- 19 井上裕弘編「昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」福岡県教育委員会 1973
- 20 浜田信也氏教示
- 21 霧久嗣郎・小池史哲・宮崎貴夫「田尻遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集 福岡県教育委員会 1976. 3
- 22 石山勲氏教示
- 23 大神邦博氏発見
- 24 鞍手郡教育会「鞍手郡誌」 1934. 11
- 25 霧久嗣郎「下松尾墓地 付金丸墓地」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集 福岡県教育委員会 1976. 3
- 26 霧久嗣郎「若宮条里遺構の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集 福岡県教育委員会 1976. 3
- 27 霧久嗣郎「杉園遺跡の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集 福岡県教育委員会 1976. 3
- 28 小方氏によると、石柵を有する複室の横穴式石室が一基存在する。

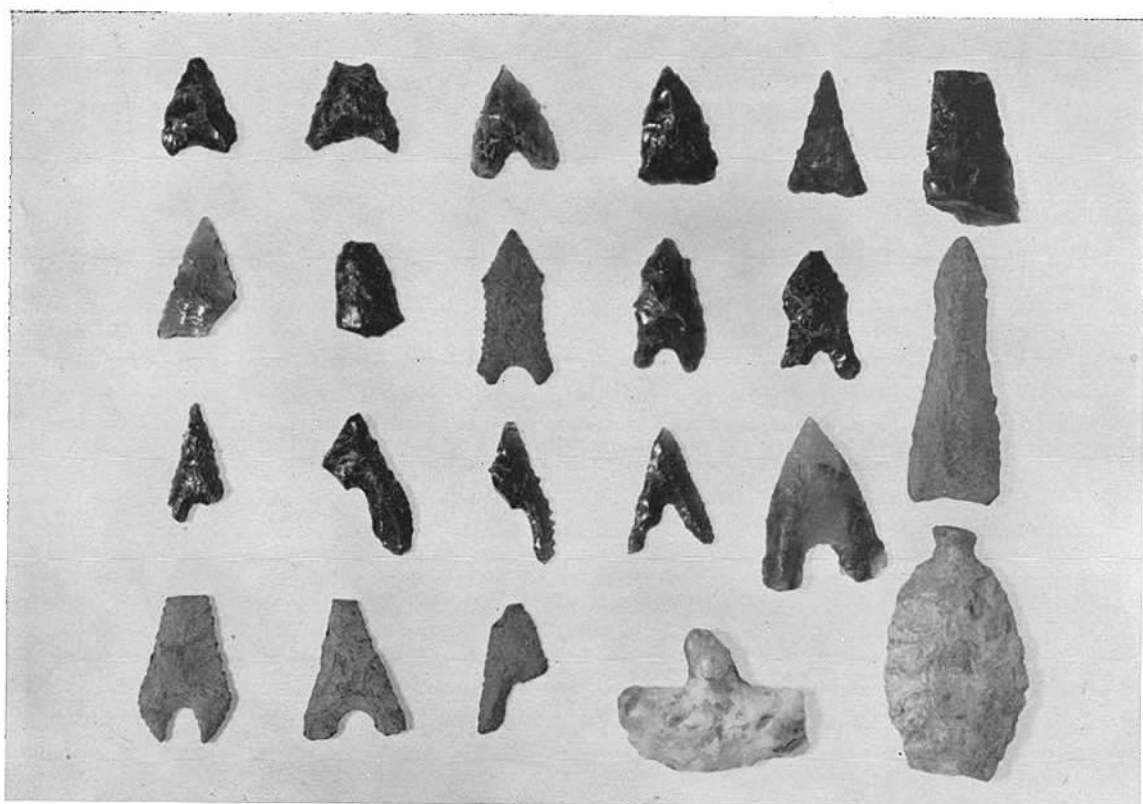


Fig. 5 若宮・宮田地区遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

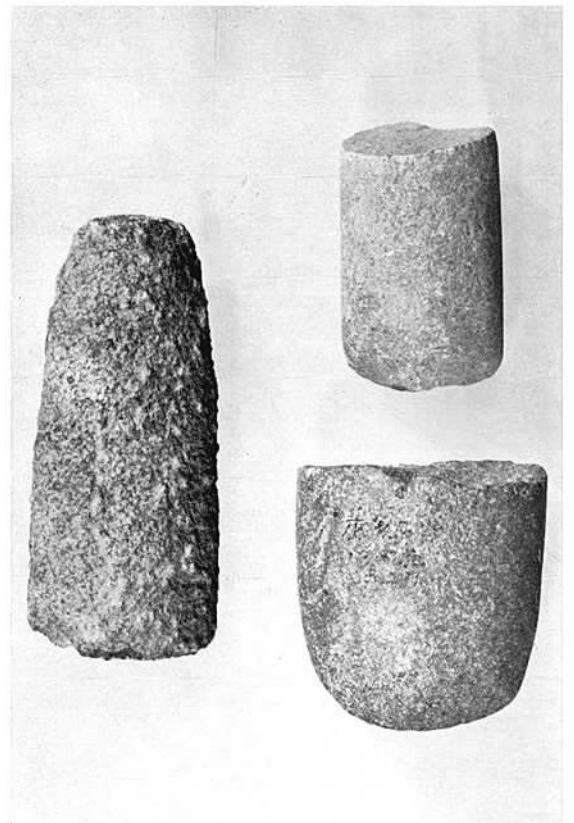
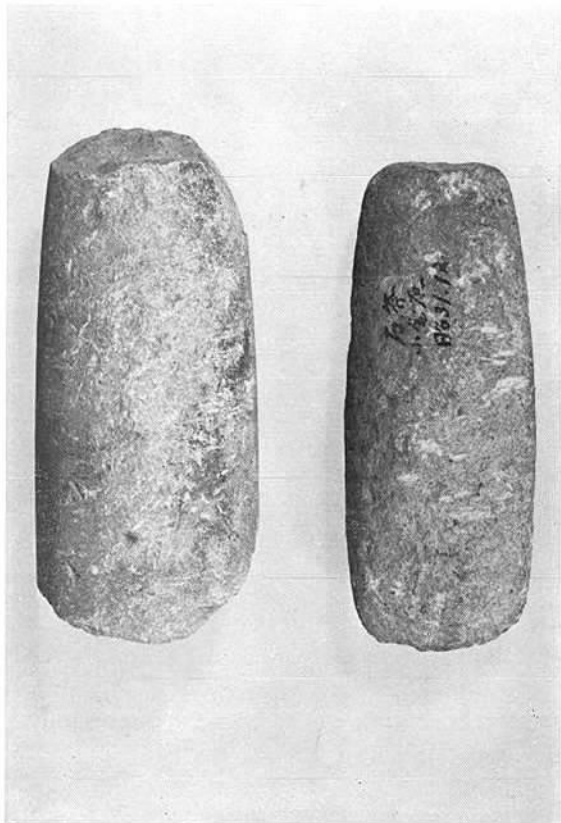
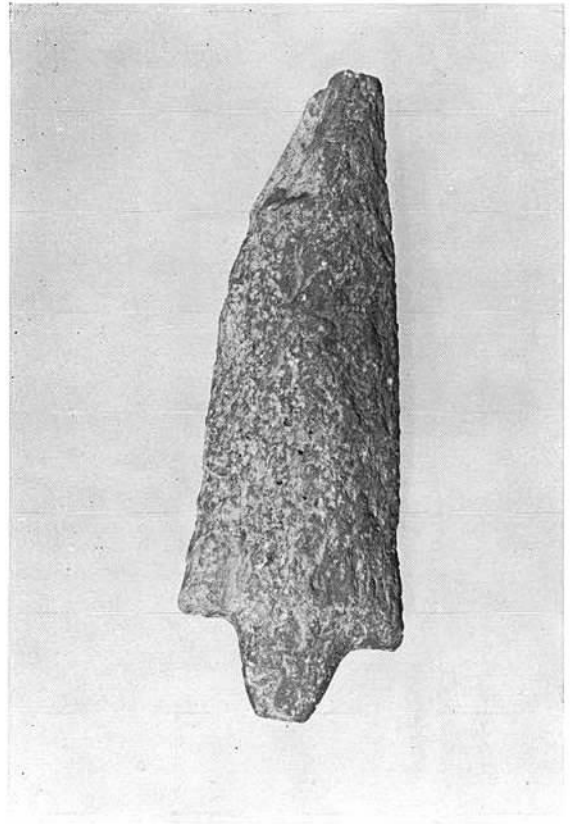
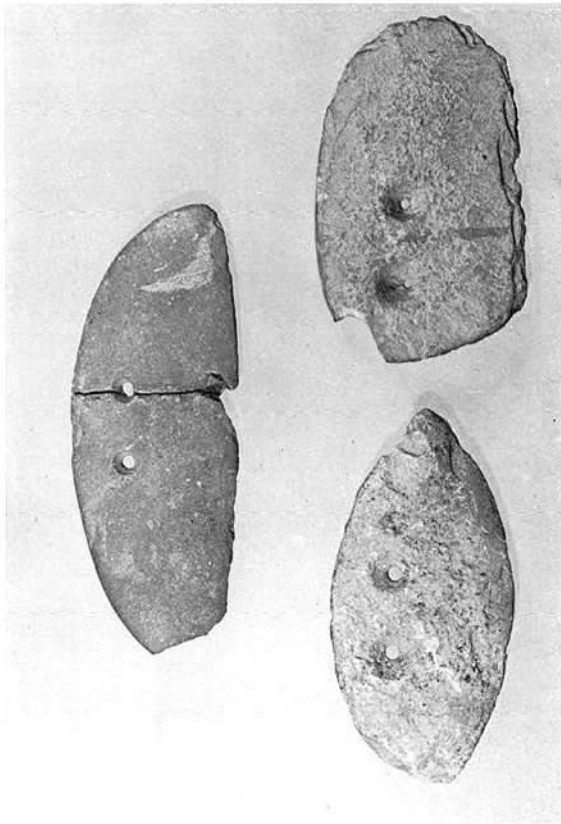
PLATES



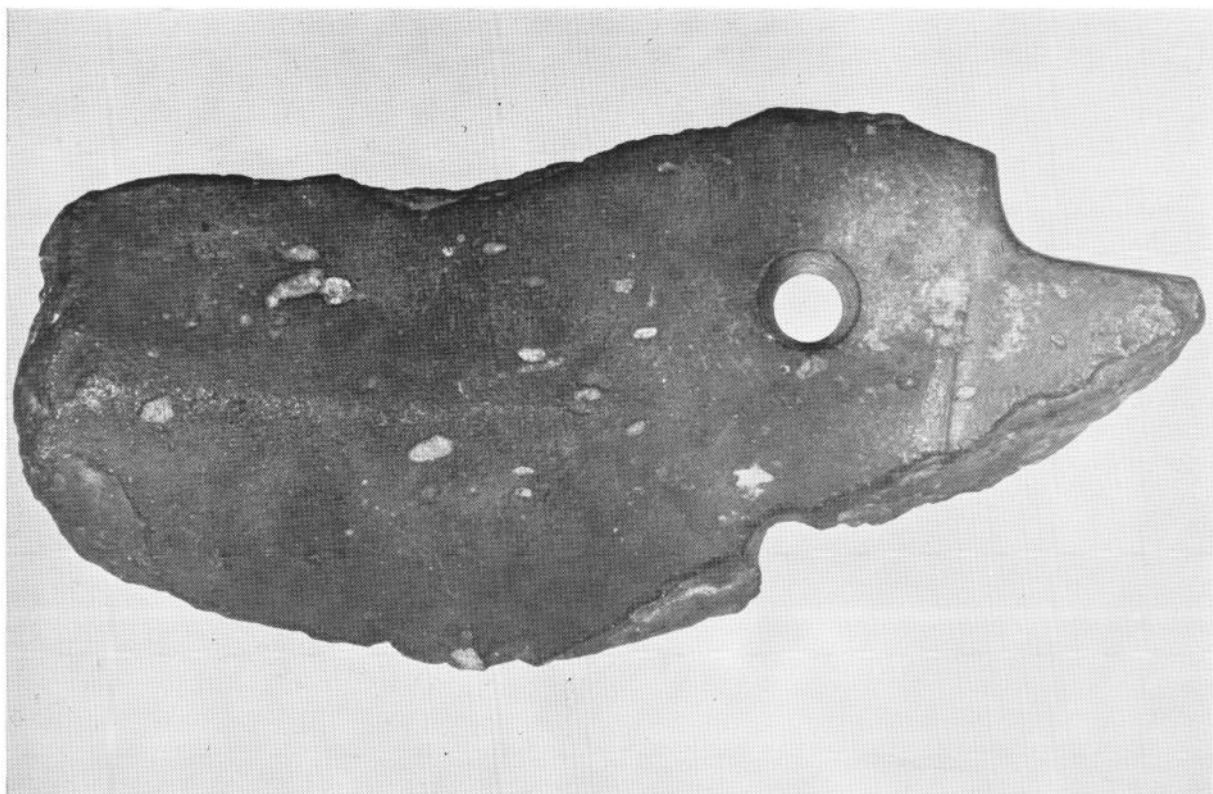
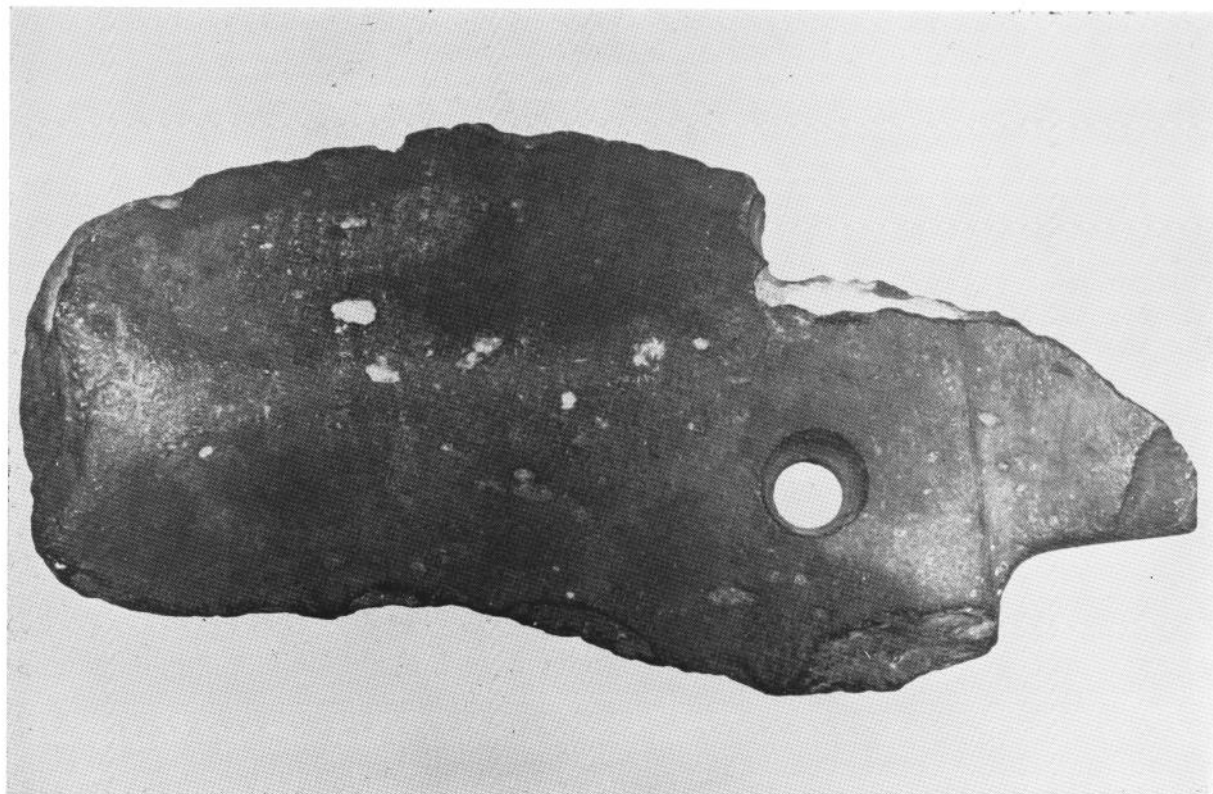
(1) 若宮町宮永採集小型仿製鏡



(2) 若宮町山口鶴ヶ谷採集石器



若宮町小金原採集石器



宮田町 芹田 採集 石才



(1) 劍塚古墳近影

(東から)



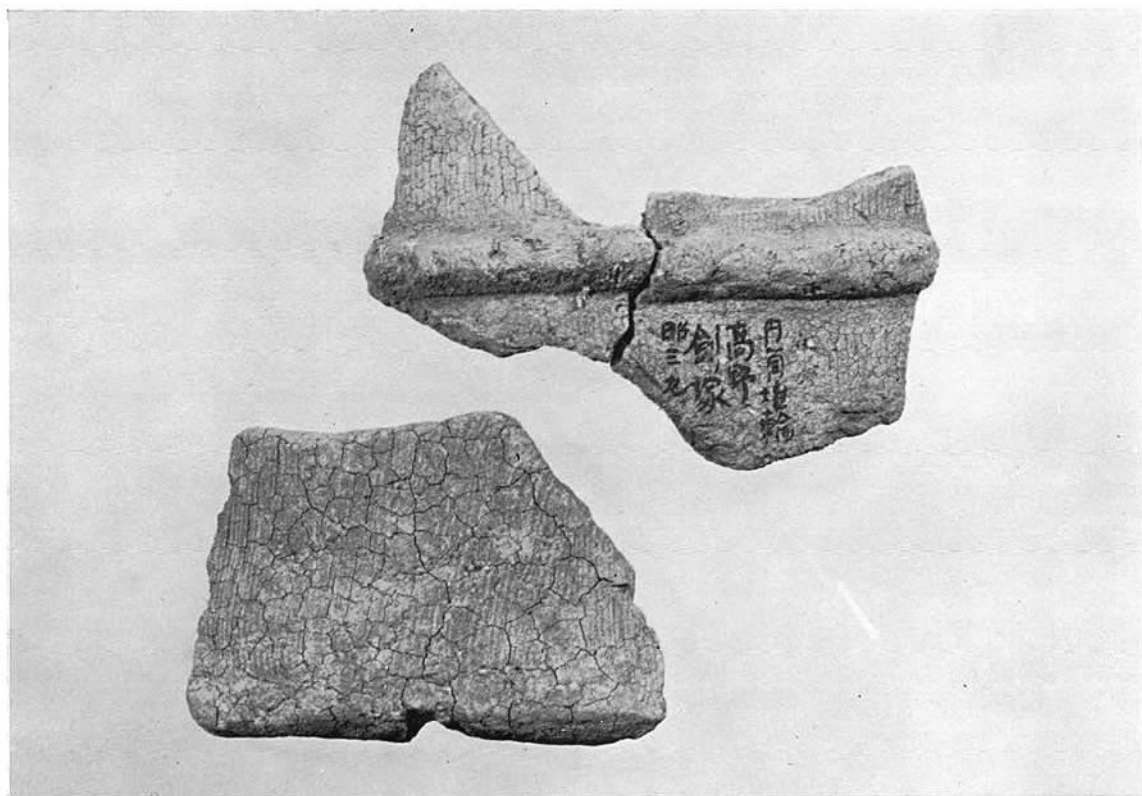
(2) 高野古墳群遠影

(北東から)



(1) 剣塚古墳航空写真

(北から)



(2) 剣塚古墳出土円筒埴輪片



(1) 高野古墳群航空写真

(南から)

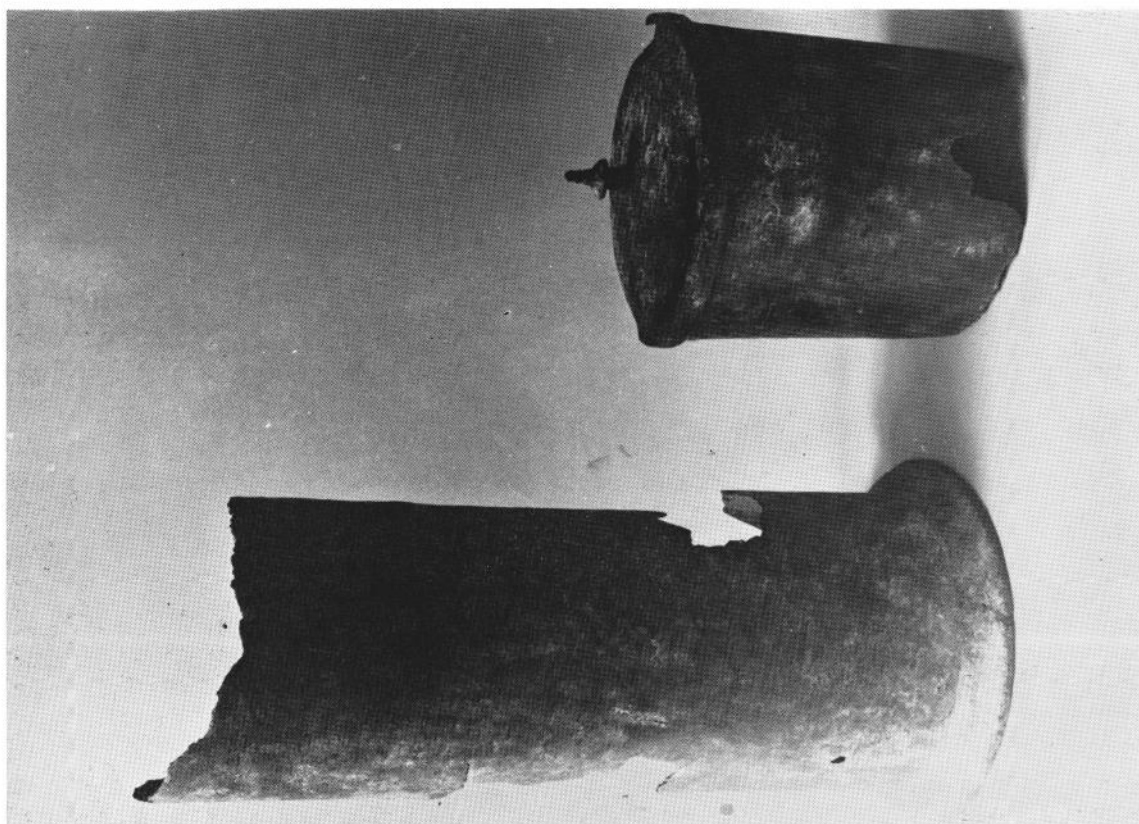


(2) 竹原古墳航空写真

(南西から)



(1) 山口神社出土網代叉鳥文鏡



(2) 山口神社出土経筒

山口神社出土經筒銘

鎮西筑前國鞍手郡上方

香椎之末宮尊廟大菩薩

殊爲報神恩、奉書寫供養

如法經一部、始從於願主

結緣之旦那、二世之大願

爲決定成就、爲法界衆生

同平等利益

願主清原貞延值奉代敬白

助成工巧尊智

保元二年^{歲次}丁丑九月廿日畢^{供養}□

鎮西筑前國鞍手□上方

香椎之末宮尊廟大菩薩

殊爲報神恩奉書寫供養

如法經一部始從於願主

結緣之旦那、二世之大願

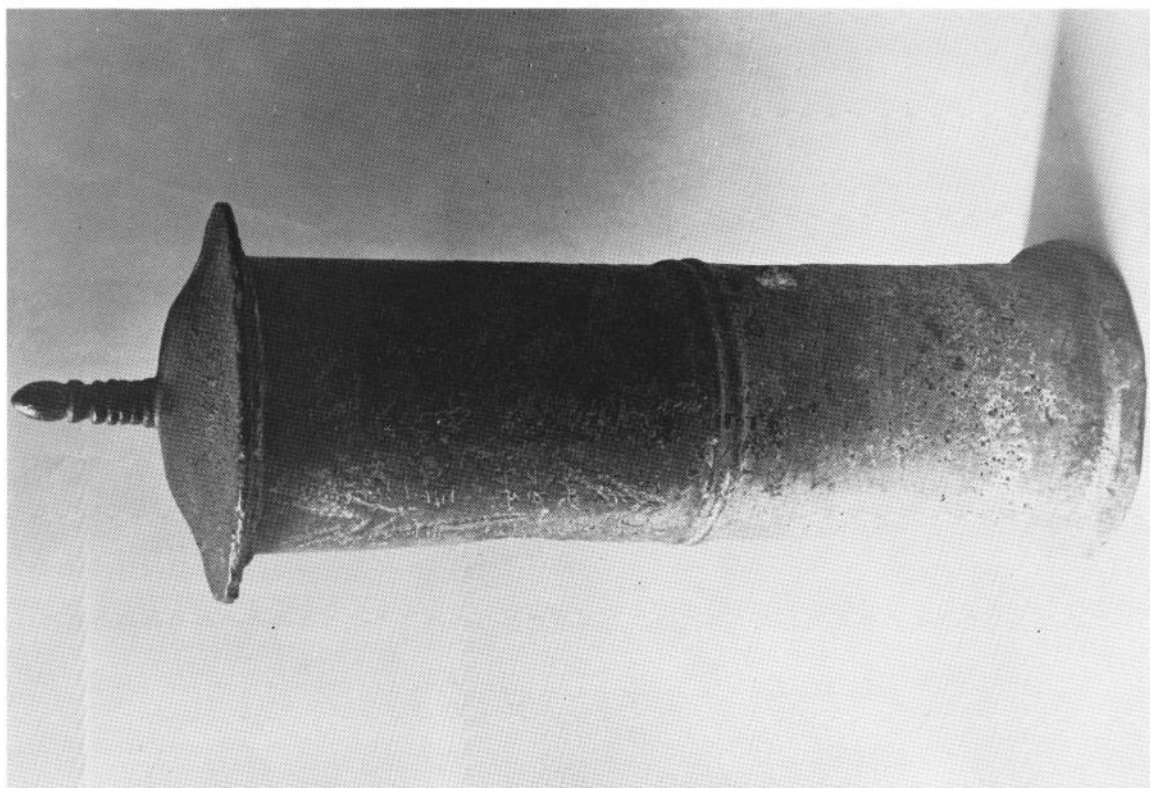
爲決定成就□

同平等利益

願主清原貞延□

助成工巧尊智

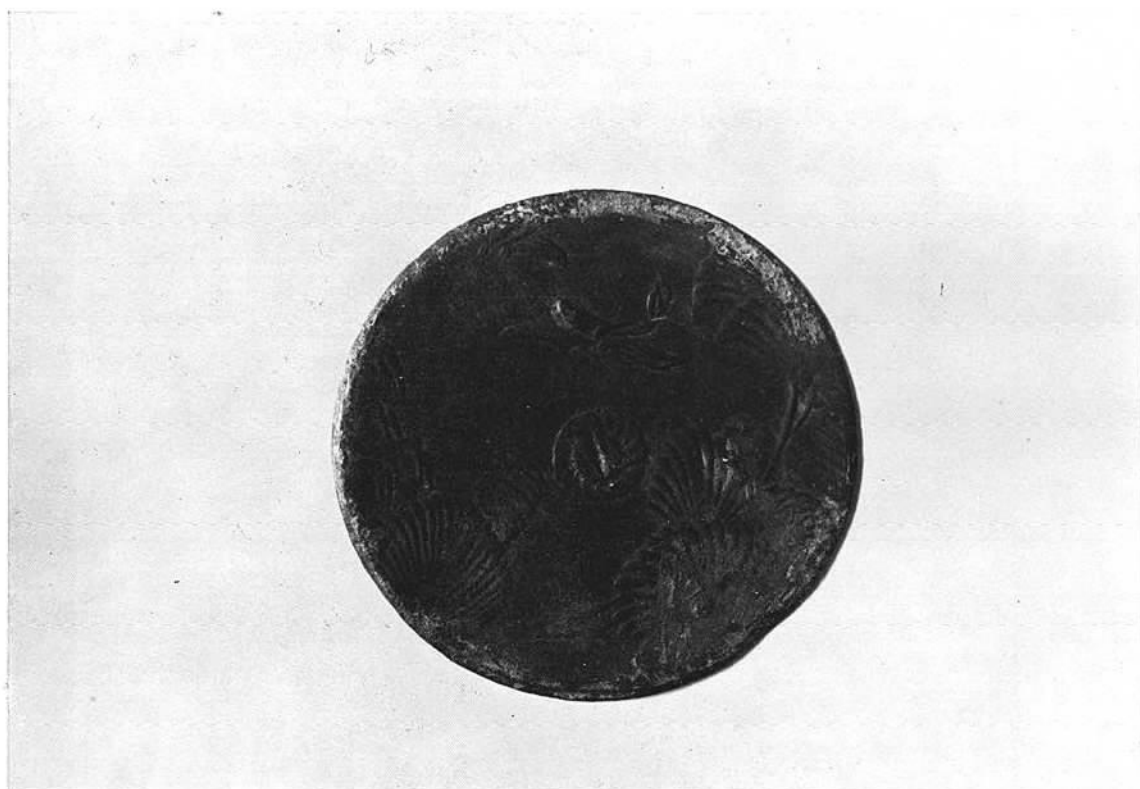
保元二年^{歲次}丁丑九月廿日□



① 山口神社出土経筒



② 山口神社出土経筒



(1) 山口神社出土菊花双鳥文鏡



(2) 山口神社出土湖州鏡

Ⅲ 平原遺跡の調査



Fig. 6 平原遺跡地形図 (縮尺1/1,000)

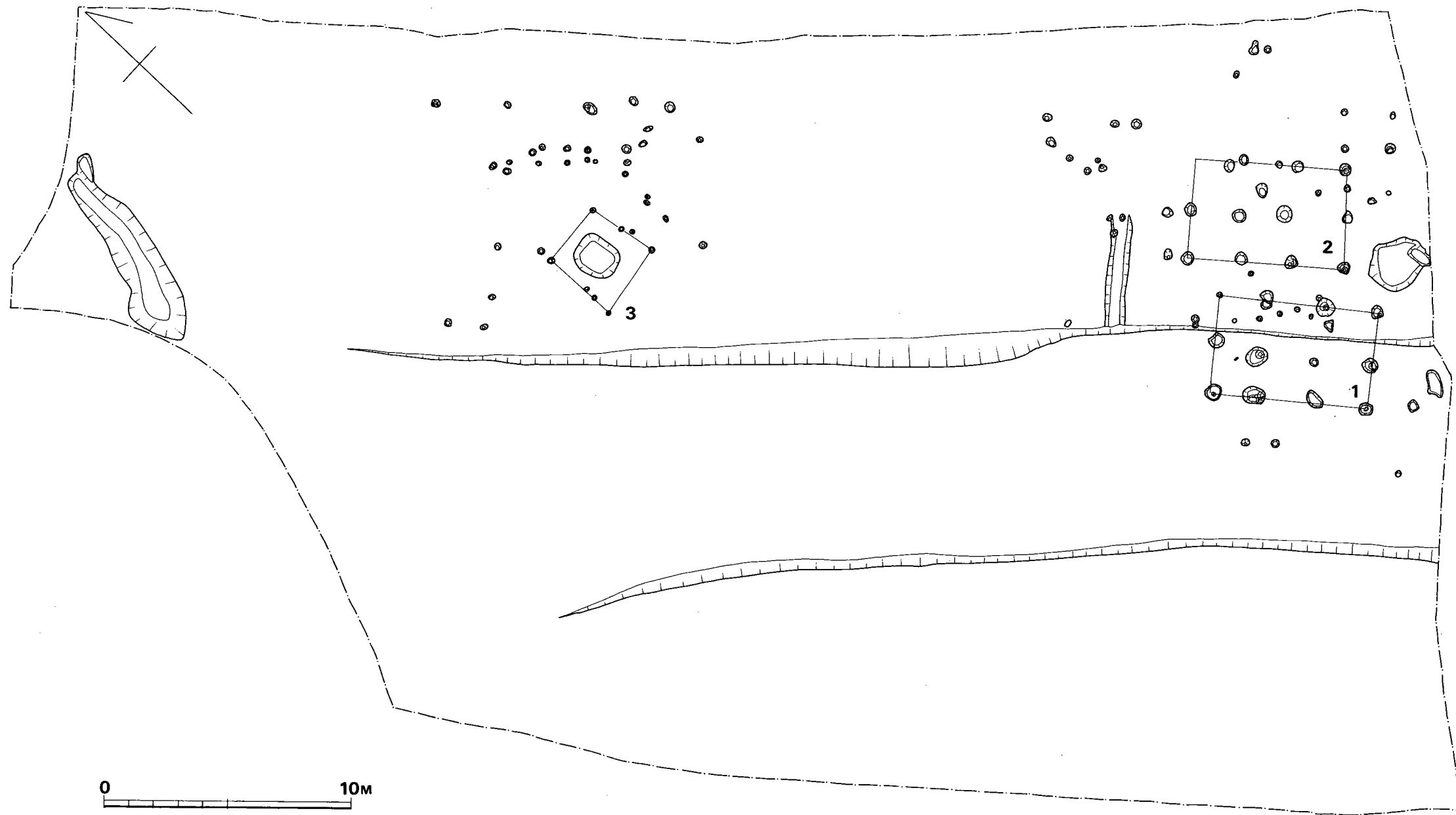


Fig. 7 平原遺跡遺構配置図 (縮尺1/200)

Ⅲ 平原遺跡の調査

1. 平原遺跡の調査経過

遺跡は鞍手郡宮田町大字芹田字平原に所在する。発掘調査は、昭和49年6月24日から昭和49年8月5日まで行なった。調査団は次のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	酒 井 仁 夫
調査補助員		高 田 一 弘
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	山 本 文 和
	嘱託	因 将 太

なお、この調査には地元在住各位の協力があった。

4月20日 工事を担当する岡崎工業の原田所長と、調査の工程について打合せ。遺跡の乗る丘陵裾部には水路が巡っており、今後の田植時期との関係で、調査を早急に行うか、あるいは水路の切り替え後に行うかについて話し合った。現実的に考えて、柳ヶ谷遺跡や遠園遺跡を調査中でもあり、到底すぐに調査を開始できる状態になかった。



Fig. 8 平原遺跡第2トレンチ発掘状況

た。水路の切り替えも地主との関係で近日中には実施できないとのことであった。そこで、柳ヶ谷遺跡調査終了後、水路にはヒューム管を入れて、調査を開始することとした。

6月24日 北田遺跡の調査終了に伴い、そこの作業員を柳ヶ谷遺跡に入れ、余った人間を平原遺跡に回すこととした。ブルドーザーを利用して表土を剥いたが、遺物の散布はあるものの、遺構は極めて稀少だった。若干の小ピットは配列よく並び、建築柱の掘り方のようなものである。ピット中には須恵器の小片が入っていた。

8月5日 掘立柱建物3棟を検出し、作業を全て終了した。梅雨時に当たったため、水路への土砂流入が心配され、雨中に土のう積み等を行うこともあったが支障なく完了したわけである。

2. 調査の内容

平原遺跡は下有木の丘陵が西に向って突出した先端部の低段丘上に位置し、芹田川に面している。遺跡地と芹田川とに挟まれた沖積地は字名筒井田と呼称され、条里制施行が推定されていた。しかし、この地域に東西方向40mのトレンチを設け、土層の観察を行なったが、それらしい遺構はまったく検出されず、青磁片が僅か一片、黒褐色粘質土中より出土したにすぎなかった。

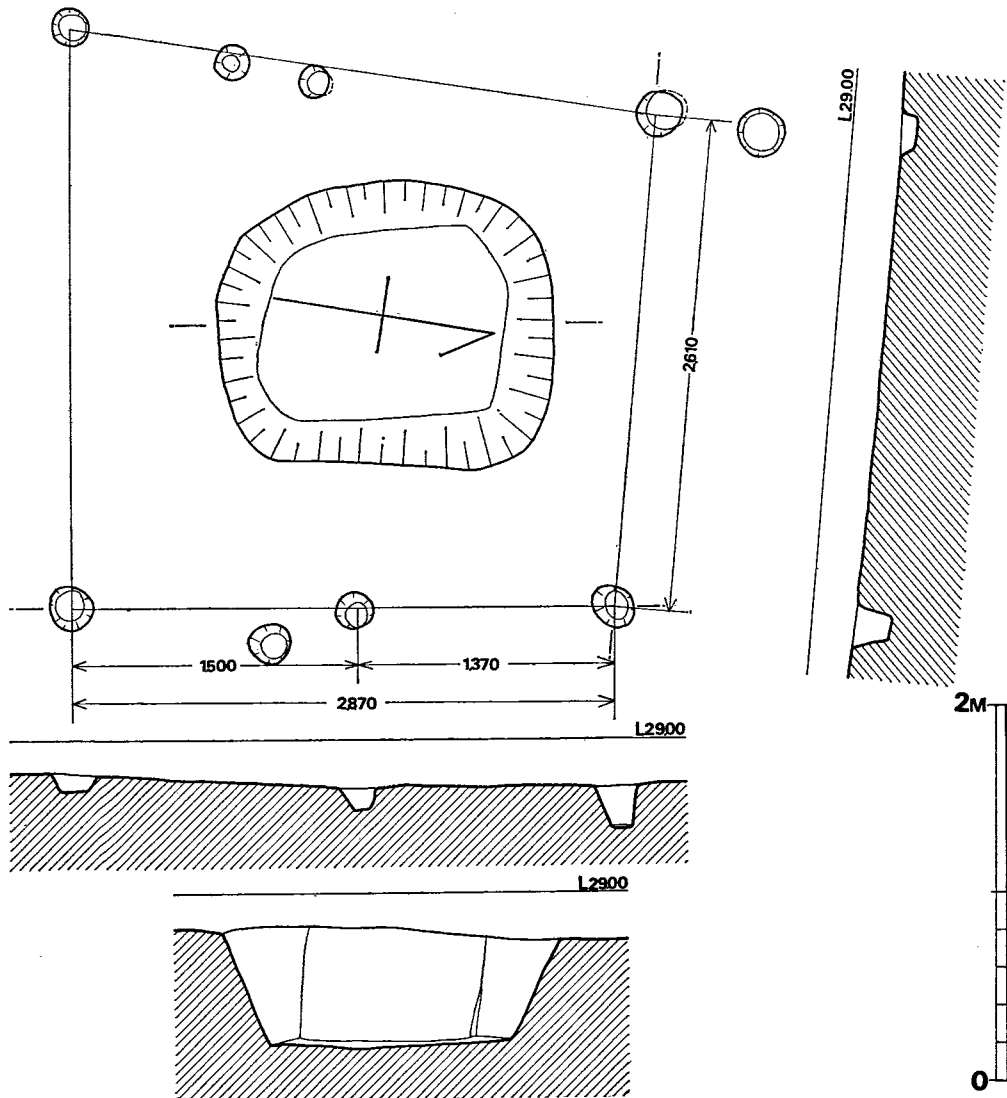


Fig. 11 小屋跡実測図(縮尺1/40)

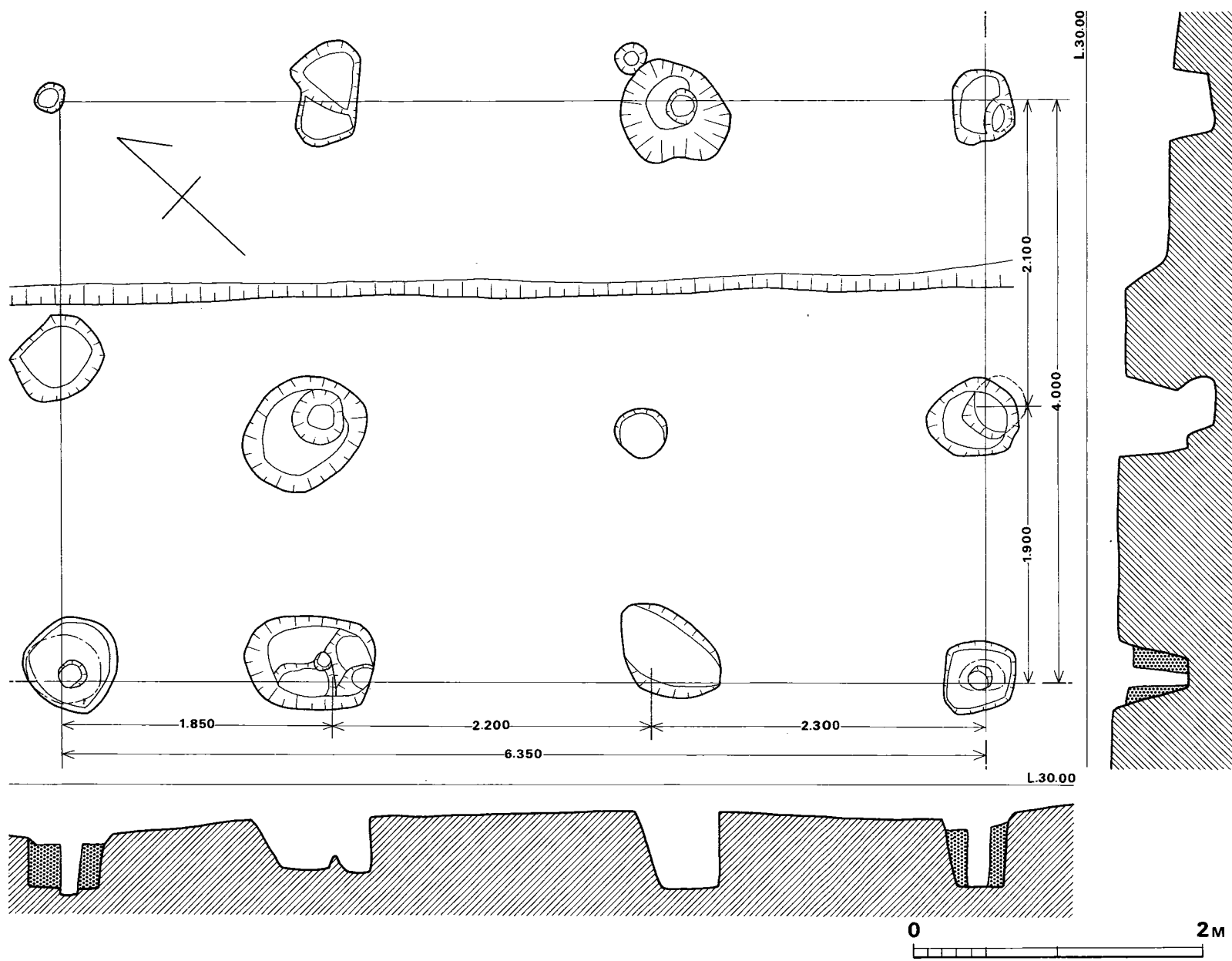


Fig. 9 第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

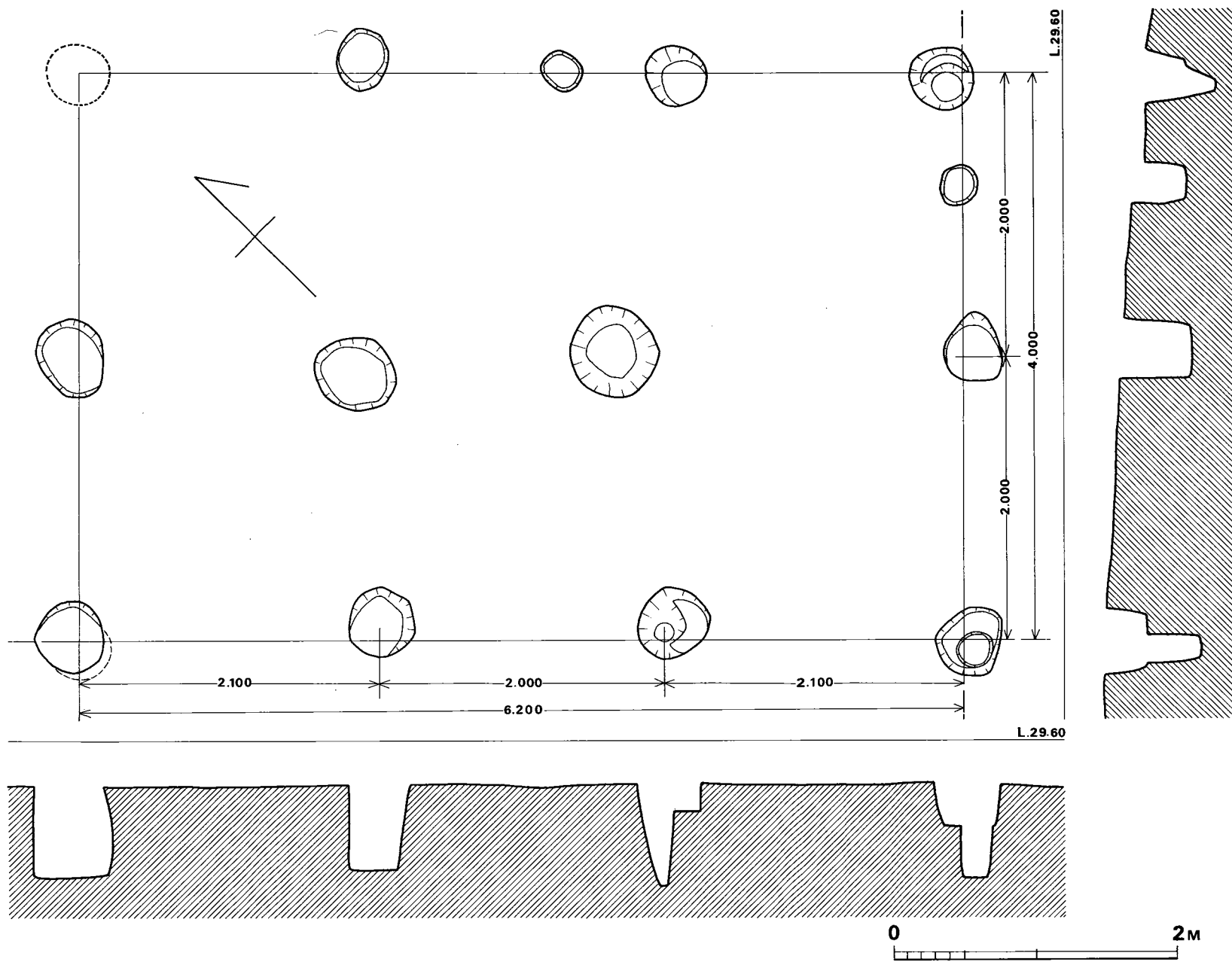


Fig. 10 第2号掘立柱建物实测图 (縮尺1/40)

平原遺跡は、調査に先立つ分布調査に際して、黒耀石製石鏃1点と青磁片が採集されていた。地目は畑であり、野菜と果樹が植えられていた。耕作に際して、地山まで整形して、段々の平坦地を作っていたため、調査前から遺構の残存状態は良くないと推量された。

ブルドーザーを利用して表土及び耕作土を剥ぎ取り、遺構の検出を計ったが、予想通り遺構の残存状態は悪く、掘立柱建物2棟と、小屋跡らしきもの1棟を検出したにすぎない。

第1号掘立柱建物 (Fig.9, PL.13)

2×3間の遺構である。長軸をN42°Wにとっている。掘り方は残存する上端で径50~60cmの不整形円形を呈し、柱との間に茶褐色土を詰めている。柱は径12~15cm程であったと思われる。柱間は各々2m前後であるが、一定しない。柱穴中より、須恵器細片が出土しているが、時期決定に供しうる資料は見い出せなかった。

第2号掘立柱建物 (Fig.10, PL.13)

第1号建物の約1.6m北東側に位置する2×3間の建物である。長軸をN45°Wにとり、第1号建物にはほぼ平行する。掘り方は残存する上端で径約50cmの円形を呈し、中に径20cmの穴が穿たれ、2段掘りの形状となっている。残存上端よりの深さは約70cmである。柱穴中より、時期決定に供しうる資料は見い出せなかった。

小屋跡 (Fig.11, PL.14)

掘立柱建物の約22m北西側に位置する。1.8×1.5mの隅丸方形ピットから50~80cm離れた四周には計9個の小ピットがあり、あたかもピットを囲む柱が立っていたような形状となっている。柱間は不定であり、南側のピットは若干ずれているため、柱並びは方形にならない。簡単な仮小屋であろう。なお、ピット中から遺物は出土していない。

出土遺物 (Fig.12)

耕作土中より若干の須恵器・陶器・磁器の破片が出土した。このうち計測できたものは5点の須恵器のみである。1・2の体部は直接的に外反し、底部との境に稜をもつ、底部はいずれも若干上げ底であり、未調整である。3の高台は短く、外側の端部は僅かに躍ね上っている。4・5は体部から底部にかけて丸味をもつ皿である。底部は内外面ナデ調整している。いずれも焼成が悪い。

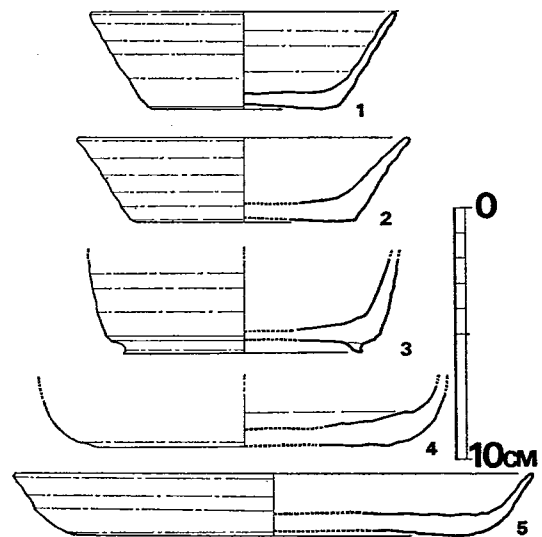


Fig. 12 平原遺跡出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

3. 小 結

3棟の遺構が検出されたが、各々の時期を決める直接的な遺物は出土していない。耕作土中より出土した遺物は前述のとうりであり、弥生時代から中世にまで及んでいる。このうち、最も多い遺物はFig.12の須恵器の類であり、8世紀初頭のものである。平原遺跡の2棟の掘立柱建物はその時期のものと推定される。当該時期の掘立柱建物は都地遺跡や咲花遺跡でも検出されており、その当時から、若宮町から宮田町にかけて各所で建立されていたのであろう。都地遺跡に比べて、当遺跡の掘立柱建物は地形からみて、未調査地区を含めても、そう数多くはないと思われる。一方、柳ヶ谷遺跡では同時期の竪穴式住居跡が検出されており、集落を挟んで2個所の掘立柱建物群が対置することは、古代史研究上、興味ある問題を提起している。平原遺跡周辺でも柳ヶ谷遺跡と対照される集落跡の存在が推測され、都地遺跡と柳ヶ谷遺跡との関係と同様な姿が、平原遺跡周辺でもとらえられると思われる。その際には相互間の規模や質的な差位にまで考察されうるものと信じている。

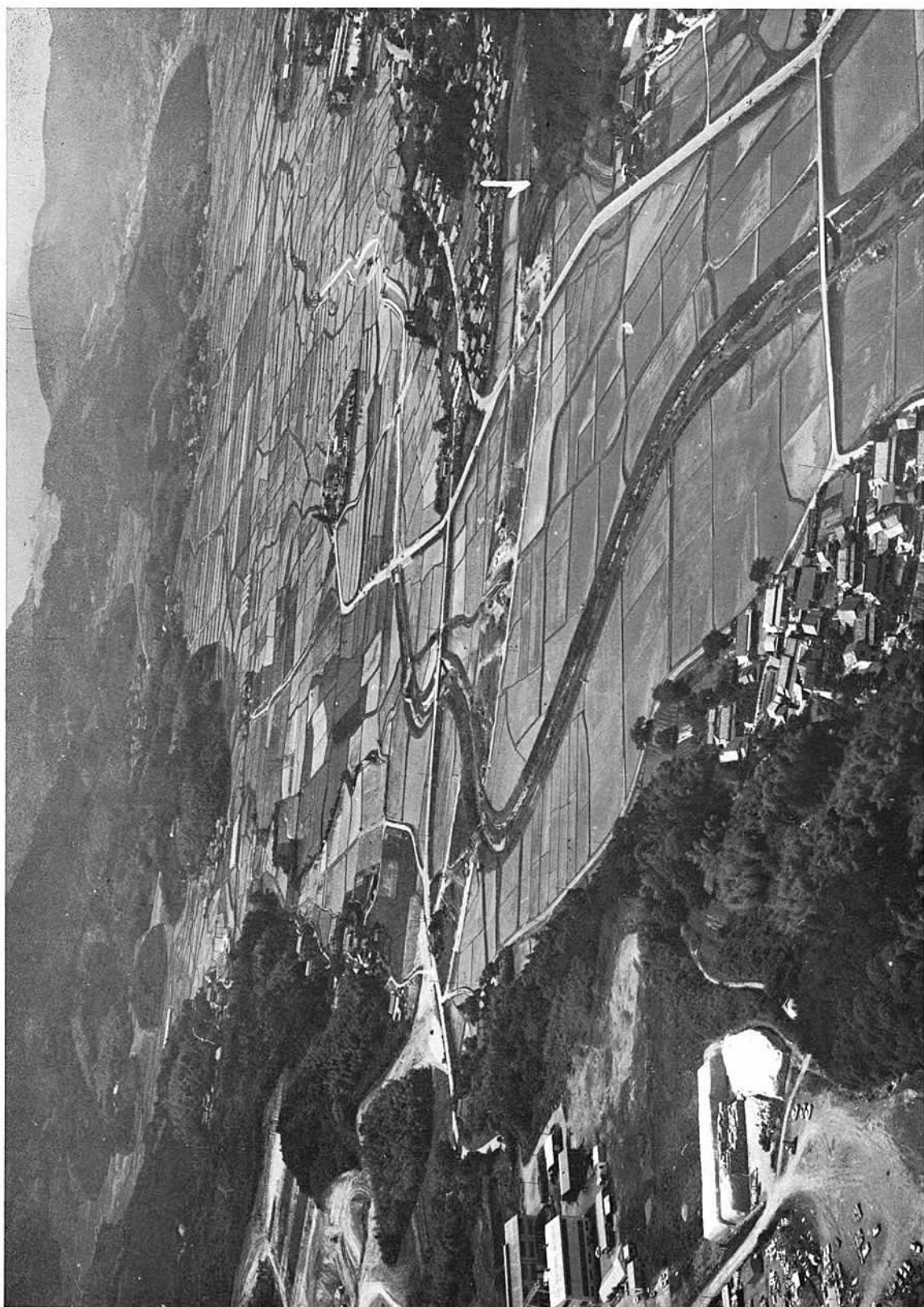
(酒井仁夫)

PLATES

平 原 遺 跡

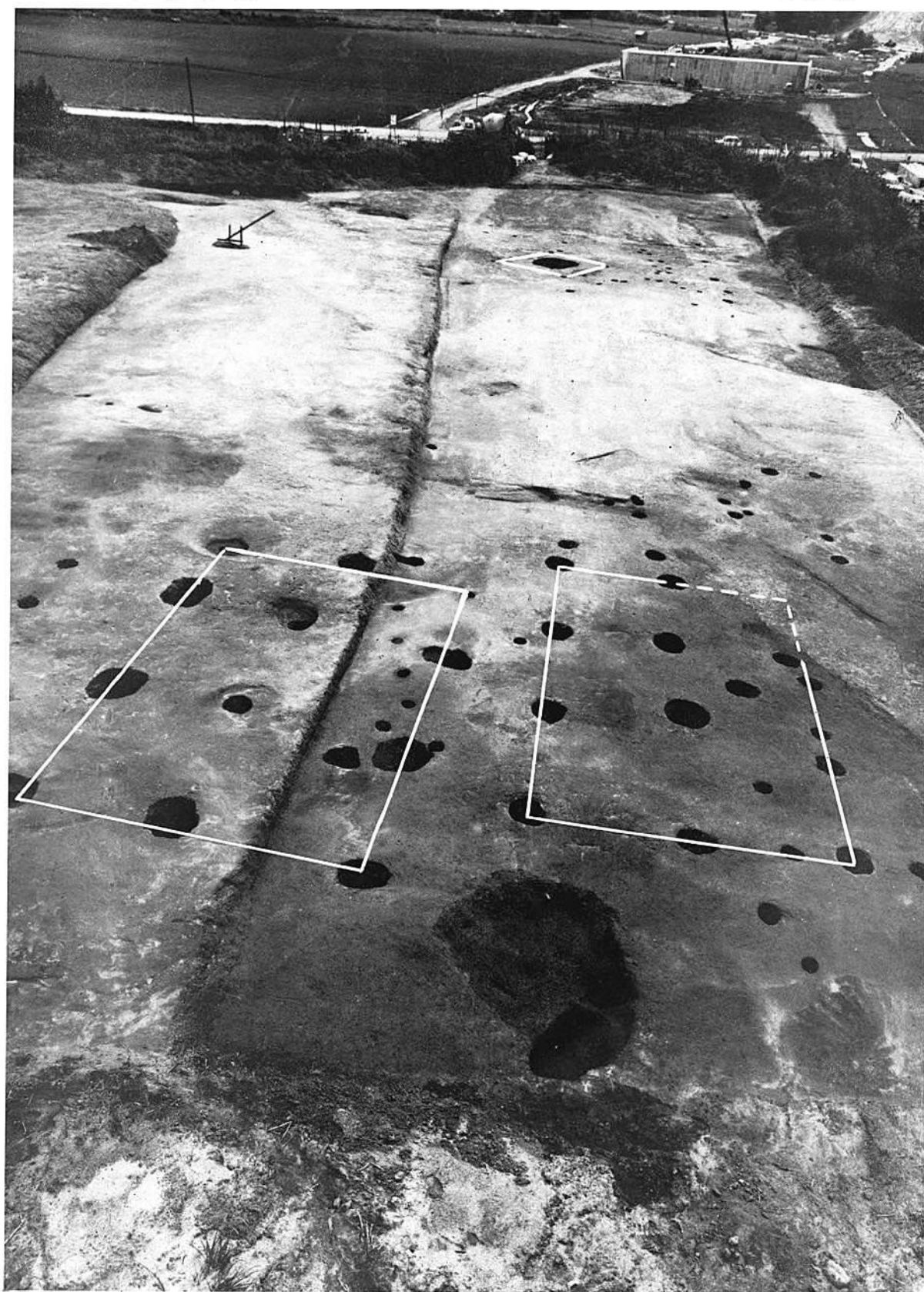


平原遺跡航空写真



平原遺跡航空写真

(南から)



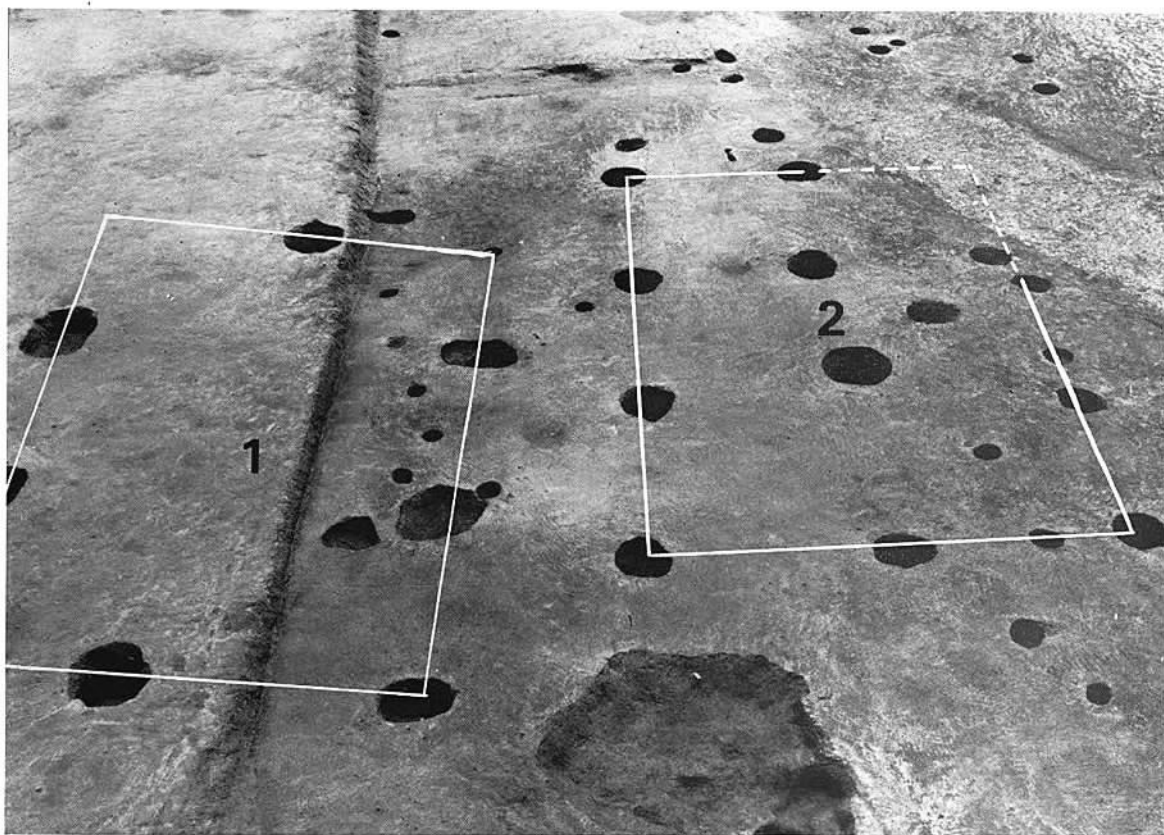
平原遺跡全景

(東から)



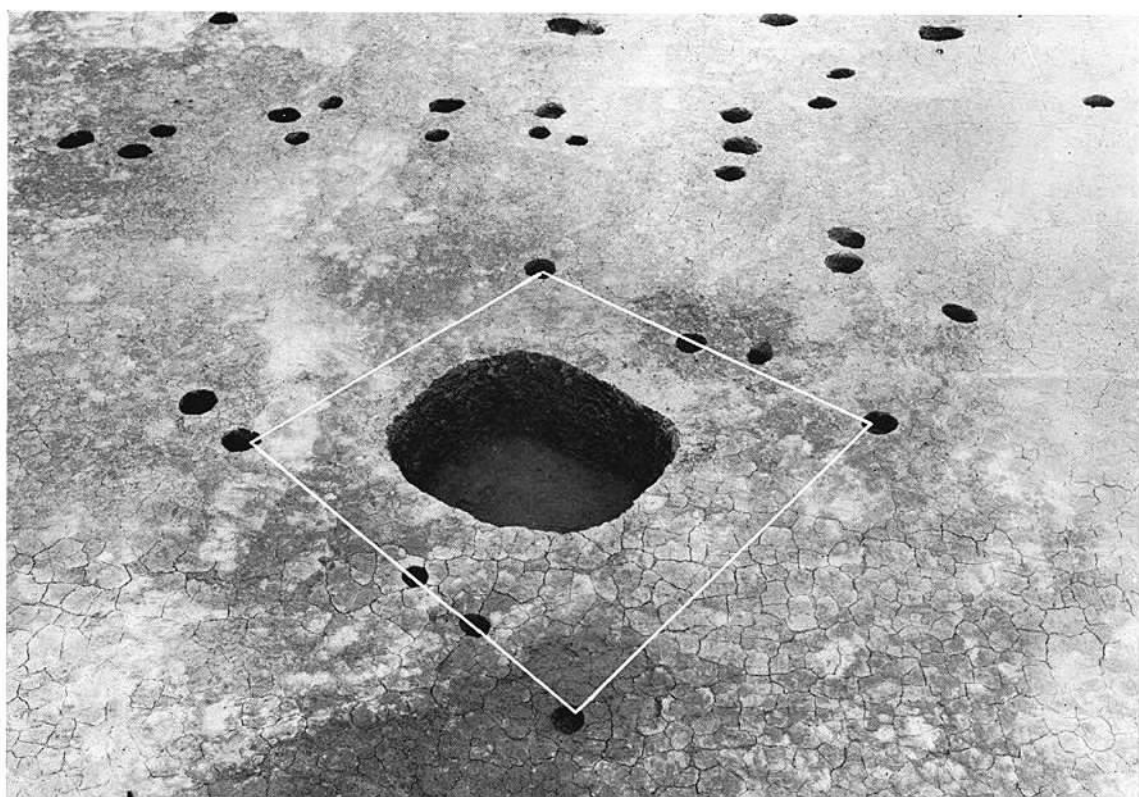
(1) 第1・第2号掘立柱建物

(南から)



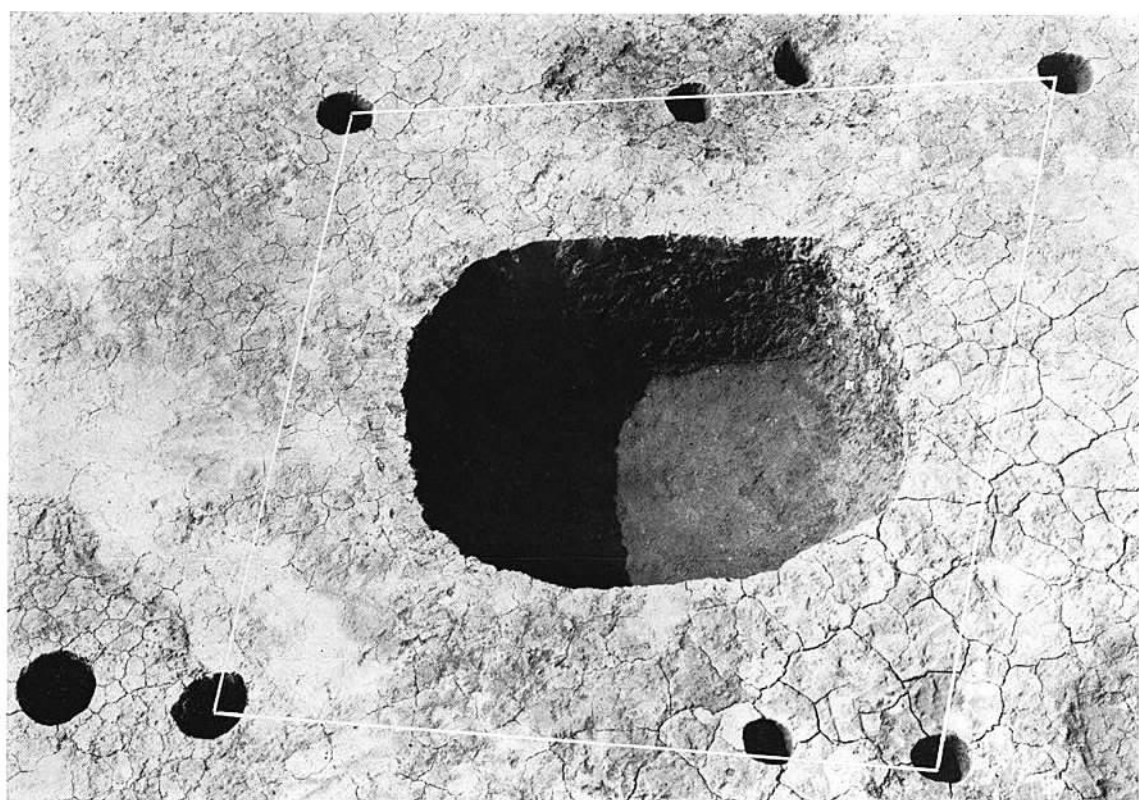
(2) 第1・2号掘立柱建物

(東から)



(1) 小屋跡

(東南から)



(2) 小屋跡

(南から)

IV 柳ヶ谷遺跡の調査

Ⅳ 柳ヶ谷遺跡の調査

1. 東区 の 調査 経過

4月19日 住友建設のブルドーザーを利用して表土を剥ぐ。路線内南半の植林地は用地が解決していなかったため、北半のみの調査とする。まず東側より表土を剥いだが、遺構らしきものは確認されなかった。20日には作業員を入れ、伐採した樹木を取り片付けた後、いよいよ遺構検出作業を開始した。

4月24日 この日までに並行する2本の溝と3基の貯蔵穴、100近い小ピットを検出する。遺物は弥生式土器や須恵器の細片がほとんどであるが、第1号貯蔵穴中からは多くの炭化物とともに弥生式土器がまとまって出土した。貯蔵穴の内部埋土の層位写真、及び当日まで検出した遺構の全体写真を撮影する。

4月26日～5月9日 測量用のセンター杭を全体に打ち実測を行なう。一方、調査区の西端附近では3軒の住居跡が見つかった。1軒の円形住居跡と、2軒の方形住居跡である。円形住居跡は、一旦建てられた後に、拡張したようである。

5月8日・9日と時折り小雨の降る中で作業を続行し、実測・写真撮影を終了した。

4月28日に鞍手商業高校の卒業生が見学に来たが、その人の話によれば、調査区の西側でもかなりの遺物を採集しており、遺跡がさらに広がる可能性が考えられた。

5月10日 ブルドーザーを利用して表土を剥ぐと案の上遺構が発見され、東区の調査終了後、ただちに西区の調査を継続した。

調査団は次のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	酒 井 仁 夫
	同	池 辺 元 明
調査補助員		内 田 始
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	山 本 文 和
	嘱託	因 将 太

なお、この調査には地元在住各位の協力があつた。

2. 東区の調査内容

東区は北から南に向う丘陵の斜面に位置している。標高は最高所で 59.00 m 、南端の最低部で 56.60 m をはかり、若干の緩傾斜部を経て宮田町の有木側に開口する谷へと落ち込んでいる。(Fig. 13, PL. 15~18)

遺跡からは3基の袋状貯蔵穴と、住居跡3軒が検出された。その他、溝状遺構が2箇所認められた。また大小のピットが無数に穿たれていた。これらのピットのうち、建物遺構の柱列と見られるような配置を示すものは認められなかった。(Fig. 14)

貯蔵穴 (Fig. 15, PL. 20)

調査区域の東部で並列する3個の貯蔵穴が検出された。北より各々1号・2号・3号と呼ぶ。いずれも耕作によるせいであろうが、上部を削平されていた。

第1号貯蔵穴 (Fig. 15, PL. 20)

上面残存径 1.3 m 、括れ部径 1.2 m 、底部径 1.45 m 、残存する深さ 0.6 m 、円形の袋状貯蔵穴である。内部には口縁部より括れ部にかけて暗褐色の土層が入っており、それ以下は、炭化物層を多く含む土層となっている。炭化物の樹種は不明であるが樹木のそれであり、層中には焼土も含んでいる。

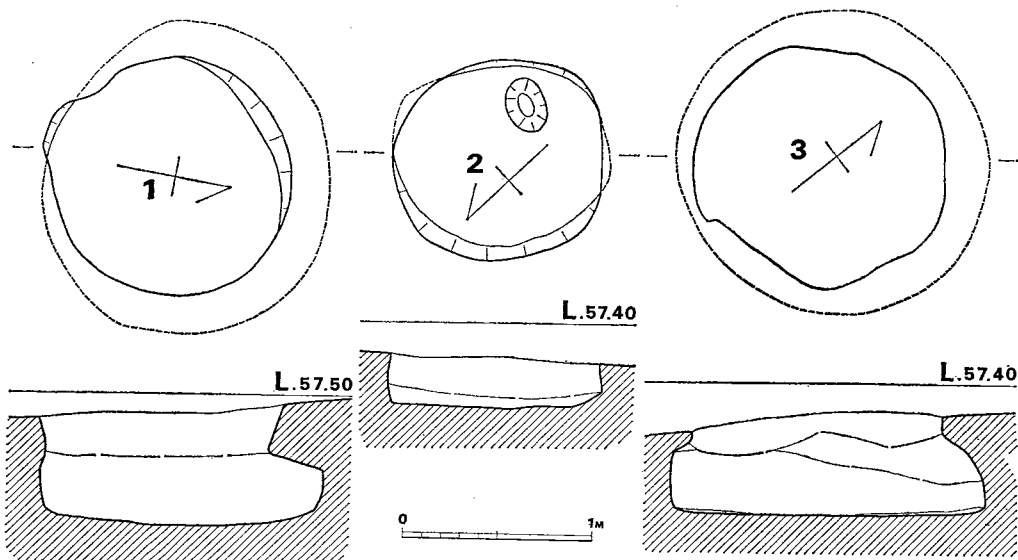


Fig. 15 第1・2・3号貯蔵穴実測図 (縮尺1/40)

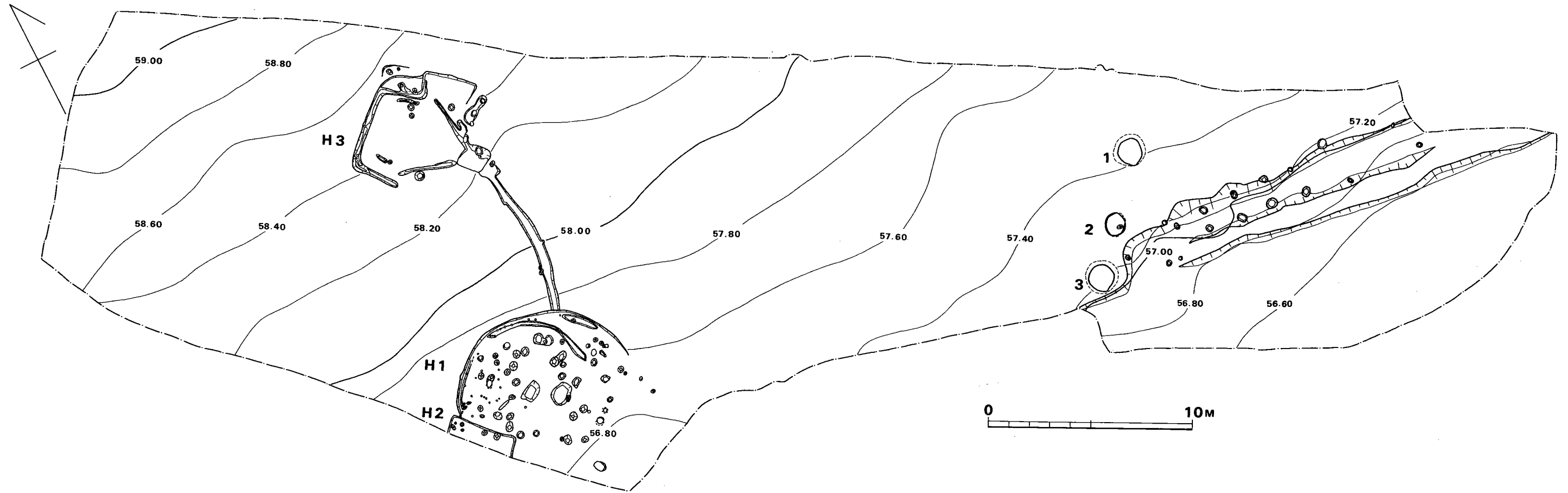


Fig. 13 柳ヶ谷遺跡東区地形図 (縮尺1/200)



Fig. 14 柳ヶ谷遺跡東区遺構配置図 (縮尺1/200)

出土遺物 (Fig. 16—6~12)

括れ部以下の炭化物と混って、弥生中期の土器が多量に出土した。

壺 (6~8) 6は大きく朝顔形に開く頸部をもち、口縁部に一条の沈線が入る。器面調整のナデは極めて丁寧である。7は平坦な縁の細片である。8は壺の胴部で外面のナデは丁寧である。内部に一部炭化物が付着している。

甕 (9~12) いづれも刷毛によって調整されている。10の底部はその製法が興味深い。(1)まず厚さ1cmの円形粘土板を作り、その縁をつまみ出して高まりを作る。(2)高まりの内側に粘土を貼り付け、その端部をまたつまみ上げる。(3)最初の粘土の外側に断面三角形の粘土を貼り付け、上端部をつまみ上げ、底面をならして、全体をやや上げ底にする。(4)(1)~(3)の工程でできた底部の上に粘土を挟み込むようにして輪積みする。(5)全体の器形ができて後に刷毛で調整し、底部はその上をナデる。以上の製法が観察される。11や12の製法では大形品が作れないため、より複雑化したのであろう。

石剣 (Fig. 36—4)

粘板岩製剣の先端に近い破片である。稜の下端で厚さ1.5cmを計り、かなり部厚い。

第2号貯蔵穴 (Fig. 15, PL. 20—1)

上面残存径1.1m、底面径1.0m、残存する深さ25cmの円形、袋状の貯蔵穴である。削平のため全容は不明であるが、第1・3号貯蔵穴と同形のものであろう。出土遺物はない。

第3号貯蔵穴 (Fig. 15, PL. 20—1)

上面の残存径1.3m、底面径1.65m、残存する深さ50cmの円形、袋状の貯蔵穴で、3基の中では最も大きい。出土遺物はない。

住居跡 (Fig. 13・14, PL. 19)

調査区域の西部で3軒の住居が検出された。北より各々3号・1号・2号と呼ぶ。また3号住居跡と1号住居跡の間には溝がある。これらは各々切り合っており、調査時の観察で、1号→溝→3号・1号→2号の関係が認められた。

第1号住居跡 (Fig. ③, PL. 19—1)

円形の住居跡である。壁高は削平によって約5cm残すのみである。南側の壁はまったく削平されていた。西壁は第2号住居跡によって切られている。

この住居跡には拡張の痕跡が認められる。つまり、径6.8mの住居の一方の壁を利用しつつ、後に径8.8mに作り替え、柱列も、もとの8本程度のを12本程度の数にし、住居中央の方形ピットも作り直している。なお柱列については一つの想定であり、建築学的に見て誤っているかも知れない。壁下の周溝脇には小ピットがあり、特に北側では密に観察される。

出土遺物 (Fig. 16—1, PL. 43)

僅かに甕の口縁部片と青銅製鋤先片が出土したにすぎない。1の器壁は極めて薄く作られている。外反する口縁部の端はやや内反する。Fig. 36—8は腐蝕の甚しい鋤先片である。刃部は剥げ落ちている。袋部はL形を呈している。平面図の右側は鋤先全形の端部に近いと思われる

第2号住居跡 (Fig. ③, PL. 19—1)

第1号住居跡を切る方形の住居跡である。南西側は林道の下に入るので、調査できなかった。壁高は約10cm残っていた。柱列は不明である。床面からの出土遺物はない。

第3号住居跡 (Fig. ④, PL. 19—2)

長辺6.0m, 短辺4.2mの不整長方形の住居跡である。南壁から東壁にかけては削平されて、周溝の痕跡さえ残さない。この個所の床面は2本の相直交する溝によって切られている。北隅にベット状遺構を有する。断面図に表現したピット4個が主柱穴と考えられる。床面の中央は焼けており、炉があったものと推察される。

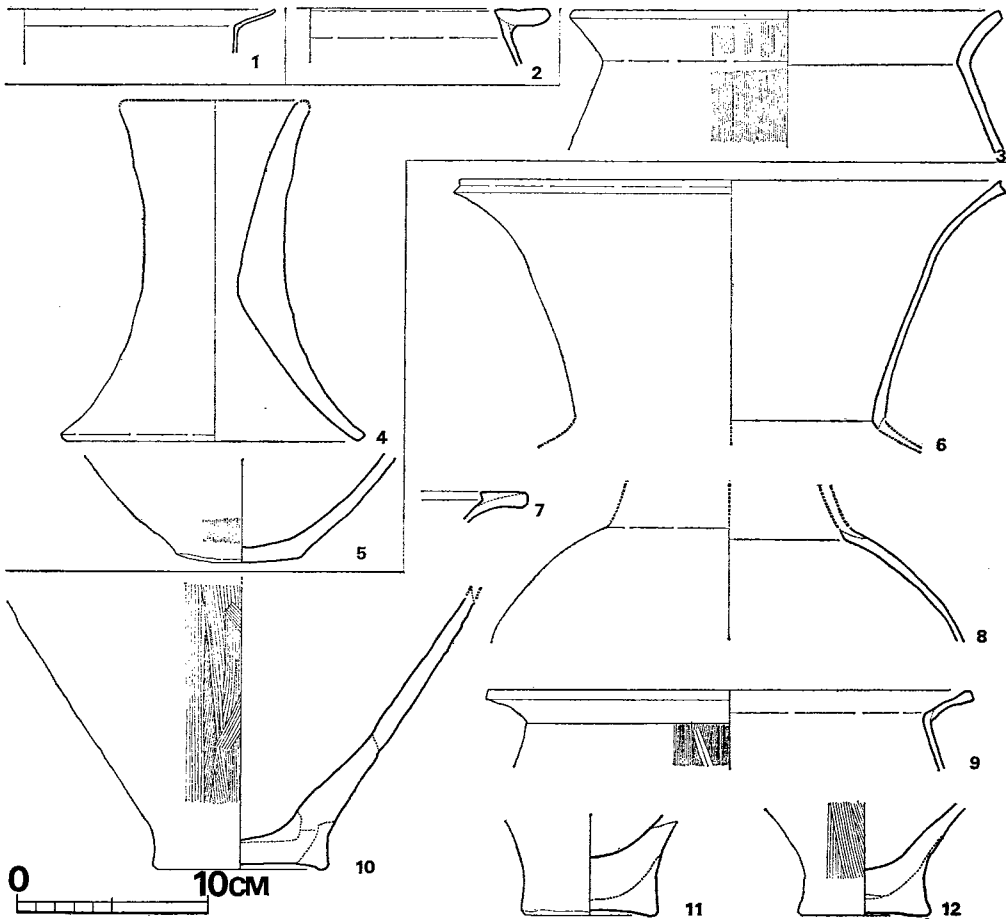


Fig. 16 住居跡・貯蔵穴出土土器実測図 (縮尺1/4)

出土遺物 (Fig. 16—3~5)

甕と器台が床面より出土した。1は口径22.6cmの甕で、口縁部は稍角張る。内外面とも同一の刷毛で調整し、口縁部の内外面はさらにナデ調整している。5は甕の底部で、床面は丸味を持つ細かい刷毛目調整である。外面の一部に煤が付着している。4の器台は上端を欠損するが、ほぼ完形である。胎土中に砂粒とスサを多く含んでいる。外面及び脚端の内面は加熱によって赤変し、器面が損じている。

その他の遺構

貯蔵穴脇と第1・3号住居跡間の2個所で溝が検出されている。前者の溝中よりの出土遺物はないが、第3号貯蔵穴の横で曲がっており、貯蔵穴が使用されていた時代に近い時期のものと考えられる。溝壁には2列の平行する柱列が見られる。柵状の遺構であろうか。

第1・3号住居跡間の溝と住居跡との切り合い関係については先述の通りである。この溝の中間は一辺1.2mの方形ピットによって切られている。このピット中よりFig. 16—2の甕口縁片が出土した。(酒井)

3. 西 区 の 調 査 経 過

発掘調査は、昭和49年5月10日より開始し、8月5日に終了し、約3ヵ月の期間を要した。西区は東区と林道を挟んで、東側の同一丘陵に位置している。遺跡は、東区とともに戦後の開墾により削平されており、その当時から弥生式土器片や須恵器片が採集され散布地として知られていた。また東区の調査結果から判断して、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が推定できた。

以下調査日誌から経過を見てみよう。

5月10日~20日 伐採した樹木を取り片ずけた後、東側よりブルドーザーを利用して表土を剝ぐ。その後遺構検出作業を開始する。さっそく東側隅より掘立柱建物と多くの小ピットを検出する。

5月22日~6月10日 この時点で住居跡8軒・掘立柱建物1棟を検出する。遺跡は南側に向ってゆるやかに傾斜しており、住居跡もこの斜面上に立地しており、北側

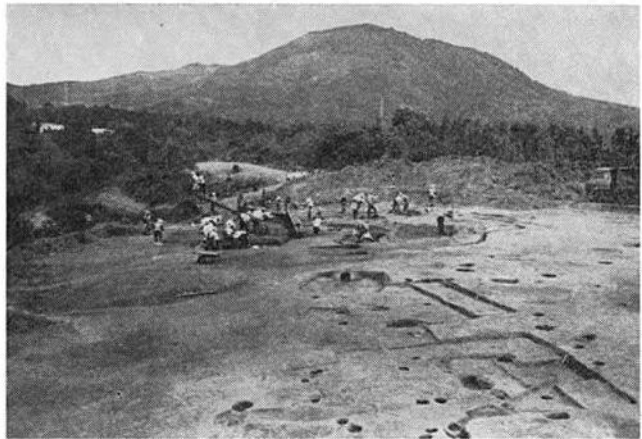


Fig. 17 柳ヶ谷遺跡発掘状況

の平坦面からは検出できない。周囲に溝を付設する住居跡を発見した。

6月10日～30日 梅雨に入り雨の日が多くなる。この時点で遺跡の東半分の調査を終了し、住居跡14軒・掘立柱建物4棟となる。遺構の割に土器類の出土が少ない。東側より写真撮影・実測を開始。ブルドーザーにより西半分の表土剥ぎ開始。



Fig. 18 柳ヶ谷遺跡発掘状況

7月1日～31日 さらに西側に向かって調査を続行する。梅雨と台風のため調査は難行したが、ほぼ全面の発掘を終了する。西側に進むにつれ丘陵の幅も狭くなり、住居跡は全体で18軒・掘立柱建物5棟を数える。時期は弥生時代後期、古墳時代後期、奈良時代にわたっている。また弥生時代後期の住居跡床面から葎骨器を検出した。東側より随時写真撮影・実測を行なう。

8月1日～5日 遺跡全面の清掃を行ない写真撮影を行なう。その後地形図を作成し調査を完了する。

調査団は次のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	上	野	精	志
	同	池	辺	元	明
調査補助員		高	田	一	弘
		内	田		始
		小	味	山	ゆ
		清	水	範	行
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	山	本	文	和
	嘱託	因		将	太

なお、この調査には地元在住各位の協力があつた。

4. 西区の調査内容

柳ヶ谷遺跡西区は、鞍手郡若宮町大字水原字柳ヶ谷に所在し釜底池の北側丘陵、標高61.60 mから58.40 mにかけての南向きの緩斜面に立地している。尾根線の平坦部にも遺構の存在が推定できるが、九州縦貫自動車道路線外のため今回は調査できなかった。(Fig. 6, PL. 15~17)

今回の調査では、18軒の住居跡・5棟の掘立柱建物・蔵骨器1が検出された。その他多数の大小ピットを検出したが建物遺構の柱列と思われる配置を示すものは判明できなかった。(Fig. ⑥)

住居跡 (Fig. ⑥, PL. 22・23)

住居跡は、弥生時代後期のもの11・古墳時代後期のもの2・古墳時代以降と時代不明のもの5を検出した。いずれも緩斜面に立地しており、多く分布しているのは、南側の池に向って張出した部分で調査区の東半部にあたる。

第1号住居跡 (Fig. ⑦, PL. 25)

調査区東側隅に存在する。プランは長方形を呈し、長軸をN34°Eにとる。床面と壁上端との比高は北壁で35cmを測るが住居跡の南東側ではコーナーも確認できないほど斜めに削平をうけている。

住居の規模は、長辺4.8m、短辺4.4mを測る。主柱は4本で黄褐色粘質土層に掘りこまれている。柱間寸法はP1～P2は1.85m、P1～P3は2.7m、P3～P4は1.9m、P2～P4は2.65mを測る。他には床面中央に凹状のピットP5、東西側の隅には、隅丸長方形のピットP6があり、小ピットが9個存在する。P5周辺にはわずかではあるが焼土塊・灰があり炉として使用されたものであろう。P6は貯蔵穴として使用されたとも考えられるが、明確でない。床面の北半部は溝によって区画された様にベット状遺構が存在する。溝は西壁と東壁側では壁に沿っており一部P5につづく。

また住居跡の付属施設と考えられるU字溝が、北側のもっとも高い部分から住居をとり囲む様に馬蹄形に存在する。溝は断面U字形を呈し幅約40cm、深さ約30cmである。住居を水から守るための排水溝とは考えられないだろうか。

出土土器 (Fig. 26)

住居内から、弥生式土器片が少量出土した。

壺形土器 (Fig. 26-1) 1は壺の口縁部の破片である。床面から出土した。口縁部端部はわずかに肥厚し、頸部から胴部にかけては薄く仕上げられている。表面は風化を受け調整は不明である。赤橙色を呈し、砂粒を多く含み焼成は悪い。

鉢形土器 (Fig. 26-2) 2は埋土から発見し、口縁部片である。黄橙色を呈し、焼成は良好。

第2号住居跡 (Fig. ⑧, PL. 26-1)

調査区東部、第1号掘立柱建物の西側に存在する。長方形プランを呈し短軸をN55°Wにと

る。上面はかなり削平をうけており、床面から壁上端との比高は北・西壁で30cm、南壁で10cm前後の状態、東側・東南隅のコーナーは壁を残さない。住居のほぼ中央に南北に溝が走り東西を区分している。

住居の規模は、長辺6.8m、短辺5.2mを測る。支柱穴は4本で、約60cm程黄褐色粘質土層を掘り込んでいる。柱間寸法はP1～P2は3.4m、P1～P3は2.6m、P3～P4は3.35m、P2～P4は2.55mを測る。この他に10数個の小ピットがあるが、この住居跡に伴うものであるかどうか明確でない。ただ北壁と南壁に存在するP5とP6については支柱として使用された可能性がある。また中央部よりやや南側に炉に使用されたと思われる凹状のピットP7がある。さらに中央を走る溝の南端に隅丸長方形のP8があり、貯蔵穴とも考えられるがその性格は明確でない。

北西隅・北東隅と西壁にそって床面より10数cmの高さにベット状遺構が存在する。ただ東壁は削平されているために明確ではないが、東側のたかまりはベット状遺構と考えた方がいいだろう。ベットの上面は貼床されている。

この住居は火災にあつたらしく床面・壁全体が火を受けて焼けている。また数個所に炭化物、焼土塊が拡がっている。

出土遺物 (Fig. 26・37)

住居跡埋土中から、弥生式土器と石鏃1が出土した。

高杯形土器 (Fig. 26—3・4) 3・4は高杯の脚柱部の破片である。3はわずかに杯部底を残す。脚部に一部煤が付着している。焼成は柔わらかく淡黄色を呈し、調整は不明である。4は杯部と脚裾部を欠損する。表面は風化で調整は不明である。内側は丁寧なナデで仕上げている。

椀形土器 (Fig. 26—5) 5は口縁部径7cm、底部径2.6cm、高さ7.2cmを測る。器壁は厚手で器形を整えた後、外面をナデ調整、内面をヘラ状の工具でナデている。外面は黄褐色をでし、一部黒色に変化する。内面は黄灰色を呈す。胎土に砂粒を多く含み、焼成はムラがある。

甕形土器 (Fig. 26—6) 6は甕の頸部片で復元径は29cmである。内外面ともに器壁を残さず調整は不明であるが内面に一部に荒い刷毛目の痕跡を残す。凸帯が一条巡るがスリへっている。黄褐色を呈し、焼成は良。

石鏃 (Fig. 37—1) 1は黒耀石を素材にした石鏃で、先端部と基部の一部を欠損している。基部は抉入する。

第3号住居跡 (Fig. ⑨, PL. 26—1・27—1)

調査区東部、第1号住居跡の西側に存在する。長方形のプランを呈し、長軸をN47°Eにと

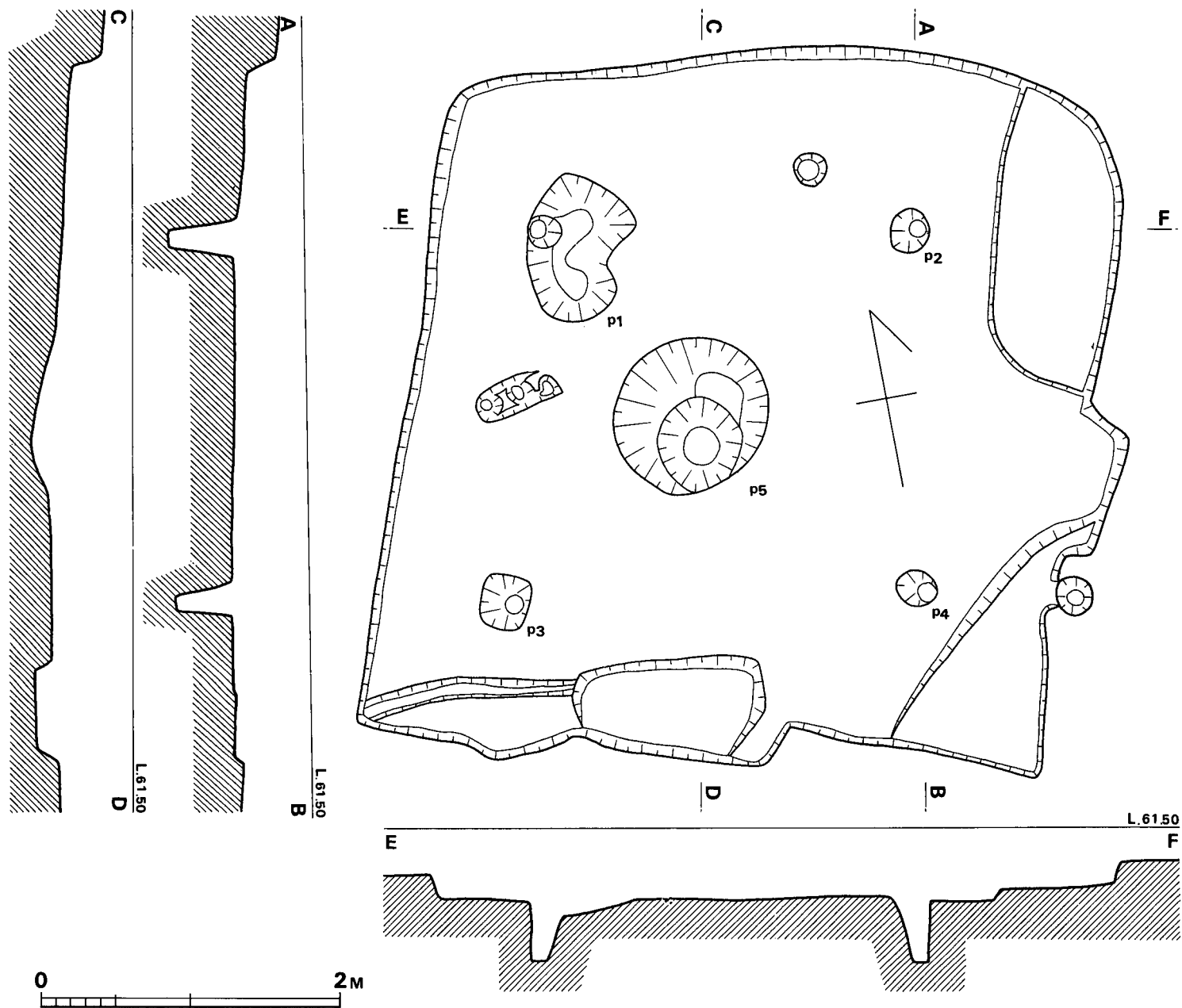


Fig. 19 第4号住居跡実測図 (縮尺1/40)

る。他の住居跡と同じく北側から南側にかけて斜めに削平をうけており、北壁は25~30cm程残っているが、南壁はほとんど残さない。西側と南側に大小のピットが検出されたが、この住居跡に伴うものではない。表土直下から土器片が多数出土していることから考えて数軒の住居跡が存在した可能性がある。

住居の規模は、長辺5.2m、短辺4.9mを測る。支柱穴は4本で、柱間寸法はP1~P2は2.6m、P1~P3は2.55m、P3~P4は2.1m、P2~P4は2.25mを測る。中央部には深さ25cmの隅丸長方形を呈すP5がある。炉として使用されたもので壁は焼けており周囲には灰の拡がりがあった。床面には3本の溝がある。また北西・北東の隅と西壁側にはベット状遺構がある。

出土遺物 (Fig. 26)

高杯形土器 (Fig. 26-7) 7は高杯の杯部片である。口唇部は平坦に仕上げられている。口縁部は外反しながら肥厚する。内面の器壁は剥落しているため調整は不明。外面はヨコナデされている。胎土は多量の砂粒を含み、焼成は良好で淡黄色を呈する。床面から出土した。

第4号住居跡 (Fig. 19, PL. 27-2)

2号住居跡の北西側に存在する。ほぼ方形を呈し長軸N11°Eにとる。床面から壁上端までの比高は15~20cm程を残している。

住居の規模は長辺4.6m、短辺4.4~4.6mを測る。支柱穴は4本で柱間寸法は、P1~P2は2.5m、P1~P3は2.5m、P3~P4は2.75m、P2~P4は2.4mを測る。P5は凹状のピットで炉に使用されたく内部は灰と焼土が詰っていた。東壁では床面から7cmほど上部にベット状遺構がある。

出土遺物 (Fig. 26・37)

P1横の凹部に集中して多量の土器片が出土した、そのほとんどが細片である。

壺形土器 (Fig. 26-8・9・11) 8は壺の口縁部である。薄手の二重口縁で外側に反転しつつ、外反する。口唇部は外側につまみ出されている。横方向の刷毛目の上をナデ調整している。9は8の胴部と考えられる。台形の貼付け凸帯があり刻目が入る、凸帯の上部はタテナデ、凸帯はヨコナデ。焼成は良好で、黄橙色を呈す。11は頸部から胴部にかけての細片で、貼付け凸帯がある。胴部は縦方向に刷毛目が入る。焼成は良好で黒褐色を呈する。

器台形土器 (Fig. 26-10) 10は口縁部を欠く。脚から脚裾部にかけてしだいに薄く仕上げられている。脚裾部径は15cmを測る。内面にしぼりの痕跡を残す。外面は縦方向の刷毛目の上をヘラナデしている。

石鏃 (Fig.37—2) 黒耀石を素材にした石鏃で、先端部を欠損している。

第5号住居跡 (Fig.20, PL. 28—1)

3号住居跡の西側に存在し東側は14号住居跡に切られている。プランは方形を呈するが削平をうけて南側半分を破壊されている。主軸はN41°Eにとる。

住居内の溝は「コ」の字状に残るが本来は一周していたものと思われる。支柱穴は2本で柱間寸法は2.8mを測る。支柱の位置から想定して、本来長辺は南北方向を示していたと思われる。復元すると5.5~6.0mほどになるだろう。短辺5.0mを測る。

中央には円形の凹状のピットP3がある炉に使用されていたらしく内面は焼けている。P1の北側には東西方向に溝が走りベット状遺構をしきっている。

出土遺物 (Fig.26)

炉の中と床面より土器片が出土したがいずれも細片である。

壺形土器 (Fig.26—12) 炉の中から出土した壺の口縁部である。外反し口唇部はわずかに外側につまみ出されている。器壁は剝落しているため調整は不明である。黄橙色を呈し焼成は良好である。
(池辺)

第6号住居跡 (Fig.21, PL. 29)

第5号住居跡の北へ8m離れてあって、傾斜地にあるため斜面下方の南西側は検出できなかった。なお第1号住居跡と同じく斜面上方にU字状溝が付属する。

住居跡は4.25m×3.20m以上の方形を呈している。床面には第1号住居跡や第5号住居跡と同じく壁直下と、床面内に北西側壁・南東側壁と平行に一条の溝が走る。この溝を境にして北西側と南西側とに若干の高低差が認められる。
(上野)

出土遺物 (Fig.26)

住居内と周溝から土器片が出土した。上面をかなり削平されているためか細片が目につく。

高杯形土器 (Fig.26—15・16) 15は杯底部と脚上部の破片である。器面は剝落し調整は不明である。杯底部には回転痕が残る。16は床面から出土した口縁部片で口唇部を欠く。内面の調整は不明だが、外面は縦方向の刷毛目の上をヨコナデしている。

壺形土器 (Fig.26—17・18) いずれも壺の胴部の細片である。17は薄手で、一条の凸帯がある。磨耗しているが台形の貼付け凸帯であろう。調整は不明である。焼成は良好で、黄橙色を呈する。18はヨコナデ調整された2条の台形貼付け凸帯がある。焼成は良好で、淡黄色を呈する。周溝から出土した。

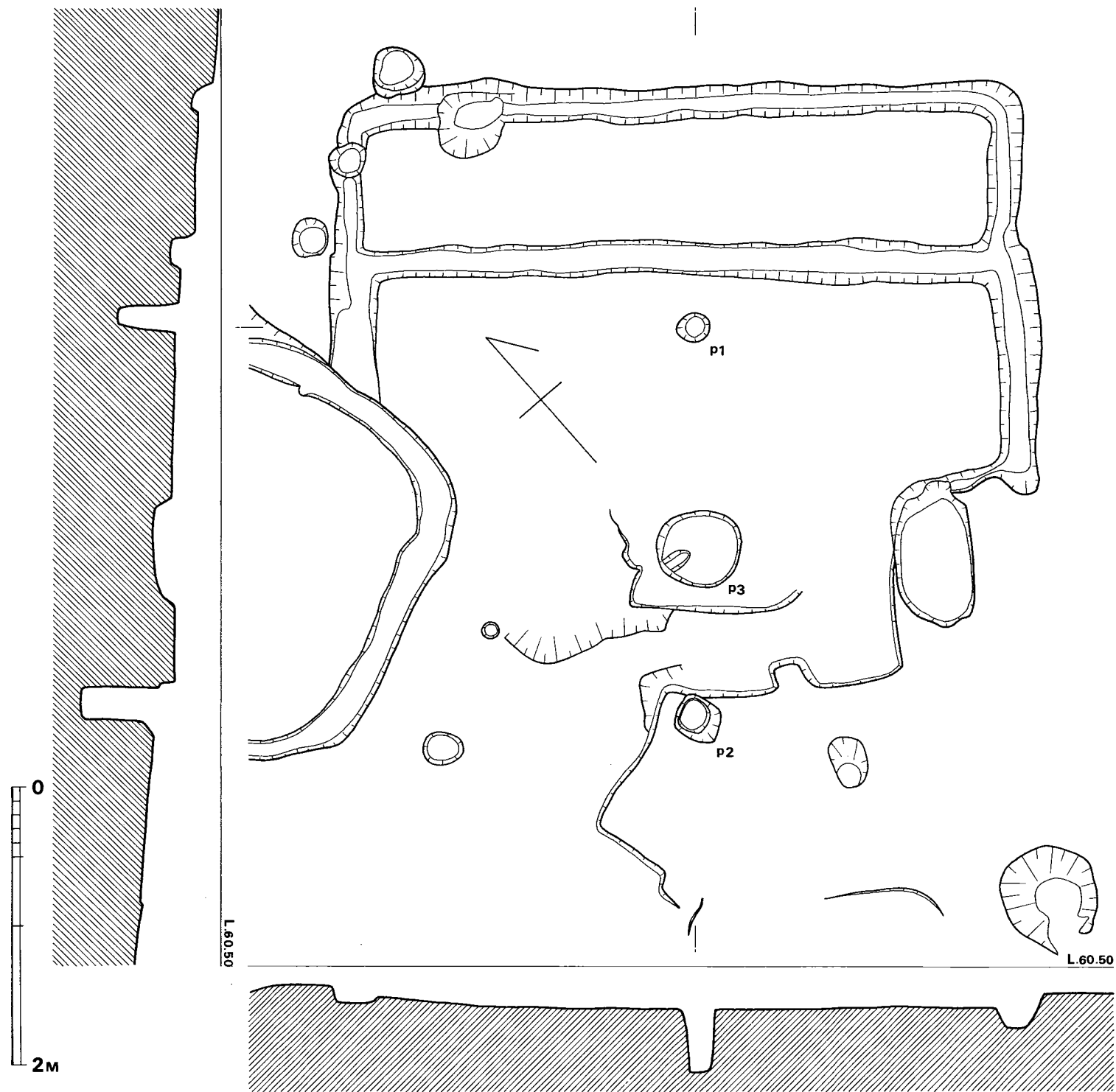


Fig. 20 第5号住居跡実測図 (縮尺1/40)

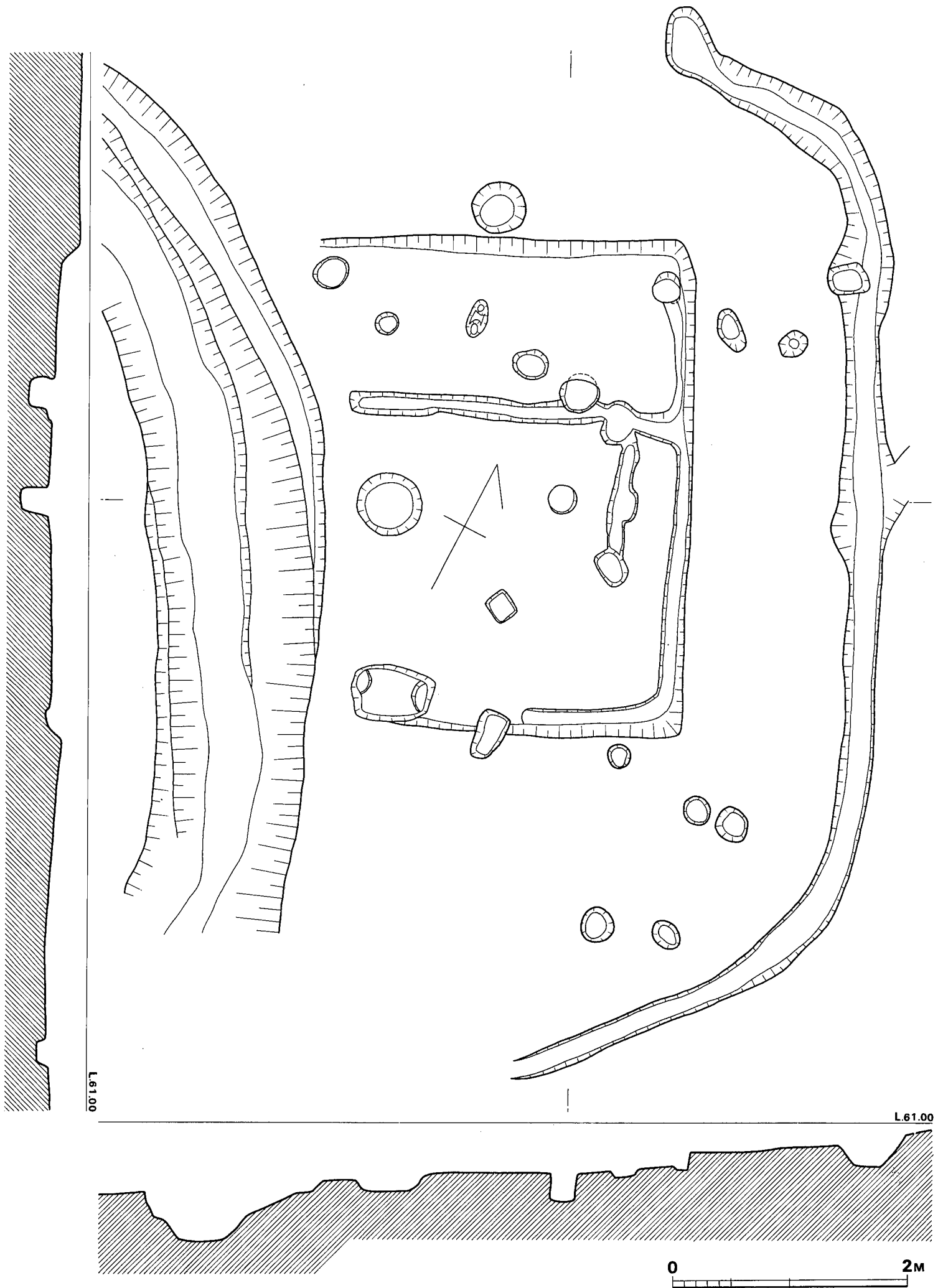


Fig. 21 第6号住居跡実測図 (縮尺1/40)

第7号住居跡 (Fig. ⑩, PL. 30)

調査区の中央部に存在する。プランは隅丸方形を呈し、主軸はN46°Eである。この住居跡の周辺はもっとも遺構が密集している所で、16号住居跡が南西側のコーナーに重複している。

1号住居跡・6号住居跡と同様に住居をとり囲む馬蹄形の溝があり、15号住居跡・2号掘立柱建物・3号掘立柱建物が重複している。新旧関係は7号住居跡がいちばん古い。

住居の規模は3.5m×3.55mである。支柱穴は2本と考えられる。P1～P2の柱間寸法は、2.5mを測る。他に小ピットP3と北西、北東隅にピットがある。住居をとりまく馬蹄形のU字溝は、北側の高い部分が一番幅が広く深い。幅1.5～1.3m、深さ50cmを測る。1号・6号住居跡と同じように住居を水から守るためのものと考えられ、幅が広いのは水を集め易く、入り易く配慮されたものではないだろうか。

出土遺物 (Fig. 26)

馬蹄形の周溝内から土器片がかなり出土したがそのほとんどが細片である。

壺形土器 (Fig. 26—19) 口縁部は「く」の字を呈する。口唇部は丸くおさまられている。薄手である。ヨコナデ調整され、外面は淡黄色、内面は暗黄色を呈する。焼成はやや柔い。

器台形土器 (Fig. 26—20) 20は、内面にしぼりの痕跡と指頭調整痕を残す。外面は指ナデされている。赤橙色を呈し、全体が加熱によってもろくなっている。脚裾端部が磨耗している。住居内の出土である。

鉢形土器 (Fig. 26—21) 21は周溝内の出土である。器壁を残さず調整は不明である。胎土、焼成ともに普通で、赤橙色を呈す。

石庖丁 (Fig. 36—1) 7号住居跡のプラン確認面で出土した粘板岩製の石庖丁である。楕円形を呈し、両面は研磨され、孔はない。(池辺)

第8号住居跡 (Fig. 22, PL. 31—1)

第7号住居跡の南西側の低い傾斜面にあり、南西部側は開墾などにより消滅しているため検出できない。

平面は3.80m×2.30m以上の方形を呈している。壁は、北西側がとくに残りが悪く10cmほど、北東側で約30cmである。床面は北西側がやや低く水平でないが、全体的に平坦である。床面内には周溝など付属施設はない。柱穴は床面上に4個みられるが、どれが支柱となるのかは不明である。主軸が地形に沿って北東・南西を取るなら北東壁の中央部の柱穴と、南西壁側に削平されて検出されなかった柱穴が存在したとも考えられる。又北西・南東に主軸を考えるならば北西壁側の柱穴と南東側の北東寄りの柱穴、さらに南西側に2つの計4個の柱穴を持つものとも考えられる。柳ヶ谷遺跡西区のこの第8号住居跡と同時期、もしくは近似している時代

の住居跡の内、ベット状遺構の付属しない住居跡はいずれも支柱穴が不明瞭であり、第8号住居跡もこの場合を上げておく。(上野)

出土遺物 (Fig. 26・36)

底部 (Fig. 26—26) 26は壺の底部であろう。胴部にかけて内反する。外面はタテナデされている、淡黄色を呈し、胎土、焼成ともに良。

石庖丁 (Fig. 36—3) 3は欠損品である。粘板岩製の石庖丁である。両面は研磨され、2孔を有する。

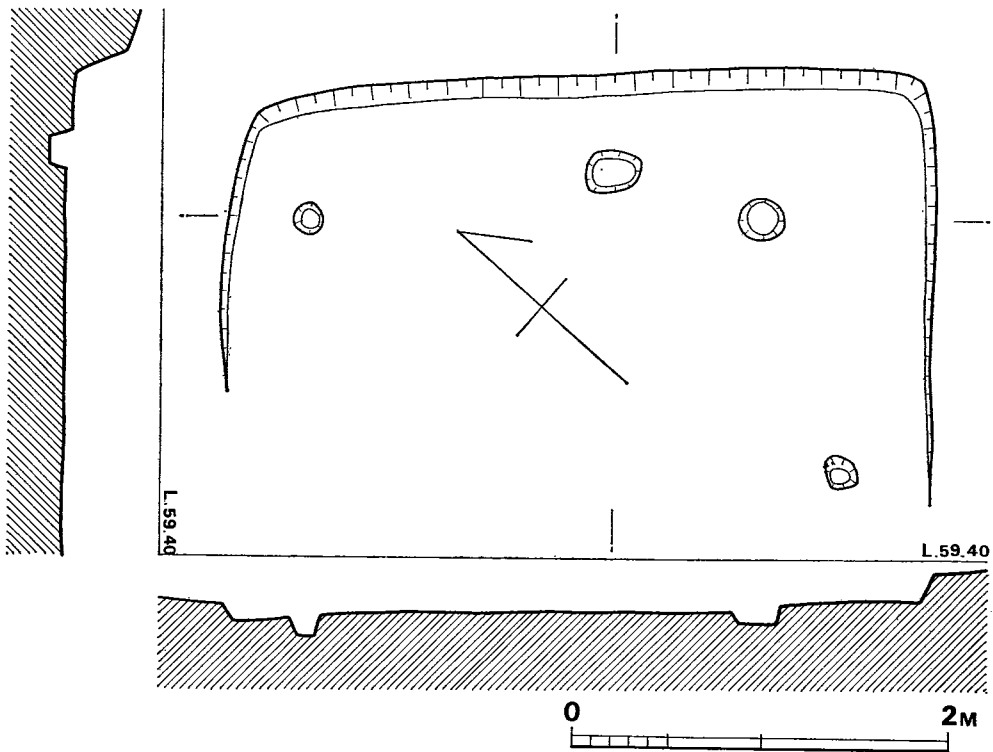


Fig. 22 第8号住居跡実測図 (縮尺1/40)

第9号住居跡 (Fig. 23, PL. 31—2)

調査区の中央部、北隅から検出した住居跡である。北側は道のため調査できなかった上に南側は削平を受けて消滅している。西壁がわずかに残る程度である。東西方向の西壁と東側の溝で4.6mを測れるが住居の規模は明確でない。西壁の方位はN25°Wをとる。支柱穴は完掘していないため不明である。住居跡にする根拠となったP1ではわずかに焼土が確認できた。炉として使用されたとと思われる。

出土遺物 (Fig. 26)

甕形土器 (Fig. 26—22) 22は口縁部片で、復元口径は19.8cmを測る。「く」の字口縁を呈し、口唇部にかけて細かく仕上げられている。頸部から胴部にかけてはしだいに薄くなる。外面はヨコナデされ、内面の頸部は指でタテナデされている。胎土、焼成とも良好で淡黄橙色を呈する。
(池辺)

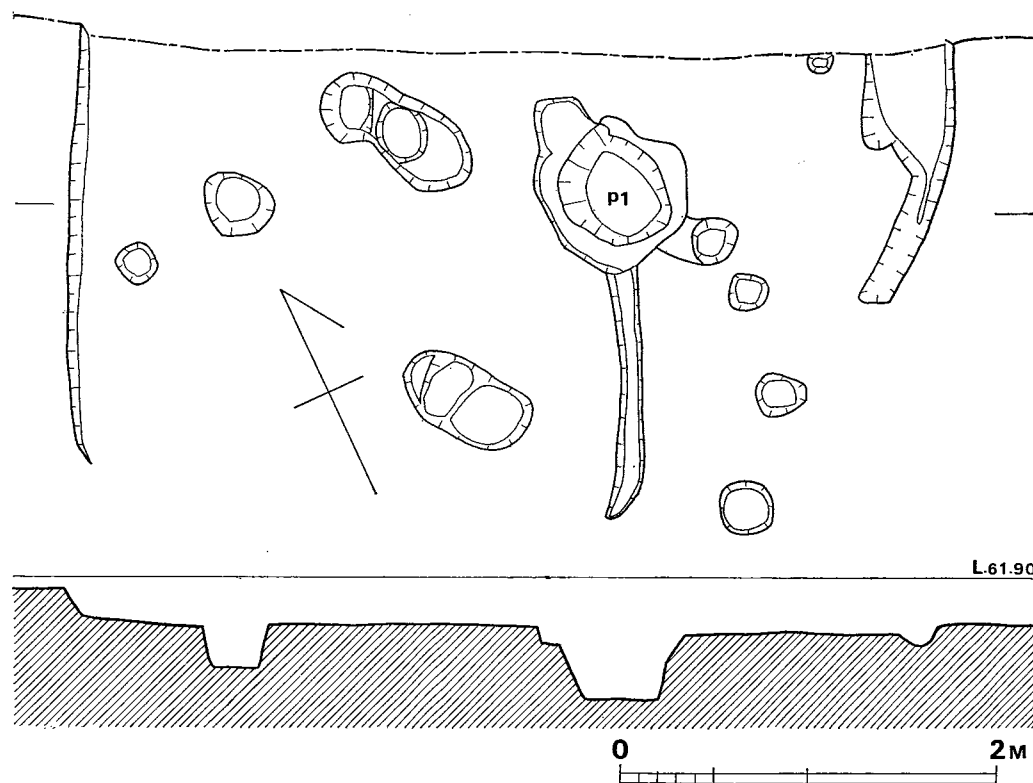


Fig. 23 第9号住居跡実測図 (縮尺1/40)

第10号住居跡 (Fig. 24, PL. 32—1)

第9号住居跡の西側にあり、南西側を削平により検出できない。

平面は4.70m以上×4.70mの方形を呈するが、おそらく正方形であろう。正方形であるとすると床面積約21㎡を算する。壁の高さは残りのよいところで13cmで、上面はかなり削平をうけていると思われる、北西・南東壁の一部と南西側壁は全く検出できなかった。

床面は部分的に掘出した地山上に床土を薄く貼ったようで、地山面は凹凸がみられる。斜面下の南西壁側地山面が、斜面上の北東壁側に比べて40cm低いことより全体的に貼床であったとも思われる。柱穴は住居跡内に6個みられるが支柱穴と断定できるものはない。しかし貼床

とするならば、南西壁側中央部に存在した可能性もある。

(上野)

出土遺物 (Fig. 26)

壺形土器 (Fig. 26—23) 23は壺の二重口縁部片である。朝顔形口縁端から、内側に反転する。口唇部は平坦である。内面はヨコナデされ、内側に反転する部分では強いナデを行っている。外面は器壁が残らず調整は不明である。口縁部外側には刷毛目がわずかに残る。淡橙色を呈し、焼成、胎土ともに良好である。

(池辺)

第11号住居跡 (Fig. 25, PL. 32—2)

柳ヶ谷遺跡の最西端に存在する住居跡で、西側・南側ともに斜面が急でけわしい。斜面上方の壁は高く残るが、他の3方の壁は残りが悪く、とくに斜面下方の壁は全く検出できない状況である。

平面は $5.10m \times 2.90m$ 以上で、方形を呈していると思われる。壁は、斜面上方側の北東壁で $35cm$ が残っている。床面はほぼ平坦であり、傾斜がほとんどなく、斜面下方の南西壁は貼床・壁であったかもしれない。柱穴は7本を検出できるが、住居跡中央部と想定されるところに大きな2個の柱穴が対抗していることよりこれら2個が主柱穴と思われる。北東側壁に近く合計5個の小さな柱穴があり支柱と想定できよう。北東側壁下中央部に上面径 $76cm \times 56cm$ 、深さ $20cm$ を測る長方形のピットがあり、この埋土中より焼土がみられることより炉跡と思われる。

(上野)

出土遺物 (Fig. 26)

壺形土器 (Fig. 26—24・25) 24は「く」の字口縁部をもつ壺形土器で底部を欠く。口縁部はヨコナデ調整されているが、他は加熱により表面が剥落しており不明である。薄く仕上げられている。25は、壺の頸部である。口縁は二重口縁になるものであろう。外面は縦方向の刷毛目で調整される。台形の貼付凸帯があり、ヨコナデされている。内外面ともに煤の付着が認められる。暗黄色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

(池辺)

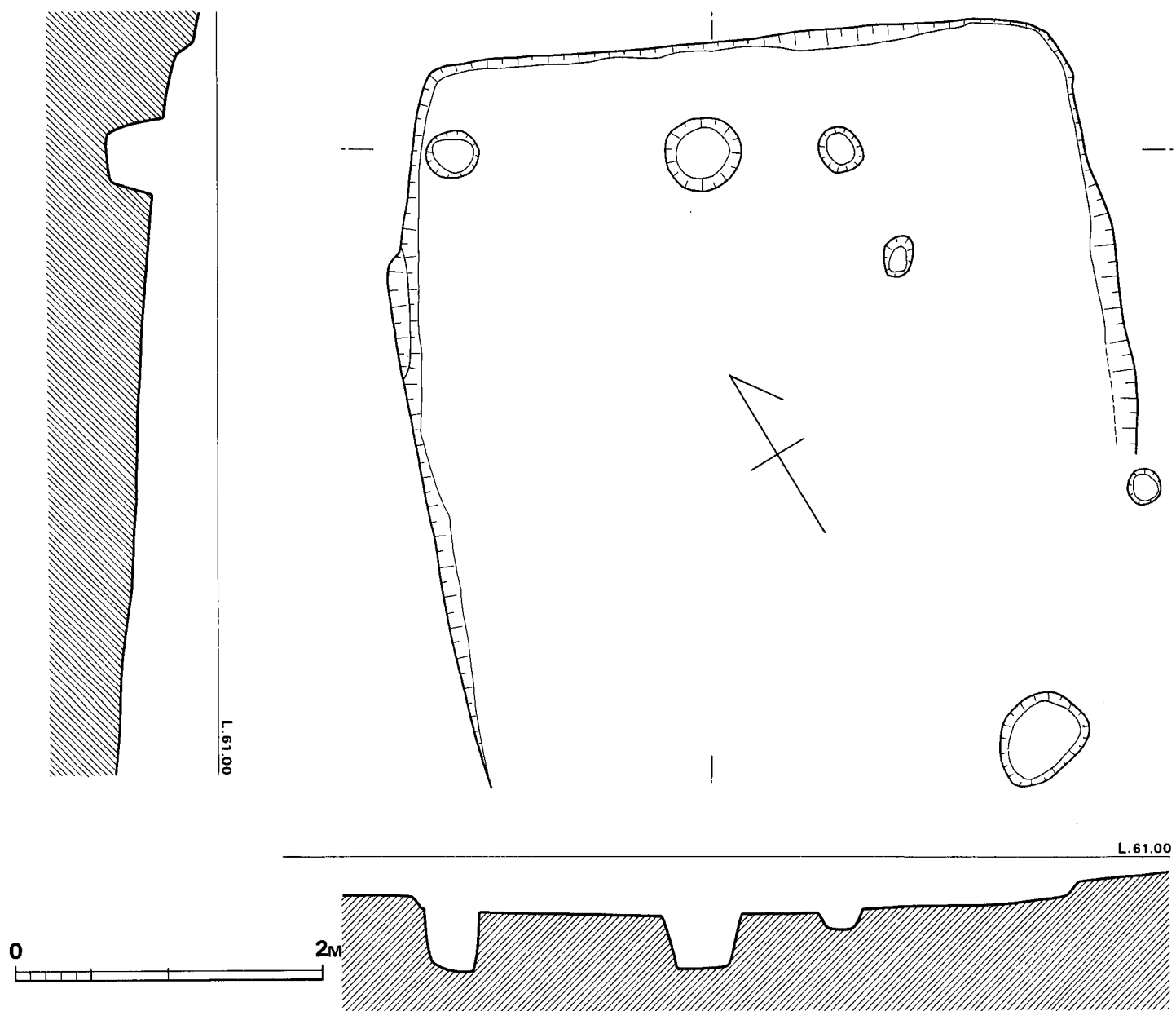


Fig. 24 第10号住居跡実測図 (縮尺1/40)

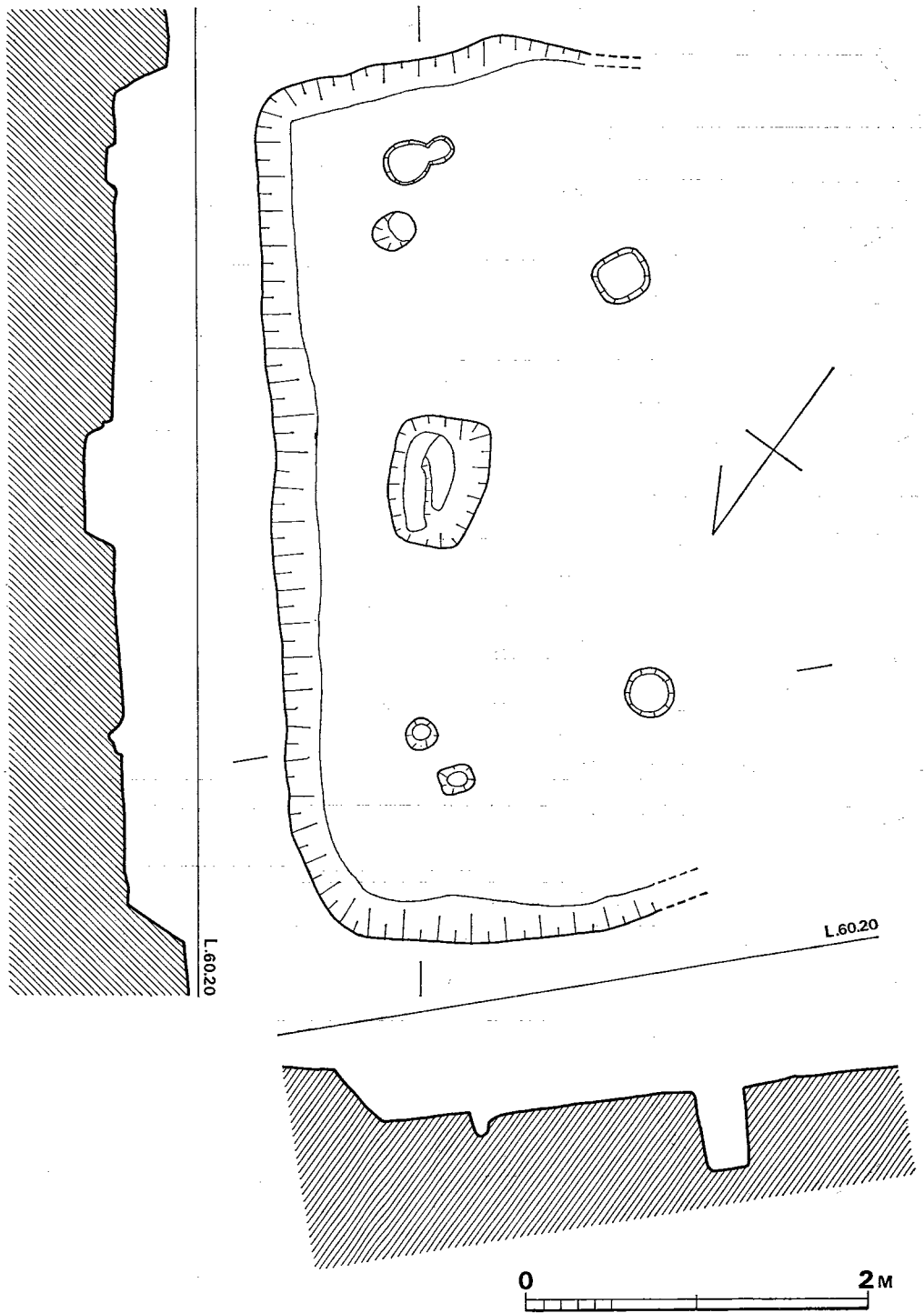


Fig. 25 第11号住居跡実測図 (縮尺1/40)

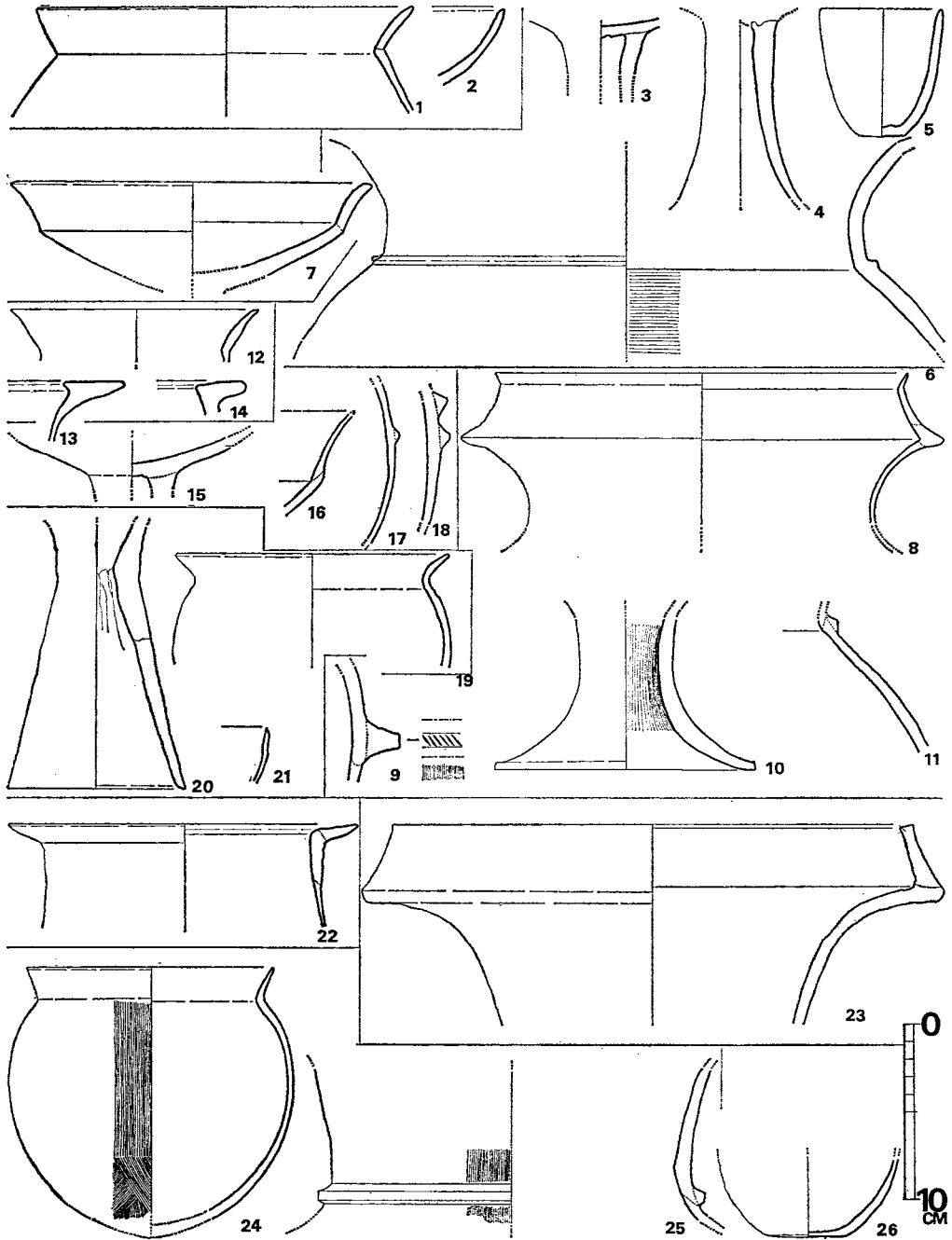


Fig. 26 住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

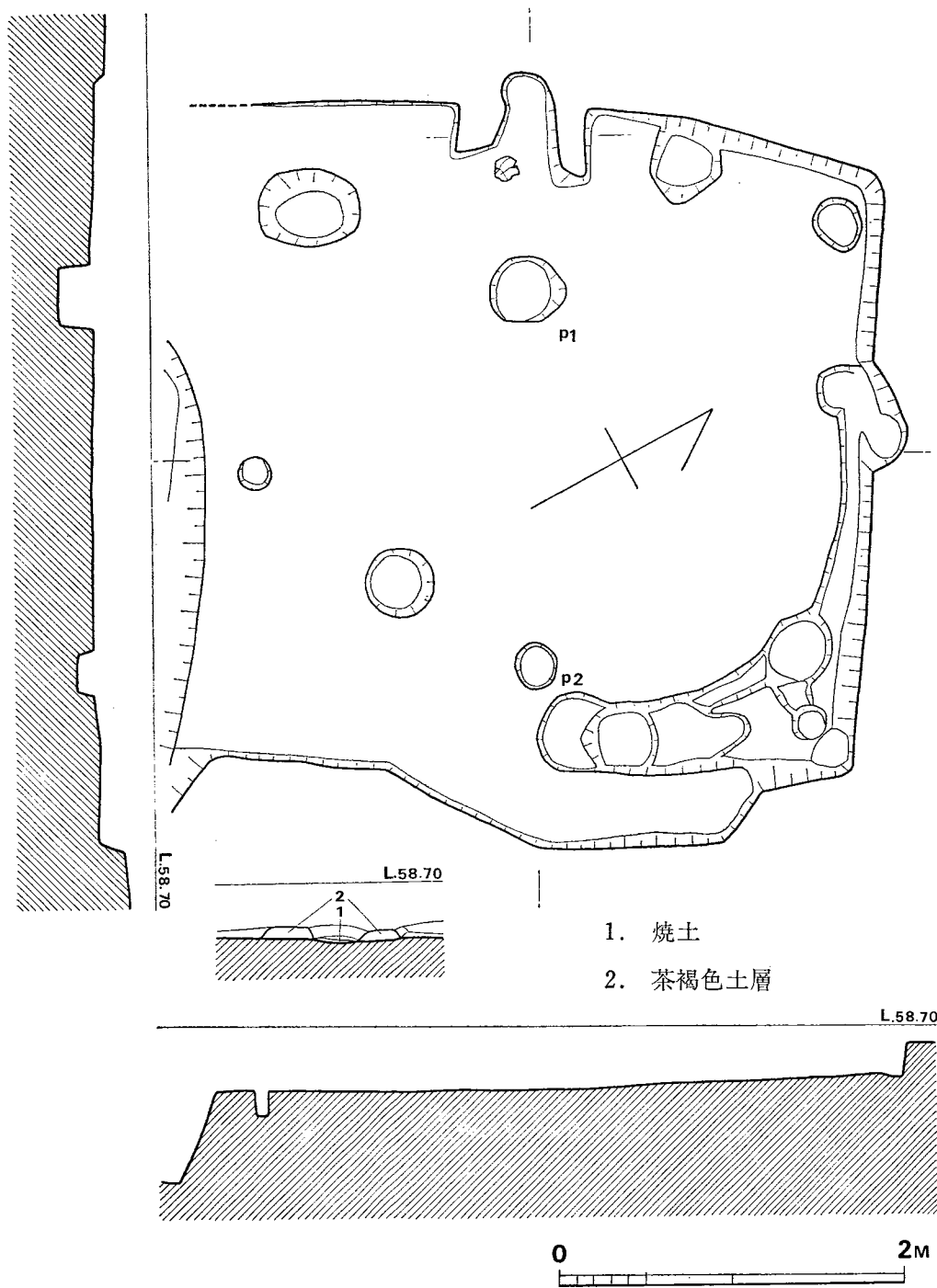


Fig. 27 第12号住居跡実測図 (縮尺1/40)

第12号住居跡 (Fig. 27, PL. 33)

調査区の東南隅に存在する。隅丸方形のプランを呈し、主軸をN72°Wにとる。上面は削平をうけており、床面から壁上端までの比高は北壁で18cmを測る程度である。南側壁は残っていない。

住居の規模は3.8×3.8mの方形である。床面には7個の浅いピットがあるが、P1とP2が主柱穴と考えられる。柱間寸法は2.2mを測る。

西壁に両袖のカマドが付設されている。上部が削平のため明確でないが茶褐色土層で構築され内部は著しく火を受けており、底部は焼土層が認められた。高杯を支脚として利用している。

出土遺物 (Fig. 31・32)**須恵器**

杯蓋 (Fig. 31—3) 3は杯蓋の破片である。天井部を欠く口縁部と体部の境に明瞭な稜をもつ。ヨコナデ調整を施す。

土師器

壺 (Fig. 32—1) 1は壺の破片である。頸部は内反気味にのび、口縁部は外反する。内外面ともに頸部と胴部の境に稜線を有する。外面の調整は不明であるが、内部面は口縁部がヨコナデされ、頸部から体部にかけては斜めに指ナデされる。黄橙色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。底部はヘラ削りの上をナデ調整、底の内部は雑に指ナデされる。

椀 (Fig. 32—2) 2は椀形土器の口縁部片である。体部は半球状で、口縁部は強く外反する形態である。口縁部と体部外面は丁寧なクシ状の工具によってナデ調整される。赤褐色を呈する。

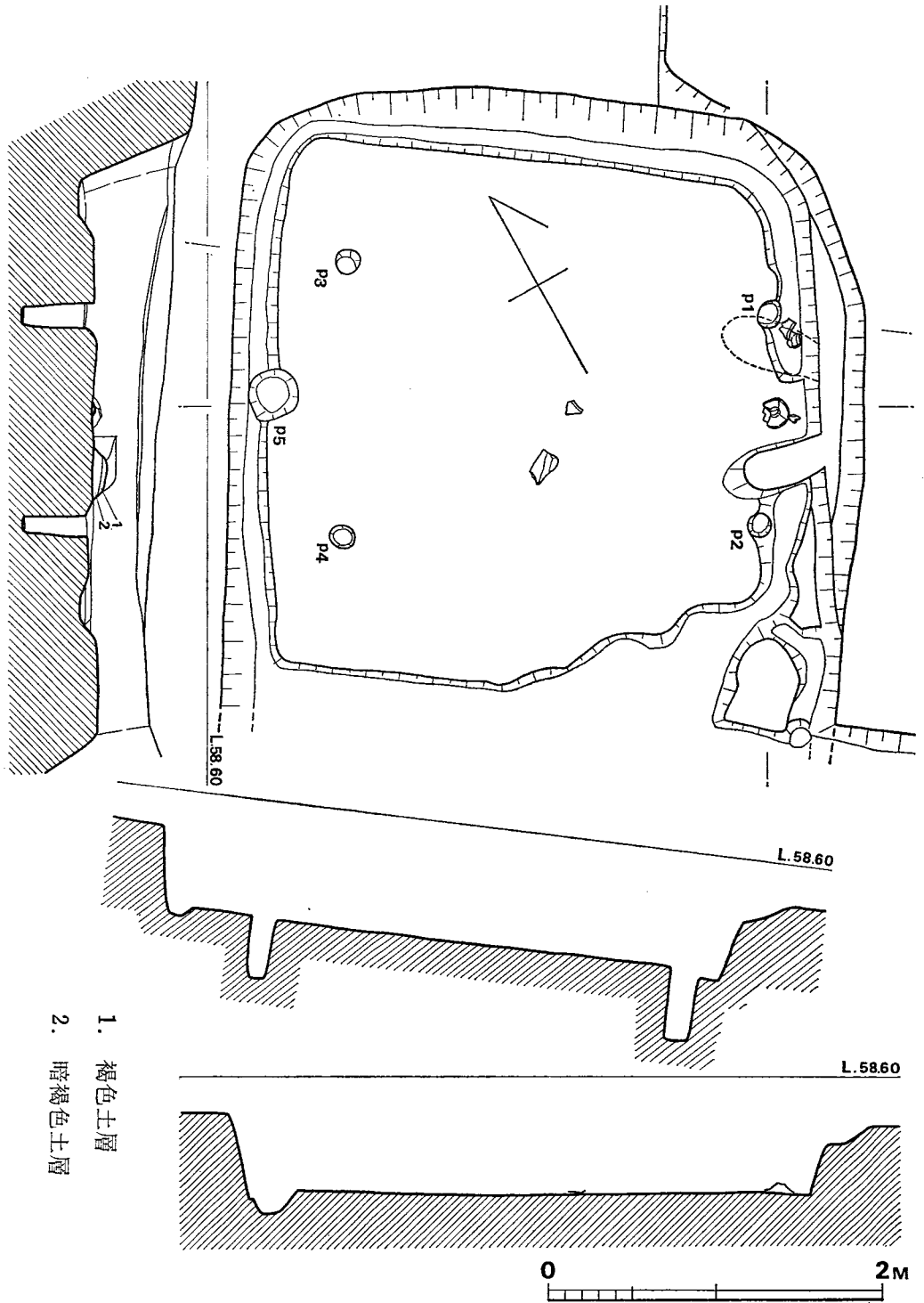
甌 (Fig. 32—3) 3は柱穴中から出土した甌の把手である。

第13号住居跡 (Fig. 28, PL. 34)

調査区の東南隅に存在する。隅丸方形のプランを呈し主軸をN61°Wにとる。南側の壁は削りとられ旧状を留めていないが、他は残りがよく床面から壁上端までの比高は50~60cmを測る。

住居の規模は長辺3.8m、短辺3.5mを測る。主柱穴は4本で、約40~50cmほど黄褐色粘質土層を掘り込んでいる。P1~P2は1.15m、P1~P3は2.5m、P3~P4は1.6m、P2~P4は2.5mを測る。他には床面西側にP5がある。住居内の溝は壁に沿って「コ」の字状に残るが、本来は一周していたと思われる。ただカマドのある部分の溝は、掘られていない。

カマドは両袖で奥行60cm、幅95cm、焚口部幅60cm、床面からの高さは15cmを測る。高杯を支脚として利用している。



- 1. 褐色土層
- 2. 暗褐色土層

Fig. 28 第13号住居跡実測図 (縮尺1/40)

出土遺物 (Fig. 31・32)

この住居跡は、上部の削平が少なく遺物の出土も多い。床面直上からは杯蓋・土師器片、カマド内に高杯、周溝からは壺の破片が出土した。

須恵器

杯蓋 (Fig. 31-4・5) 4・5ともに口縁部が、外側に張る。口唇部は丸味をもつ。体部から天井部にかけて丸味を帯びる。4の外面は灰を被っており、調整は不明瞭である。内面は青灰色を呈し、体部から口縁部にかけてはヨコナデ調整され、天井部内面はナデで仕上げている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。5は、器壁が剝落しており調整は不明である。淡黄色を呈し焼は柔い。胎土には砂粒を含む。

土師器

高杯 (Fig. 32・4~6・8・9) 4は床面から出土した杯部の破片である。口縁部は外反し広がる。ヨコナデ調整され、赤橙色を呈す。5は脚柱部片である。器壁は剝落しているため調整は不明瞭であるが、わずかにヘラ削りの痕跡が認められる。6は、脚裾部の破片である。裾部はかなり肥厚する。ヨコナデ調整されている。8は杯部でカマド内から出土したもので支脚として利用されたものであろう。体部と口縁部の継目調整は雑である。口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。内外面とも加熱により器壁がほとんど剝落しており調整は不明瞭である。内外面に一部煤が付着している。胎土には砂粒が目立ち、赤橙色を呈する。9は、口縁部と脚裾端部を欠く。脚柱部と脚裾部の継目部分は薄く仕上げられ、裾部にかけて肥厚する。赤橙色を呈し胎土には砂粒を多く含み、焼成は柔い。

壺 (Fig. 32-7) 7はカマド横の周溝内から出土した。口縁部片である。加熱により器壁が剝落する。

第14号住居跡 (Fig. 29, PL. 35)

5号住居跡と重複して検出した住居跡である。隅丸長方形のプランを呈し主軸をN11°Wにとる。東側から西側にかけて上面を斜めに削平されており、床面から壁上端までの比高は7~25cmを残す程度である。

住居の規模は長辺3.3m、短辺2.9mを測る。柱穴は存在しない。壁に沿って幅20cm前後の溝が巡る。

カマドは北側の壁に設けられている。奥行95cm、幅110cm、焚口部幅45cm、床面からの高さ25cmを測る。煙道は住居外に延び、煙出しのピットにつながる。焚口部の壁は内反し天井部につづく、内壁は著しく火を受けて焼けている。また床面には高杯が逆さの状態を支脚に利用されている。カマドの断面は3層に分かれ、茶褐色土層で基礎が作られ、黒褐色土層で形を整え、黄褐色土層で調整されている。また焚口部床面に暗茶褐色土で埋ったピットが存在するが、その性格は明確でない。

出土遺物 (Fig. 31・32)

須恵器

横瓶 (Fig. 31-11) 11は、床面から出土した。頸部から上を欠損している。肩部は丸い。胴部は、櫛状工具による回転ナデ調整され、内面は指でおさえた上をロクロによる回転ナデで仕

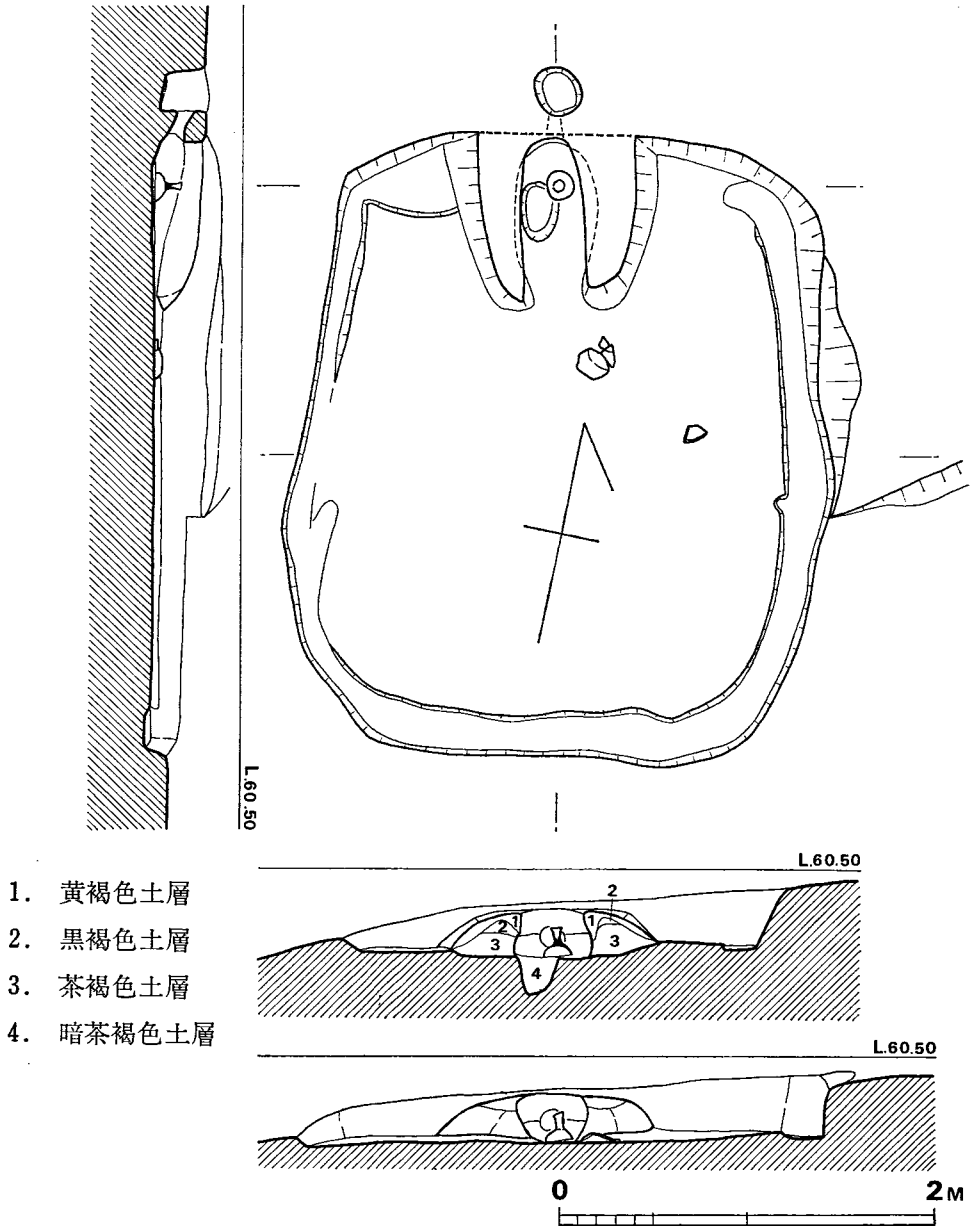


Fig. 29 第14号住居跡実測図 (縮尺1/40)

上げている。底部は指でおさえた雑な調整を行なっている。一般に調整は雑である。淡青灰色を呈し、胎土にはところどころ大砂粒を含む。焼成は柔い。

高杯 (Fig. 32—11) 11は、カマド内の出土で支脚に利用され、脚柱部内側には、焼土が固くつまっていた。杯部は、丸く仕上げられ、整形法は不明である。脚柱部は、ヘラ削りされている。脚柱部と脚裾部の境に稜がある。杯部内外面、脚部外面に煤が付着している。赤橙色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。

甌 (Fig. 32—12) カマド内出土の破片である。体部がゆるやかにすぼまる形態である。胴部内外面はヘラ削りで仕上げられ、底部はヘラで斜めに削った後楯状の工具でヨコナデされている。赤橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。 (池辺)

第15号住居跡 (Fig. 30, PL. 36)

第14号住居跡の北西側3.5m離れてあり、第7号住居跡付属のU字状溝と重複しているが、第15号住居跡の方が新しい。

平面は2.86m×2.60mのほぼ正方形を呈しており北東側壁ほぼ中央部にカマドが付属している。床面は平坦、水平であり、やや軟か気味である。壁は削平をうけていて10cmから20cmの遺存である。カマドは両袖があり、支脚として自然石が利用されていて、煙出しは壁線より外に出ている。袖は幅30cm前後、長さ50cmほどで、高さは削平され不明である。カマド内の床面は皿状のくぼみがあり、そのくぼみ内に支脚は固定されており、火気を強く受けている。柱穴は存在しない。

第16号住居跡 (Fig. 30, PL. 30・31—1)

第7号住居跡と重複していて、この第16号住居跡の方が新しいことが認められた。第14号・第15号住居跡と同じくカマドがある。

平面は2.65m×2.50mのほぼ正方形を呈し、カマドが北西側壁の中央部にあり、遺存が悪く精査できないが、両袖の長さ約40cm、幅は合せて50cmあり、カマド前面に厚く焼土層がみられる。煙出しはトンネル式でなく、直接屋外へ出していたと思われ煙道部は検出されない。床面には3方の壁直下に周溝があるが浅い。柱穴は床面上に2個みられるが、第13号・第14号住居跡と同じくないものであろう。 (上野)

出土遺物 (Fig. 32)

碗 (Fig. 32—13) 床面から出土した。体部は半球状を呈し、口縁部がやや外傾する。内外面ともにヘラ磨きで調整され、特に口縁部近くは丁寧に仕上げられる。暗赤橙色を呈し、胎土、焼成ともに良好である。

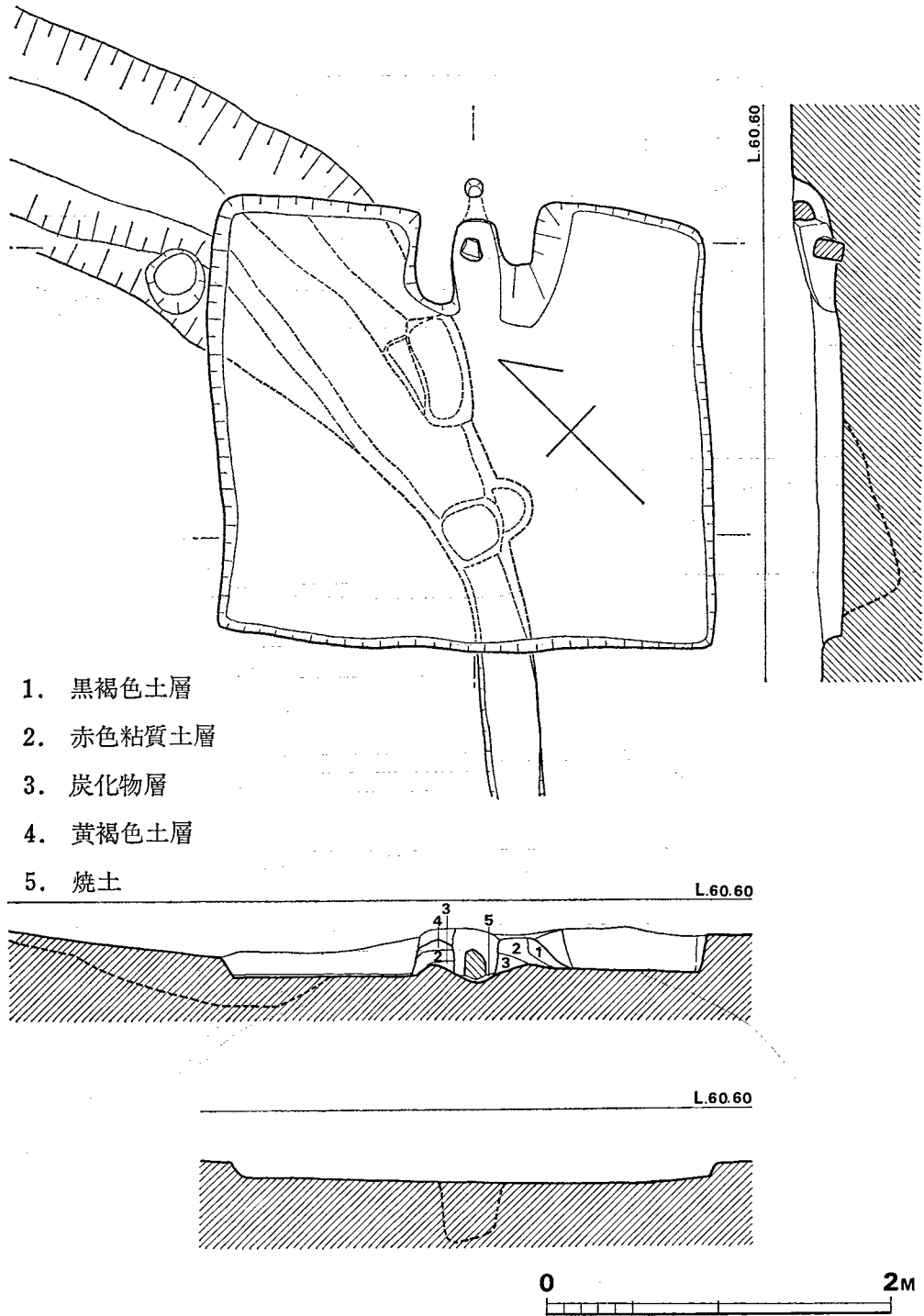


Fig. 30 第15号住居跡実測図 (縮尺1/40)

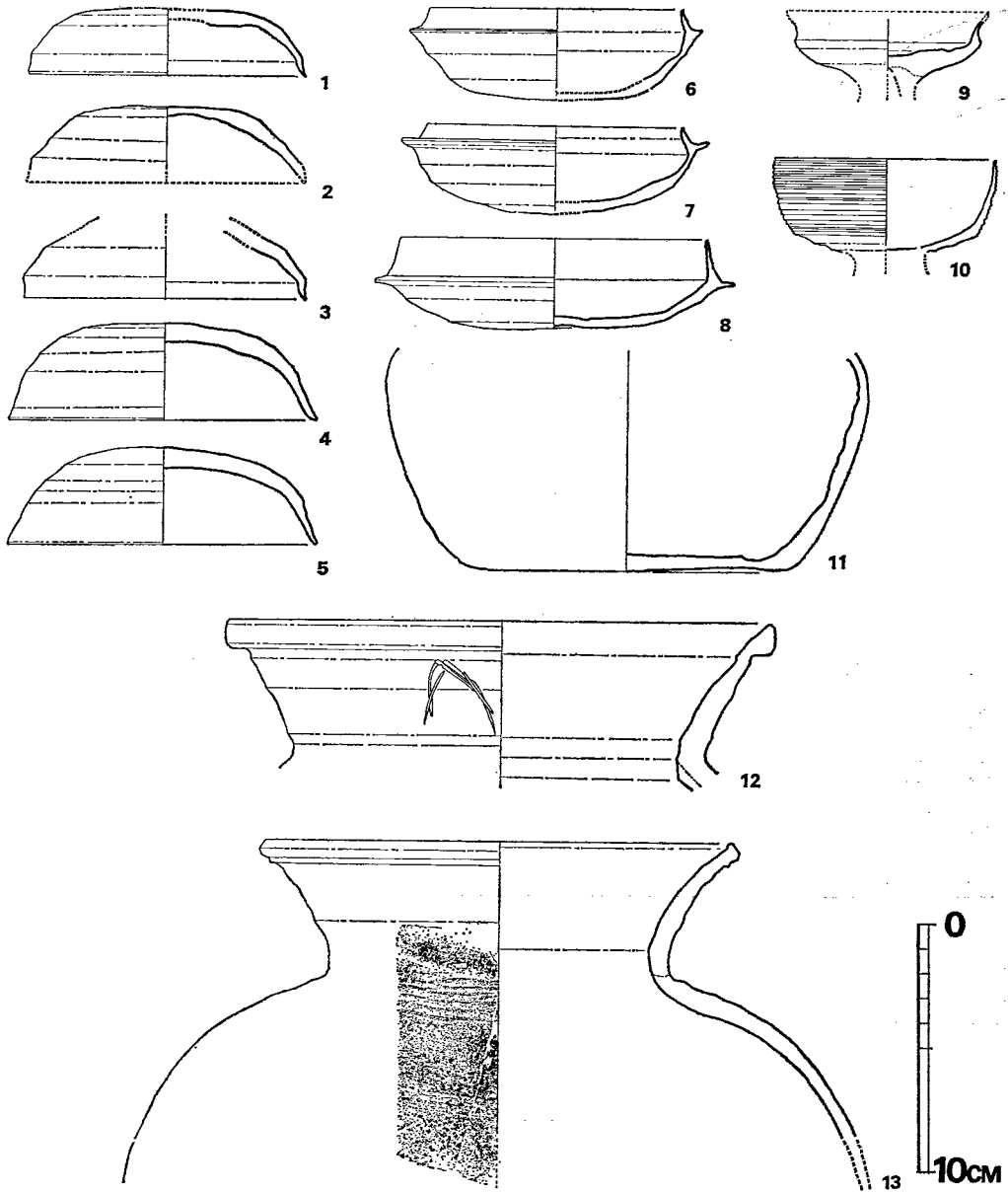


Fig. 31 住居跡出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

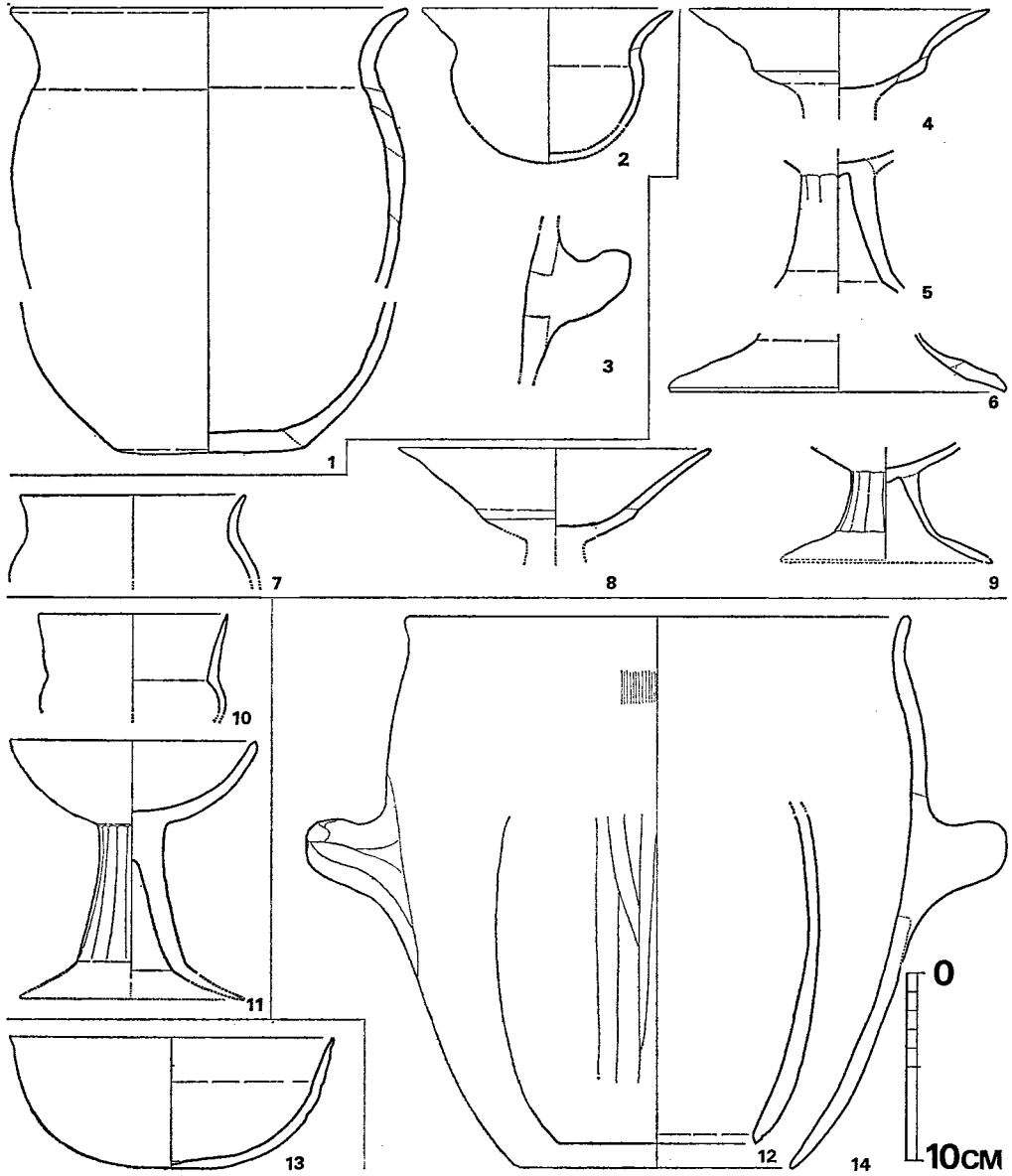


Fig. 32 住居跡出土土師器実測図 (縮尺1/4)

第17号住居跡 (Fig. 33, PL.37-1)

調査区の中央部からやや西寄りに存在する。隅丸長方形のプランを呈し、主軸をN33°Wにとる。上面はかなり削平を受けている。

住居の規模は、長辺3.9m、短辺2.4mを測る。床面には、小ピットが7個あるがいずれ浅い。支柱穴はP1~P4が考えられる。柱間寸法はP1~P2は1.8m、P1~P3は2.1m、

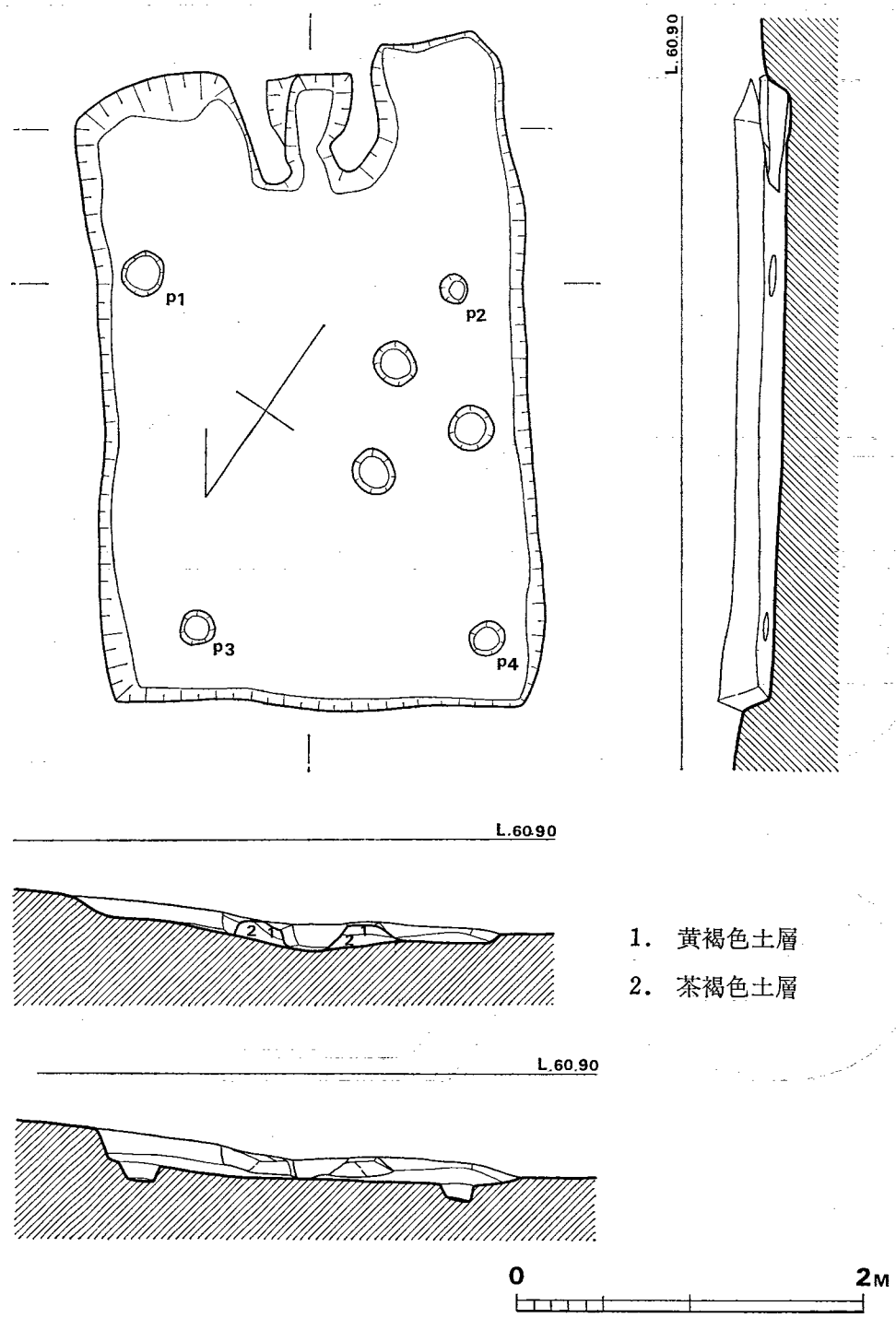


Fig. 33 第17号住居跡実測図 (縮尺1/40)

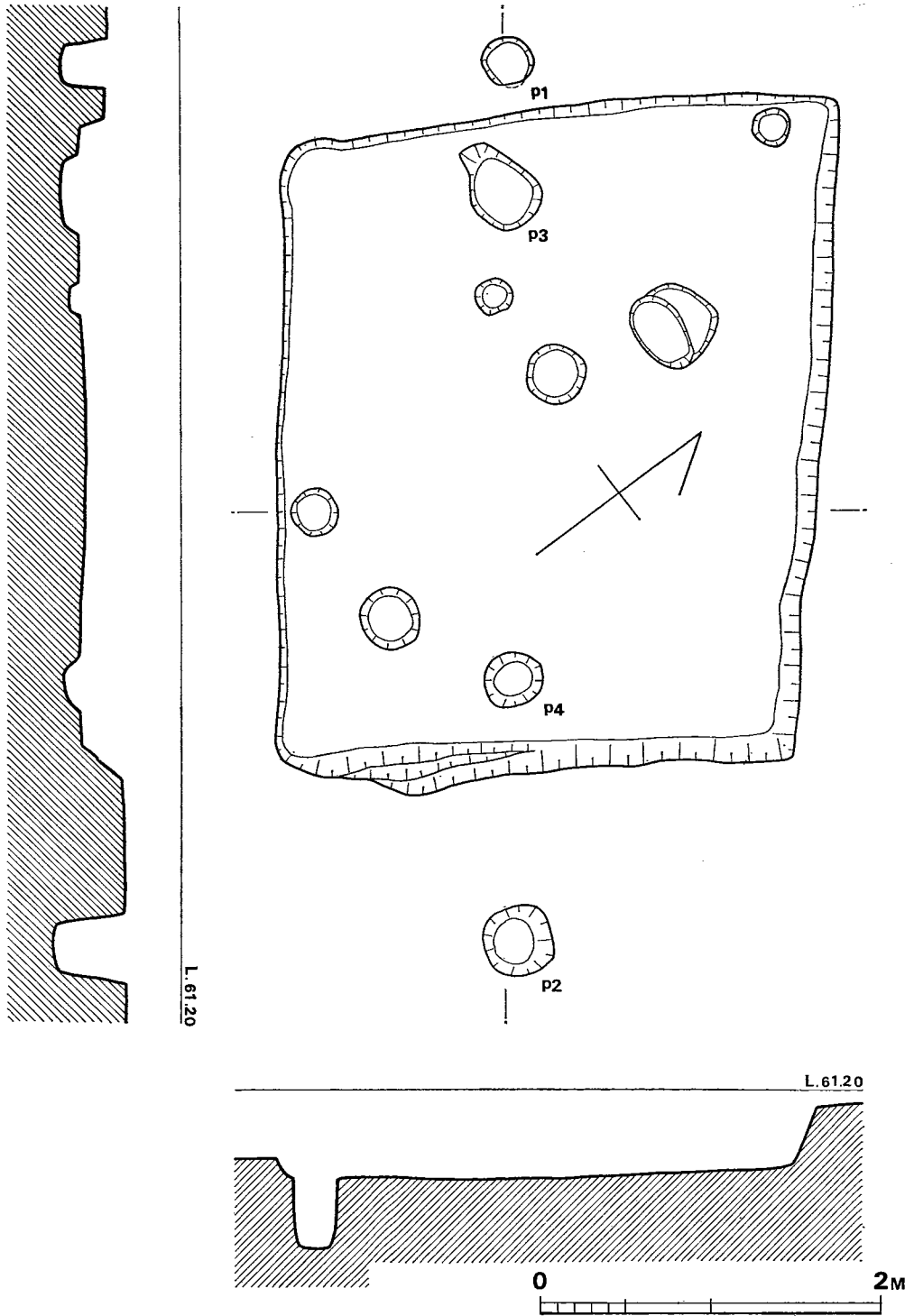


Fig. 34 第18号住居跡実測図 (縮尺1/40)

P3～P4は1.65m, P2～P4は2.0mを測る。南壁には、カマドが設けられている。上部は削平され明確でないが奥行70cm, 幅95cm, 焚口幅15～20cmを測る。

第18号住居跡 (Fig. 34, PL. 37-2)

調査区中央部やや東側に存在する。長方形のプランを呈する住居跡である。短軸をN53°Wにとる。住居の規模は長辺3.6～3.9m, 短辺3.0～3.3mを測る。柱穴は床面に8個, 外に2個P1・P2があり, 支柱穴としてP1～P4を考えたが明確ではない。

表土層下の遺物

表土層下より遺構に伴わず, 弥生式土器, 須恵器, 土師器, 石器等が出土した。

弥生式土器 (Fig. 26-13・14, Fig. 35) 13は, 壺形土器の口縁部破片で, 口縁は鋤形をなす。淡黄色を呈し, 焼成は良好である。14は甕形土器の口縁部破片で, 外面は丹塗りされている。赤橙色を呈し, 胎土, 焼成ともに良好である。Fig. 35は壺形土器である。頸部より上を欠損する。赤橙色を呈し, 胴下部に一部煤が付着している。器面は風化し残っていない。

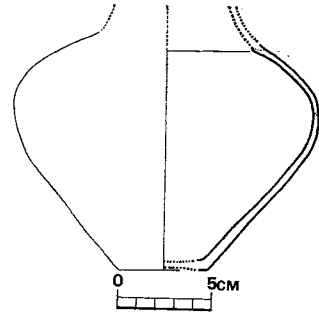


Fig. 35 出土土器実測図
(縮尺1/4)

須恵器

杯蓋 (Fig. 31-1・2) 1は, 5号住居跡の南側の表土直下から出土した杯蓋の破片である。口縁部がやや外側へ張る。端部は丸味をもつ, 口縁部と体部の境に稜がある。外面は暗青色, 内面は暗橙色を呈する。焼成, 胎土ともに良好である。2は口縁部を欠損している。天井部は平坦である。天井部から肩にかけてヘラ削りがみられ, 外は内外面にわたってナデヘラ削りがみられ, 外は内外面にわたってナデ調整を施している。灰色を呈し, 焼成は良好である。

杯身 (Fig. 31-6~8) 6・7は, たちあがり基部は内反し上部は内傾する。蓋受は外方にほぼ水平に突出す。ともに青灰色を呈し, 焼成はやや柔く, 胎土に砂粒を含む。8は, たちあがりは1.7cmを測り, 薄くやや内傾する。底部はヘラ削りで調整され, 外はナデ調整を施す。内面は暗赤橙色, 外面は灰橙色を呈し, 焼成は悪い, 胎土に砂粒が多い。

高杯 (Fig. 31-9・10) いずれも5号住居跡の南側から出土した高杯の破片である。9は杯部底を残すのみで, 口縁部は外反気味に立あがるものと思われる。黒灰色を呈し, 焼成は良好である。10は杯部で, 口縁部がやや内反気味に立あがる。内面はナデ調整され, 外面は櫛描き調整されている。赤橙色を呈し, 焼成は悪い。胎土中の砂粒は極めて小さく, 良質である。

壺 (Fig. 31-12・13) 5号住居跡南側より出土した。12は口縁部破片である。頸部は外反し

ながらのび、さらに口縁部は外反する。口縁部端部は外方に突出し、下面に稜を有する。頸部にはヘラ描文がある。ヨコナデ調整され淡青灰色を呈する。一部灰により自然釉がつく。焼成は良好である。13は、頸部から口縁部にかけて外反し、口縁端部は、上方につまみ出され、下面には稜を有する。ヨコナデ調整されている。肩部外面は叩きの上をヨコナデ調整され、内面は青海波文の叩きが認められる。淡青灰色を呈し、焼成はややあまい。胎土には砂粒が目立つ。

土師器

甑 (Fig. 32—14) 表採の資料である。口縁部はわずかに外反する。体部は把手の部分でもっともふくらみ、底部にかけてゆるやかにすばまる形態である。口縁部はヨコナデされ、体部は縦方向の刷毛ナデで仕上げられ、内部はヘラ削りされている。体部は一部煤が残る。淡黄色を呈し、焼成はあまり良くない。

石器 (Fig. 36, PL. 43)

石庖丁 (Fig. 36—2) 9号住居跡付近での表採資料である。欠損品で、輝緑凝灰岩製である。両面は研磨され、二孔を有する。

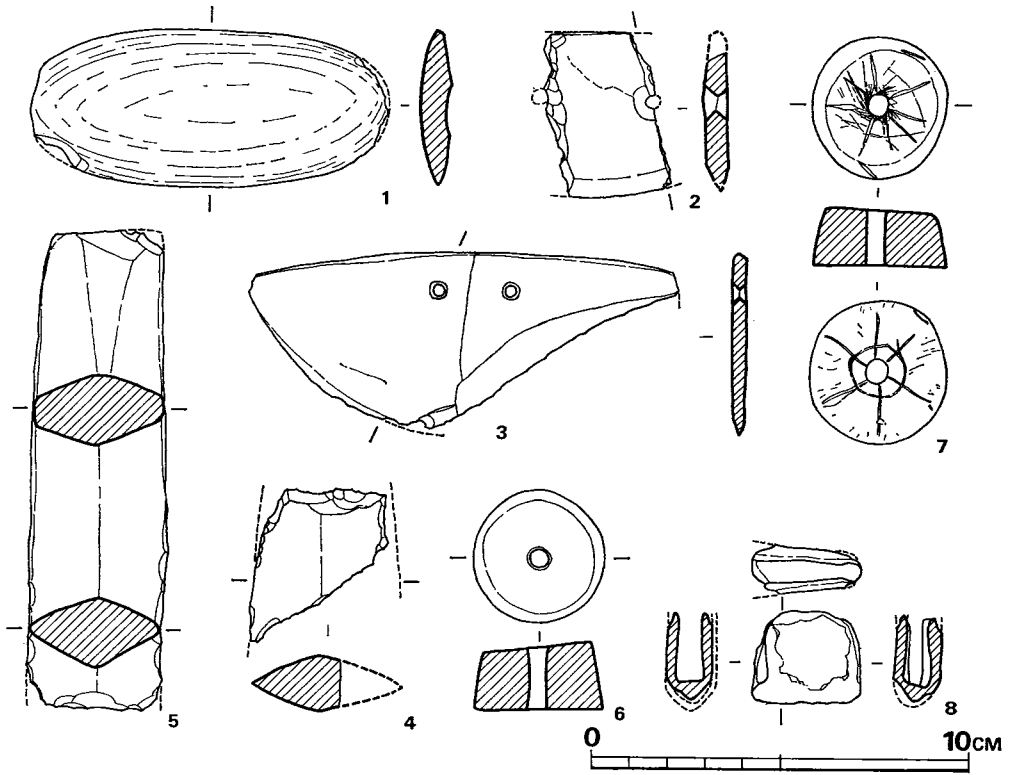


Fig. 36 柳ヶ谷遺跡出土石器・青銅器実測図 (縮尺1/2)

石剣 (Fig.36—5) 欠損品である。長さ12.5cmを測り中央に稜が有り、断面は菱形を呈する。素材は硬質砂岩である。

石鏃 (Fig.37—3・4) 3は黒耀石製で両側縁は内に反曲する。基部は抉入する。4はサヌカイト製石鏃である。基部を欠損している。

紡錘車 (Fig.36—6・7) いずれも表採資料である。6は滑石製、7は蛇紋岩製である。全周、二面とも丁寧に研磨されている。

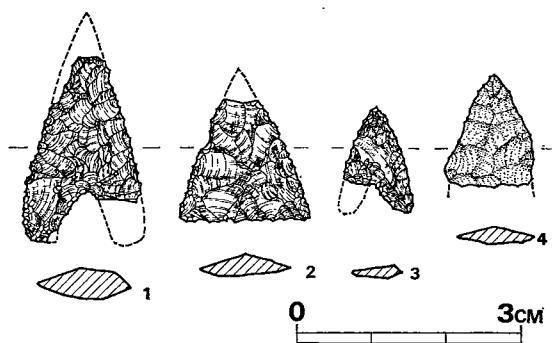


Fig. 37 柳ヶ谷遺跡出土石鏃実測図 (縮尺1/1)

掘立柱建物 (Fig. ③, PL. 38・39)

西区の柱穴状のピット群のなかで、5棟の掘立柱建物を確認した。2間×2間が4棟、3間×3間が1棟である。東側のものから第1号～5号とした。

第1号掘立柱建物 (Fig.38, PL. 38—1)

調査区の最も東に位置する建物で、2間×2間である。桁行方向はN29°Eにとり、正方形に近いプランをもつ。平均梁行4.8m、桁行4.93mを測る。柱痕は検出できなかったがP1とP3にわずかに痕跡がみられる。掘方は70cm～1mとかなり大きい。P3から少量の土器片が出土したが、時期は不詳である。

(池辺)

第2号掘立柱建物 (Fig.39, PL. 38—2)

第7号・第8号住居跡の壁と1mから1.50m離れて西側に在り、第3号掘立柱建物と第7号住居跡に付属するU字状構に重複している。立地をみると丘陵斜面に直角・平行に9本の柱が整然と並んでいる。2間×2間の総柱建物遺構である。第3号掘立柱建物との切合い関係は第2号のP2と第3号のP5、第2号のP3と第3号のP2とにみられているが不明である。

(上野)

第3号掘立柱建物 (Fig.40, PL. 39—1)

2間×2間の総柱建物である。第7号住居跡の西側にあり住居跡に付属するU字溝とP3・P6が重複している。2号掘立柱建物ともP2・P5で重複するU字溝より新しいことは確認したが、2号との関係は不明である。平均梁行2.64m、桁行3.0mで、桁行方位はN32°Wを測る。柱痕は検出できなかったが、掘方からみて10～15cm程の円柱ではなかろうか。時期は不詳である。

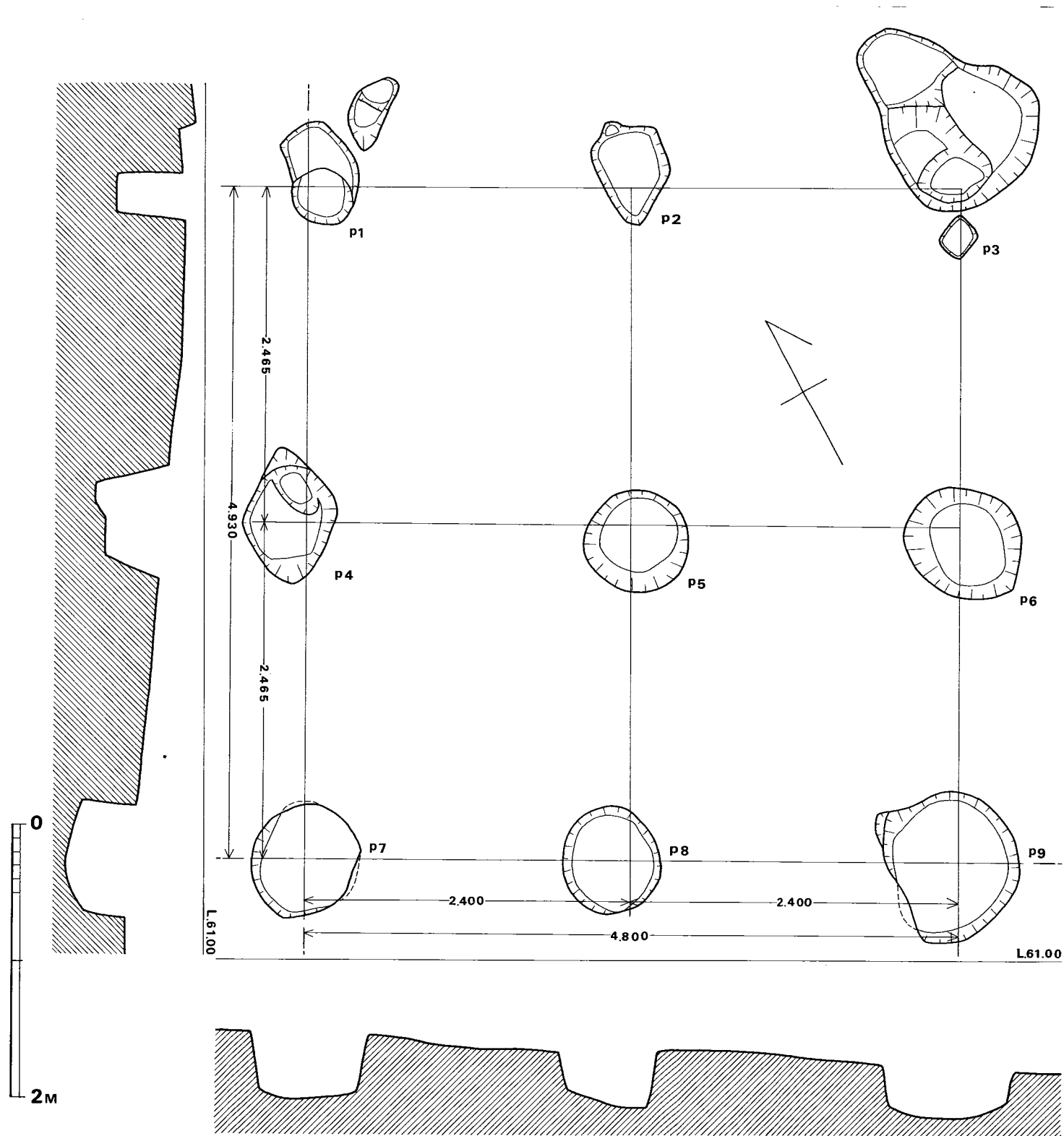


Fig. 38 第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

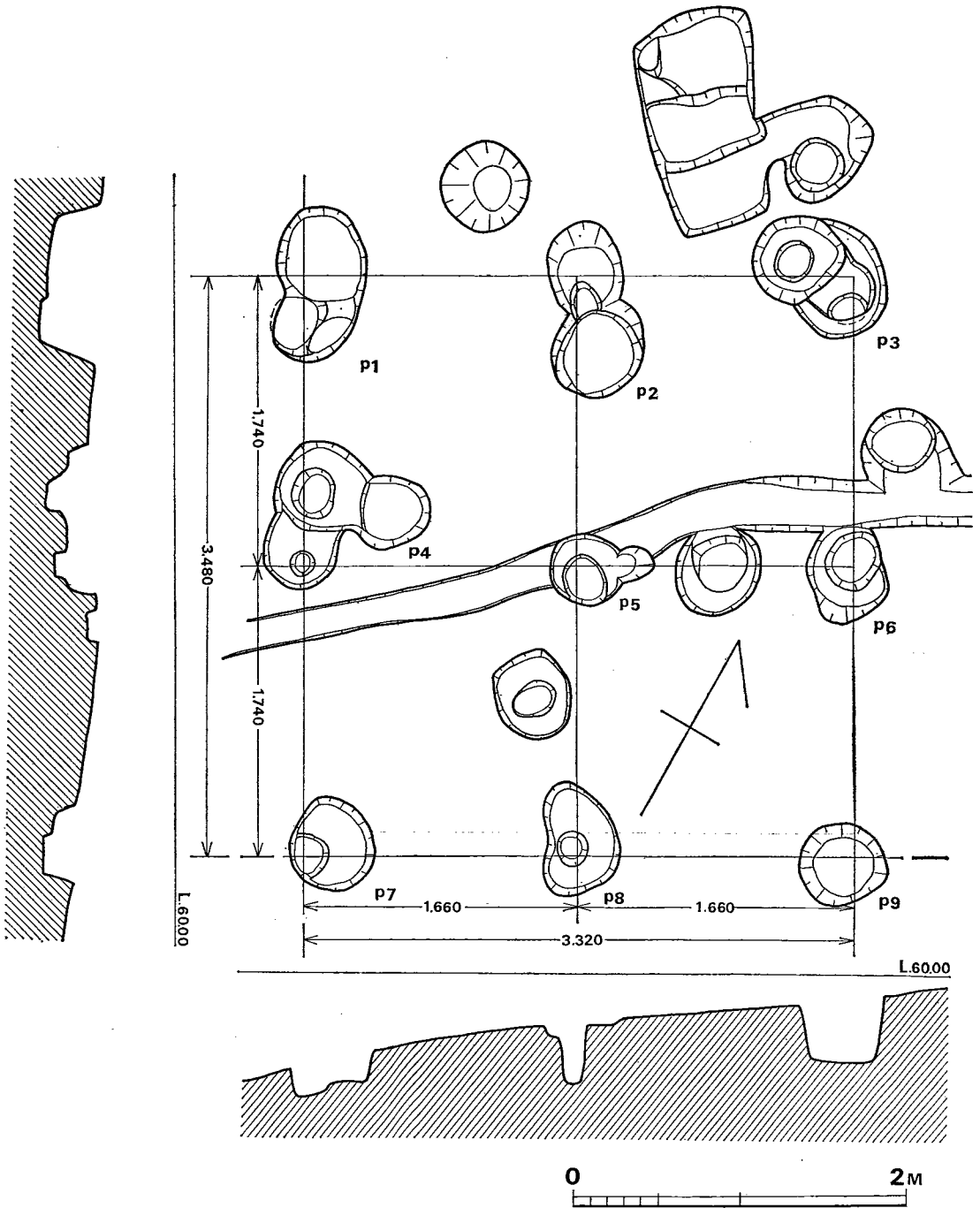


Fig. 39 第2号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

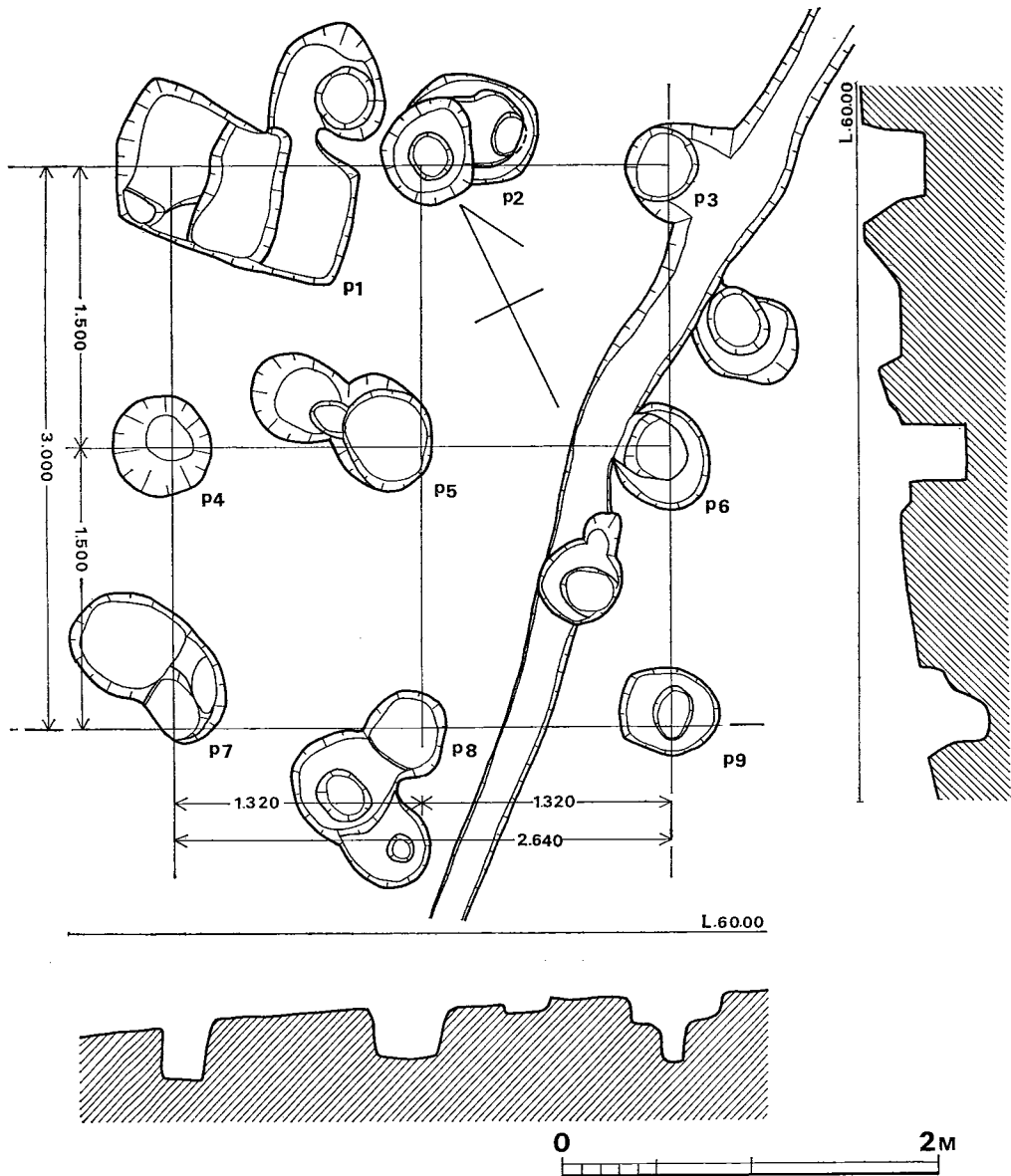


Fig. 40 第3号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

第4号掘立柱建物 (Fig. 41, PL. 39-1)

第9号住居跡の東側から検出した2間×2間の総柱建物である。桁行方位はN22°Eで平均梁行3.3m, 桁行3.4mを測る。柱の大きさはP1・P3・P4から判断して10~15cmの円柱であろう。掘方は、50~60cmの大きさである。時期を決定する出土遺物はない。

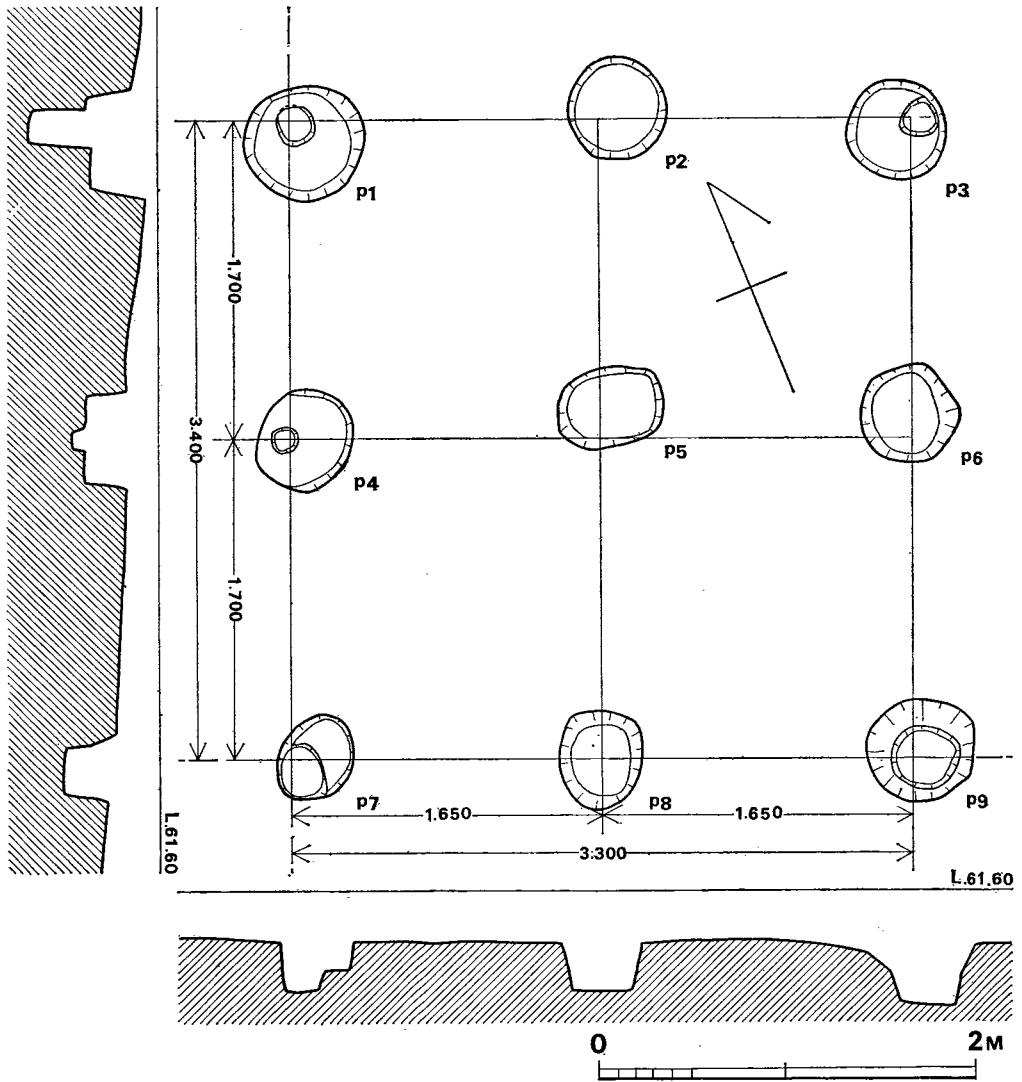


Fig. 41 第4号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

第5号掘立柱建物 (Fig. 42, PL. 39—2)

第6号住居跡と第18号住居跡との間に検出した3間×3間の建物である。P5にあたる部分には柱穴を発見できなかったが、他の並びから判断して建物にした。平均梁行3.68m、桁行4.88mを測り、桁行方位は、N56°Eである。P2・P4は6号住居跡と重複し住居跡より新しいが、時期は不明である。(池辺)

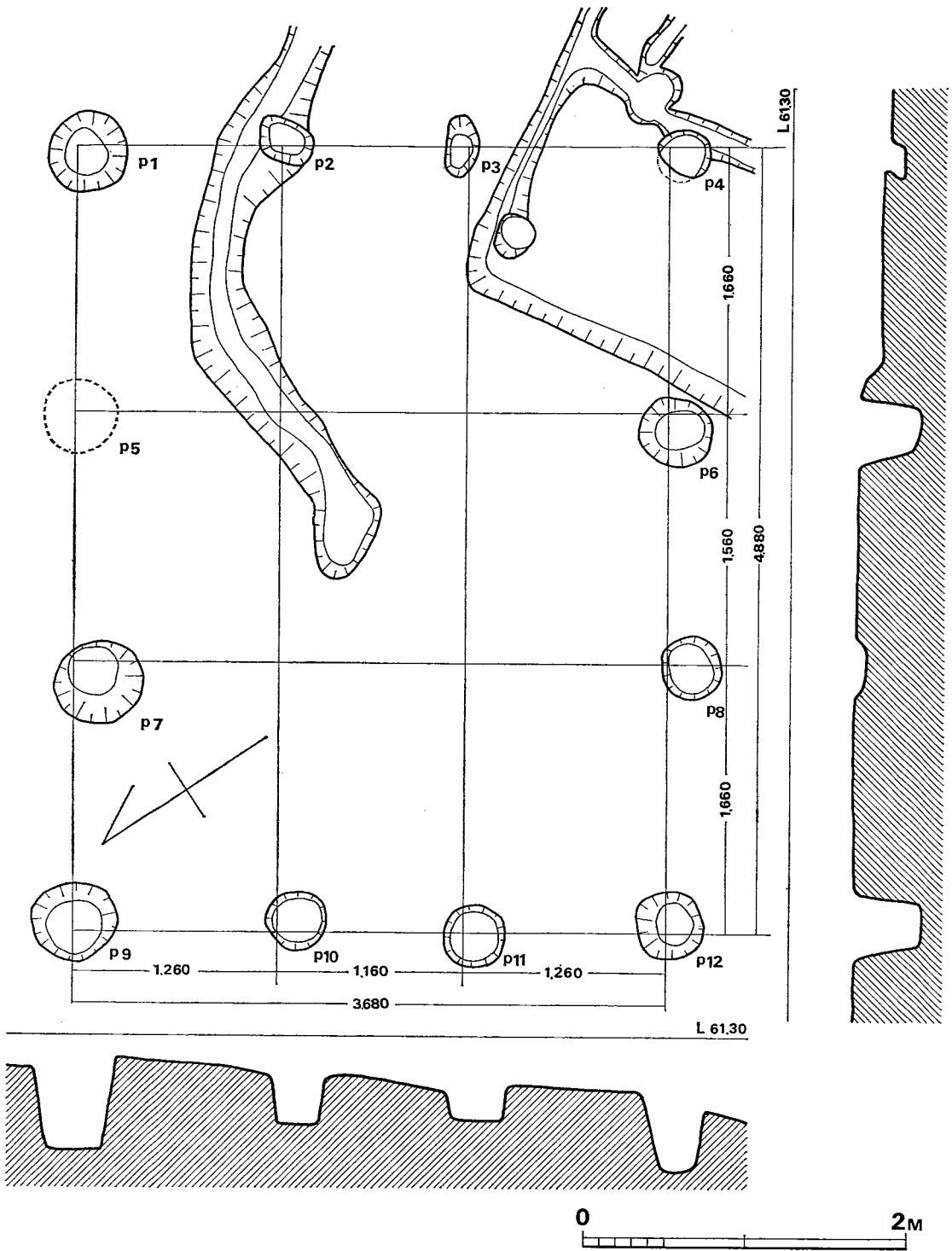


Fig. 42 第5号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

柳ヶ谷墳墓 (Fig. 43~45, PL. 40)

柳ヶ谷遺跡西区第10号住居跡の発掘調査において火葬骨を蔵骨器に埋納した火葬墳墓が検出された。墳墓は、北東から南西にのびる丘陵の頂部よりやや下る南斜面にかけてのところに位置している。

埋葬状況 (Fig. 43, PL. 40-1)

西区第10号住居跡発掘調査中において検出されたものであるが、火葬墓よりも第10号住居跡の方が古く、第10号住居跡発掘以前に火葬墓が確認できるはずであるが、表面観察調査、及び表土除去後においても確認できなかった。

蔵骨器は、楕円形の墓壙内に埋置されているが、墓壙の上部構造は近世の開墾、又住居跡の発掘などにより不明であり、結局地山内に掘り込んだ墓壙のみの検出である。

墓壙は残存上面径27cm×27cmのやや方形に近い楕円形を呈し、床面は平坦であり、残存深さ11cmである。蔵骨器は墓壙床面にほぼ密着して蔵骨器底部を固定させているが、蔵骨器全体はやや斜めかげんに埋置されている。蓋は、本来ならば蔵骨器口縁部に覆せてあるべきであるが、肩部に寄せかけた状態で出土しており、当初よりこのような状態で埋置されたものか判別できない。墓壙内には焼土と木炭が充満しており、蔵骨器をとり囲んでいる。蔵骨器内には火葬骨が充満の状態で見られる。これはおそらく火葬場において直接蔵骨器に火葬骨を埋納した結果であろう。蔵骨器内の内より、器内中央よりやや上半部にて穂を下にして斜めの状態で検出された。なお墓壙の標高は59m50cmほどである。

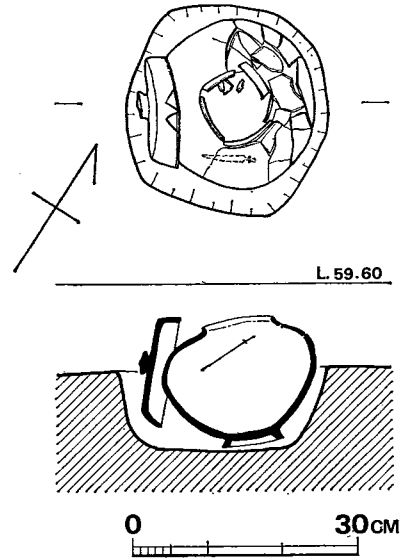


Fig. 43 柳ヶ谷墳墓実測図 (縮尺1/10)

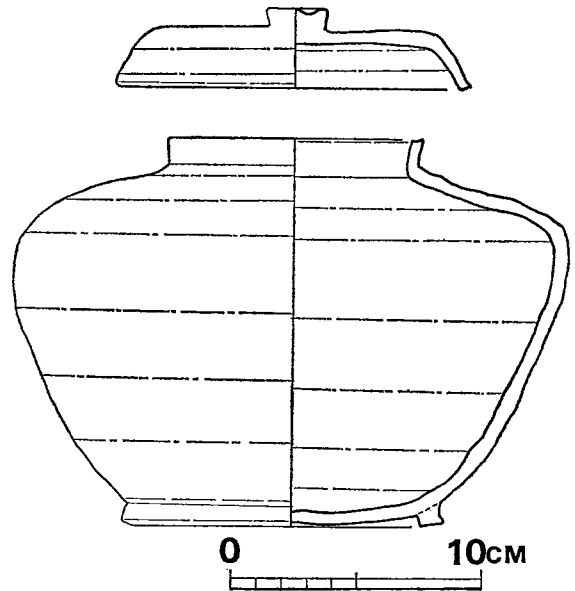


Fig. 44 柳ヶ谷墳墓出土蔵骨器実測図 (縮尺1/3)

蔵骨器 (Fig. 44, PL. 40-2)

柳ヶ谷墳墓に使用された蔵骨器は陶製・須恵器有蓋壺形の短頸壺形土器であり、身の壺形土器は、高さ15.5cm、口径10.2cm、底径12.8cm、最大胴部径22cm、口縁部立上り1.1cmを測る。底部には高台が貼り付けられており、底部よりやや丸味をおびて直線的に最大胴部へと伸びる。器高の3分の1よりやや上位に大きく屈局する最大胴部があり、さらに口頸部へとやや内反りしてつづき、口唇部へとやや外反して立上がる。口唇部はやや太く、丸い。高台はヨコナデされ、胴部外面は細かいナデが施こされている。器肉はほぼ0.5cmである。色は黒灰色を呈し、焼成はかたく良好であり、胎土は緻密であり、全体的に優ぐれた須恵器といえよう。

蓋は須恵器のつまみ付き杯であり、総高3.2cm、口径14.2cm、器肉約0.5cmを測る。つまみは貼り付けで天井部は平坦であり、肩部から口縁部へ直線的に外反しており口縁端部は外へはねる。

刀子 (Fig. 45, PL. 40-1)

蔵骨器内に副葬されていたもので、全長11.4cm、刀身の長さ6.7cm、幅は中央部で0.85cm、関部付近で1.1cmで、刀身の断面は三角形である。茎部は長さ4.7cm、幅約0.6cmで、断面は楕円形に近い。茎には楕円形の縁金具がある。
(上野)

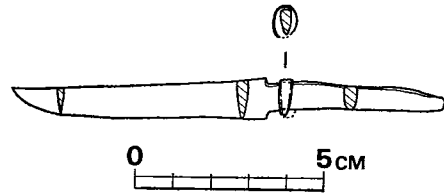


Fig. 45 柳ヶ谷墳墓蔵骨器内出土鉄器
(縮尺1/2)

3. 小 結

以上、検出した遺構について簡単に記した。柳ヶ谷遺跡発見の住居跡は、弥生時代中期に始まり、奈良時代前期にまで及んでおり、主に弥生時代後期及び古墳時代後期のものである。しかしながら遺跡の上部は、戦後の開墾による削平を受け攪乱されているため、遺構に伴う遺物出土例は極めて少なく、土器もほとんどが細片で、石器類の出土も少なかった。このため遺構の時期決定に不安が残る。

弥生時代に属する遺構として住居跡12軒と貯蔵穴がある。住居跡は弥生時代後期を中心とする時期の所産で、方形プランを呈し、ベッド状遺構と炉跡を持つ。二重口縁の壺形土器が代表的な遺物である。東区第1号住居跡は出土土器から弥生時代中期後半に比定される。埋土から青銅鋤先片が出土した。弥生後期住居跡のうち西区第1・6・7号住居跡の3軒には、住居の外周の斜面下方に開く大きな溝をめぐらしている。排水溝として使用されたものであろう。この種の溝を伴う住居跡は、北九州ではまだ発見例が報告されていないが、大阪府高槻市の紅葺山遺跡では、丘陵の緩斜面に検出した4軒の弥生時代後期の方形住居跡にこの例が発見されている。(註1) 屋根裾と住居壁間の広さを知る上で1つの資料となり得よう。

古墳時代の住居跡は2軒検出された。第12・13号住居跡がこれでカマドが設けられており、出土遺物から6世紀後半の所産と考えられる。

第14号住居跡は、 $3.3m \times 2.9m$ の小さな住居跡である。カマドの支脚として利用された高杯、床面から出土の須恵器からみて奈良時代の所産と考える。柱穴は検出できなかった。第15・16号住居跡も平面プラン、カマド等からこれに属するものと考えられるが、出土遺物からは断定できない。いずれも7世紀後半～8世紀初頭の所産であろう。第17号住居跡は出土遺物がなく時期決定にはいたらない。

その他多数の柱穴状ピットが検出されて5棟の建物が想定された。いずれも出土土器が細片で時期は判断できない。ただ第5号掘立柱建物は、第6号住居跡と、第2・3号掘立柱建物は第7号住居跡と重複しており、その切り合い関係から、弥生時代後期以降のものである。

第10号住居跡床面から出土した、火葬墓は、蔵骨器に使用された須恵器短頸壺から奈良時代後期の所産である。

遺跡は、さらに北側の丘陵平坦部へ延びるものと思われる。各種遺構を検出した縦貫道路線の両側は、工業団地用地とされ、昭和51年度から発掘調査が行なわれる予定であり、この地域の各時代にわたる、居住地や、墓所の変遷が明確にされてくるであろう。

(池辺)

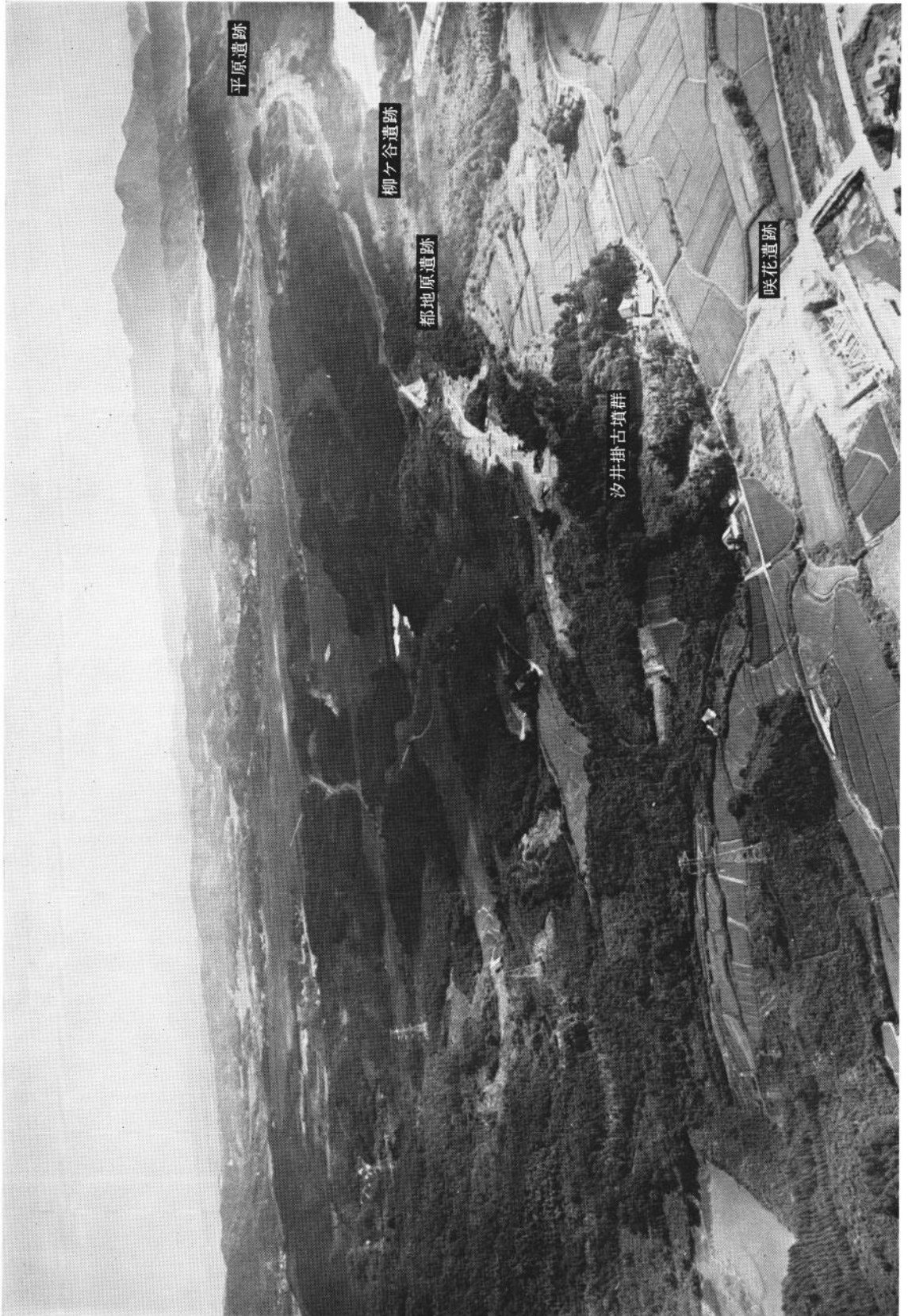
註1 紅葺山遺跡「高槻市史」第6巻 考古編 高槻市役所1973.6

PLATES

柳ヶ谷遺跡



柳ヶ谷・都地原遺跡航空写真



都地原・柳ヶ谷遺跡航空写真

(南西から)



(1) 柳ヶ谷遺跡航空写真(1)

(東南から)



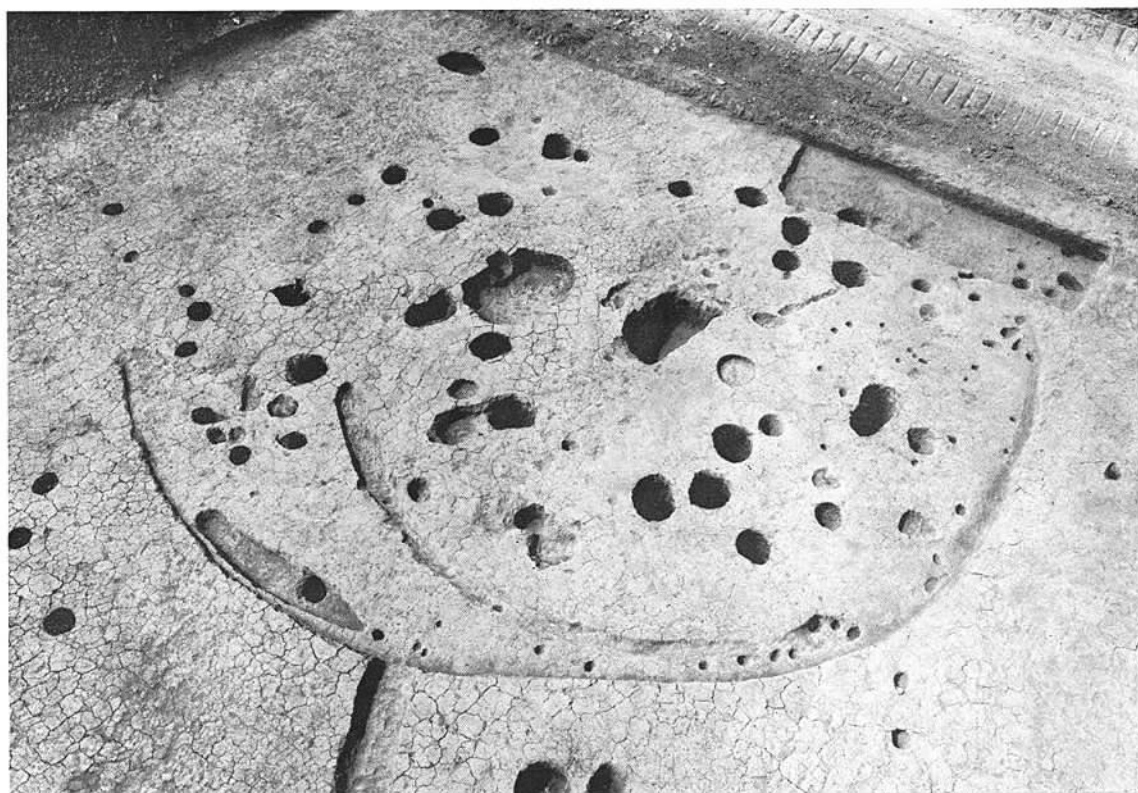
(2) 柳ヶ谷遺跡航空写真(2)

(南から)



東区全景

(西から)



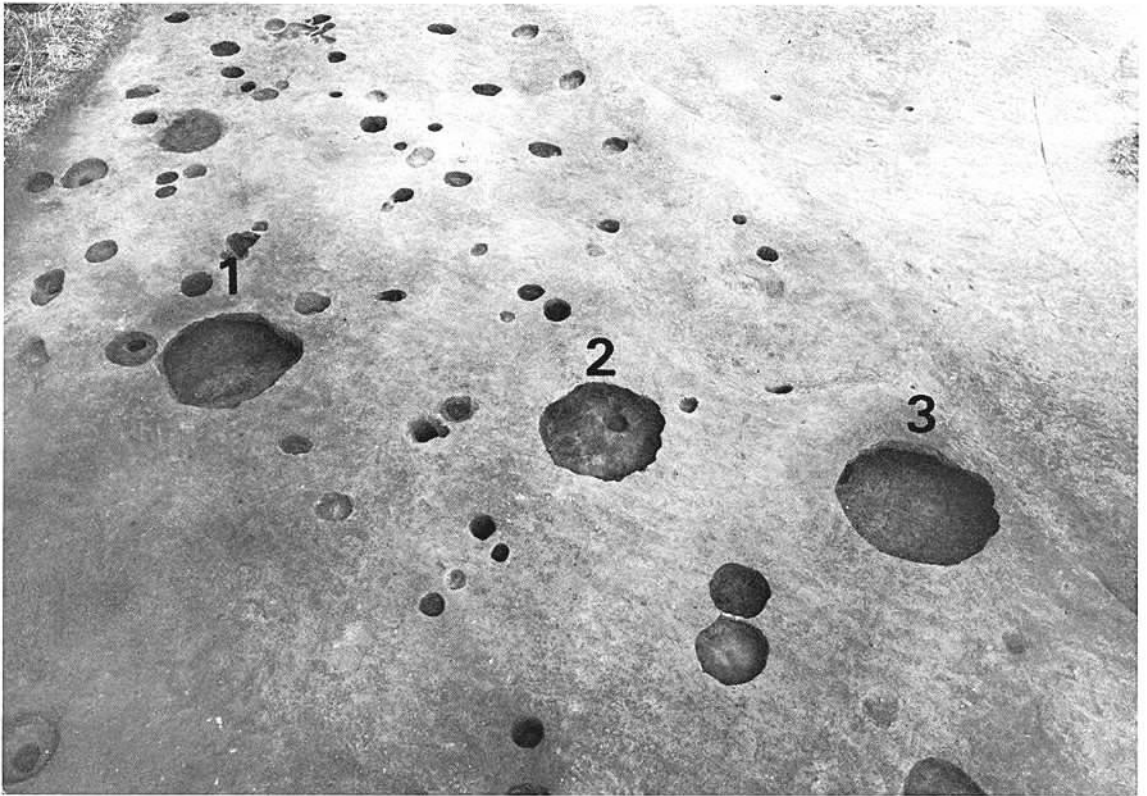
(1) 第1・2号住居跡

(北から)



(2) 第3号住居跡

(南から)



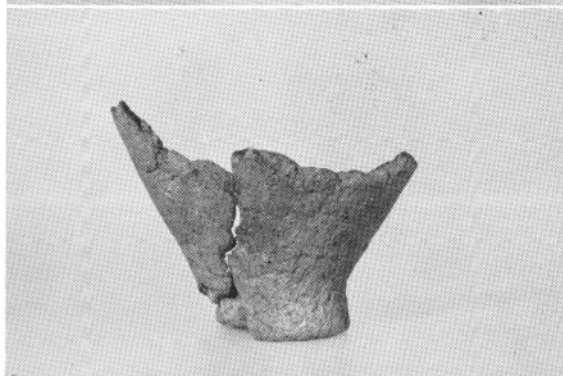
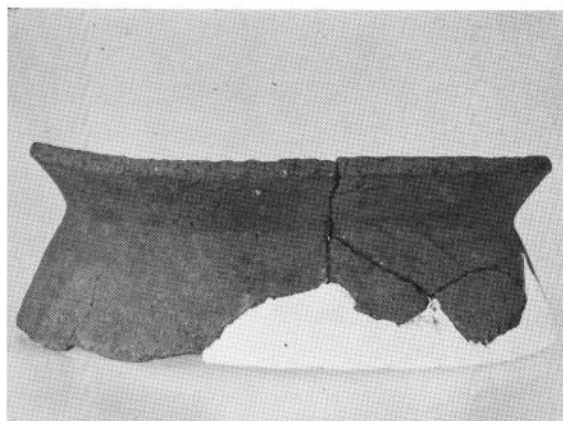
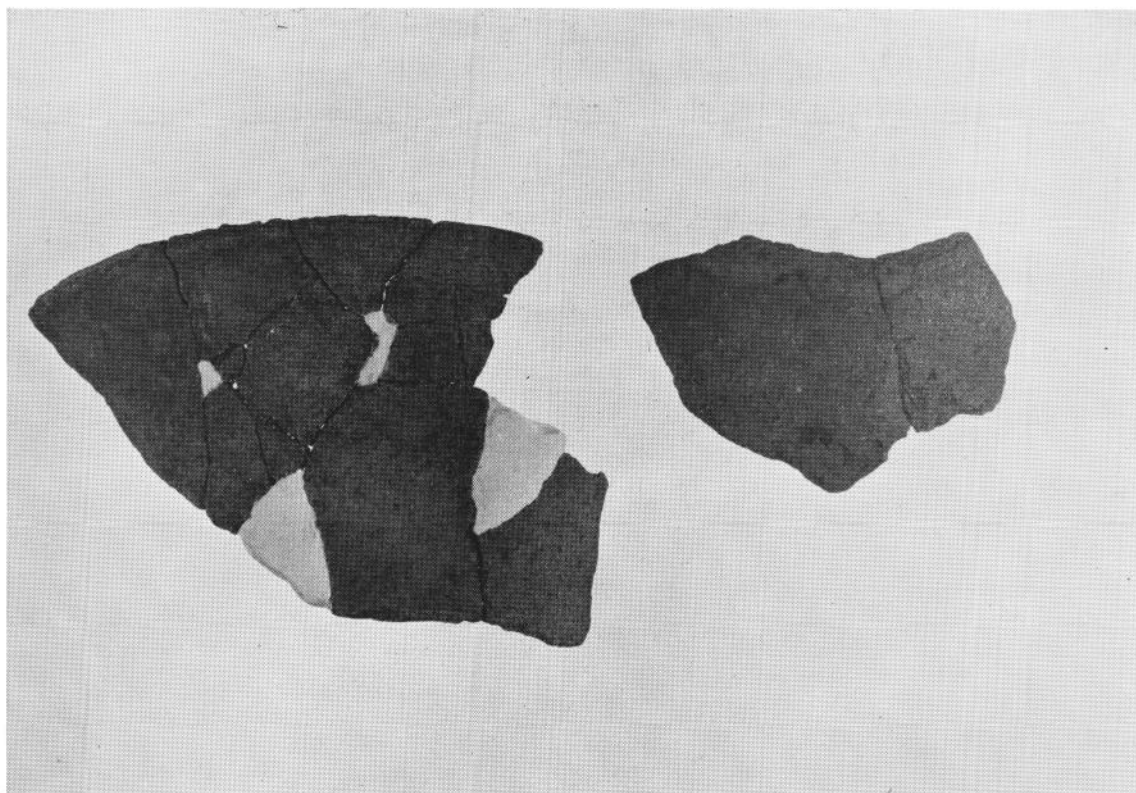
(1) 第1・2・3号貯蔵穴

(西から)

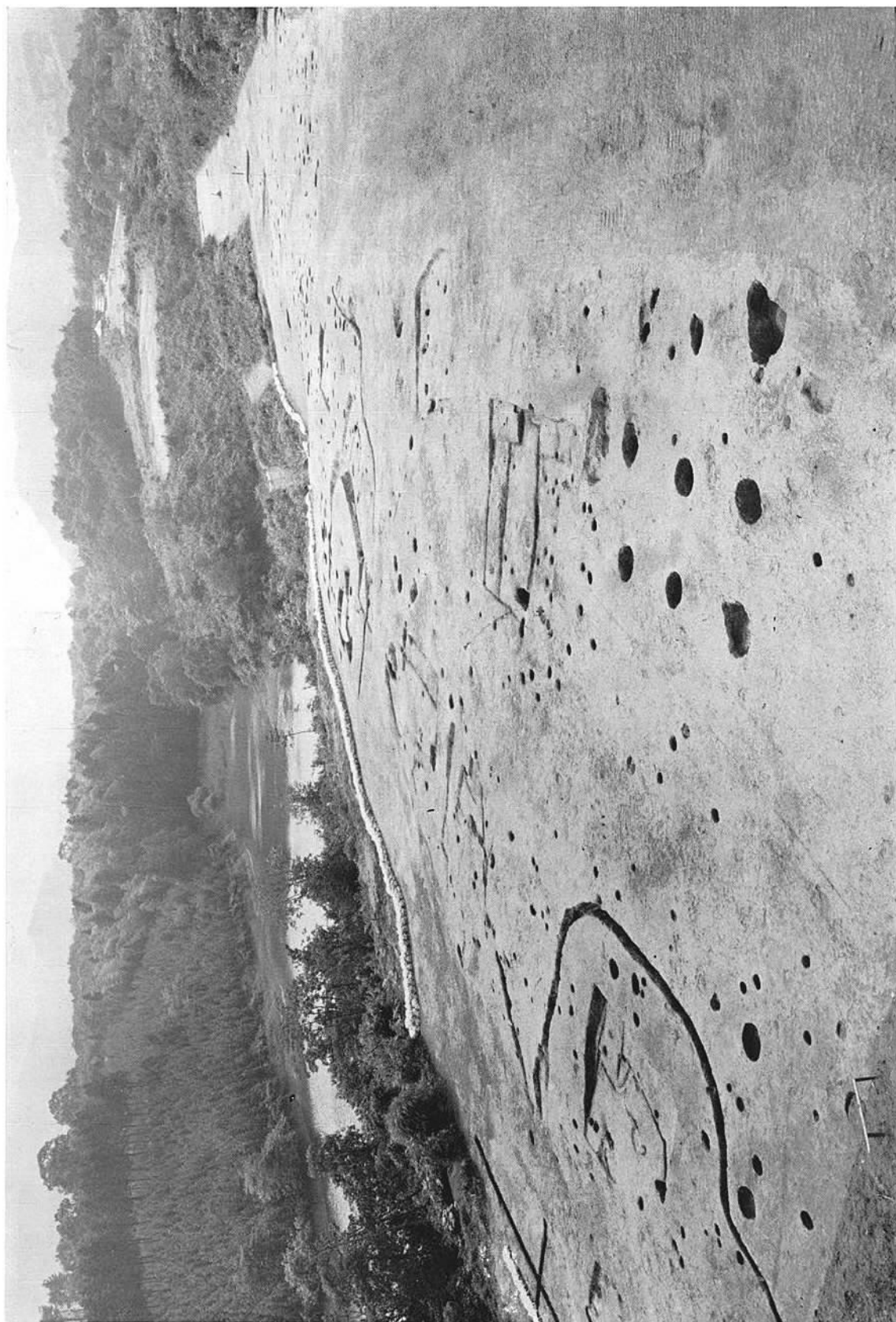


(2) 第1号貯蔵穴

(西から)



東区出土土器



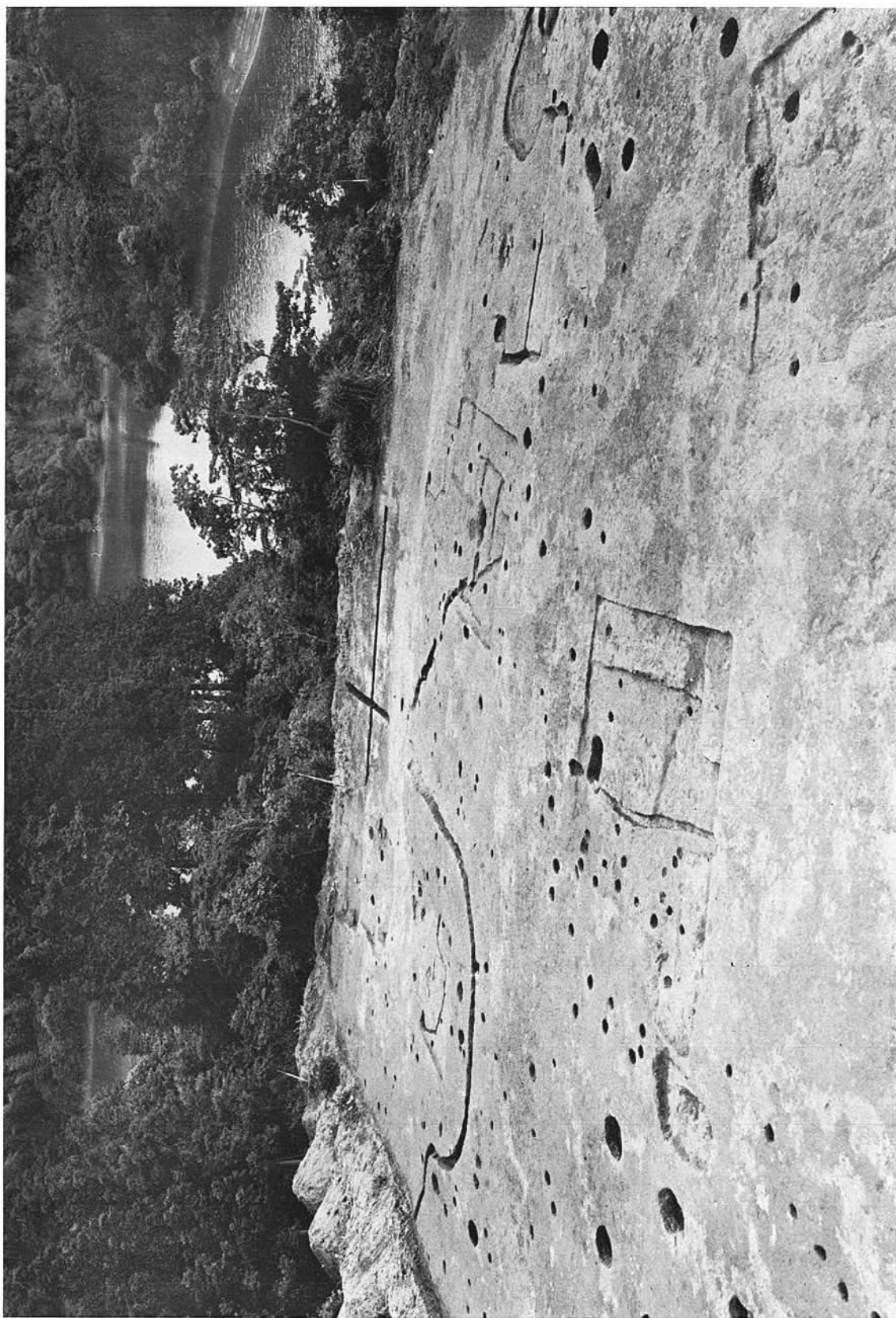
西区全景

(北東から)



西区全景

(南西から)



西区東半遺構の状況

(北から)



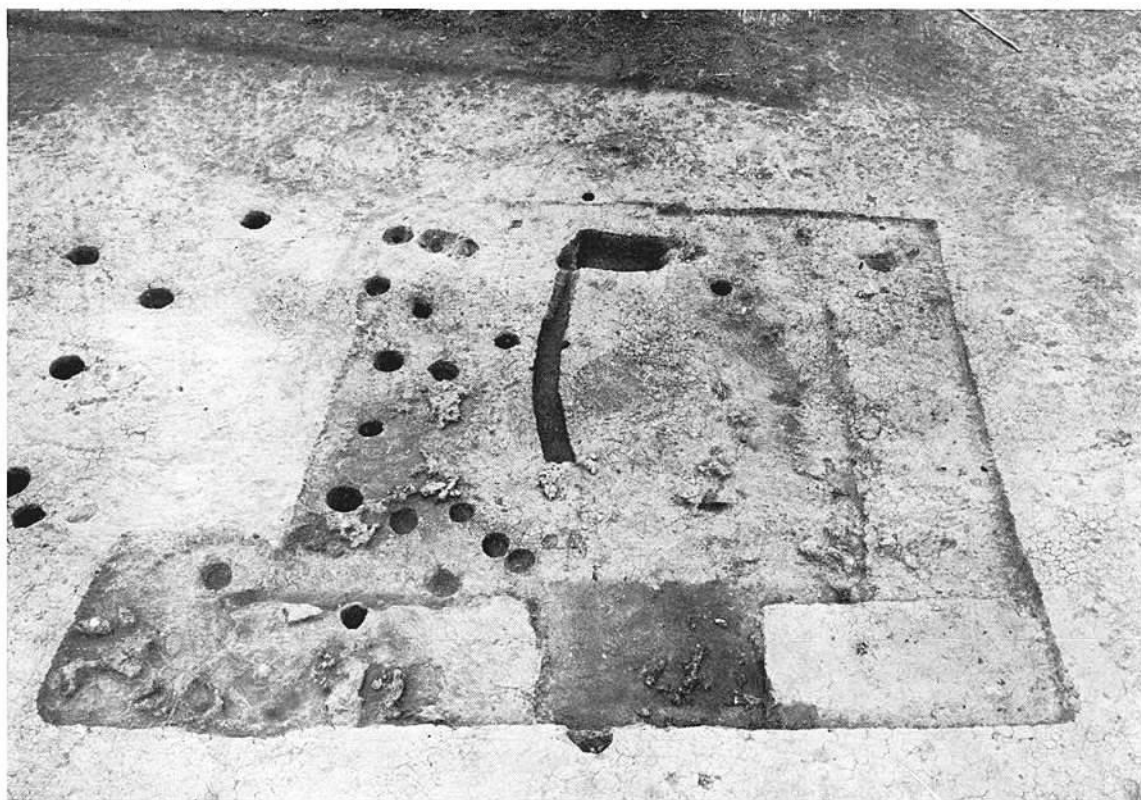
(1) 第 1 号住居跡 (1)

(北から)



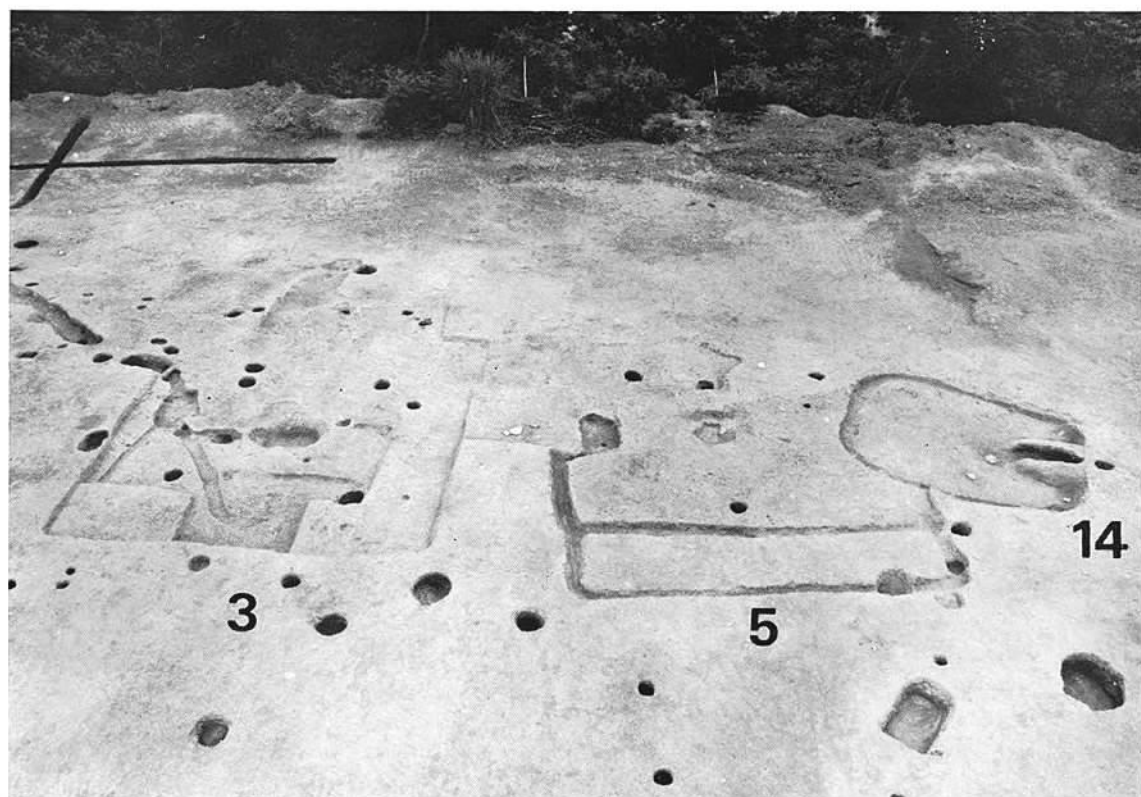
(2) 第 1 号住居跡 (2)

(北から)



(1) 第2号住居跡

(北から)



(2) 第3・5・14号住居跡

(北から)



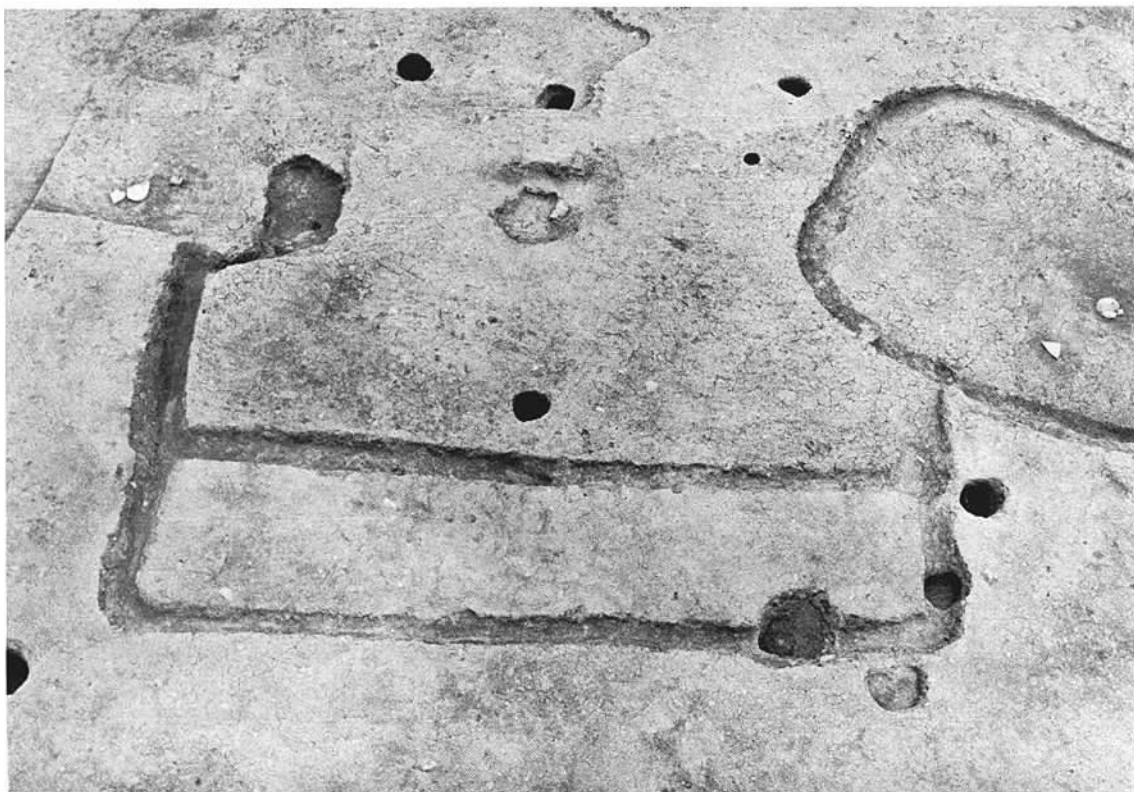
(1) 第3号住居跡

(北から)



(2) 第4号住居跡

(北から)



(1) 第5号住居跡

(北から)



(2) 住居跡群

(北西から)



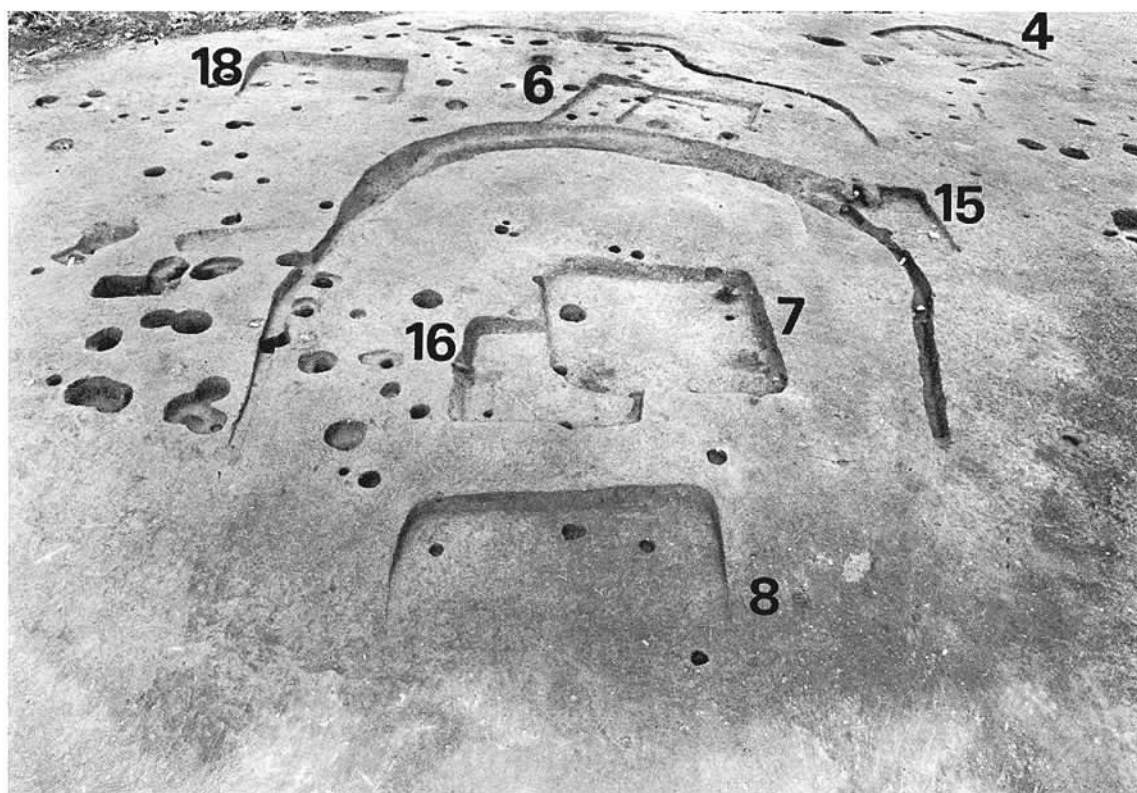
(1) 6号住居跡(1)

(北東から)



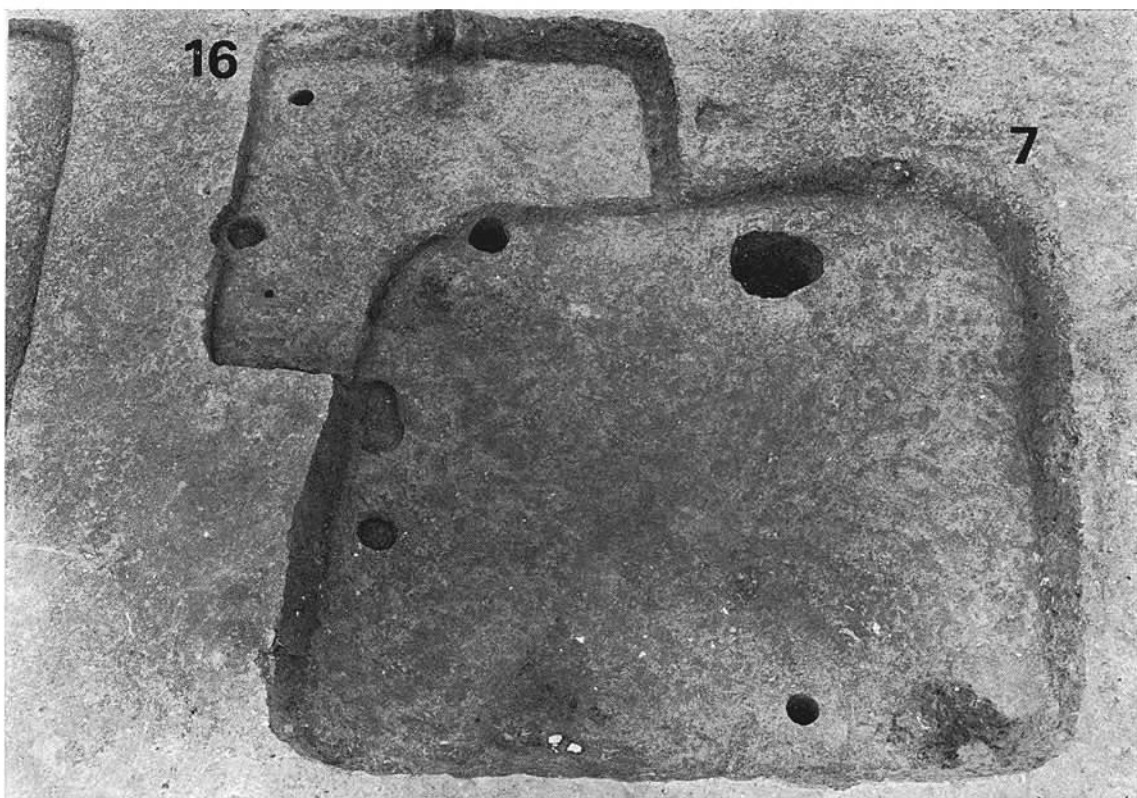
(2) 6号住居跡(2)

(北東から)



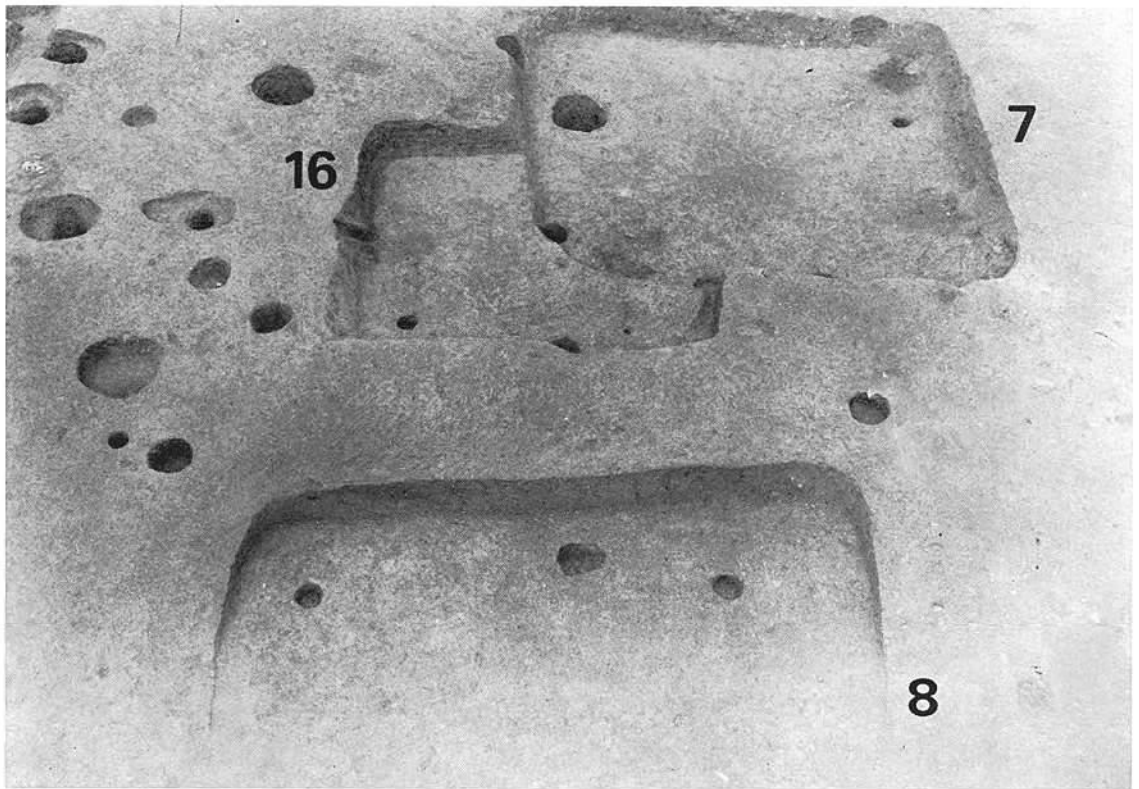
(1) 第7・8・16号住居跡

(南から)



(2) 第7・16号住居跡

(東から)



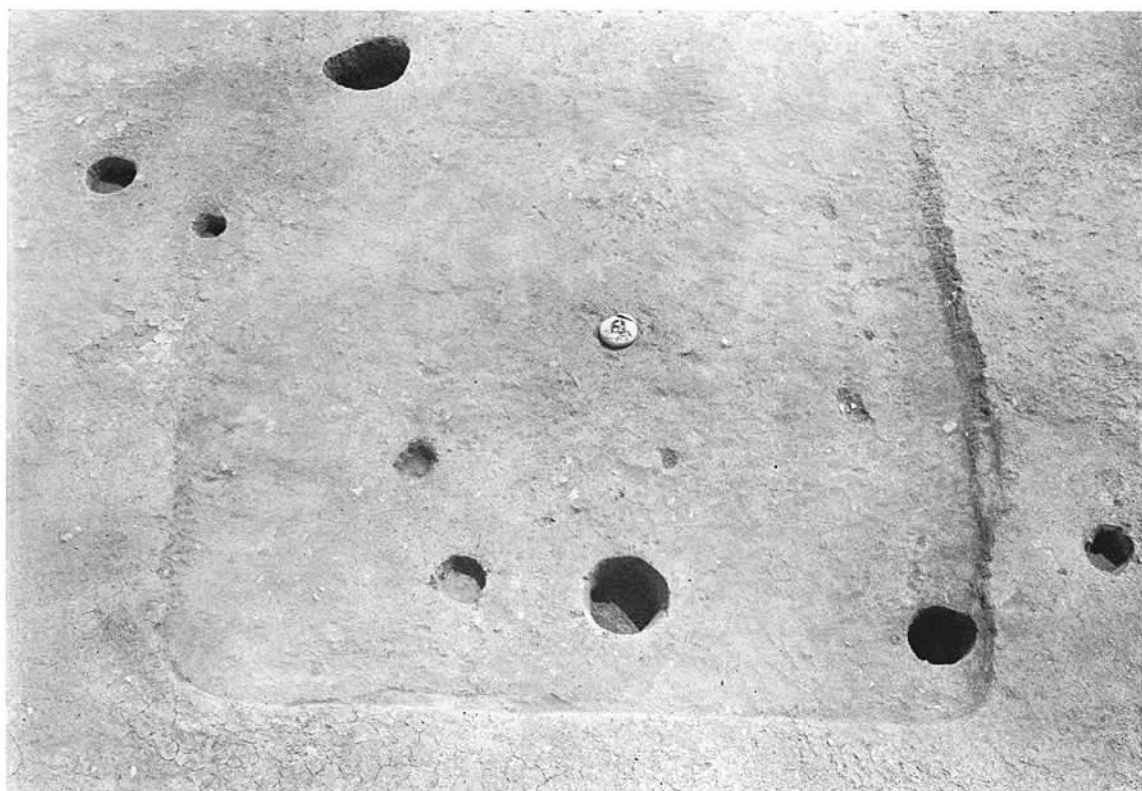
(1) 第7・8・16号住居跡

(南から)



(2) 第9号住居跡

(南から)



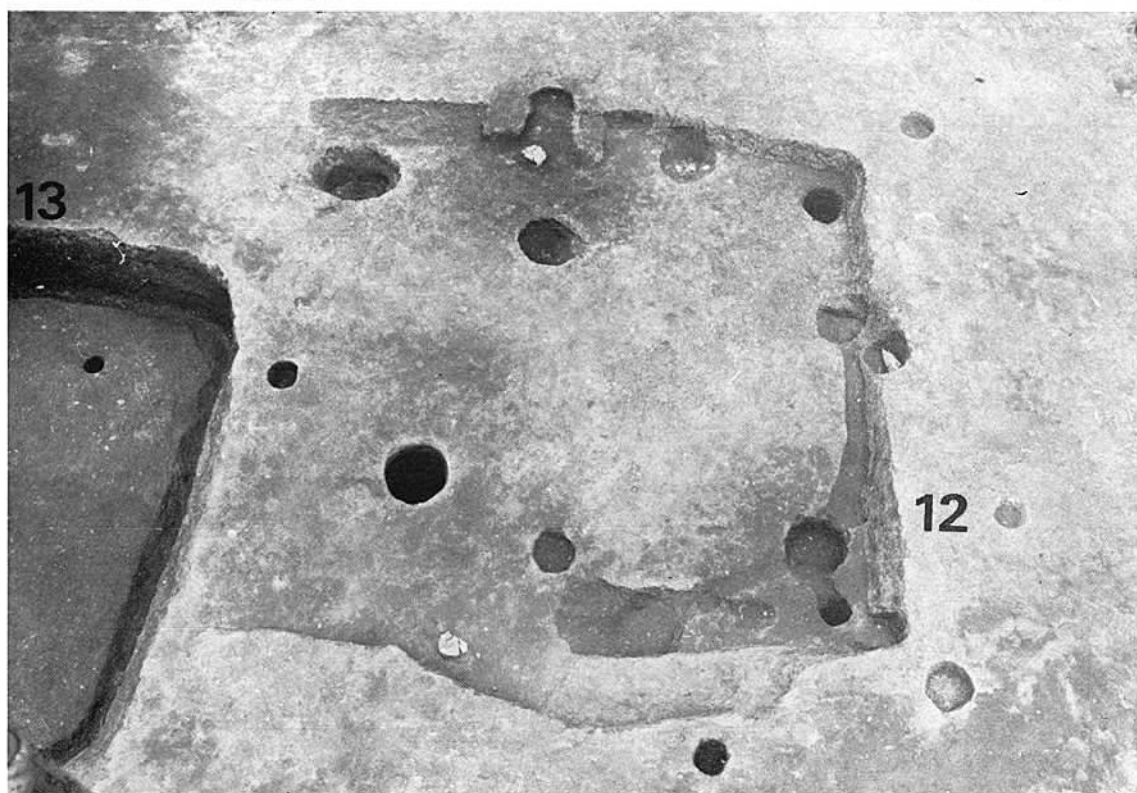
(1) 第10号住居跡

(北から)



(2) 第11号住居跡

(南から)



(1) 第12号住居跡

(東から)



(2) 第12号住居跡カマド

(東から)



(1) 13号住居跡

(西から)



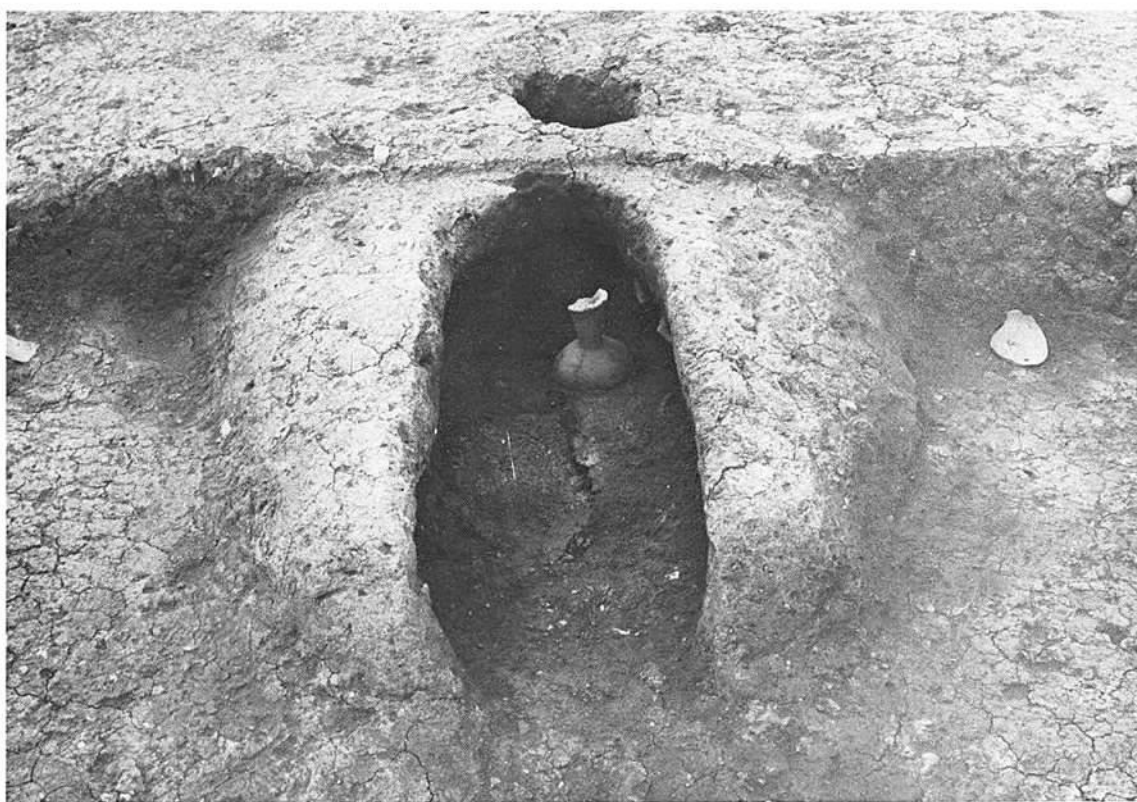
(2) 13号住居跡カマド

(西から)



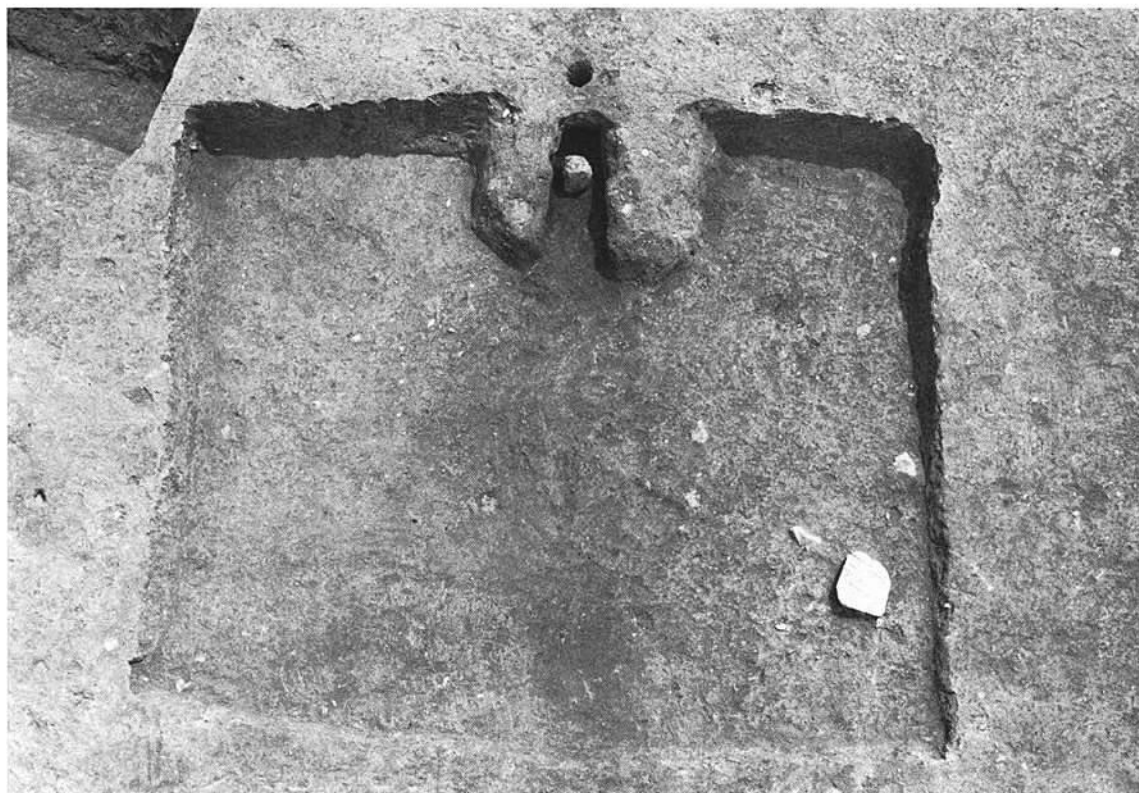
(1) 第14号住居跡

(東南から)



(2) 第14号住居跡カマド

(東南より)



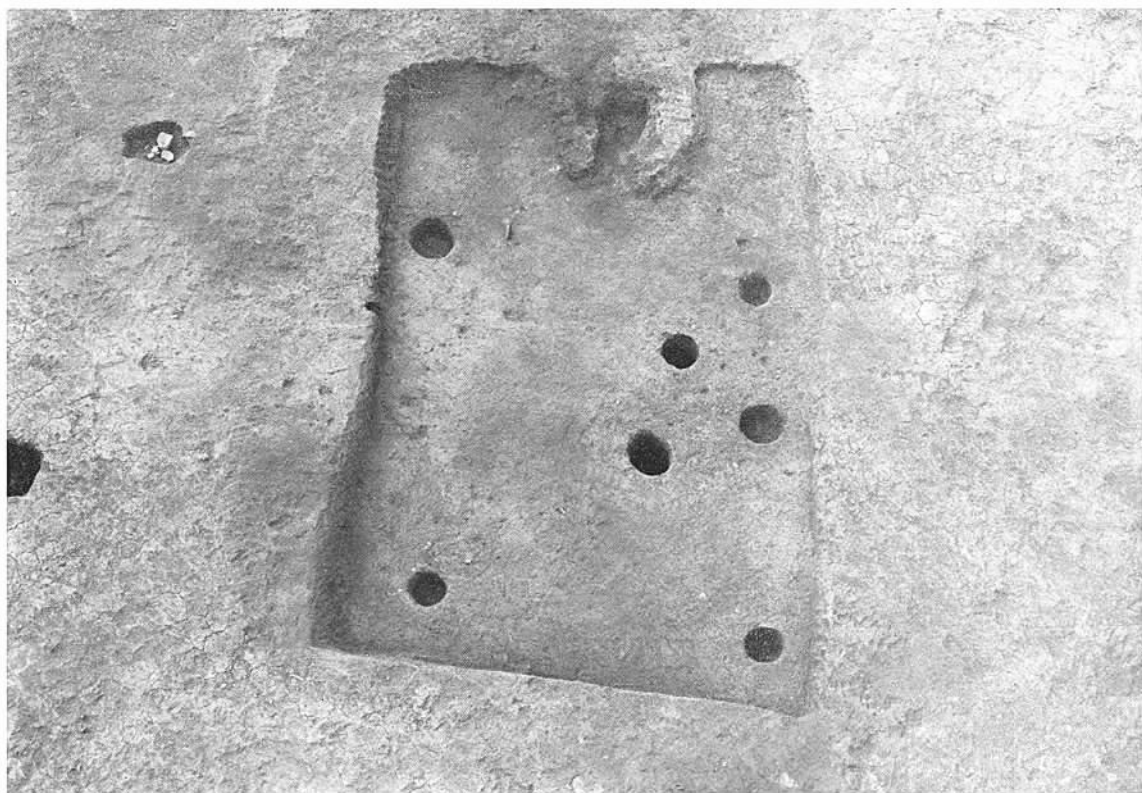
(1) 第15号住居跡

(南から)



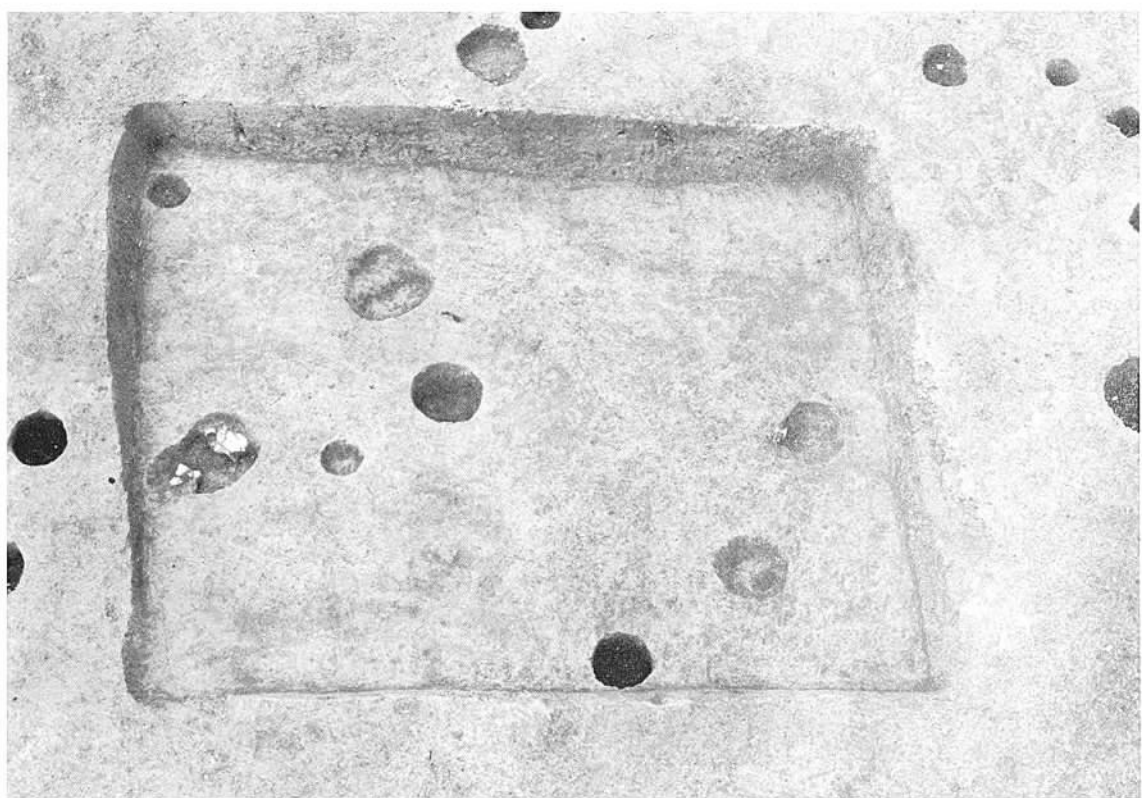
(2) 第15号住居跡カマド

(南から)



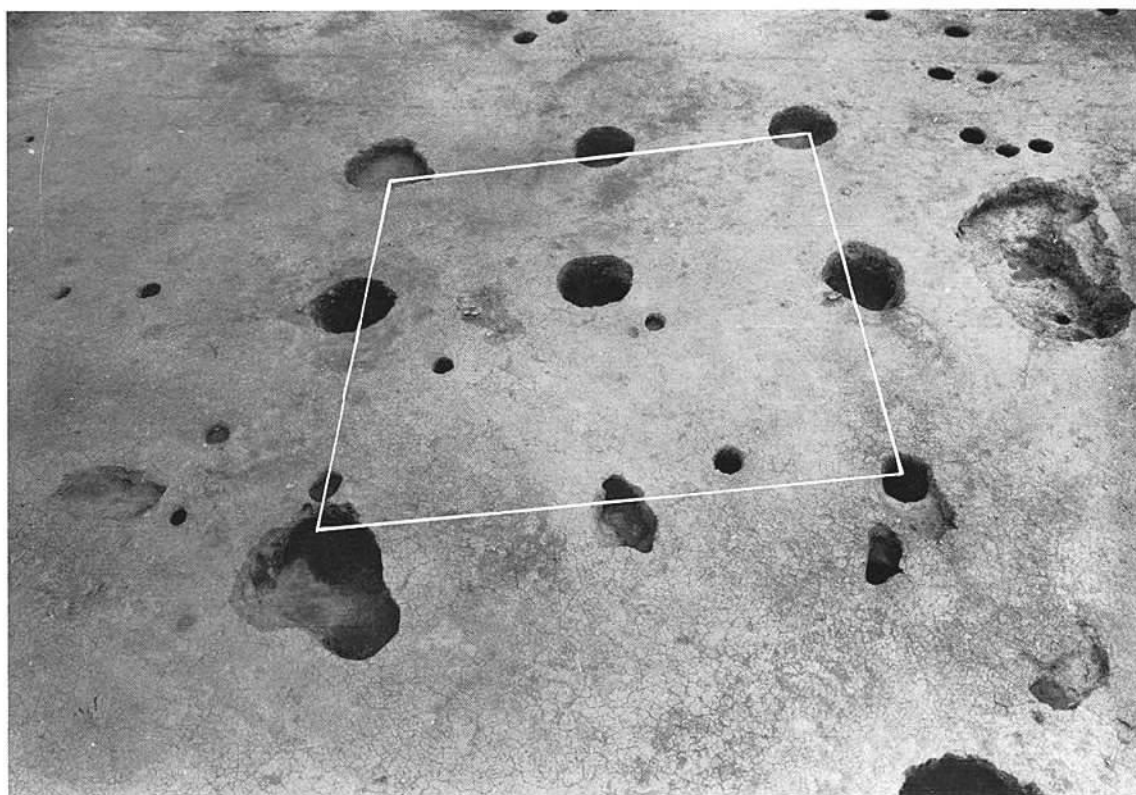
(1) 第17号住居跡

(北西から)



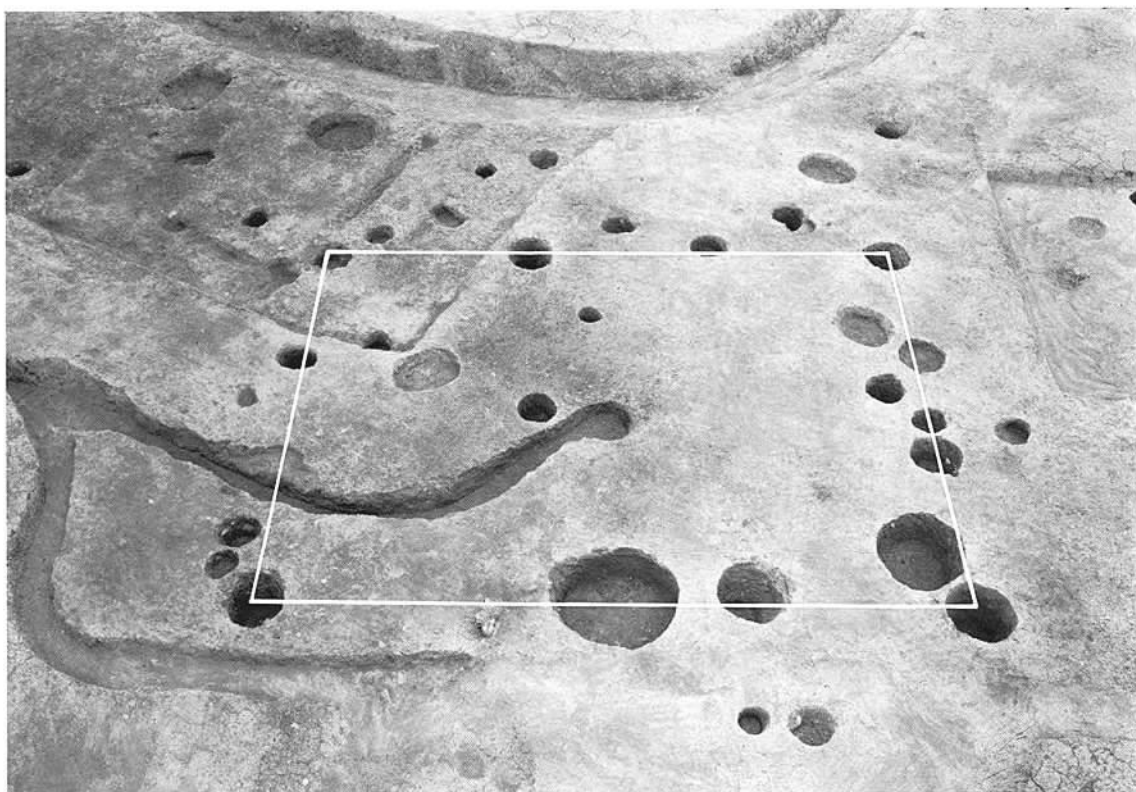
(2) 第18号住居跡

(南から)



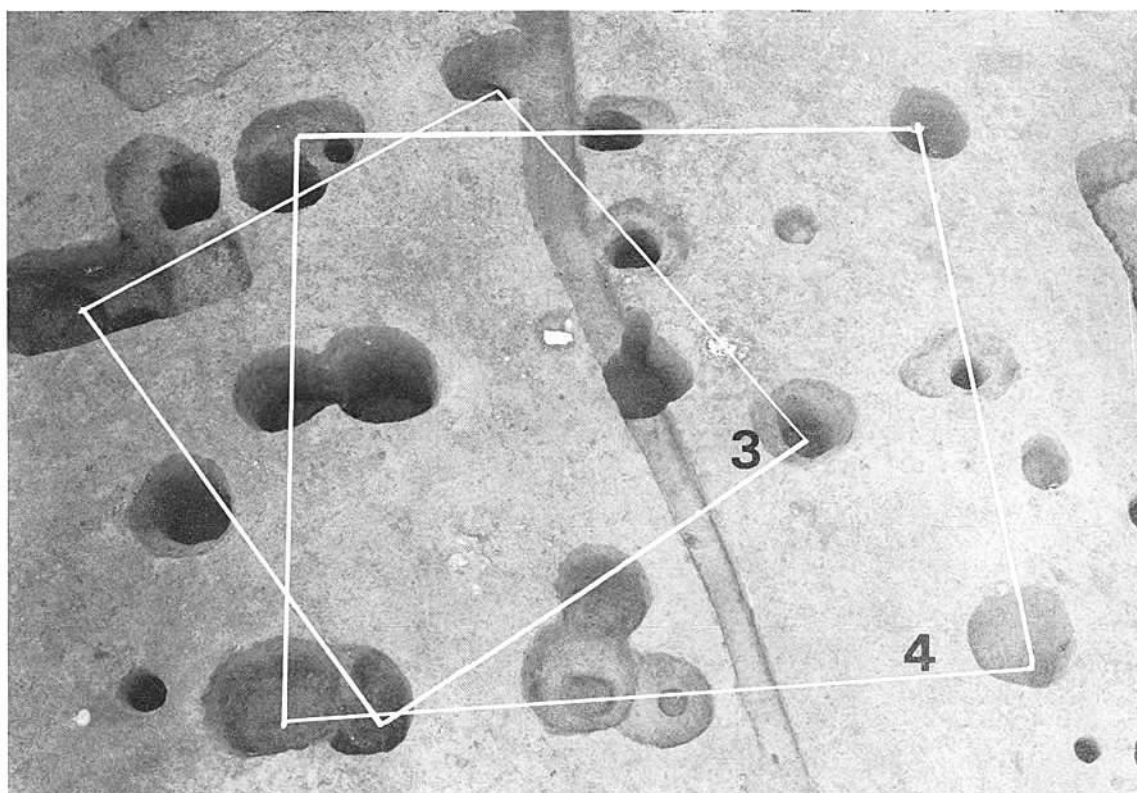
(1) 第1号掘立柱建物

(北から)



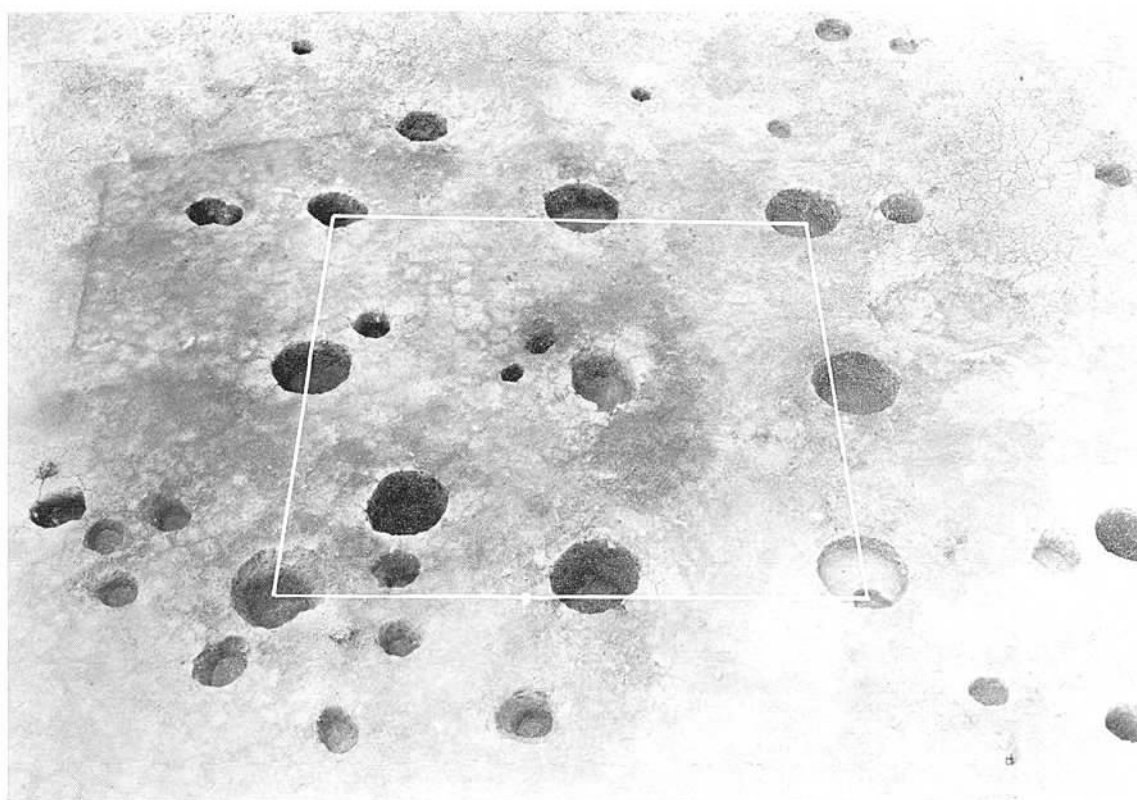
(2) 第2号掘立柱建物

(北から)



(1) 第3・4号掘立柱建物

(南から)



(2) 第5号掘立柱建物

(東から)

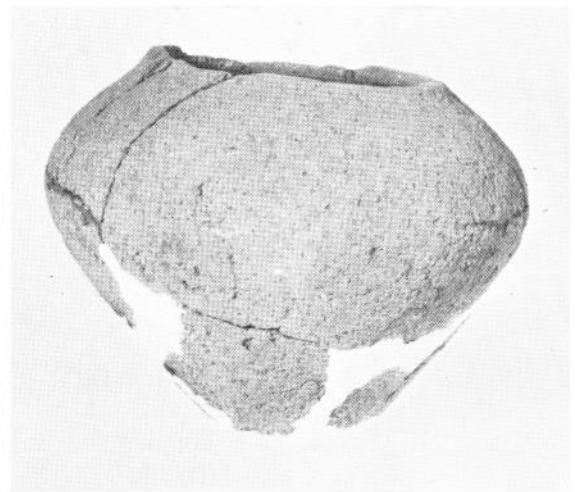
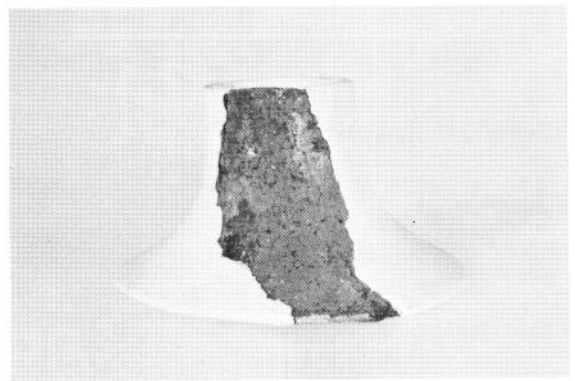
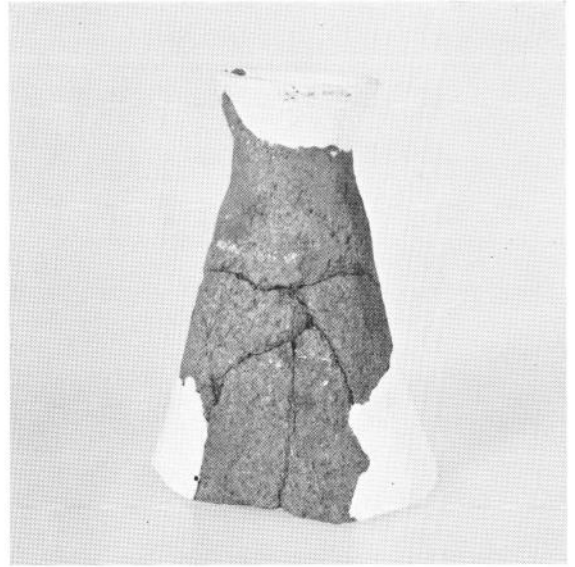
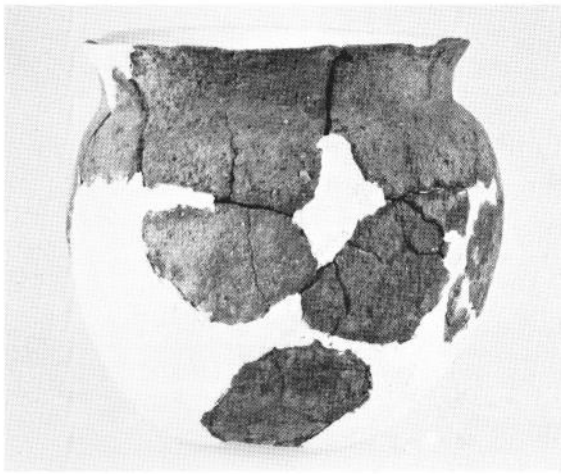
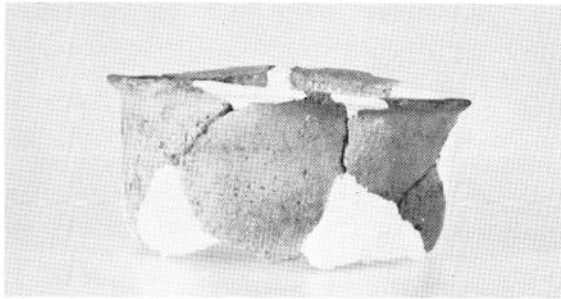
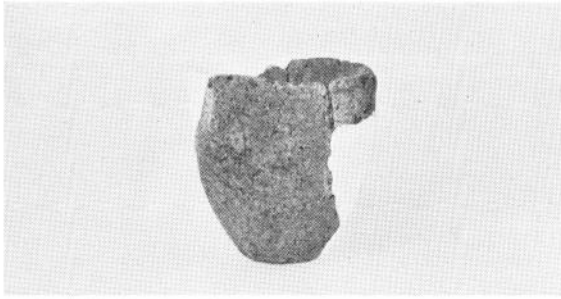


(1) 柳ヶ谷墳墓

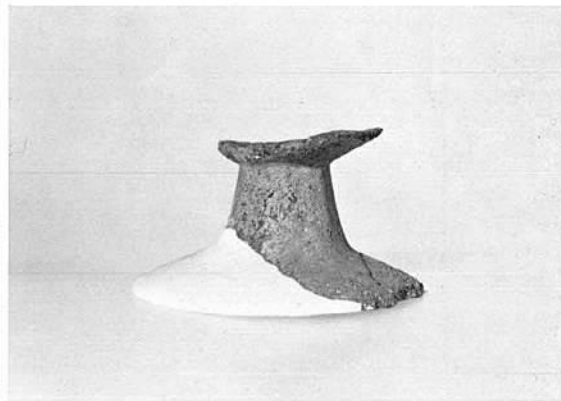
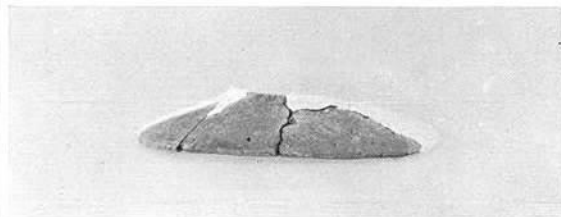
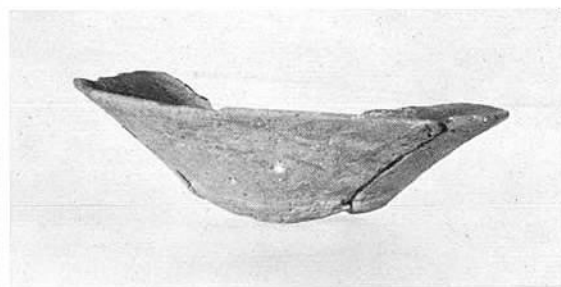
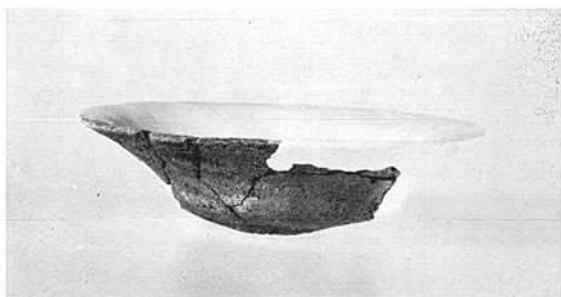
(北から)



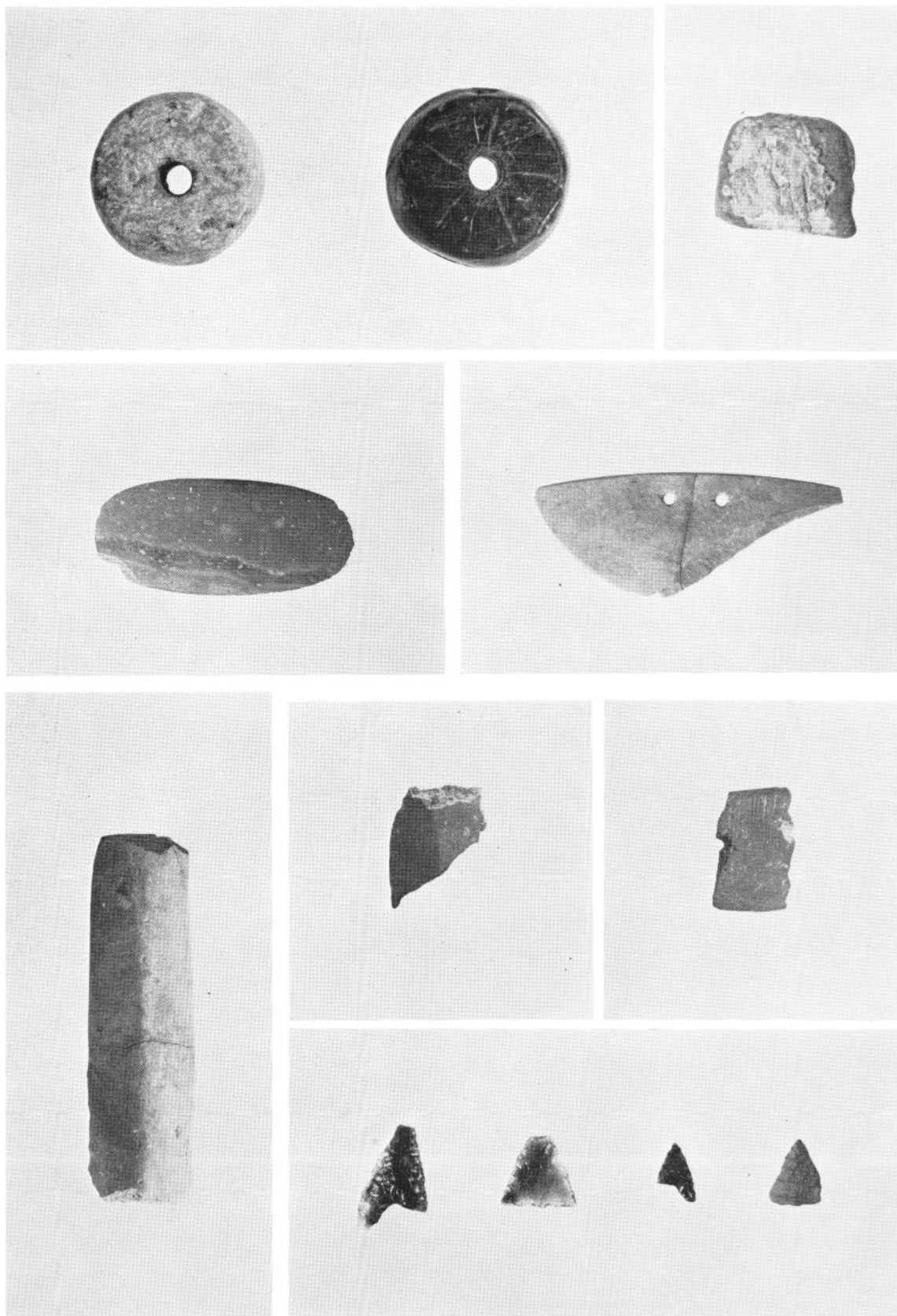
(2) 柳ヶ谷墳墓出土蔵骨器



西区出土土器



西区出土土器



柳ヶ谷遺跡出土石器・青銅器

V 都地原遺跡の調査

V 都地原遺跡の調査

1. 東区 の 調査 経過

都地原遺跡東区の発掘調査は、昭和49年8月5日から8月23日まで実施した。調査団は次のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	酒 井 仁 夫
	同	上 野 精 志
	同	池 辺 元 明
調査補助員		高 田 一 弘
		松 村 一 良
		伊 東 登 美 子
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	山 本 文 和
	嘱託	因 将 太

なお、この調査には地元在住各位の協力があつた。

以下、調査日誌によって経過をみてみよう。

8月5日 発掘器材を搬入し調査を開始する。柳ヶ谷遺跡とは谷をはさんだ西方70mに位置しており、当遺跡でも住居跡の存在が想定される。

8月6日 調査前の写真撮影を行ない全面発掘にとりかかる。表土は植林地であるために攪乱をうけている。ブルドーザーにより表土はぎを開始する。

8月7日 表土直下より須恵器片を採集する。午後遺跡の北側より第1号住居跡プランを確認する。

8月8日 第1号住居跡を発掘するとともに時代不詳の溝を掘る。

8月9日 第2号住居跡のプラン



Fig. 46 都地原遺跡発掘状況

を確認発掘を開始する。

8月10日 第2号住居跡内に貯蔵穴の存在が明らかになる。

8月12日 第2号住居跡完掘。第3号住居跡のプラン確認。

8月14日 第3号住居跡を完掘し、遺構の実測を開始する。東側端より9本柱建物、蔵骨器を検出する。

8月20日 9本柱建物の実測開始。

8月21日 遺構実測終了。さらに南側に向って調査範囲を広げたが遺構は確認できない。

8月22日 遺構確認面の地形図の作成を開始。

8月23日 地形実測を完了し調査を終了する。

2. 東区調査の内容

都地原遺跡東区は福岡県鞍手郡若宮町大字沼口にある。遺跡は遠賀川の一支流、犬鳴川の形成する若宮盆地の北端、標高296mの靡山南裾から東に派生する丘陵の南斜面に位置する。

標高は65~70m、水田面との比高は約25mを測る。同丘陵は小さな谷が入り込み、数多くの湧水点が存在し、弥生時代及び古墳時代の生活跡・墓跡が数多く発見されている。

東区は調査区全域に遺構の存在が予想された為、全面発掘を行なった。その結果、丘陵尾根沿いの南斜面に、住居跡3軒が、他に掘立柱建物1棟、蔵骨器1が検出された。(Fig. ①)

住居跡 (Fig. 47, PL. 44)

第1号住居跡 (Fig. 48, PL. 45-1)

本住居跡は調査区域の西隅で検出されたもので、丘陵尾根近くの南側斜面に位置する。緩傾斜面に位置するため、土砂の流出が著しく、住居跡の南側は存在しない。6.50×4.25 (+α)mの長方形を呈する住居跡で、主軸方位N10°Eを測る。現存壁高は北側壁下で約25cmを測る。東西両側壁に沿って幅1mの削出しベット状遺構を設けている。床面はほぼ平坦をなし、比較的良く締っている。床面中央には径約70cm、深さ約10cmの円形ピットが検出され、ピット内面は赤く焼けた痕跡が認められた。周溝は北側壁下を走り、東北隅の方形ピットを経て、床面南側中央の円形ピットに連なっている。周溝は幅10~20cm、深さ5~18cmで、周溝底のレベルは方形及び円形ピットに向って下る。柱穴は住居跡の中央主軸線上に2箇所検出された。径65~80cm、深さ60~70cmで、柱穴内の土層の変化により、柱間寸法は3.45cmを測り、柱には径15~20cmの丸木材を用いていると考えられる。

床面から2石、中央の円形ピット内から1石花崗岩の小角礫が出土したが、土器等の遺物は検出されなかった。



Fig. 47 都地原遺跡地形図 (縮尺1/1,000)

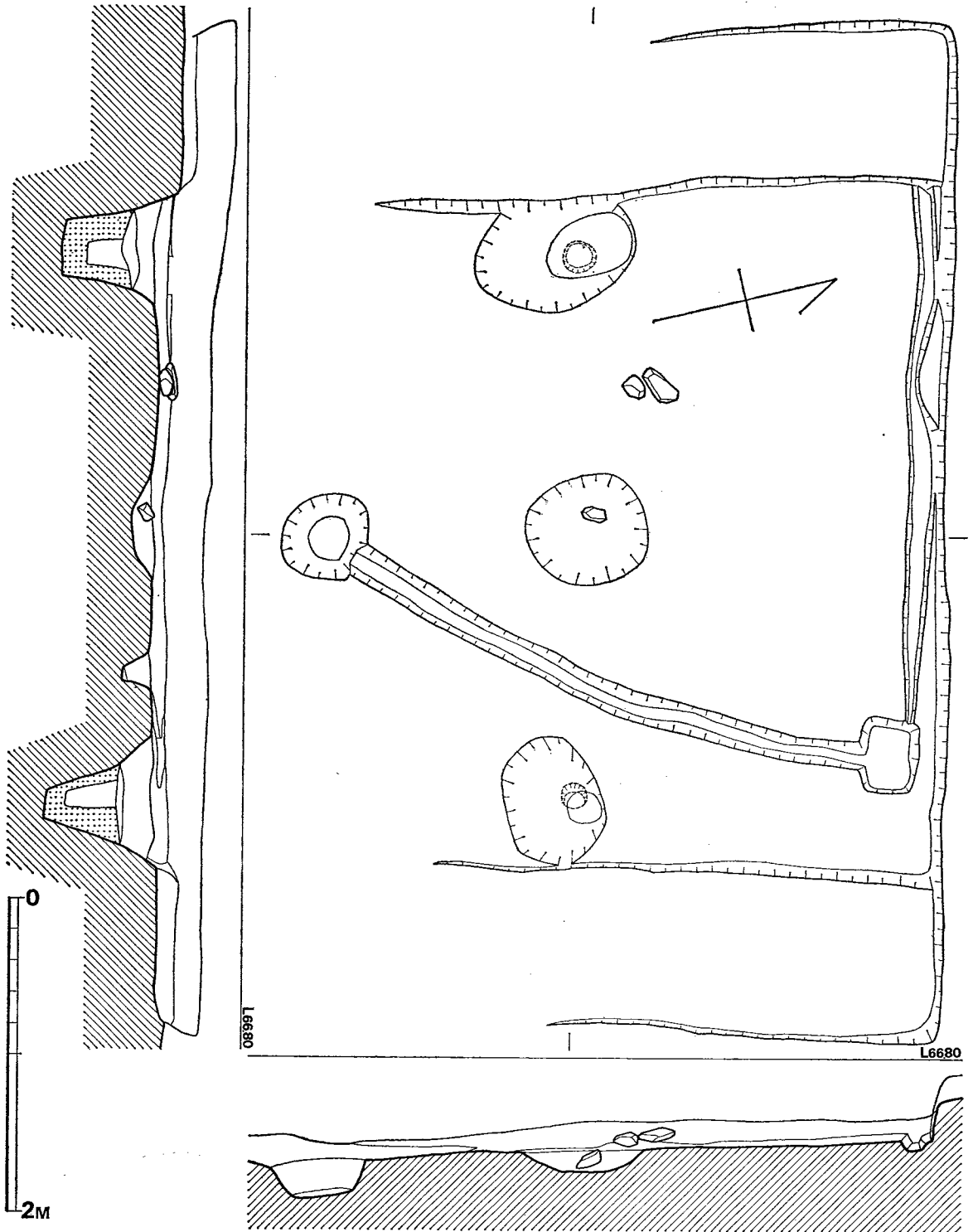


Fig. 48 第1号住居跡実測図 (縮尺1/40)

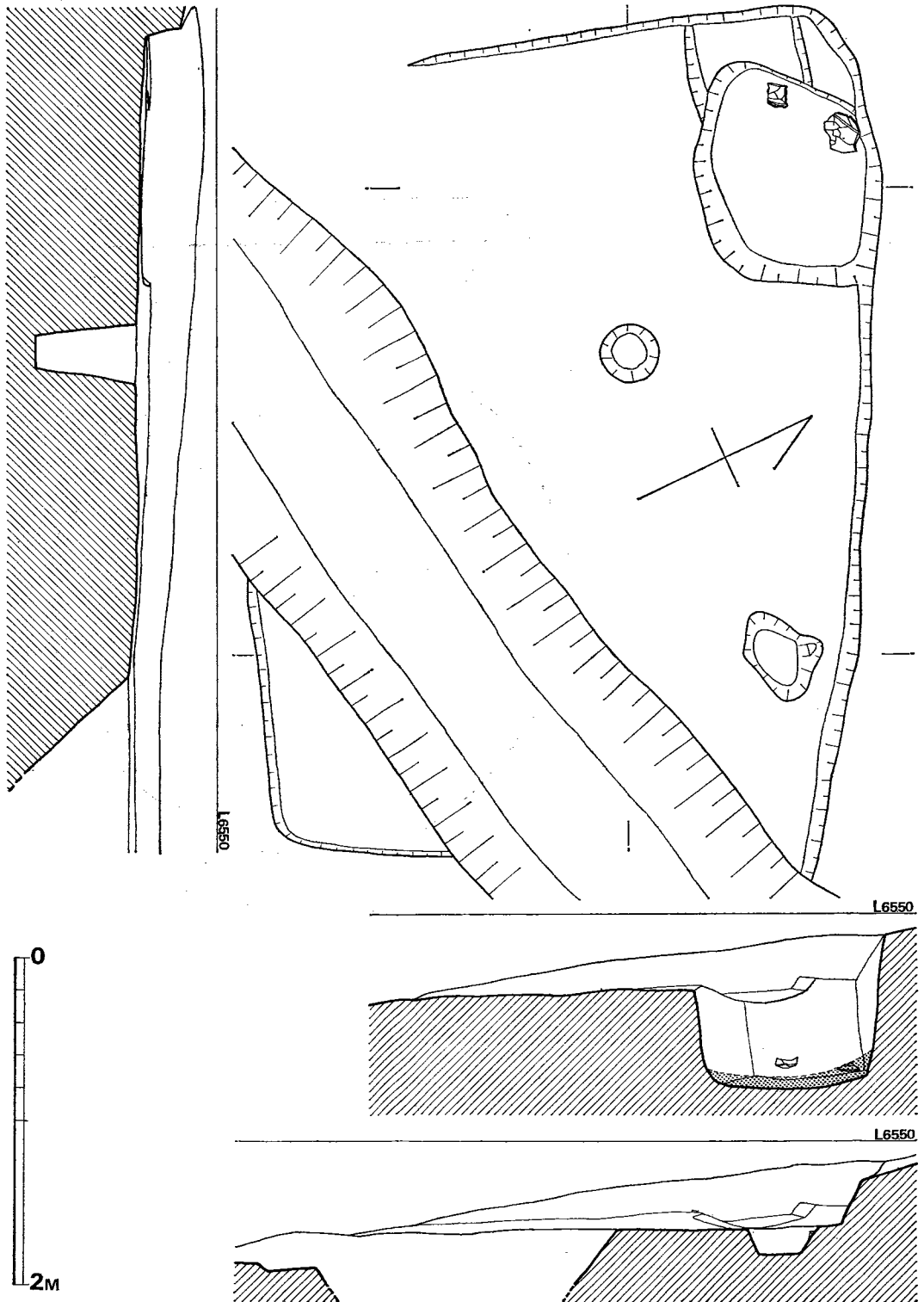


Fig. 49 第2号住居跡実測図 (縮尺1/40)

第2号住居跡 (Fig. 49, PL. 46)

第1号住居跡より東南方向に約10m離れて検出された。丘陵南側の緩傾斜面に位置するため、土砂の流出が著しく、住居跡の南半部の保存状況は悪い。5.50×3.70mの長方形を呈する。主軸方位はN29°Eを測る。住居跡南半部を後世の用水路によって切られている。壁高は北側壁下で約30cmを測る。床面は良く踏み固められており、平坦をなすが、やや南側壁方向に傾斜する。床面北西コーナー寄りには、1.35×1.20m、深さ65cmの長方形を呈する貯蔵穴が検出された。貯蔵穴床部には厚さ20cmの白色粘土層が認められ、同粘土層上面から壺形土器片が出土した。床面からピットが二箇所検出されたが、柱穴としては中央寄りのピットが考えられる。

出土遺物 (Fig. 49)

壺形土器で、胴部はやや楕円形気味で、最大径部に貼付けの刻目「コ」の字突帯を一条巡らしている。底部は丸底気味の平底になると思われる。器面の荒れが著しいが、頸部外面及び胴部内面に僅かながら刷毛目調整の痕跡が認められる。胎土に多量の粗い砂粒を含み、焼成は不良、黄褐色を呈する。胴部最大径(復元値)33.4cmを測る。

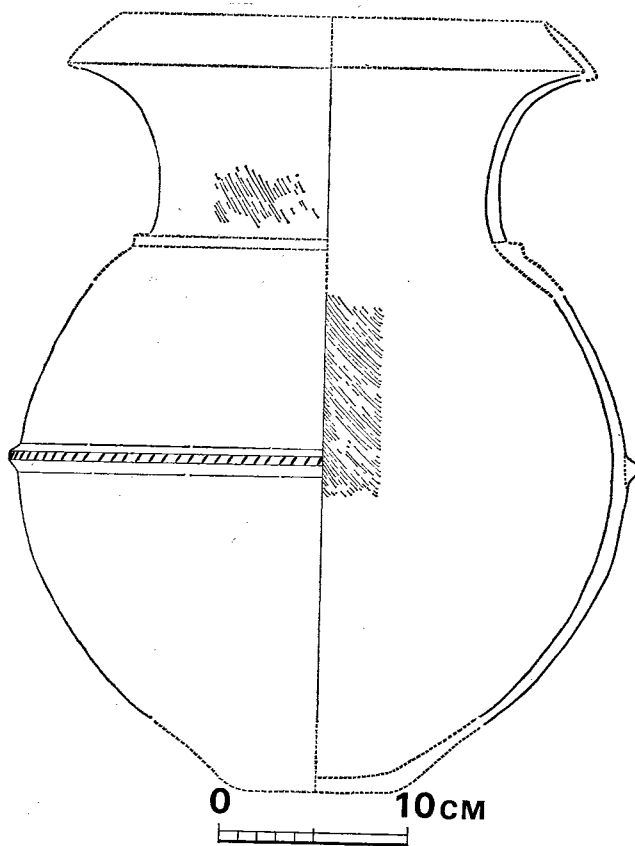


Fig. 50 第2号住居跡内貯蔵穴出土土器実測図(縮尺1/4)

胴部最大径(復元値)33.4cmを測る。

第3号住居跡 (Fig. 51, PL. 45-2)

調査区のはほぼ中央に位置し、第1・2号住居跡と同様に緩傾斜面に位置するため、住居跡南側の残りは悪い。5.20×4.55mの隅丸方形を呈し、主軸方位はN70°Wを測る。現存壁高は北側壁下で約45cmを測る。西側壁下を幅20~75cm、深さ5~10cmの周溝が巡る。西側壁中央には須恵器・土師器・混入灰黒褐色粘土による貼付けのカマドを設けており、周溝はカマド下のみ埋められていたものと考えられる。カマドは奥行き105cm、幅95cm、焚口幅50cm、床面からの高さ20(+α)cmを測る。カマド内には焼土層が認められ、花崗岩角柱1石が立っていた。ま

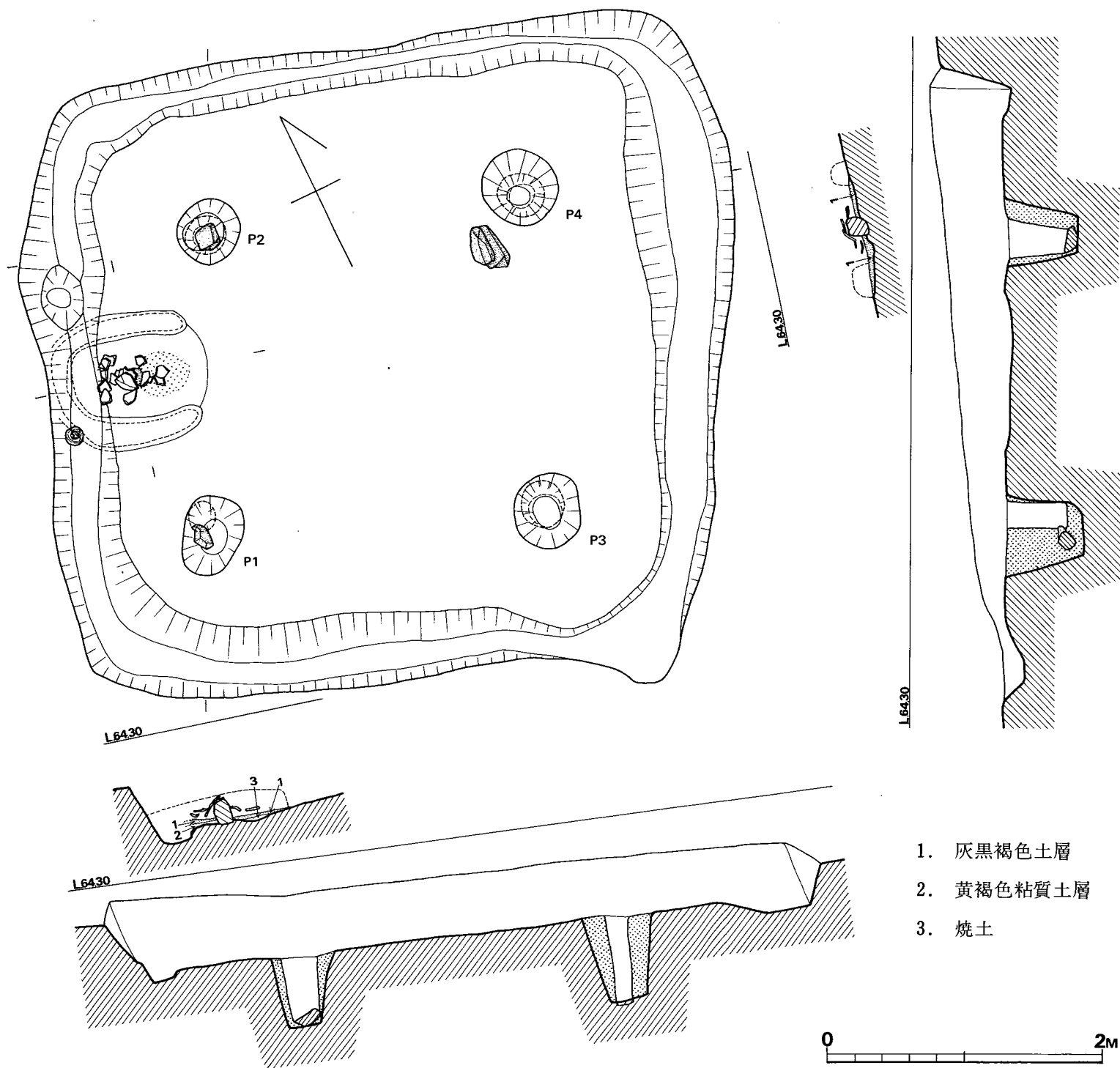


Fig. 51 第3号住居跡実測図 (縮尺1/40)

た、土師器片等が落ち込んでいた。主柱穴は4本で、カマド側2柱穴から根石または根固めの石と思われる花崗岩角礫が各1石が検出された。柱間寸法はP 1～P 2は2.04m、P 1～P 3は2.50m、P 2～P 4は2.30m、P 3～P 4は2.25mを測る。P 4寄りの床面から砂岩2石が検出された。遺物は主にカマド周辺から土師器・須恵器が検出された。

出土遺物

須恵器 (Fig. 52—1—5)

杯蓋 (1・2) 1は天井部と体部の境に鈍い段を有しており、口縁部外面は垂直に立つ。天井部には広い範囲にヘラ削りが施されている。胎土に粗い砂粒を含むが、焼成は良好、淡灰色を呈する。口径12.1cm・器高4.6cm。2は天井部を欠くが、丸味をもって体部に続く。精良な胎土を用

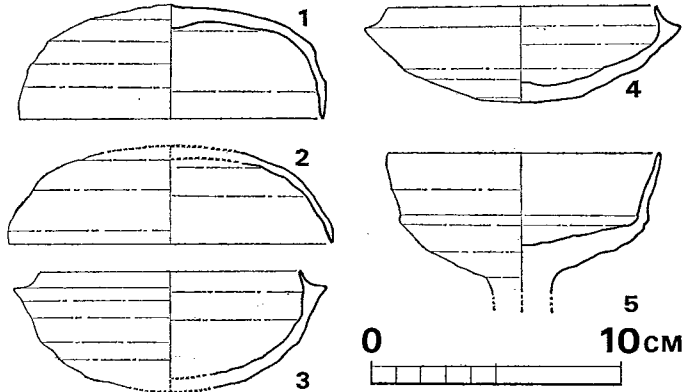


Fig. 52 第3号住居跡出土土器実測図④ (縮尺1/3)

いており、焼成は良好である。青灰色を呈し、口径12.8cm、器高(復元値)3.8cmを測る。

杯身 (3・4) 立上り0.6～0.8cmと短く、内傾する。3は体部が大きく内反気味に立上る。4の体部は丸味をもつが、全体的に扁平化している。口径10.3～10.7cm、最大径12.4～12.6cm。いずれもカマド直上から出土。

無蓋高杯 (5) 杯部の底部と体部の境に段を有する。口唇部は丸くおさめる。色調は淡灰色を呈し、焼成は不良である。脚部を欠失する。杯部口径11.0cm。

1は床面、2は北壁側周溝内、3・4はカマド上面、5はカマド下周溝からの出土である。

土師器 (Fig. 53)

椀 (1・3・7) 1は口径13.9cm、器高4.9cmを測る。底部は非常に薄く、底部外面には手持ちのヘラ切り痕を残す。胎土は精良で、赤褐色を呈し、焼成は良好。3は底部からゆるやかに内反しながら立上がり、口縁端部は丸く仕上げている。内外面ナデ調整。焼成不良。口径17.4cm器高8.4cmを測る。7は底部を欠失する。口径9.5cm。

甕 (4) 4は口縁部が短く外反し、胴部の若干のふくらみを残し、丸底へ続く。器面の荒れが著しく、わずかながら胴部外面に刷毛目調整痕及び煤の付着が認められる。茶褐色を呈し、焼成不良。口径17.1cm。

埴 (2) 2は短く直口気味に外反する口縁部をもち、器壁は薄く整形する。胴部下半か欠失する。器面の荒れが著しく、調整は不明である。暗赤褐色を呈し、胎土、焼成ともに不良。口

径9.8cm, 胴部最大径10.6cmを測る。

壺(5) 5は胴部中ほどより以下を欠失する。丸味をもつ胴部のみ縦方向の刷毛目調整, 他は横なで調整。胎土, 焼成ともに良好。赤褐色を呈し, 口径22.5cmを測る。

甗(6) 6は胴部はやや開き気味に立上がり, 口縁端部は丸味をもつ。把手部は荒いヘラ削り痕を残す。内面は縦なで調整, 外面は胴部上半部が刷毛目調整, 胴部下半部がヘラ削りで仕上っている。胴部外面には煤の付着が認められる。胎土は砂粒を含み粗いが, 焼成は良好で赤褐色を呈す。口径(復元値) 30.3cmを測る。1・4は床面, 2・3はカマド周辺床面, 5・6はカマド, 7は柱穴内よりの出土である。(松村一良)

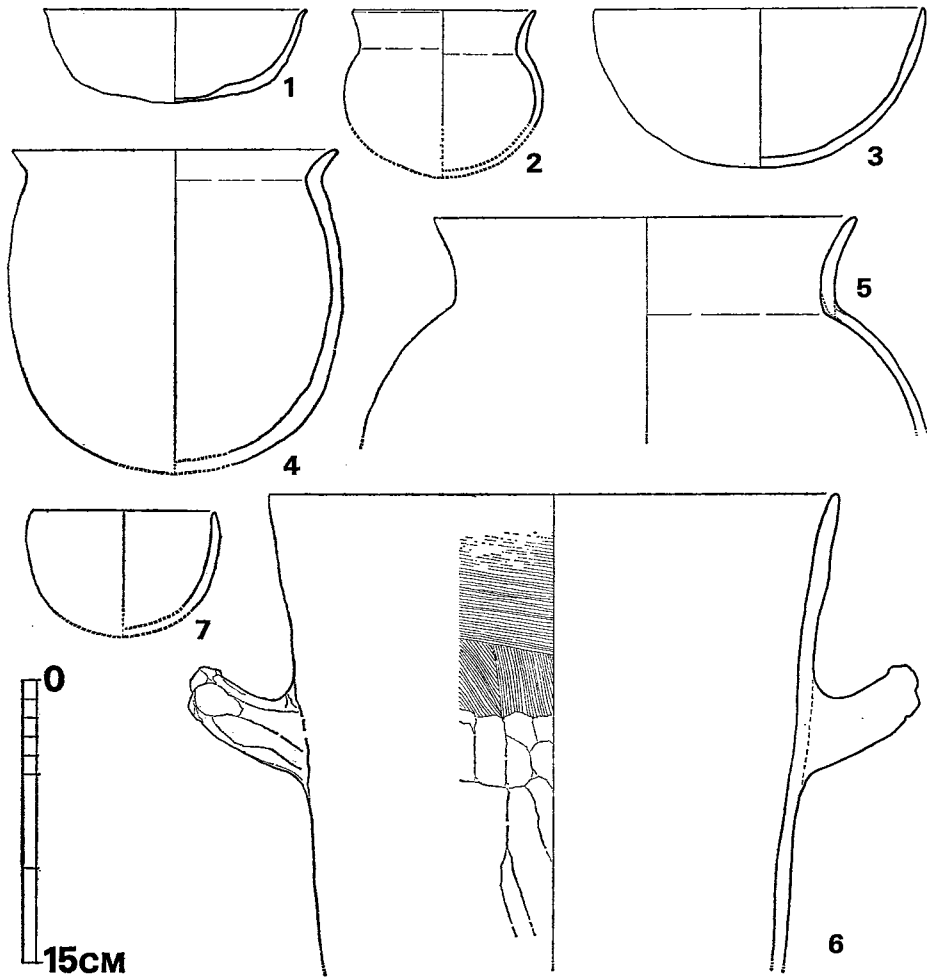


Fig. 53 第3号住居跡出土土器実測図 ② (縮尺1/4)

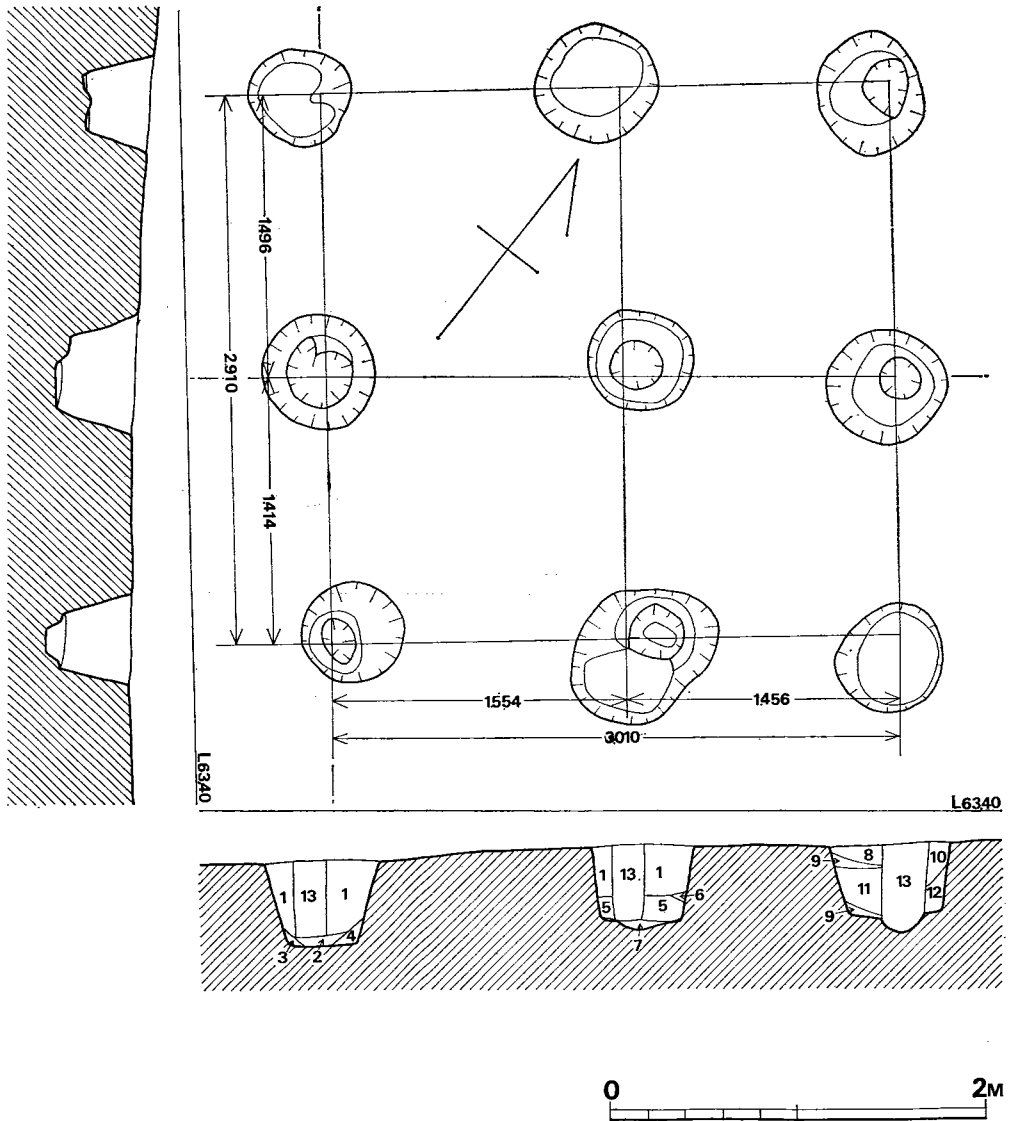


Fig. 54 第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

- | | | | |
|------------|---------------|------------|------------|
| 1. 黄褐色土 | 2. 灰褐色粘質土 | 3. 黄褐色粘質土 | 4. 赤褐色粘質土 |
| 5. 赤黄褐色粘質土 | 6. 黄斑赤褐色粘質土 | 7. 暗黄褐色土 | 8. 黒褐色土 |
| 9. 赤褐色土 | 10. 炭化物混入黄褐色土 | 11. 黄斑黒褐色土 | 12. 赤斑黒褐色土 |
| 13. 暗褐色土 | | | |

第1号掘立柱建物 (Fig. 54, PL. 47)

東区の東北隅に位置する建物で、2間×2間の正方形に近いプランをもつものである。桁行方向は、N38°Wにとる。平均梁行3.01m、桁行2.91mである。柱穴は14~20cmの円柱で、暗褐色土の範囲としてとらえられた。掘方は54~65cmの大きさである。出土遺物はなく時期は不明である。

都地原第1号墳墓 (Fig. 55)

都地原第1号墳墓は火葬骨を須恵器甕に納め、それを墓壇内に埋置した火葬墳墓で、遺跡は柳ヶ谷墳墓より西方150mのところの在り、柳ヶ谷墳墓と同じ丘陵上であり、丘陵頂部よりやや下った南斜面にかけてのところに位置している。

埋葬状況

本墳墓は表面観察の時には確認できず、又発掘調査開始後においても直ぐには発見が困難であって、出土した須恵器甕内に火葬骨が認められ火葬墳墓としたものである。都地原遺跡内でも東区は近世の開墾が特になされているため上部施設は破壊されている。

墓壇は地山面以下のみであるが、円形で、床面は摺鉢状に尖っている。残存上面径40cm、深さ11.8cmであり、当初より甕を意識したものであろう。蔵骨器は、墓壇床面より2cmから3cmほど上位に須恵器甕の底部が位置しており、墓壇内には木炭と少量の焼土塊粒を混合した埋土で蔵骨器を固定している。蔵骨器は甕の底部付近のみが墓壇内に遺在しているのみで、胴部や口縁部は周辺に散らしている。蔵骨器内には火葬骨と木炭が混合しており、火葬骨は多量なほどではない。

蔵骨器 (Fig. 56, PL. 48)

蔵骨器に使用された容器は陶製・須恵器甕で、高さ30.8cm、口径19.2cm、最大胴部径28.3cmを測り、丸底である。底部は凹凸面が残り、胴部は丸く大きくのび、口頸部で細く締り大きく外反して口縁部につづき、口縁端部はさらに外反して段がついている。胴部内面にはまばらに青海波文がみられ、外面はヨコナデされている。(上野)

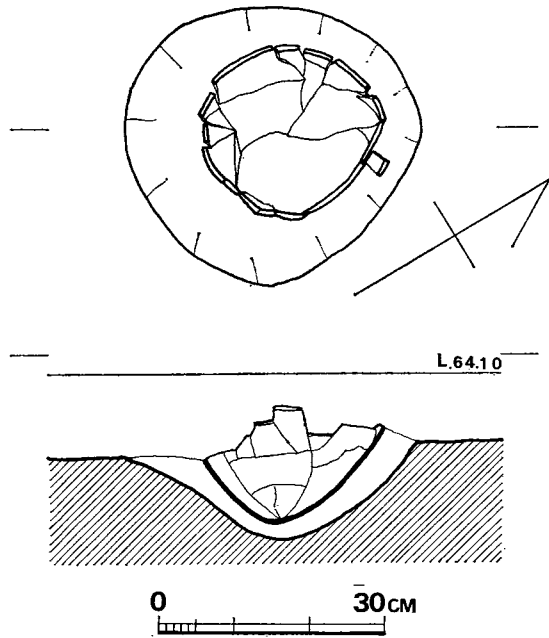


Fig. 55 都地原第1号墳墓実測図(縮尺1/10)

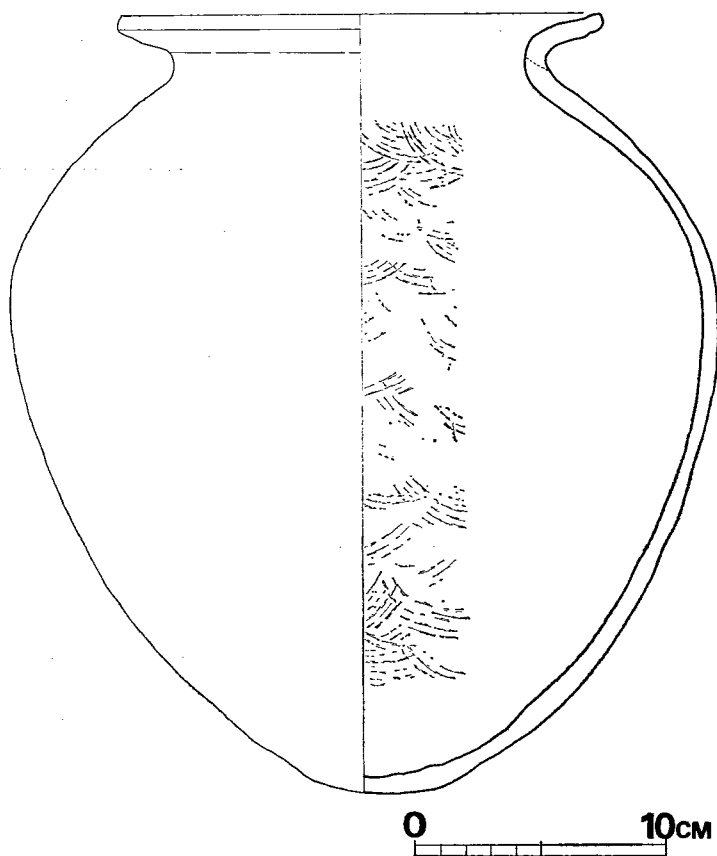


Fig. 56 都地原第1号墳墓出土蔵骨器実測図 (縮尺1/3)

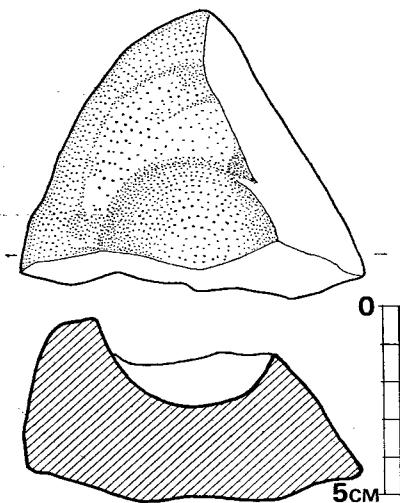


Fig. 57 表土層下出土石器実測図 (縮尺1/2)

表土層下の遺物

(Fig. 57~60, PL. 48~50)

表土層下より遺構に伴わずに石器・土師器・須恵器等が出土した。

石器 (Fig. 57)

硬質砂岩製の凹石で、約 $\frac{1}{3}$ が現存する。本来形状は楕円形の板状をなしていたものと推測され、片面の中央に径約5cm、深さ約2.5cmの断面半円状の凹みを有する。

弥生式土器 (Fig. 60-9)

壺形土器の胴部である。胴最大径部に貼付け刻目「コ」の字突帯を一条巡らす。器面の荒れが著

しいが、内外面ともに刷毛目調整にて仕上げている。胎土に多量の砂粒を含み、焼成は不良。淡茶褐色を呈する。胴部最大径(復元値)39.1cmを測る。

須恵器 (Fig. 58-1~20, Fig. 39-21, 22, PL. 48~50)

杯蓋 (Fig. 58-1~8)

I類 (1) 天井部が丸味をもち、口唇部内面が軽く押えられ外反する。色調は灰色を呈し、焼成は不十分である。口径11.3cm、器高4.2cmを測る。

II類 (2・4・5) 口縁部が垂直に立つもので、天井部は右方向のヘラ削りを施す。口径21.1~12.5cm、器高3.8~4.1cmを測る。

III類 (3・6・7) 口縁部が外へ延びるもので、天井

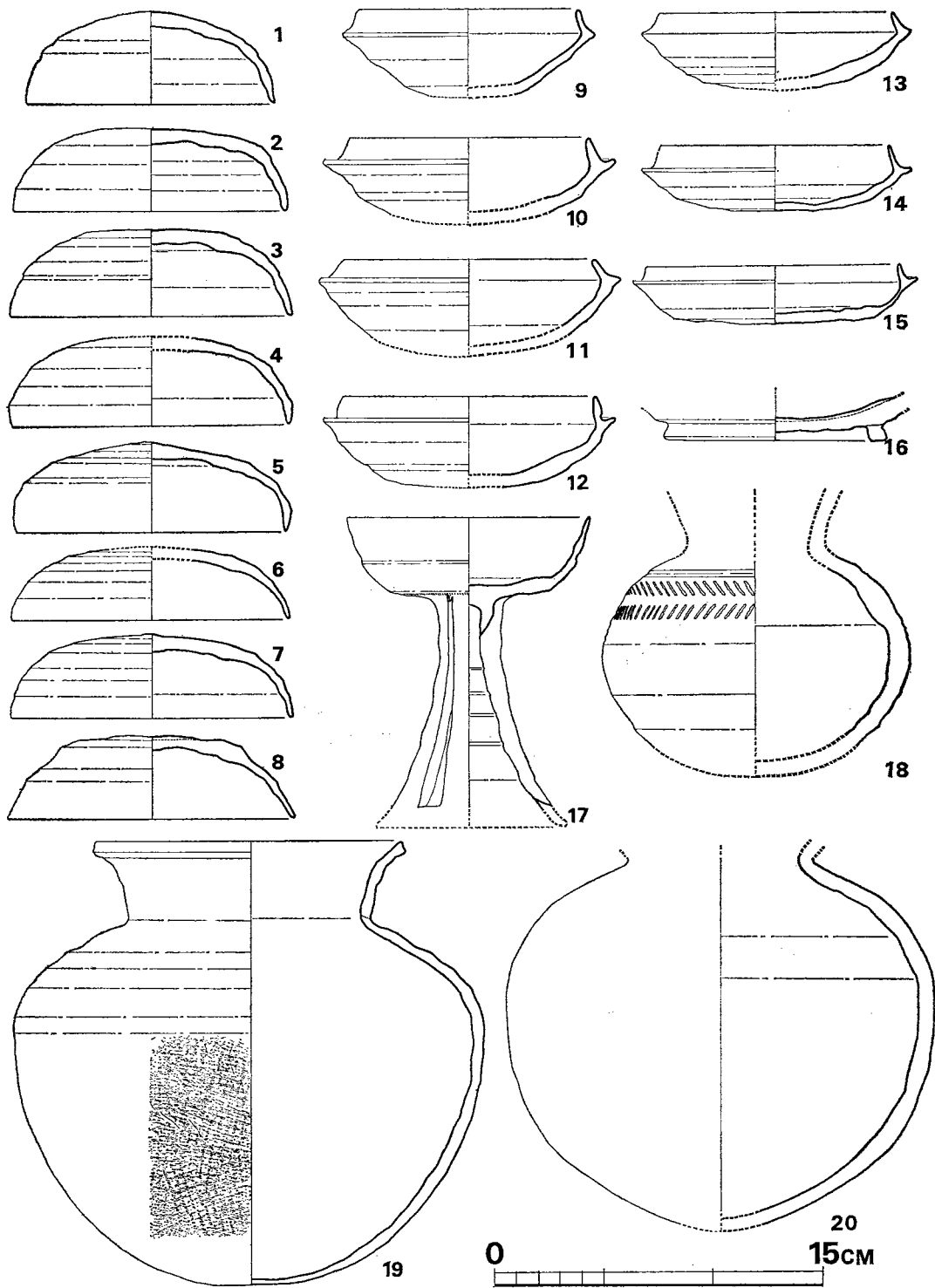


Fig. 58 表土層下出土土器実測図 (縮尺1/3)

部のみへら削りを施す。口径12.6~13.0cm, 器高3.4cmを測る。

Ⅳ類(8) 天井部が平坦をなし、口縁部が大きく外反する。口径13.0cm, 器高3.7cmを測る。

杯身 (Fig. 58—9~16)

Ⅰ類(9) 底部を欠損するが狭い平坦面をなすと推測される。口径10.1cm, 最大径11.6cm, 器高(復元値)4.2cm, 立ち上がり1.1cmを測る。

Ⅱ類(10~13) 底部から内反気味に立上がるもので、蓋受け部が落ち込む10・12と蓋受け部端から立ち上がるもの11・13とがある。口径10.6~11.6cm, 最大径12.4~13.5cm, 立ち上がり0.7~1.1cm, 器高3.5~4.2cmを測る。

Ⅲ類(14~15) 底部が広い平坦面をなすもので、底部のみへら削りを施す。口径10.5~11.6cm 最大径12.4~13.1cm, 立ち上がり0.6~1.0cm, 器高2.6~3.0cmを測る。

Ⅳ類(16) 高台を有するもので、高台口径10.2cmを測り、大形である。

無蓋高杯 (Fig. 58—17)

脚裾部を欠損する。体部下面には一条の刺突文を巡らし、二段の刺突文を配する。胴部はカキ目調整を施す。胎土に粗い砂粒を含むが、焼成は非常に堅緻で、灰黒色を呈する。胴部径14.0cmを測る。19は最大径が胴部上位にあり、器壁は薄い。胴部外面下半部は格子目の叩き目文を施した上をヨコナデ調整、胴部内面下半分及び底部は青海波文の上をナデ調整、他の部分はヨコナデ調整で仕上げている。胎土は精良であるが、焼成は不十分である。茶褐色を呈する。

口径14.2cm, 胴部最大径11.4cm, 器高20.3cmを測る。20は口縁部と底部を欠損する。内面は青海波文の上をヨコナデ調整、外面はヨコナデ調整で仕上げている。胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良好で、一部に自然釉が付着する。胴部最大径19.6cmを測る。

甕 (Fig. 59—21)

21は口径23.0cm, 口頸部高5.6cmを測る。内外面ともにヨコナデ調整。焼成は堅緻である。黒灰色を呈する。

平瓶 (Fig. 59—22)

底部は平底をなし、器壁は薄い。外面は格子目叩き文の上をヨコナデ調整で仕上げ、内面は青海波文を叩き打して

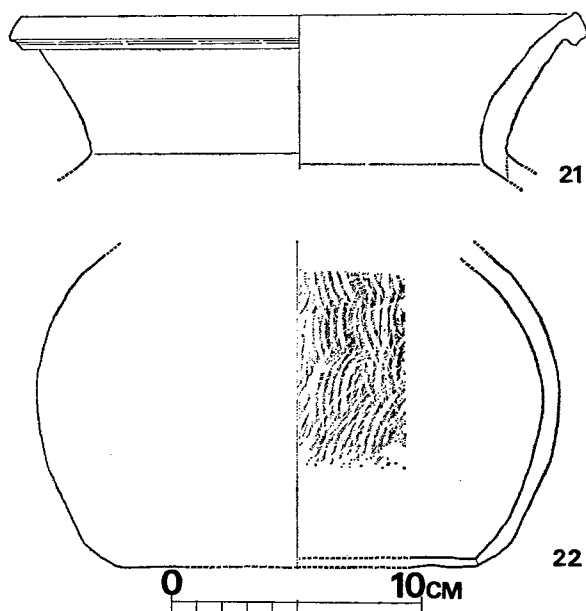


Fig. 59 表土層下出土土器実測図(縮尺1/3)

いる。胎土は精良であるが、焼成は不十分、淡茶褐色を呈する。最大径20.9cmを測る。

土師器 (Fig. 60-2~8, PL. 48~50)

長頸埴 (Fig. 60-2)

2は直口気味に開く口縁部をもつ。器面の荒れが著しく、調整は不明、焼成不良。口径9.8cmを測る。

脚付埴 (Fig. 60-1)

口縁端部を欠失する。頸部から口縁端部にかけて直線的に延び、若干外反する。胴部最大径を上部にもち、脚部は短い柱状部より裾部に著しく屈折する。調整は丁寧に内面及び口縁部外面はヨコナデ調整、胴上半部及び脚裾部内面はヘラ削りの上をヨコナデ調整、胴下半部はヘラ削り、

脚柱状部外面はヘラ削り脚裾部外面はヘラ削りの上をヘラ磨き、脚柱状部内面はヘラ削りの上を指頭によるナデと押えによって仕上げている。胎土は非常に良質で、赤褐色を呈し、焼成は良好である。口径(復元値)11.1cm、胴部最大径12.6cm、脚裾部径13.7cm、復元器高13.7cmを測る。

甕 (Fig. 60-7・8)

いずれも胴部以下を欠失する。頸部から短く外反し、7は口縁部が若干外に引伸ばされている。焼成はいずれも良好。

高杯 (Fig. 60-3・4)

いずれも脚部で、裾部を欠く。3は裾部と

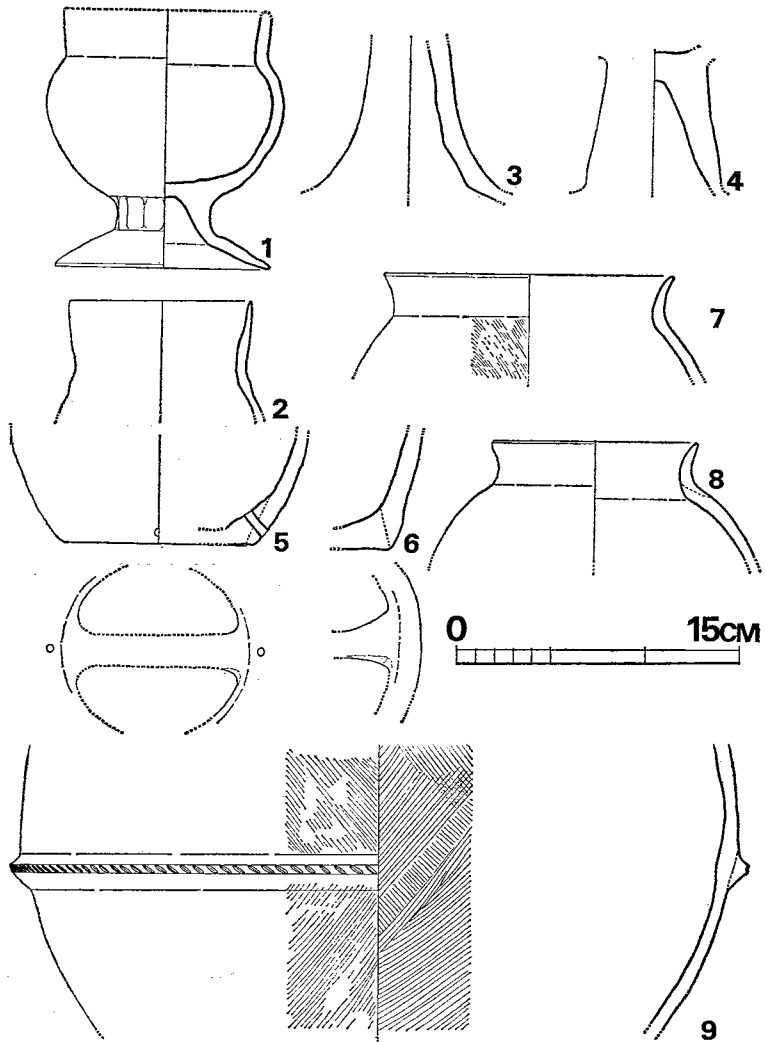


Fig. 60 表土層下出土土器実測図 (縮尺1/4)

の境界が不明瞭で、4は裾部で強く「く」の字形になると推測される。ともに器面の荒れが著しいため、調整は不明であるが、内面はしぼり痕及び巻上げ痕を縦方向のヘラナデによって消している。焼成は良好。

甗 (Fig. 60-5・6)

いずれも甗の底部である。5は底面を幅1.8cm、厚さ8mmの長方形のベルト状帯によって形成され、胴部立上り部に2箇所焼成前の穿孔が施されている。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好。
(松村)

3. 西 区 の 調 査 経 過

都地原遺跡西区では、住居跡1軒と歴史時代墳墓4基が検出された。なおこれら遺構群と東区とは調査期間が異なり、また住居跡と墳墓群とも調査時が違うため全体写真などの作業はできなかった。住居跡1軒を検出した第1次調査は1974年(昭和49年)9月に、墳墓4基を検出した第2次調査は1975年(昭和50年)11月に発掘調査を実施した。調査団は次のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	上	野	精	志
調査補助員		関		晴	彦
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	山	本	文	和
	嘱託	因		将	太

なお、調査には地元在住各位の協力があつた。

以下、調査期間が短期のため、調査日誌によって経過を抜粋する。

第1次調査 1974年(昭和49年)

9月3日 工食用道路の部分のみであるが、遺跡全体に繁茂はなはだしく、伐採作業を行なう。

併行してブルドーザーにより表土除去。

9月4日 本日にて伐採・表土除去を終了。

9月5日 発掘作業を開始する。遺構検出に務めたところ、方形プランと想定される住居跡状の落ち込みを1ヶ所確認する。午後よりさっそく住居跡の発掘にとりかかる。

9月6日 午前中にて住居跡を完掘する。午後より写真撮影・実測を行なう。又その他遺構の検出を行なうも検出できず本日をもって終了とする。なお、遺跡南半部の用地内は土地問題で調査できず来年度に予定する。

第2次調査 1975年(昭和50年)

- 10月27日 昨年度の第1次調査の残り部分を第2次調査として本日よりブルドーザーを入れ、表土除去調査を開始する。
- 10月28日～11月1日 ブルドーザーによる表土除去作業、火葬骨を納めた蔵骨器を検出。
- 11月4日 本日より遺構検出を始める。先日確認した蔵骨器（都地原第2号墳墓）周辺を精査し、発掘する。第2号墳墓より西方5m離れて土壙あり、その内より須恵器杯2個を検出する。又9m離れた南斜面に土師器の口縁部が確認される。これは火葬墓であろう。
- 11月5日 第2号墳墓の発掘。前日検出の須恵器2個を精査すると火葬骨が在りこれを第4号墳墓とする。合せてこれら第2号・4号墳墓の写真撮影・実測を行ない、又他の遺構検出につとめる。
- 11月11日 第2号・4号墳墓の写真撮影・実測を行なう。又遺構検出作業を行なう。
- 11月12日 第3号墳墓を発掘し、写真撮影・実測を行なう。その他遺構の検出作業。
- 11月17日 遺構検出中に第2号墳墓の東方、15mのところが多量の焼土層を検出する。平板にて遺構検出面の地形測量（縮尺 $\frac{1}{100}$ ）を行なう。本日にて遺構検出作業を終了する。
- 11月18日 前日検出の焼土層を掘り下げると方形の墓壙を有する火葬墓（第5号墳墓）となる。第5号墳墓の写真撮影・図面作成。
- 11月19日 地形測量・全体写真撮影を行ない、発掘調査作業を終了する。

4. 西区の調査内容

第4号住居跡 (Fig. 61, PL. 51—1)

この遺構の北側一部が、九州縦貫自動車道用地外に及ぶため路線外は発掘調査できず約4分の3を発掘する。住居跡は丘陵の平らな頂部に位置しており、都地原遺跡東区の第3号住居跡から西方に83.5m離れて存在する。

平面プランは4.40m×4.50mのほぼ正方形と想定され、床面積は約20㎡であろう。現存壁高は10cmから15cmである。住居跡中央部に径1.2m×0.9m、深さ14cmの楕円形ピットと、南壁下の中央部に1.3m×0.8m、深さ20cmの楕円形ピット在り。住居跡中央部のピットより、焼土や木炭層の発見はない。西壁中に大小2つのピットが存在するが、この住居跡に付属するかどうか疑問である。床面は平坦であり、全体的に締まりがなくやわらかいようである。出土遺物は覆土中より若干の弥生式土器が出土する。

出土遺物

住居跡覆土中より若干の弥生式土器が出土したのみで、それらはいづれも小片で図示できるものではない。しかし詳細は観察すると弥生時代後期の特徴を有する土器片のようである。

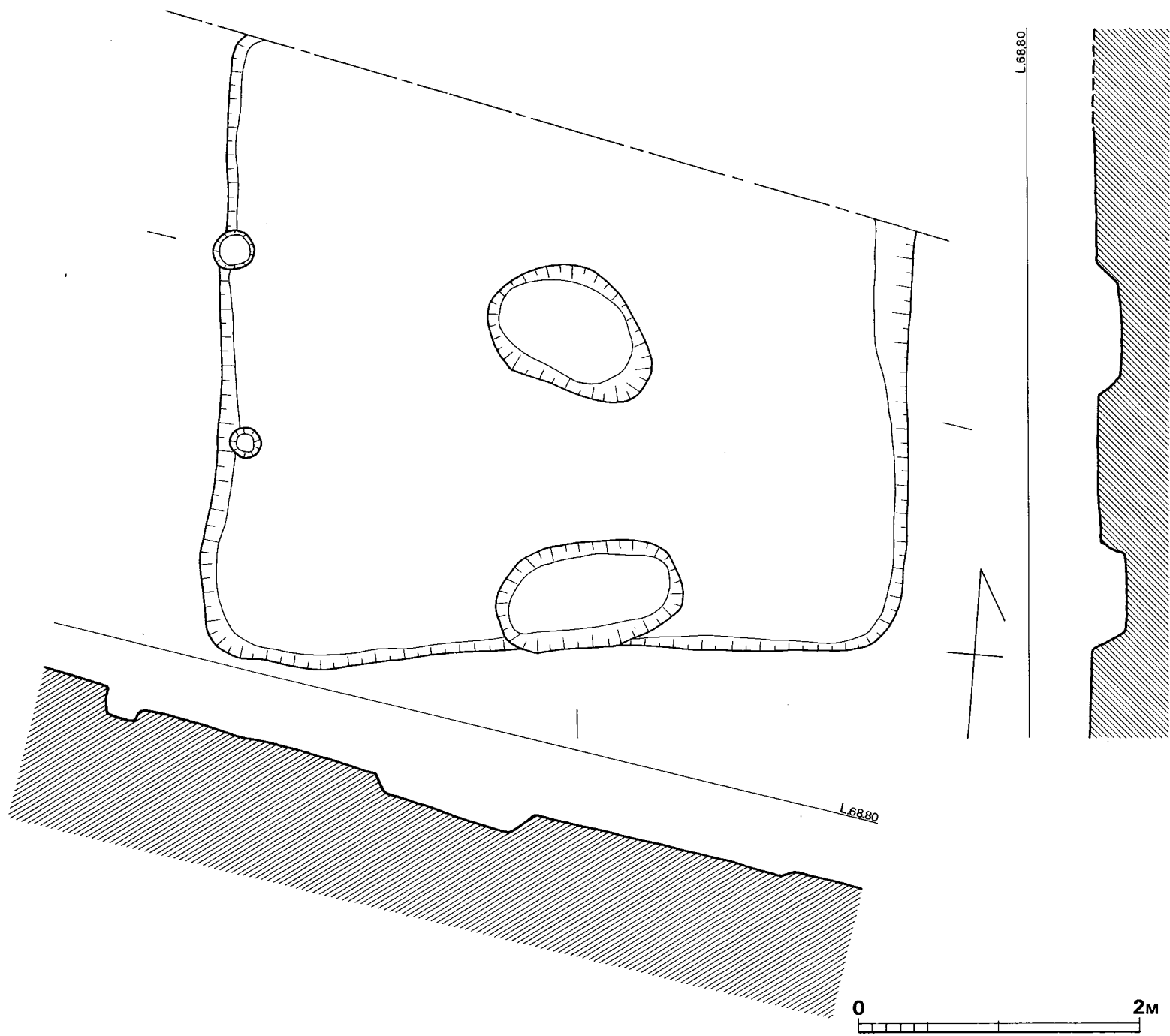


Fig. 61 第4号住居跡実測図 (縮尺1/40)

都地原第2号墳墓

(Fig. 62・63, PL. 52・53)

都地原第1号墳墓より西方77m離れて在り、須恵器壺内に火葬骨を埋納し、それを素掘り墓壙内に埋置した火葬墳墓である。第1号墳墓の存在するところより2m高い丘陵の平坦部に近いところの南斜面に位置している。

埋葬状況 (Fig. 62)

表土除去の際に上部遺構が削平されたために墓壙の上部は不明である。発見時にすでに壺の胴部下位のみが遺存しており、本来ならば蓋が覆さっていたと思われる。

蔵骨器は、38cm×39cmの隅丸方形の墓壙内に、頭大の川原石と、それよりは大きな石との2つの石塊が蔵骨器を挟むようにある。この2つの石は木炭と焼土塊粒で共に固定されていて、さらに2つの石の間に壺が安定するように底部を水平に保ち、墓壙床面より5cmほど高くして埋置されている。2つの石は蔵骨器を「ハ」の字状に挟んだ状態である。墓壙は南西部を木の根により攪乱されているが、床面は平坦で、残存深さ18cmを測る。墓壙内には木炭の焼土粒がみられ、丁寧に埋置されているようである。

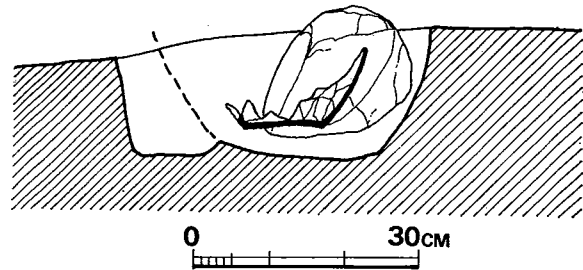
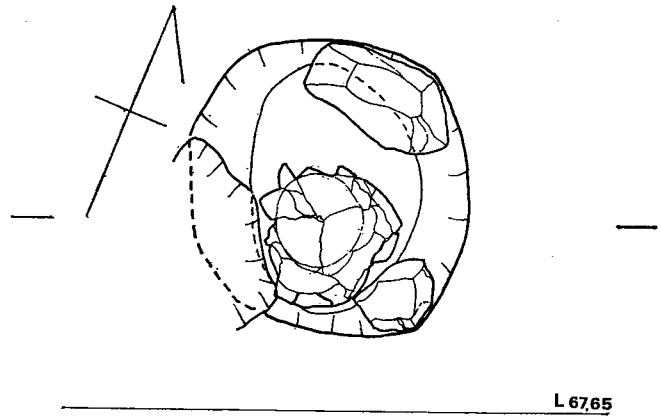


Fig. 62 都地原第2号墳墓実測図 (縮尺1/10)

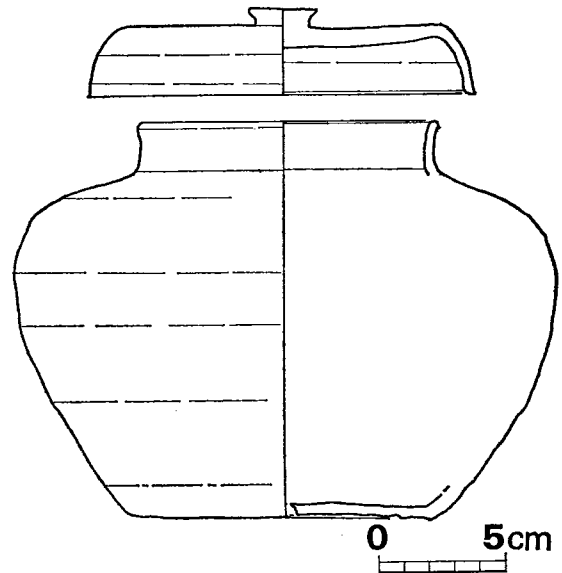


Fig. 63 都地原第2号墳墓出土蔵骨器実測図 (縮尺1/3)

蔵骨器内には火葬骨と器内底部には少量の砂とが混って満ぱいの状態であり、火葬骨と共に砂が埋納されていることが注目される。

蔵骨器 (Fig. 63, PL. 53—2)

蔵骨器は陶製・須恵器有蓋壺形の短頸壺形土器である。壺は貼り付けの高台が欠け落ちている。高さ15.8cm、口径11.8cm、底径11.5cm、最大胴部径21.6cm、口縁部立上り2.1cmで、最大胴部は器高の3分の2のところにある。底部中心部に外面より打撃をあたえて穿孔された径約1cmの小孔がみられる。底部より曲線的にのび、丸く大きく曲る最大胴部へとつづき、さらに丸く口頸部へとつながりやや外反して口縁部へと立上がる。口縁部は丸く外へ開く。胴部外面は底部より最大胴部までヘラ削りを施こしているために胎土の小砂粒が飛んで欠けている部分が小孔として残る。上半は細かいナデを施こす。内面は全体の荒い斜めに走るナデが多い。外面の最大胴部より下は黒灰色、上3分の1は灰色を呈している、焼成は硬く焼きしまり、胎土は緻密である。

蓋も須恵器で、つまみ付き杯で総高3.4cm、口径15.4cm、器肉0.4cmから0.3cmを測る。つまみは貼り付けと思われる頂部がほぼ平坦な作りであり、天井部は水平で口縁部はやや丸味をおびて外反する。口縁部は外にはねる。天井部はヘラ削り、口縁部にはヨコナデを施こしている。灰色を呈し、焼成は良好であり、胎土は緻密である。

都地原第3号墳墓

(Fig. 64・65, PL. 54・55)

第2号墳墓より南へ9.50m離れた斜面で、第2号墳墓より1.20m低い。土師器甕を墓壇内に埋置したもので甕内より火葬骨は検出されませんが、埋葬状況その他より火葬墳墓とした。

埋葬状況 (Fig. 64)

上部の埋葬状態は開壘などにより不明であるが、地山面より下位を検出する。墓壇は36.5cm×31.1cmの隅丸方形で、残存深さ21cmである。墓壇床面は平坦で径18cmで

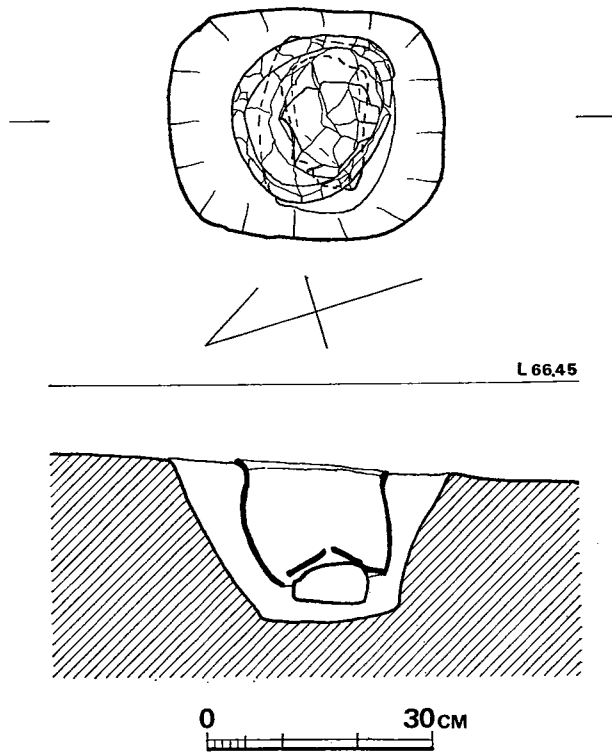


Fig. 64 都地原第3号墳墓実測図(縮尺1/10)

あり、3 cmほど埋土を行い、その上に17 cm×10 cm弱の厚さ5 cm程の長方形の石を置いている。そしてこの敷石の上に土師器甕の底部を打ち欠き穿孔した底部のみを置き、さらに土師器甕の胴部をやや深く一部敷石が覆さるまで埋めている。墓壙内及び土師器甕内には墓の掘り土をそのまま埋め戻したようであり、現在では火葬骨はみられない。しかし埋葬状況より火葬墓とされよう。

蔵骨器 (Fig. 65, PL. 55—2)

陶製・土師器甕で打ち欠き部分の底部を復元してみると高さ20.2 cm、口径22.5 cm、で全体的に歪んでいて特に底部はひどい。平底気味の底部より丸味をおびて直線的な胴部へとつづき口頸部は若干内傾している。口縁部は大きく外反し、さらに端部へと外に開く。口頸部内面にかなり強い稜がつく。外面から口縁部内面にかけて荒い刷毛目、胴部内面は未調整である。橙褐色を呈し、焼成は良好、胎土は密である。なお Fig. 65の図中の底部に示す2つの矢印はその間が穿孔されていたことを指すものである。

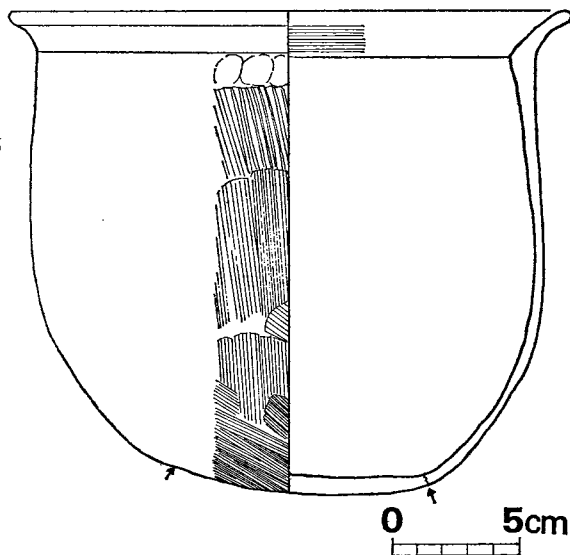


Fig. 65 都地原第3号墳墓出土蔵骨器実測図 (縮尺1/3)

都地原第4号墳墓

(Fig. 66・67, PL. 56—1・2)

第2号墳墓の東方5.2 m離れて検出されたもので、墓壙内に須恵器杯2個を口縁部を下に、底部を上にして埋置しているものである。

埋葬状況 (Fig. 66)

墓壙の上部は破壊されていて、残存径37 cmから32 cmの不整形円で、深さ5 cmほどである。墓壙の底面は南側が低く水平でないが平坦である。墓壙内には須恵器杯を上下逆さにして2つ連ねるようにして並べて埋置している。その杯のうち大きい方は2分の1しか残らず、小さい方

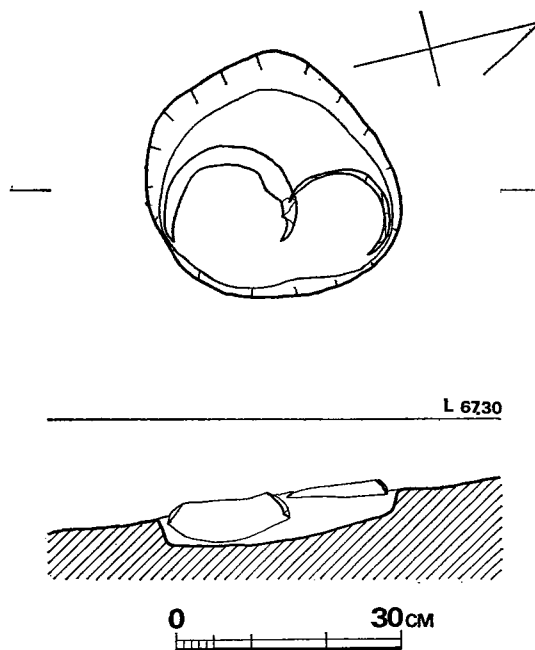


Fig. 66 都地原第4号墳墓実測図 (縮尺1/10)

は口縁部の一部しか在らず、遺構図のみで、遺物としての実測図は不可能である。これら大小2つの杯内部より若干の火葬骨が検出された。墓壙内の埋土は地山掘削時の土をそのまま埋め戻したようである。

蔵骨器 (Fig. 67, PL. 56-2)

埋置方法が底部が上に、口縁部が下という「倒置法」である。須恵器杯大は、高さ5.3cm、口径16.8cm、で底部には高台が付く。底部より丸く体部へとつづき、体部は直線的に口縁部に伸び、端部は内面がやや薄い。高台は低く、やや外反している。器面全体にナデを施す。灰色を呈し、焼成はやや悪いが、胎土は微密である。

都地原第5号墳墓 (Fig. 68, PL. 56-3)

第2号墳墓の東方15.3m離れて多量の焼土層が見つかり精査すると方形プランの落ち込みを検出した。墓壙内に木製(?)の蔵骨器を埋置した例と思われる。

墓壙は21cm×21cmの正方形ではほぼ垂直に27cmほど掘り込んでおり、墓壙内の埋り土の中より多量の焼土塊と若干の木炭とが出土している。火葬骨は認められなかったが、掘り方とほぼ同じ位の大きさの木製蔵骨器を使用したものと想定される。なお、この5号墳墓が、都地原墳墓群では一番高所に位置している。(上野)

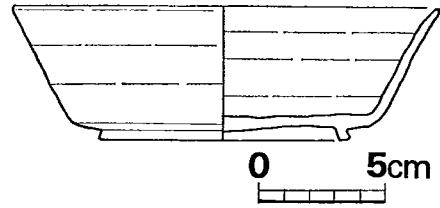


Fig. 67 都地原第4号墳墓出土蔵骨器実測図 (縮尺1/3)

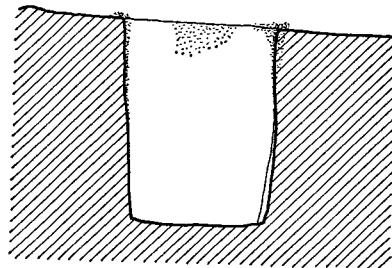
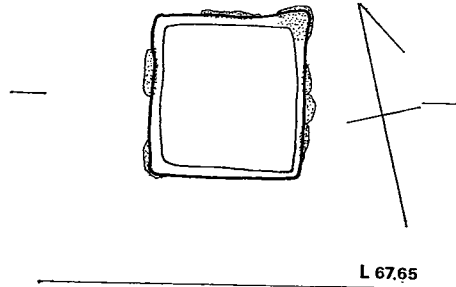


Fig. 68 都地原第5号墳墓実測図 (縮尺1/10)

5. 小 結

都地原遺跡から検出された遺構は竪穴住居跡4，掘立柱建物1，蔵骨器5である。

第1号住居跡は出土遺物がなく，時期は不明である。しかし，山口川を挟んで対岸の丘陵上に位置する茶臼山遺跡において，本住居跡と同様の構造をもつ住居跡が検出され，弥生時代後期中葉の土器を伴っている。従って，本住居跡も一応弥生時代後期に比定できよう。第2号住居跡は弥生時代後期中葉に属する。第3号住居跡は貼付けのカマドに第ⅢB期から第Ⅳ期にかけての高杯が埋め込まれており，6世紀後半から終末にかけての所産といえよう。

掘立柱建物は，土器の出土がないため時期の決定はできないが，遺構確認面直上，及び周辺には，須恵器片の出土が多く，また第3号住居跡との関連も考えられ，6世紀後半ごろの所産ではなかろうか。

遺構に伴わないで出土した遺物は弥生時代後期及び古墳時代後期に属するものである。

以上，出土遺物より各遺構の所属年代を考えてみたが，第1号住居跡と第2号住居跡は同時期に存在した可能性が強い。

調査区域が道路敷に限られたため，丘陵南斜面のみの調査であったが，遺跡は丘陵尾根の平坦部に広がる可能性が強い。 (松村)

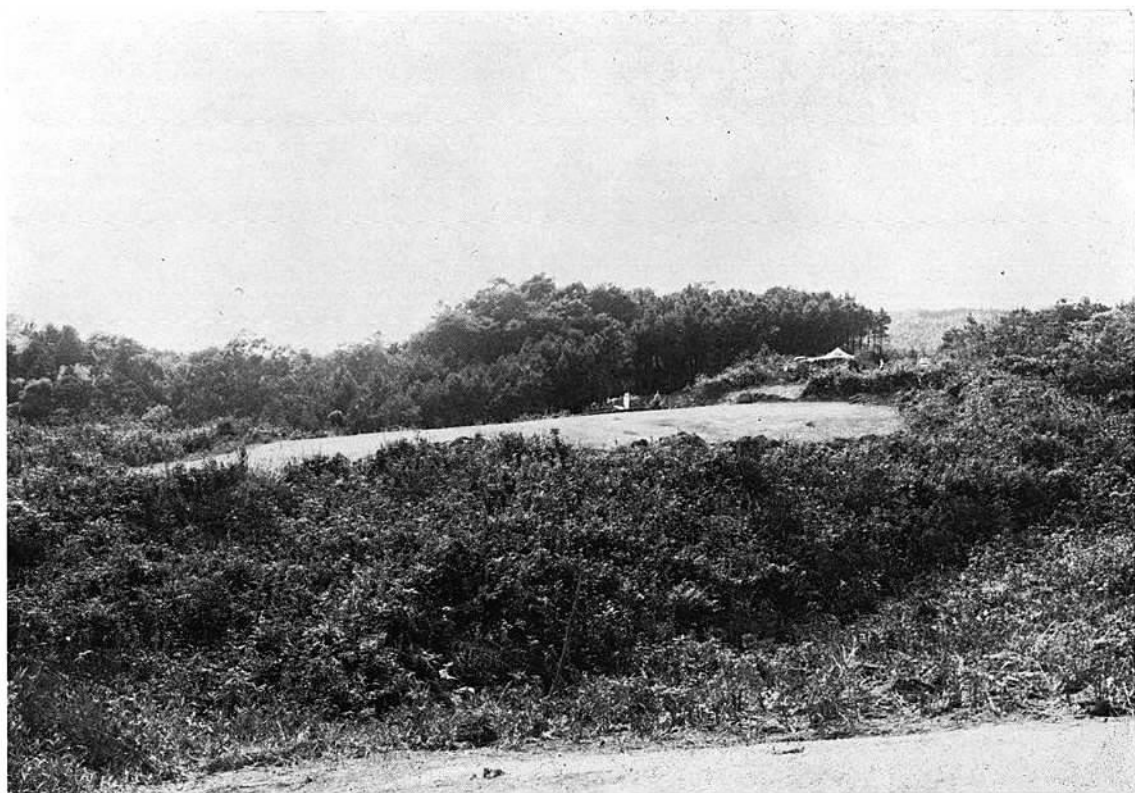
都地原遺跡東区及び西区より合計5基の火葬墳墓が検出された。これらについて若干のまとめをしたい。

九州縦貫自動車道関係若宮地区埋蔵文化財発掘調査において，又既に若宮町内発見の墳墓中より出土したと思われる蔵骨器は17基を数える。これらの総括的な考察は次回の若宮地区「汐井掛遺跡群」の報告書に回すとして，ここでは本報告書にて報告の柳ヶ谷・都地原墳墓群のことについてのみふれてみたい。

立地についてはいずれも丘陵頂部よりやや下ったところの南斜面であり，発掘調査範囲が広がれば他に発見される可能性は十分にある。埋葬状況については素掘の土壌内に蔵骨器を埋置する方法を用いている。その内第2号墳墓については2個の支石があり，第3号墳墓については敷石が存在する。蔵骨器の種類は陶製（須恵器・土師器）と木製（？）とに分けられる。土師器を使用したものは第3号墳墓の甕のみであり，須恵器を用いたものに第1・2・4号墳墓と柳ヶ谷墳墓とがある。さらに須恵器でも柳ヶ谷墳墓と第2号墳墓は有蓋付短頸壺形土器を，第1号墳墓では甕形土器，第4号墳墓では杯である。これらの埋置法は第4号墳墓のみが倒置法である点が注目される。 (上野)

PLATES

都 地 原 遺 跡



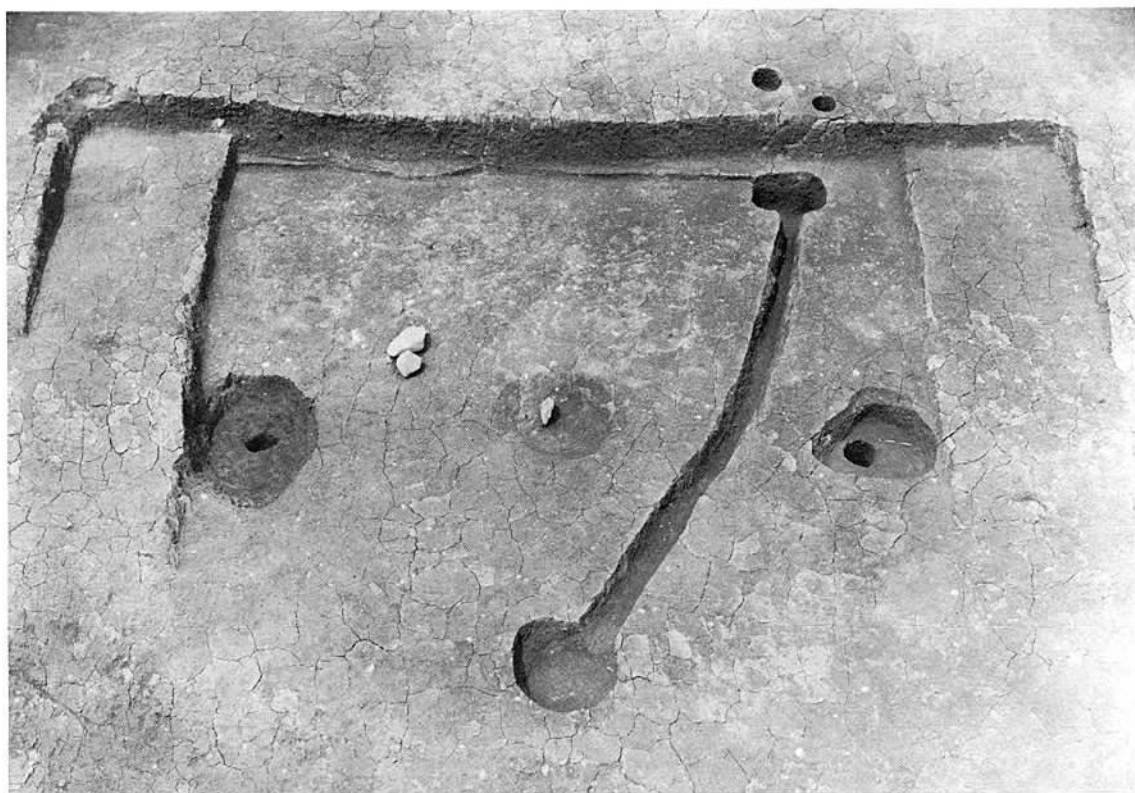
(1) 都地原遺跡近景

(東から)



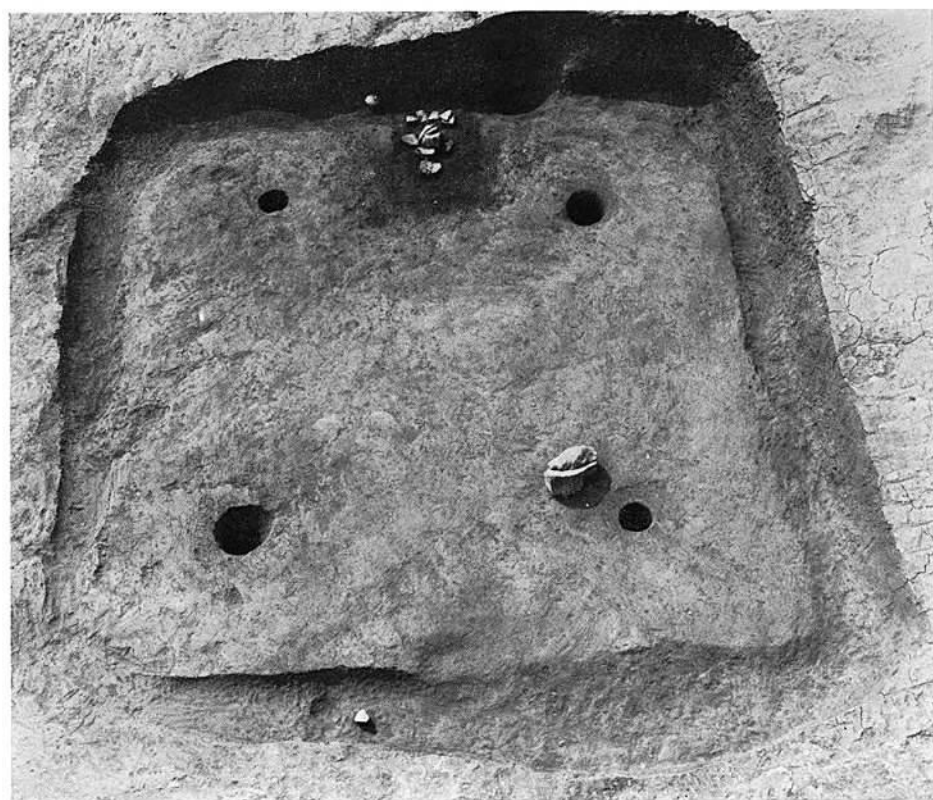
(2) 東区全景

(東から)



(1) 第1号住居跡

(南より)



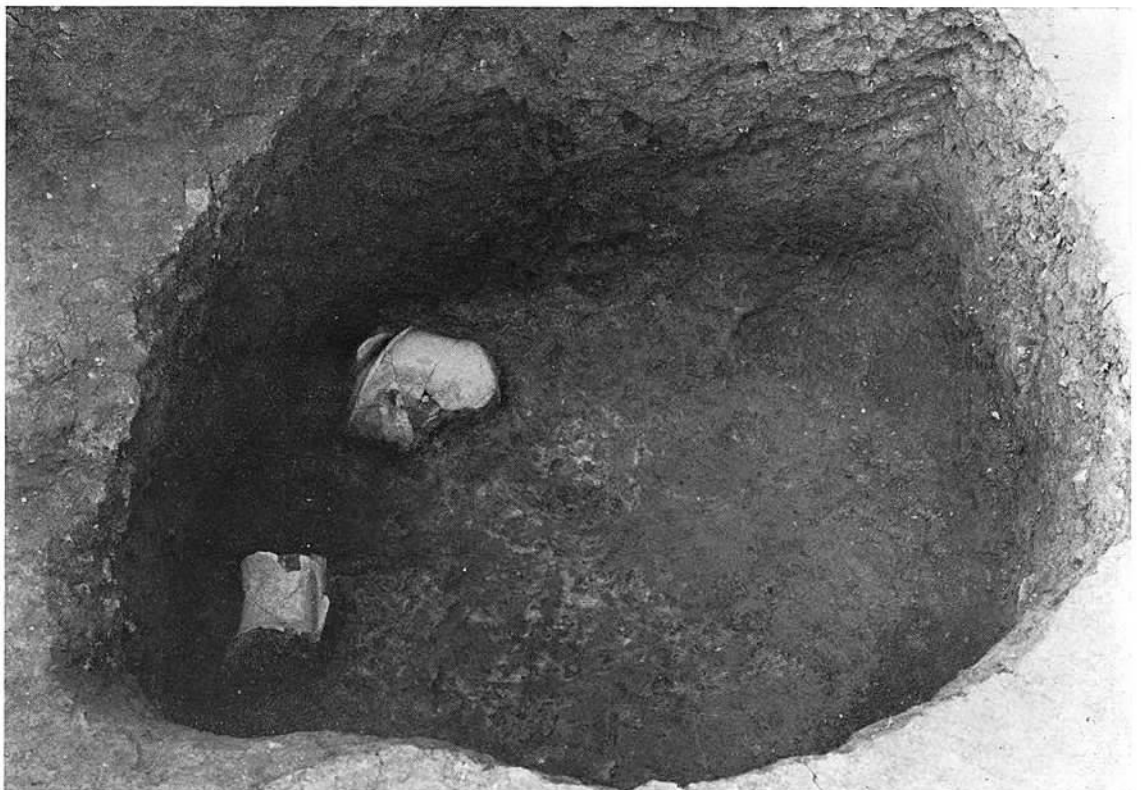
(2) 第3号住居跡

(東より)



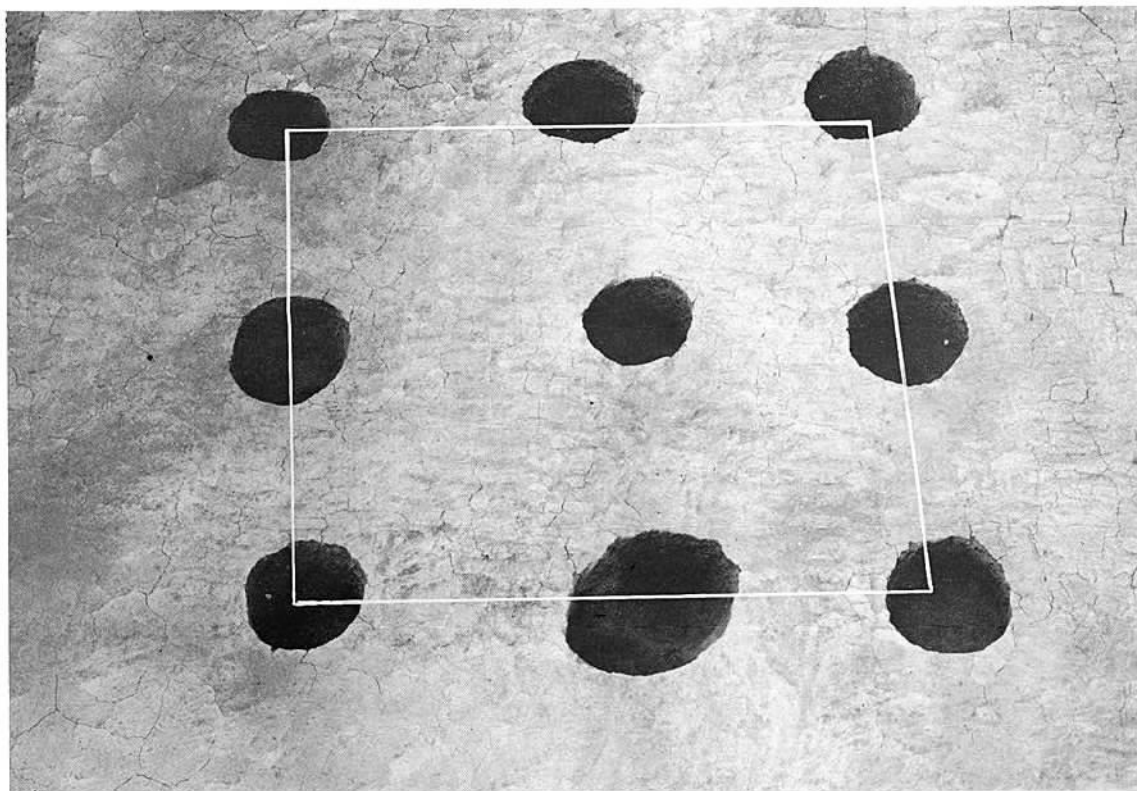
(1) 第2号住居跡

(南より)



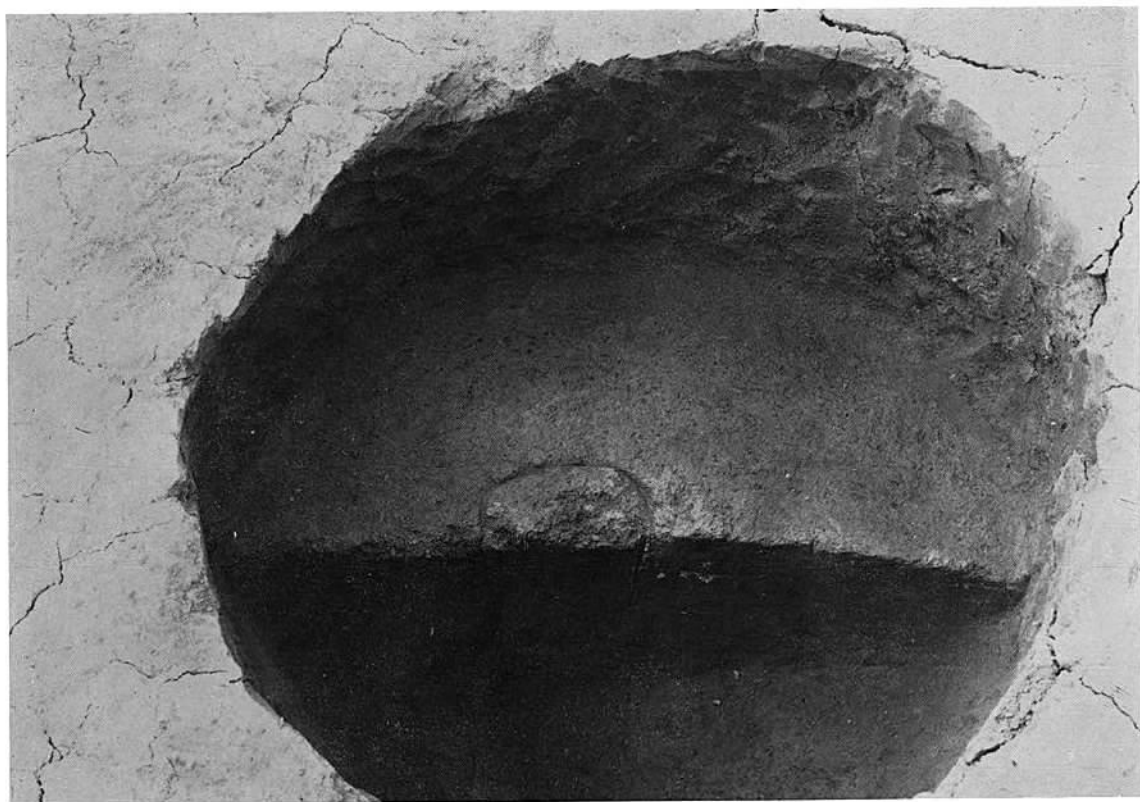
(2) 第2号住居跡内貯蔵穴

(南より)



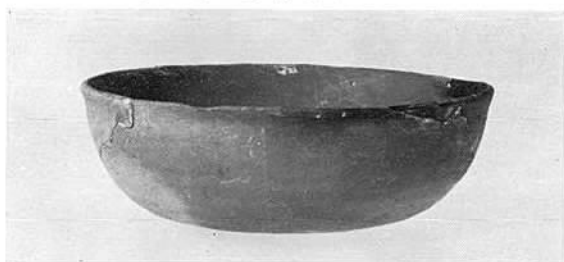
(1) 第1号掘立柱建物

(東から)

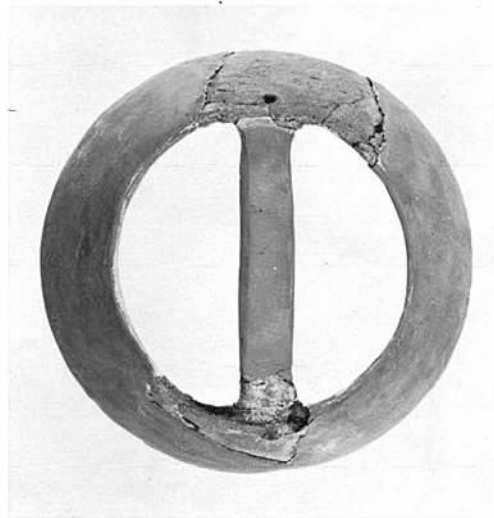


(2) 第1号掘立柱建物柱穴土層断面

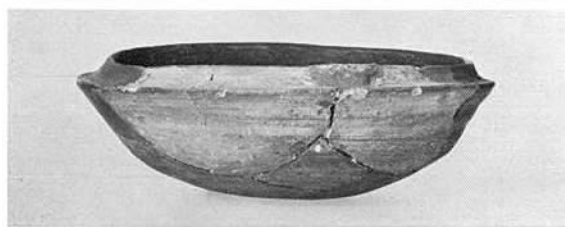
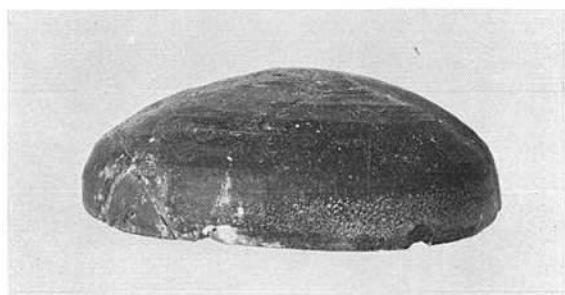
(東から)



東区出土土器



東区出土土器

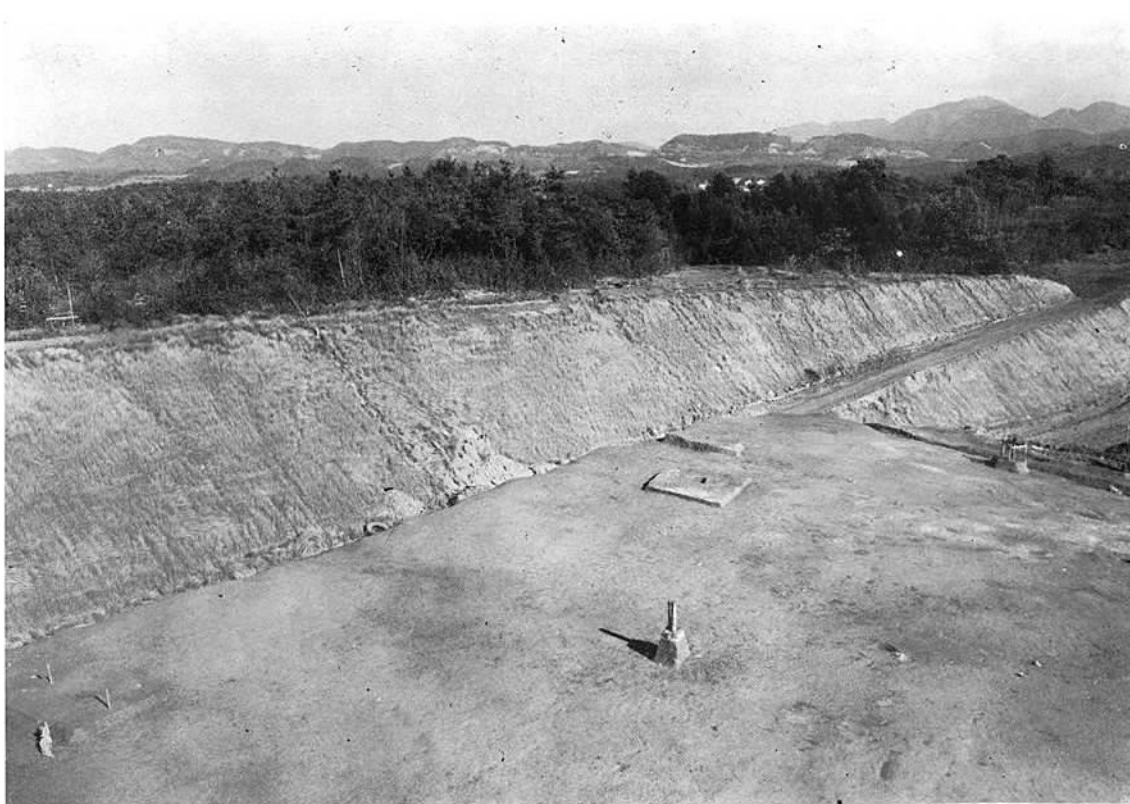


東区出土土器



(1) 第4号住居跡

(東から)



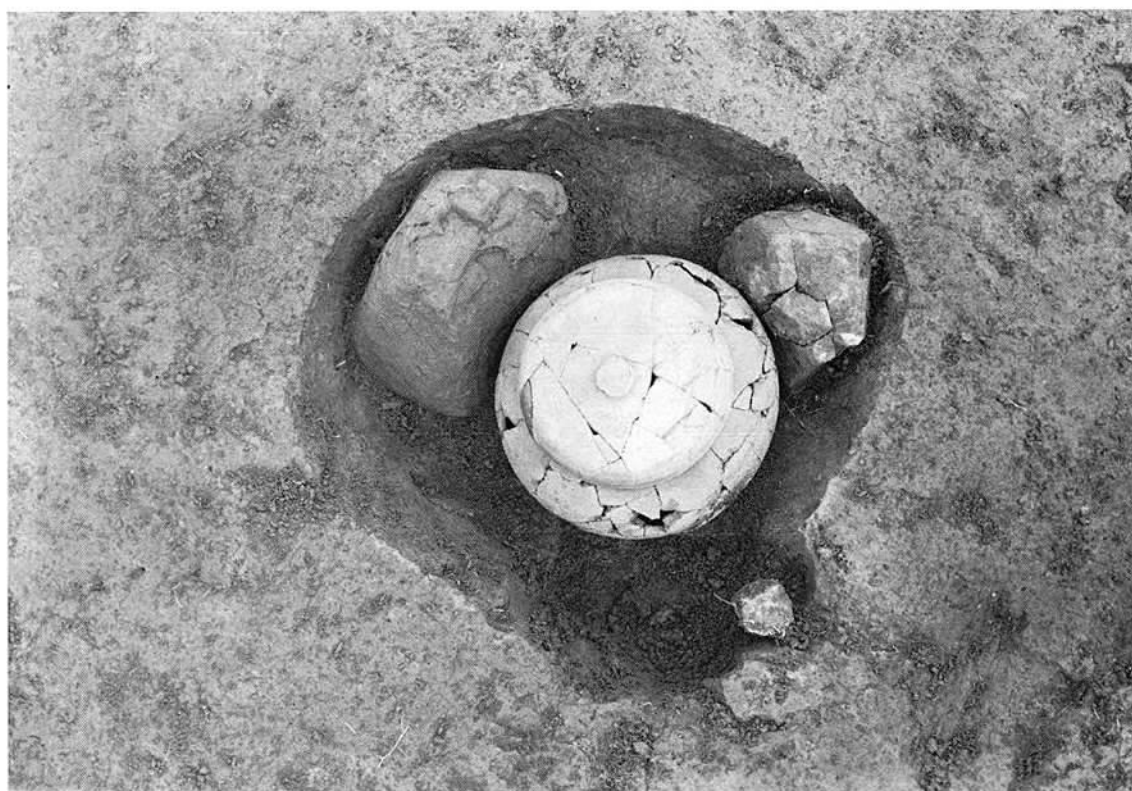
(2) 西区墳墓群全景

(南西から)



(1) 都地原第2号墳墓

(西から)



(1) 都地原第2号墳墓(復元状態)

(西から)

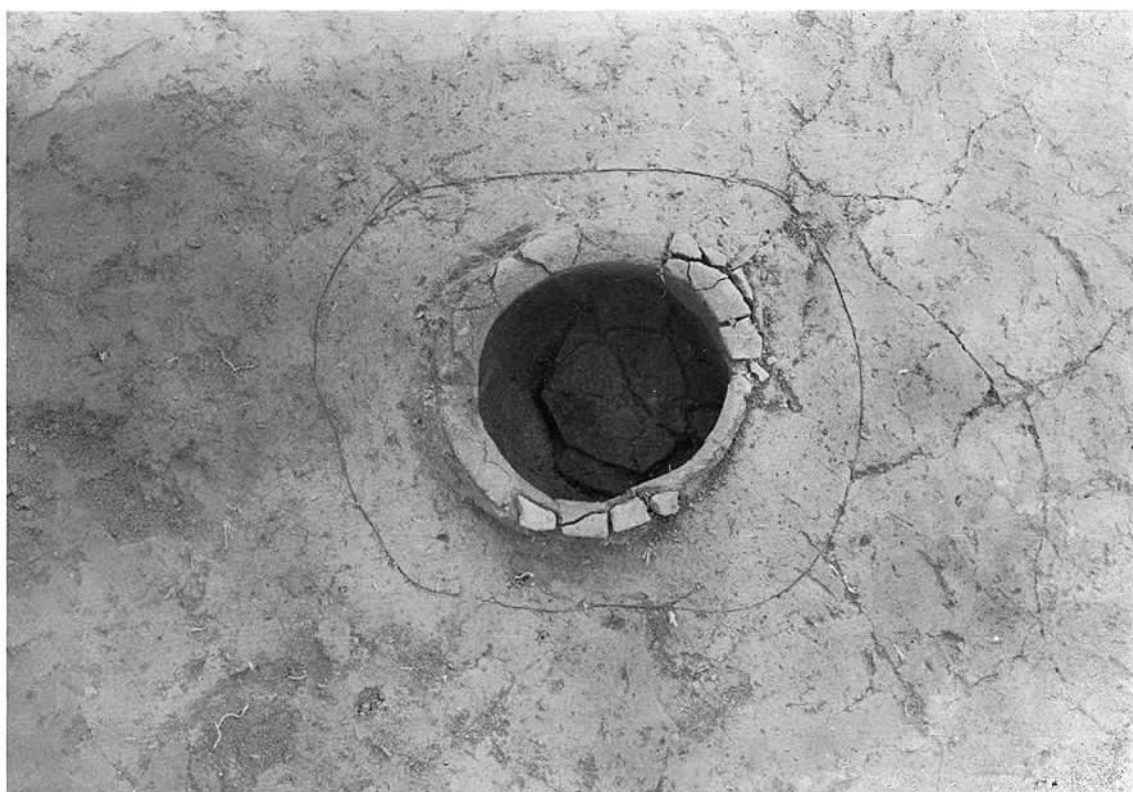


(1) 都地原第2号墳墓の墓坑

(西から)

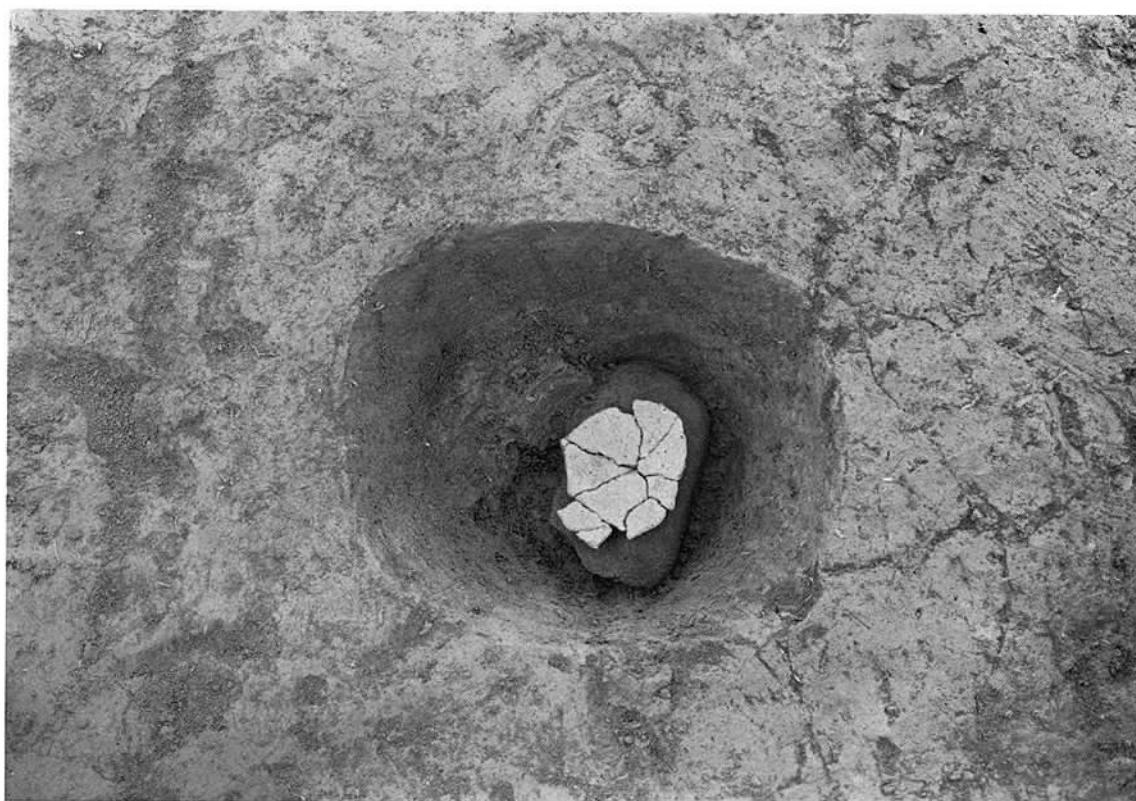


(2) 都地原第2号墳墓出土蔵骨器



(1) 都地原第3号墳墓

(北西から)



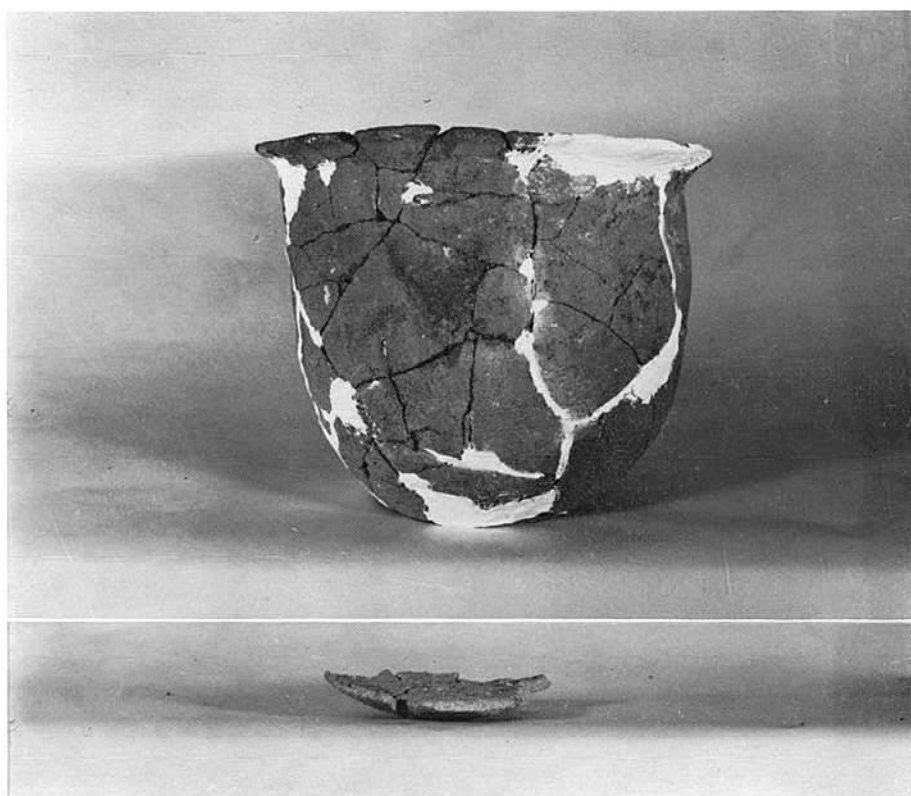
(2) 都地原第3号墳墓

(北西から)

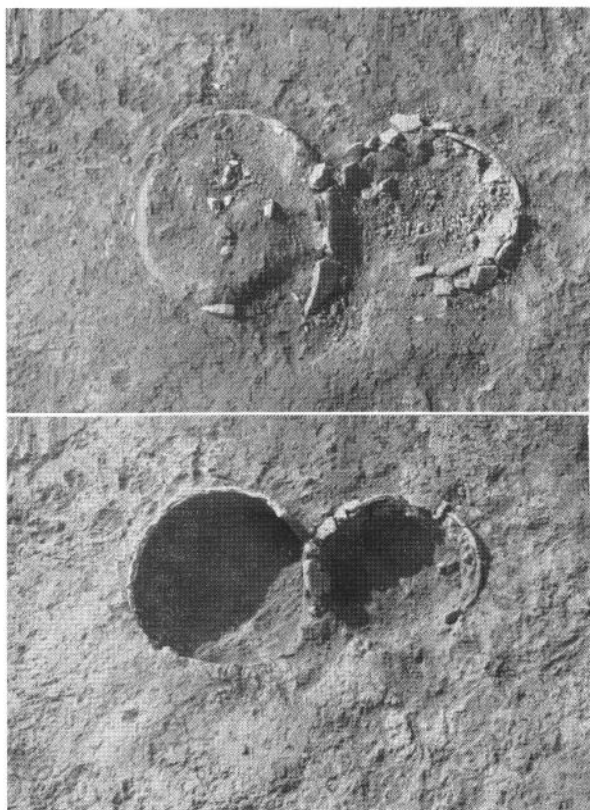


(1) 都地原第3号墳墓の墓坑

(北西から)



(2) 都地原第3号墳墓出土蔵骨器



(1) 都地原第4号墳墓(南東から)



(2) 都地原第4号墳墓出土蔵骨器



(3) 都地原第5号墳墓

(南から)

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—Ⅷ—

昭和52年2月1日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— VIII —

付 図

1 9 7 7

福岡県教育委員会

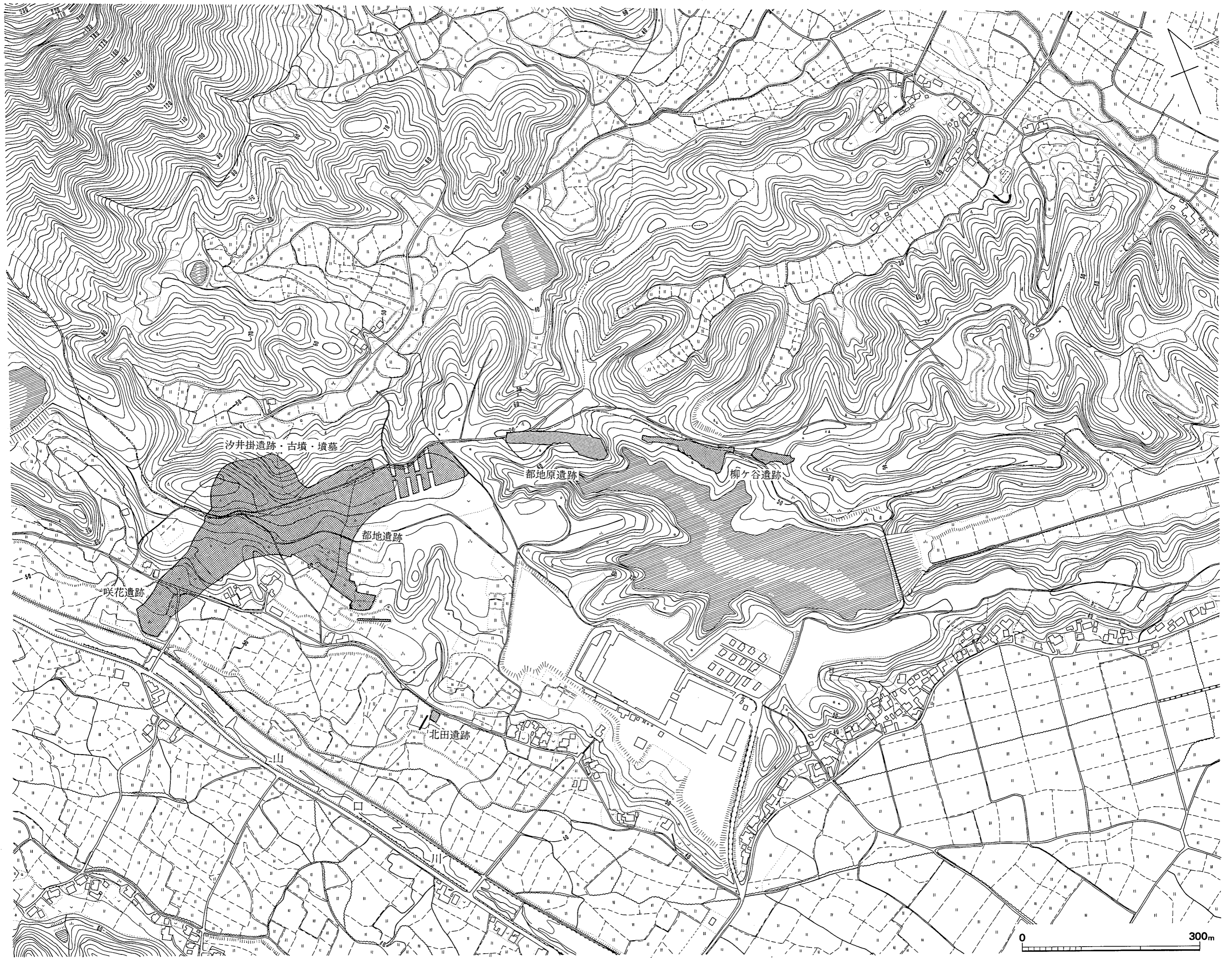


Fig. ① 柳ヶ谷・都地原遺跡周辺地形図 (縮尺1/5,000)



Fig. ② 柳ヶ谷遺跡地形図 (縮尺1/1,000)

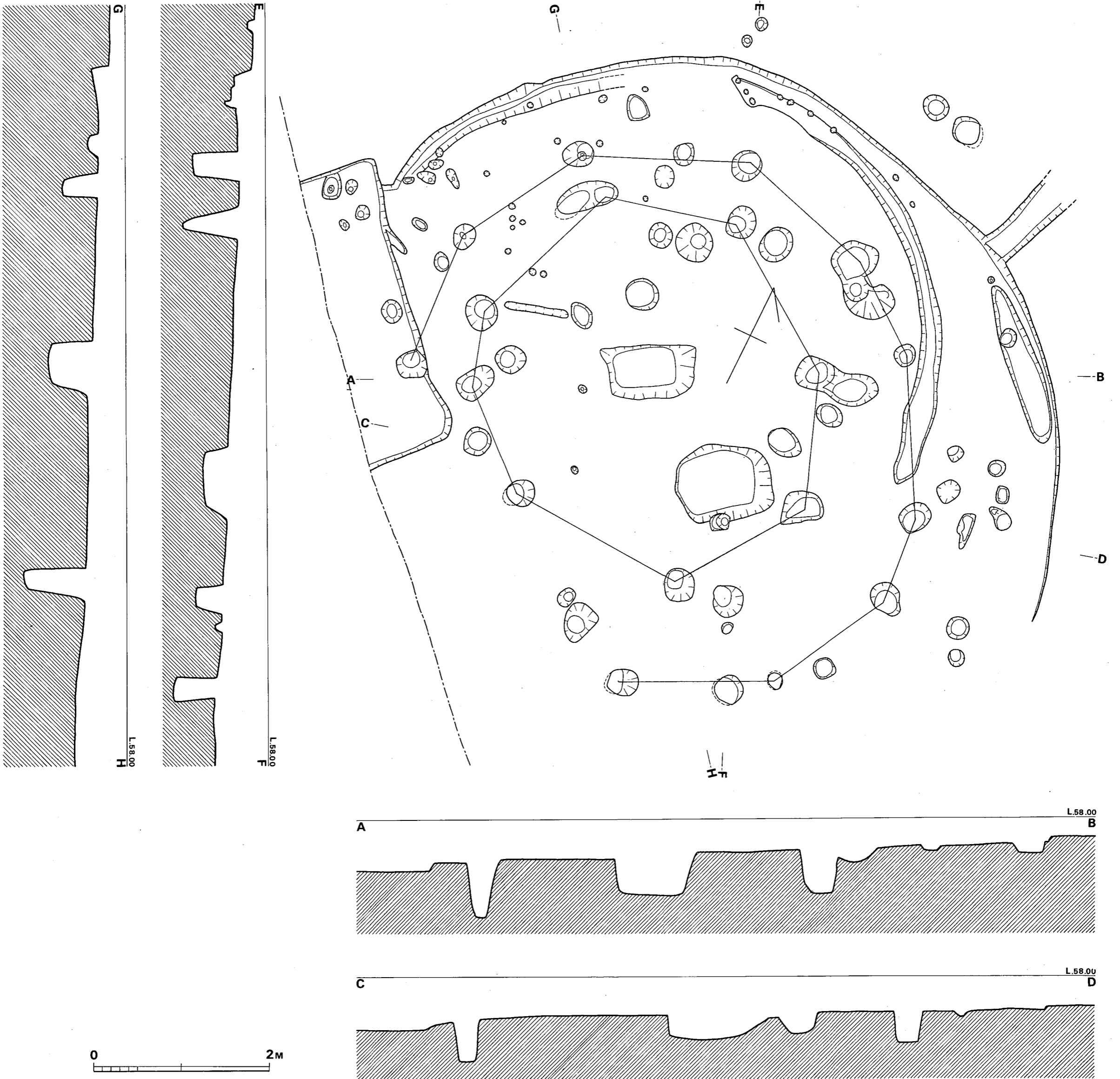


Fig. ③ 柳ヶ谷遺跡東区第1号・2号住居跡実測図 (縮尺1/40)

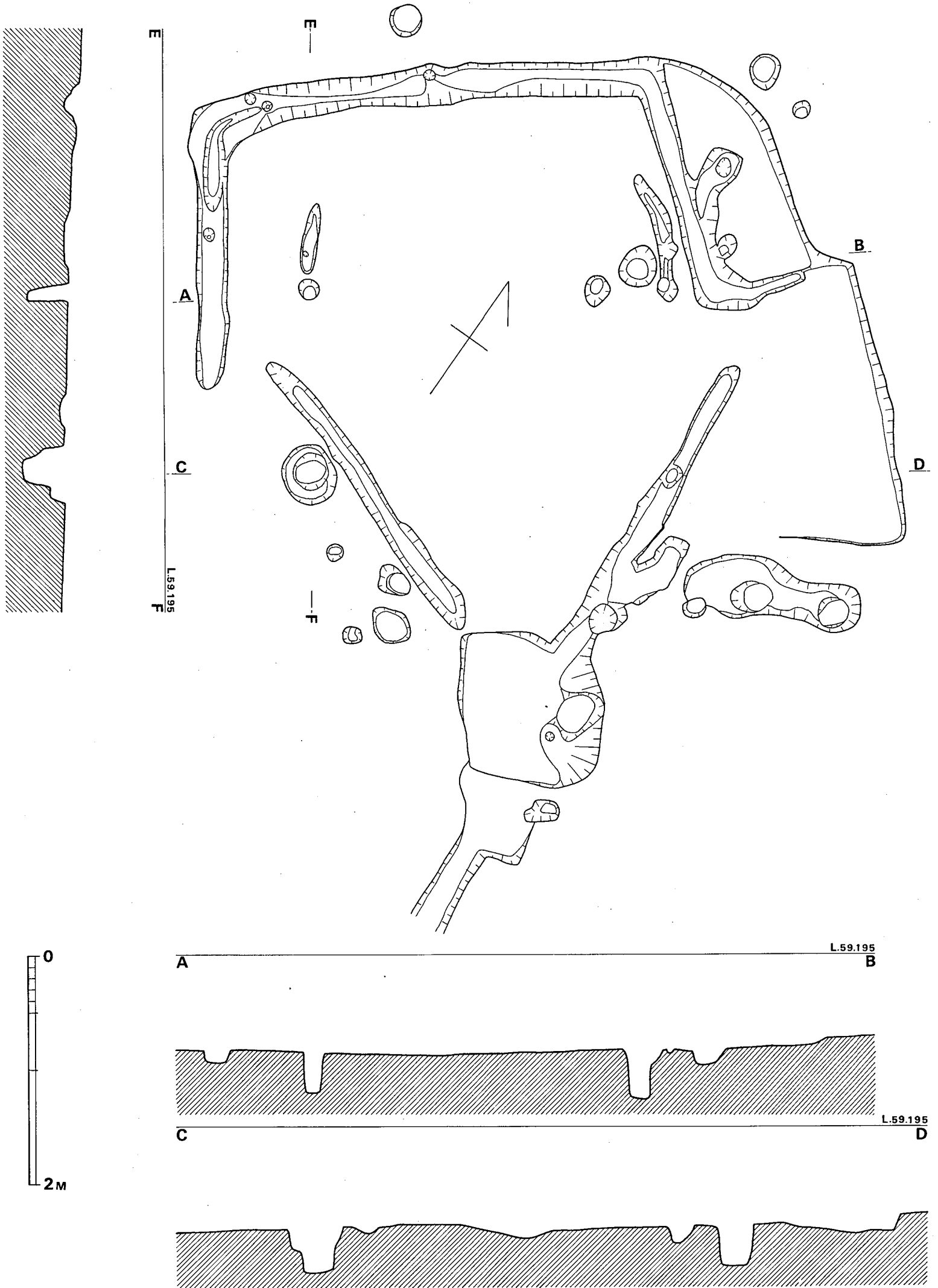


Fig. ④ 柳ヶ谷遺跡東区第3号住居跡実測図 (縮尺1/40)

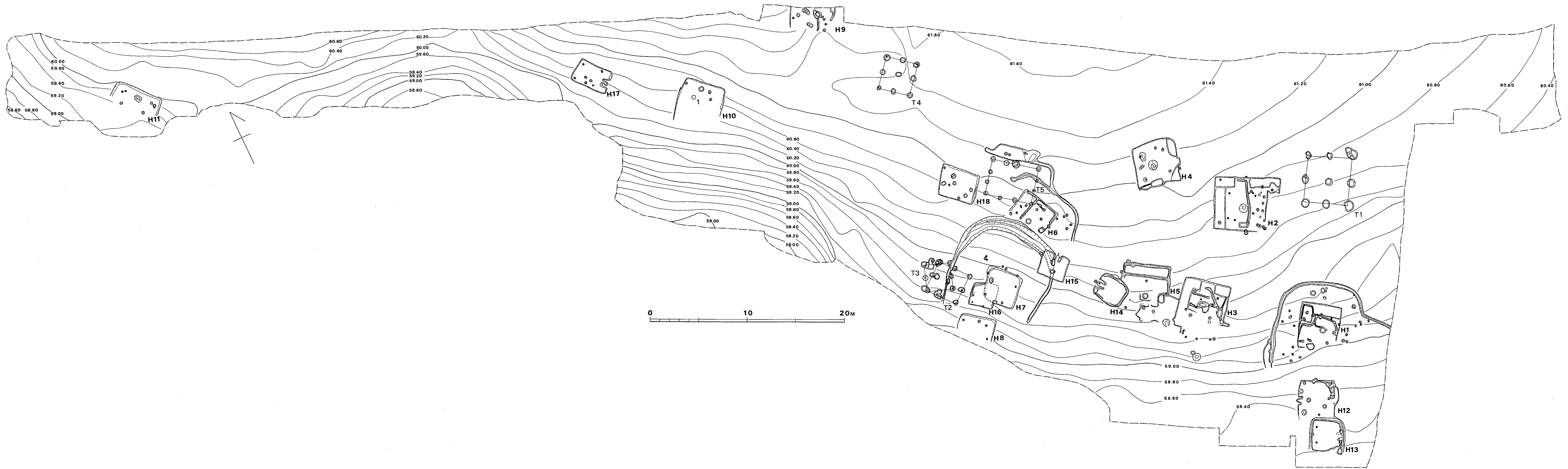


Fig. ⑤ 柳ヶ谷遺跡西区地形図 (縮尺1/200)



Fig. ⑥ 柳ヶ谷遺跡西区遺構配置図 (縮尺1/200)

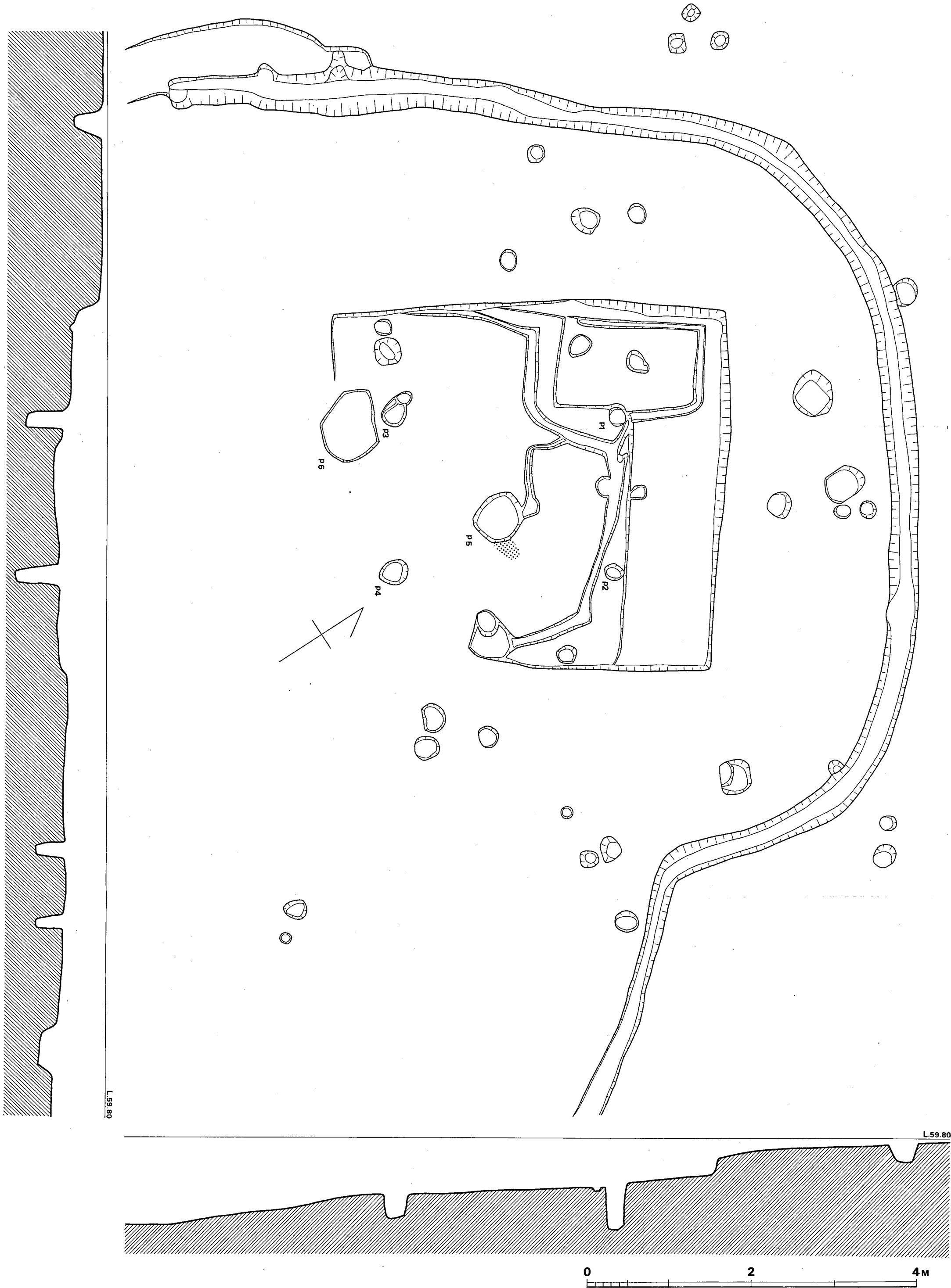


Fig. ⑦ 柳ヶ谷遺跡西区第1号住居跡実測図 (縮尺1/40)

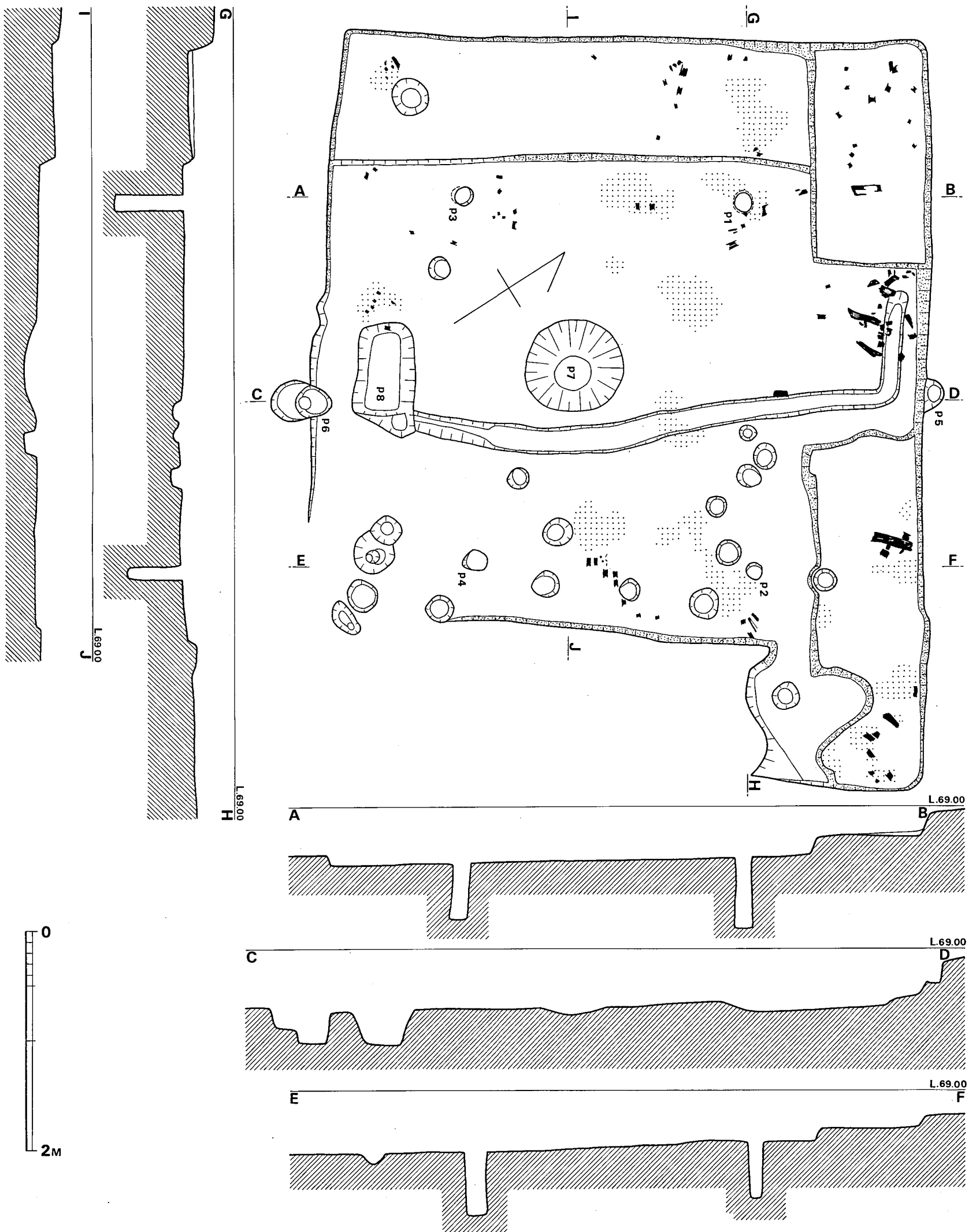


Fig. ⑧ 柳ヶ谷遺跡西区第2号住居跡実測図 (縮尺1/40)

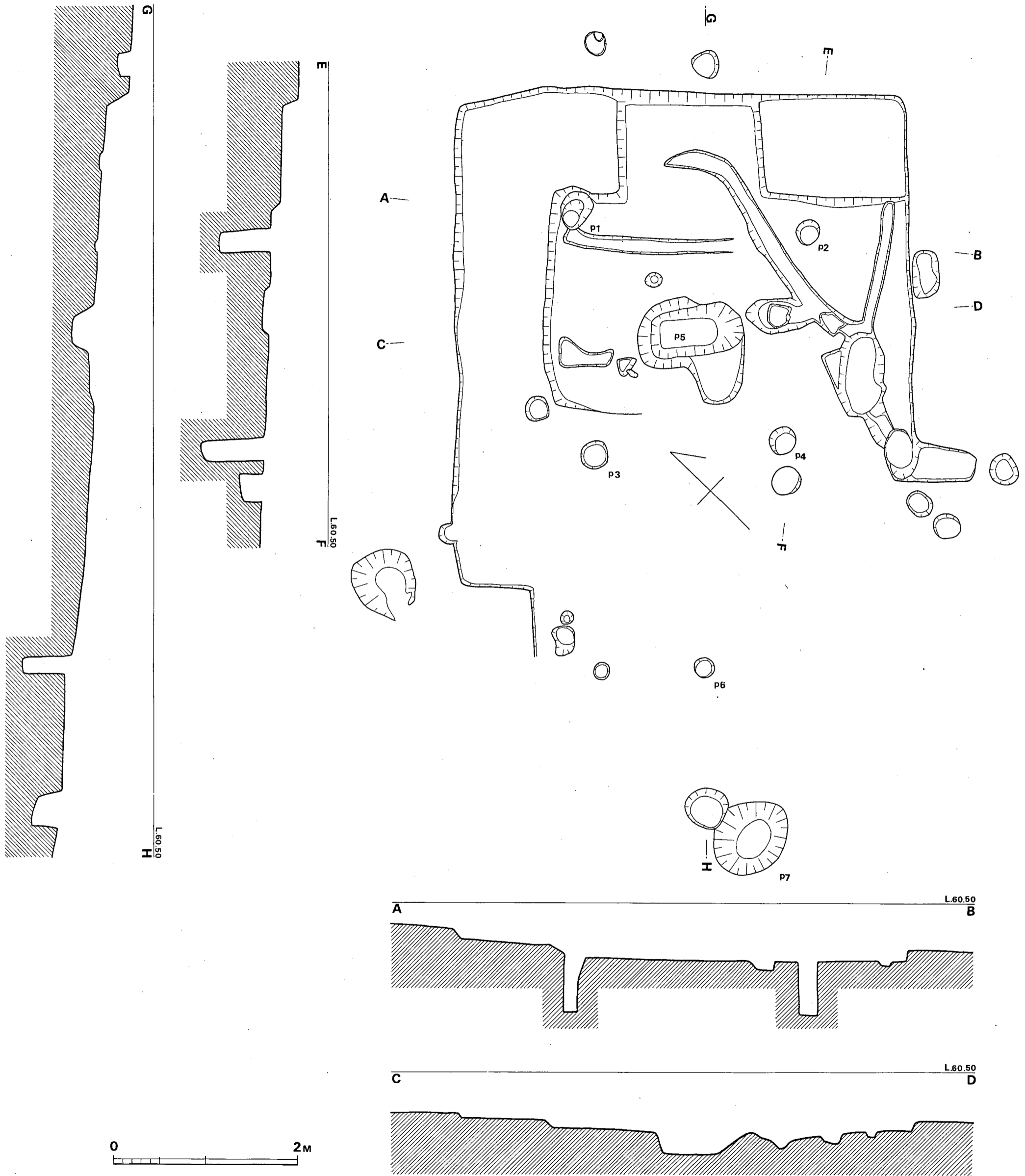
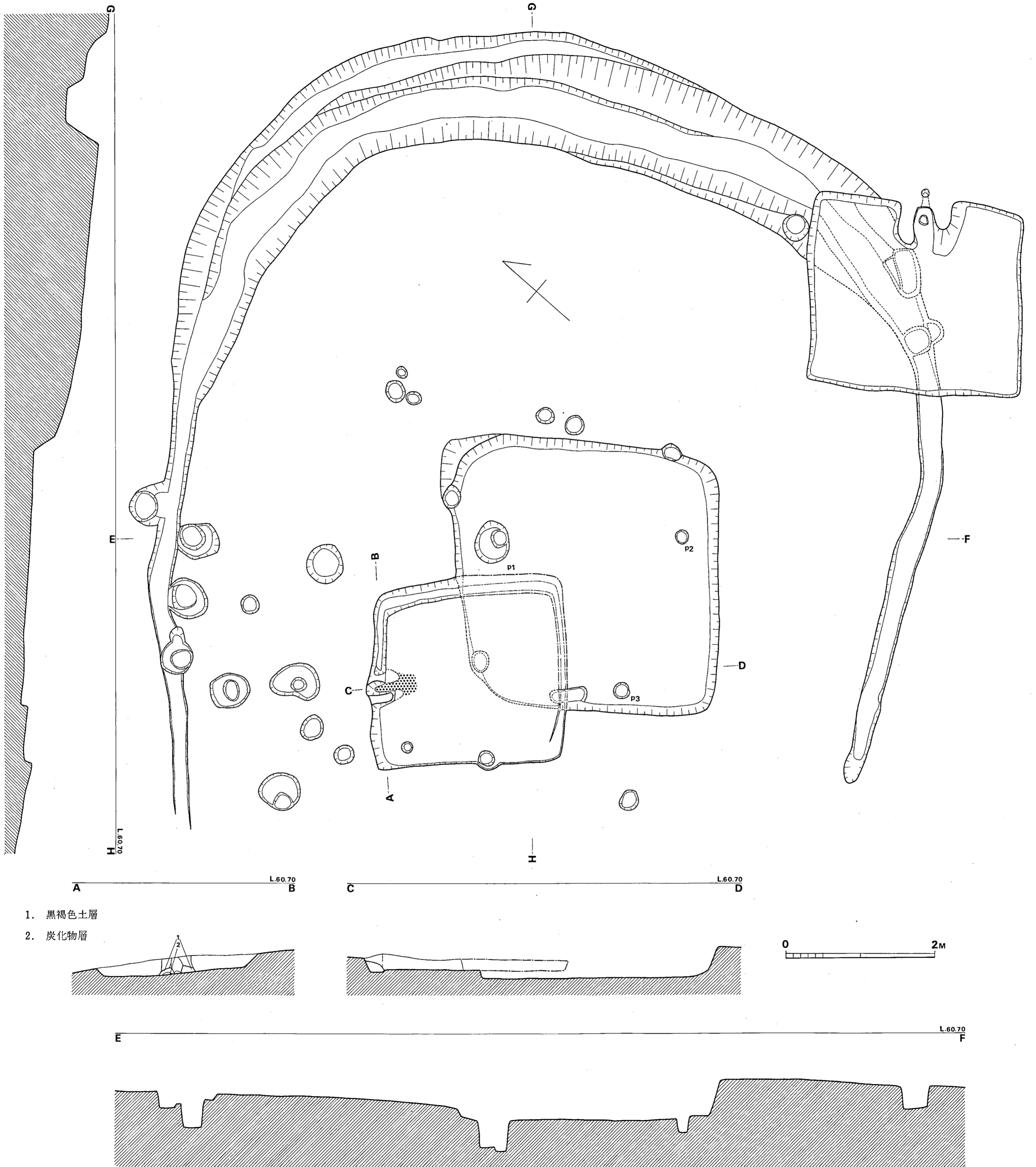


Fig. ⑨ 柳ヶ谷遺跡西区第3号住居跡実測図 (縮尺1/40)



- 1. 黒褐色土層
- 2. 炭化物層

Fig. 10 柳ヶ谷遺跡西区第7・15・16号住居跡実測図 (縮尺1/40)

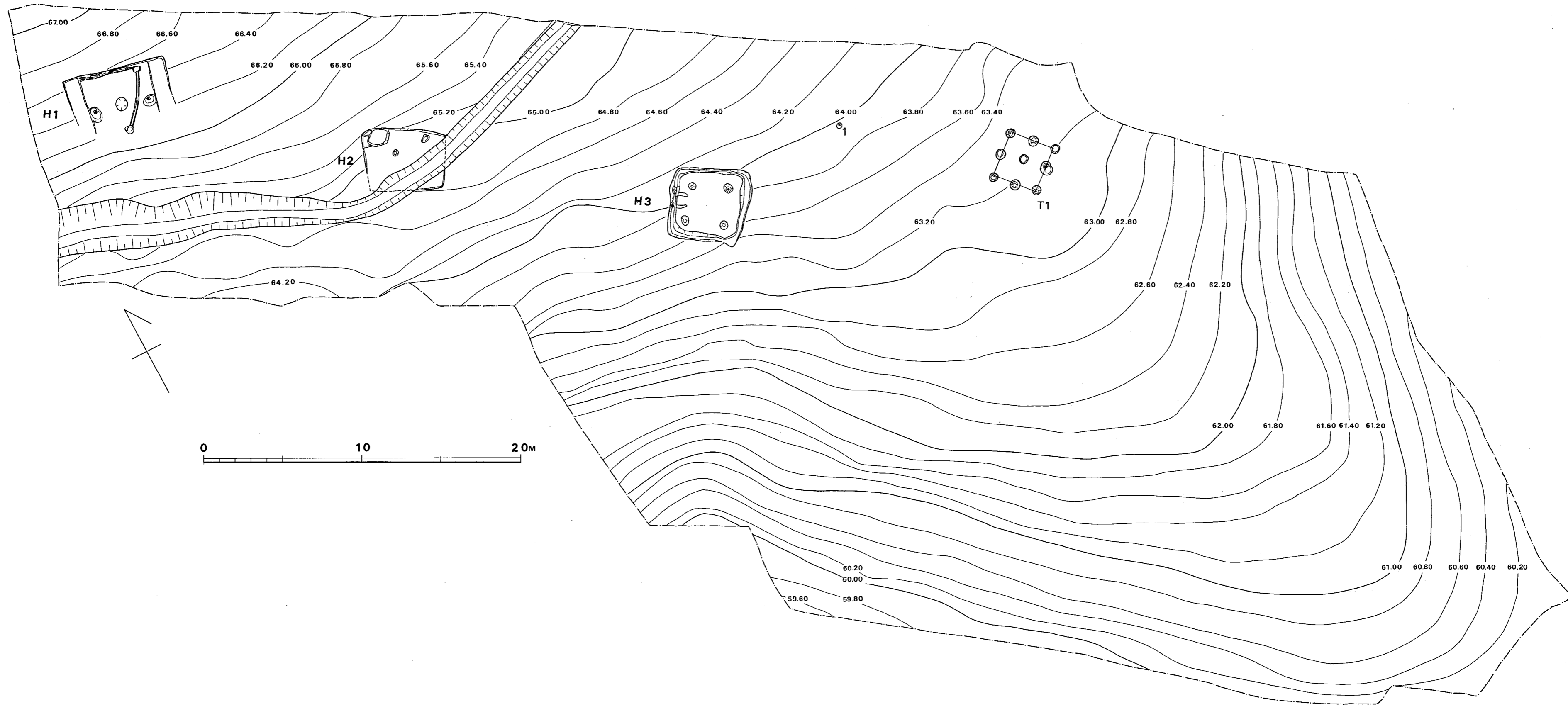


Fig. ① 都地原遺跡東区地形図 (縮尺1/200)

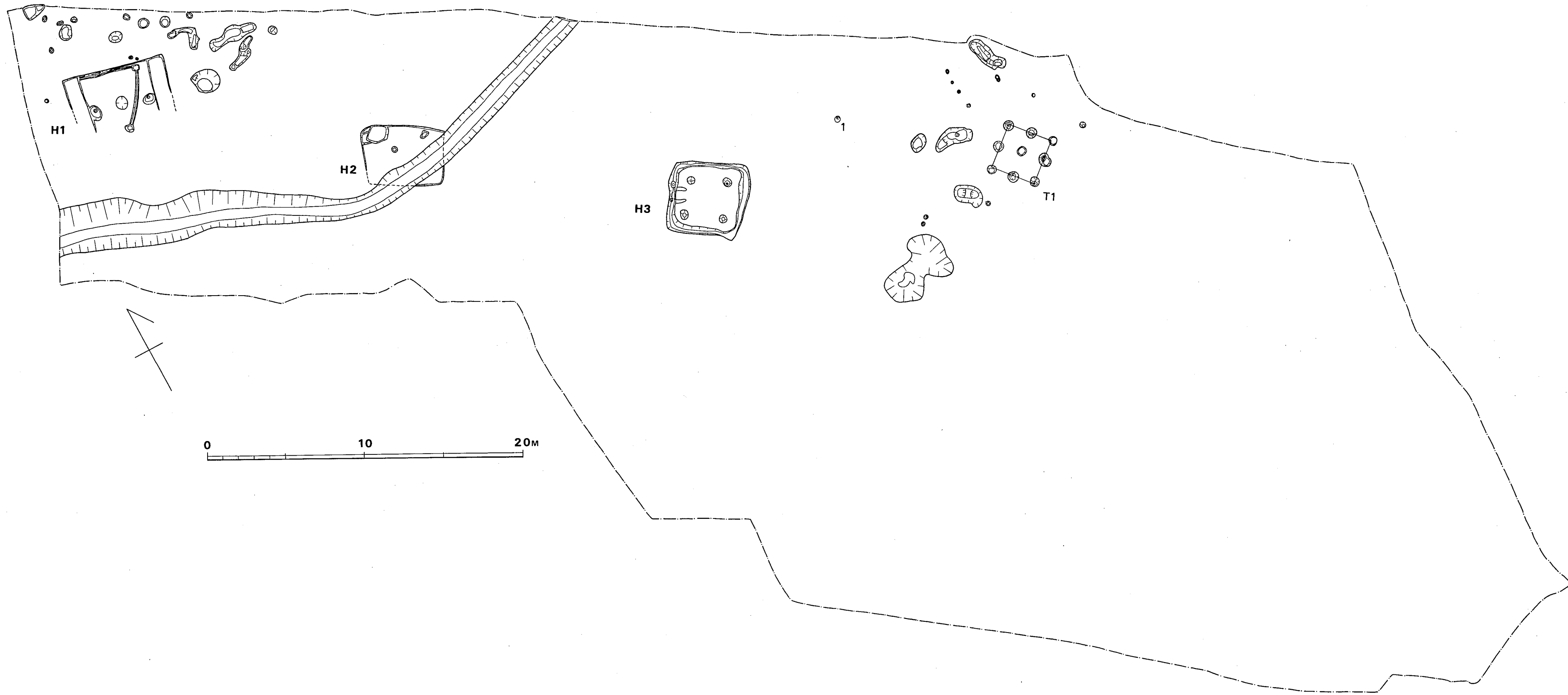


Fig. ⑫ 都地原遺跡東区遺構配置図 (縮尺1/200)

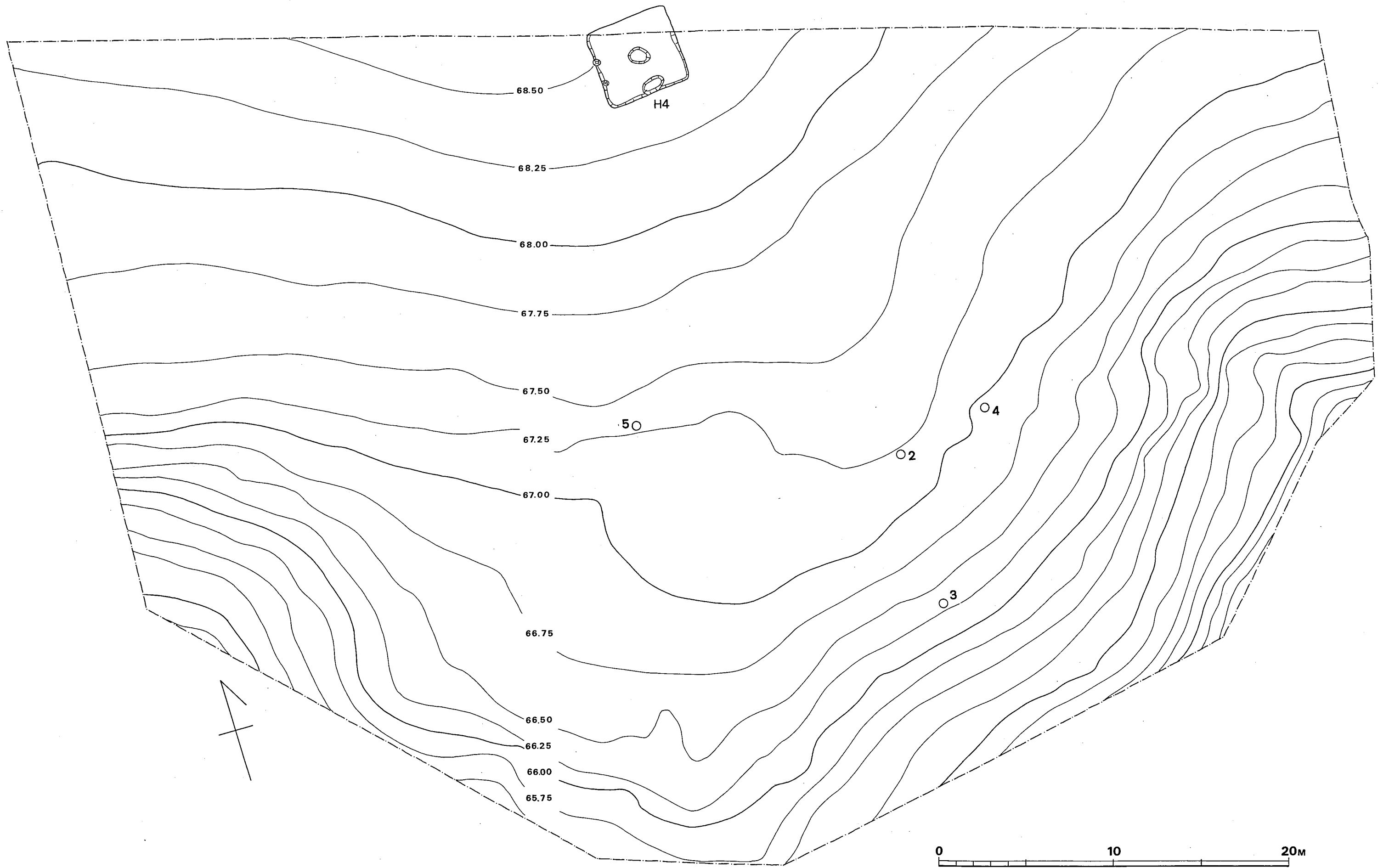


Fig. ⑬ 都地原遺跡西区地形図 (縮尺1/200)